
魔法少女リリカルなのは～『紅き修羅の力を持つ者』～

白き修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは『紅き修羅の力を持つ者』

【Nコード】

N1806U

【作者名】

白き修羅

【あらすじ】

神様の気まぐれによって死んでしまった一人の青年、真崎龍牙。彼は神様の気まぐれでリリカルなのはの世界に転生する。しかし彼は魔力がまったく無い！だが彼には魔力の代わりになんとスパロボOGの修羅が持つ覇気を持つ！しかもチート級の覇気を。彼はチート覇気と原作知識を駆使してリリカルなのはの世界を生き抜く！オリ主最強なので嫌いな人は回れ右で、後処女作ですので文才は期待できるものではありませんが・・・、とりあえず「魔法少女リリカルなのは」紅き修羅の力を持つ者「スタートします！！」

プロローグ（前書き）

初めまして！白き修羅と申します！処女作なので誤字脱字があるかもしれません。予告なしでやってみましたが、だが私は謝らない・・・すいません謝ります・・・結構原作ブレイクと、ご都合主義があります。結構頑張ってます。読んで心の片隅でもいいんで応援してください！お願いします！

プロローグ

始まりの前の話

「ということでリリカルなのは世界に転生してもらいます！」

「ちょっとまで、いきなり何言ってるんだあんた？」

俺は普通すぎるツツコミを入れた、当たり前だろ！？いきなり「転生してもらいます」って言われたら！

「だ〜か〜ら〜リリカルなのは世界に転生してって言ってるの！」

どうやら目の前にいるゴチャゴチャ言ってる女性に神様らしい。なんで俺の目の前に神様がいるのかというと、俺が死んだからだ。いつも通りの会社の帰り道に突然心臓発作で苦しみ死亡……。そして目が覚めたら真っ白な空間にいて目の前に神様が立っていて今にいたる……。

「ね〜話聞いてる？」

「あー聞いてるよ俺に転生してほしいっていうんだろ？」

「そうそう♪あなたというイレギュラーをリリカルなのはに投入したらどんな風に原作ブレイクするんだろっておm「そんな理由で殺したのかい!!」「うん♪」

本当に神様かこいつ……。

「はぁ・・・わぁーたよ勝手にしろ、俺にはそれしか選択肢ないんだろ？」

「うん、そもそもあなたには拒否権なかったからそこそこよろしく」

このアマ・・・

「じゃあ転生するね「ちょっと待て!!」なによ」

「転生するってことは何かしらの能力つけてくれるんだろうな？」

「もちろん！原作ブレイクできるような能力つけといてあげるから」

「ならいいんだが・・・」

少しだけホッとしてしまう自分が憎い・・・

「じゃ改めて、転生するねーえいつ！」

神様が右手を挙げた瞬間俺の足元に巨大な穴が開いた・・・落ちるなコレ

「う、うわあああああ！！！！」

落ちました

「頑張って原作ブレイク目指してねー」

神様のその言葉を聴いて俺の意識が途絶えた・・・

「おぎゃあああ!!!(うわああああ!!!)」

目が覚めたら赤ちゃんになってました(笑) って(笑) じゃねええええ!!

「可愛い顔ね」

頼むから可愛いって言わないで・・・

「あなたには名前をつけなくちゃね・・・あなたの名前は今日から龍牙よ」

「龍牙か・・・いい名前だ」

父親らしき人が俺を抱いている母親に言う。二人とも幸せそうな顔をしている、俺はこうして転生した。そして同時に俺の物語が始まった

プロローグ（後書き）

・・・どうでしょうか？自分では始まりはこんな感じでよかったと思ってるんが・・・うーんもっと文才力が欲しい。次回から本編始まりますお楽しみに！

第一話「原作ブレイクは主人公がやるとは限らない」（前書き）

前回の宣言どおり本編無印はじめたいと思います。あと少し短いです・・・。原作キャラは少ししか出ませんのでそこそこヨロシクデス。あと英語とかかゝなり苦手なんでデバイスの音声は全部日本語にします。では第一話スタートです！

第一話「原作ブレイクは主人公がやるとは限らない」

おう、真崎龍牙だ。俺が転生して早4年が過ぎた。まさか赤ちゃんからとはな、あのバカ神様に年齢設定してもらえばよかったな・・・。今俺はミッドチルダのとある一軒家に住んでいる。

「龍牙、ご飯できたよ」

「はい」

俺は食卓へ向かう

「おはようございます父さん、母さん」

「はい、おはよう」

「ああ、おはよう」

母さんと父さんに朝のあいさつを交わす。

「あ！もう行かなくちゃ！」

「む、もうそんな時間か」

「それじゃ行ってくるわね」

「ああ行ってらっしゃい」

「行つてらっしゃい母さん」

母さんがバタバタと行つた。母さんの名前は真崎李香。時空管理局所属の優秀な研究員である。今あるデバイスを研究しており平日休日関係なしで研究に没頭している。

「まったく、日曜日だというのに騒がしいなあいつは」

父さんが苦笑する。父さんの名前は真崎靱。父さんも同じく管理局に所属していて、管理局内では「剛拳の修羅神」と呼ばれているエースで階級は准尉、めっちゃくちゃ強いらしい。

「仕方ないよ母さんだつて頑張つてるんだから」

「ふむ、確かに、さて俺も仕事に行くかな」

「あれ？今日休みじゃなかったの？」

「だつたんだがな、急遽仕事が入つてな・・・」

「そっか」

「すまないな、休日だというのにお前にかまってやれなくて・・・」

「大丈夫だよ、もう慣れっこだから」

「うむ・・・」

父さんがやや暗い顔をする

「それに今日は日曜日だから？あいつら？が来るから大丈夫だよ！」

「そうか・・・では行ってくる」

「行つてらっしゃい父さん」

・・・これで家に俺以外居なくなりシーンと静まりかえる、父さんと母さんは結構家を留守にするからこのシーンとした空気は慣れている。

「さて？あいつら？いつ来るかな？」

俺が先ほどから行っている？あいつら？というのは・・・

ピンポン！

お、来たな

「はい今行きます」

玄関に赴く。そして扉を開けると

「おはよう、龍牙君」

「おはよー龍牙くん！」

「おはよ龍牙」

「おはようございますプレシアさん、おはようフェイト、アリシア」

そうこいつらテストロッサ一家。ん？なんでテストロッサ一家がここに居るのかって？それは原作でアリシアが死んだエネルギー駆動炉ヒュドラの暴走事故の日に、たまたまそこに居合わせた父さんが暴走を強制的に抑えて、駆動炉を破壊した。どんだけだよ父さん・

・ちなみに父さんの魔力ランクはSSだ。ちなみに俺は魔力がまったく無い、父さんは母さんに相当驚いたらしい、オイ神様何で俺に魔力が無いんだよ魔力なきや何もできないだろ！！・・・話がそれたが、暴走を抑えたその日から父さんとプレシアさんは友人になった。俺はその時思った・・・父さんナイス原作ブレイク！あれ？俺原作ブレイクするために転生したのに父さんがしてしまった・・・と若干顔を引きつけてしまったのは内緒だが・・・。

「どうしたの龍牙？」

フェイトが俺の顔を覗き込む、近い！フェイトの可愛い顔が俺の顔の前に！！・・・って何興奮してんだ俺。ん？（二回目）なんでアリシアが生きてるのにフェイトが居るのかって？それはアリシアの「妹がほしい！」と駄々をこねたらしく、プレシアさんがプロジェクトFでフェイトを生み出したらしい。

・・・おおい、娘の一言で犯罪に手を染めんなよプレシアさんえ・・・。

「なんでもねえよ」

「そっかならいいんだけど」

「ねーねー早く行こうよー」

「ああ、プレシアさん行きましょう」

「ええ、じゃ転移するわよ」

プレシアさんがそう言うのと俺たちの足元に魔方陣が現れた、そして俺達は時の庭園へ転移した。

「いこ！龍牙君！」

俺はアリシアに手を引かれた

「まってよう姉さん」

俺達はプレシアさんがアリシアとフェイトと俺のために作った時の庭園の遊び場に来た。そこは一面畑の場所で綺麗な場所だ。

「何して遊ぶ？」

「俺は何でもいいぞ」

「じゃ花飾り作ろう！」

アリシアの提案で花飾りを作ることになった、俺は作れないが・・・不器用なんだよ俺は。
それから20分後・・・

「できた！」

「わたしもできたよ」

フェイトが作った花飾りはとても綺麗にできていた。アリシアはと

いうと・・・

「アリシア、これボールか？」

「花飾りだよ！」

アリシアが作った花飾り？は花を器用に丸めて作られていた、うーんボールにしか見えない・・・

「うーんどうしたらこんなになるんだ？」

「頑張ったんだよ！それでも！そんなこと言っんならあげないよ！」
ブンブンに怒ってる、お可愛い。

「ごめんアリシア」

俺はアリシアからひょいと花飾りを取った。

「あ」

「ありがたくもらっとくよ」

笑顔で言った、するとアリシアは頬を赤くして

「う、うん！／＼／」

お、機嫌直ったな。

「あの、龍牙？」

「ん？」

フェイトが頬を赤くして

「私のも受け取ってくれないかな？」

「ああ」

フェイトから花飾りを受け取る

「ありがとな、フェイト」

「うん、どういたしまして！／＼／」

フェイトが満面の笑みで言った

そして遊んでいるうちに時間が流れて俺が帰る時間になった。

「そろそろ帰るよ」

「えゝもつと遊ぼうよゝ」

「こらアリシア、龍牙君を困らせちゃダメよ」

「ぶゝ」

「じゃ転移するわよ」

「お願いします」

俺の足元に魔方陣が現れる

「じゃあなアリシア、フエイト」

「うん、またね」

「またね龍牙君・・・」

そして俺はミッドチルダの自宅目の前に転移した。玄関の扉を開け居間へ赴いた

「ただいま」

「・・・お帰り龍牙」

あれ？父さんだけが、いつもなら母さん帰ってきてる頃だと思ったんだけどな。

「父さん、母さんは？」

「・・・」

父さんは暗い顔で無言だ

「どうしたの父さん？、あ！わかった母さんまた失敗して始末書とか書かされてるんでしょ？」

「龍牙」

急に父さんが真顔になったので思わず俺も真顔になった

「なに？父さん」

「龍牙落ち着いて聞いてくれ」

「う、うん」

「母さんが死んだ」

「え？」

父さんの一言で俺は固まる

「う、嘘だよね父さん？母さんが死んだなんて・・・」

「本当だ、今日の昼ごろ実験中に事故が起き研究所が半壊し、その時に母さんが巻き込まれて・・・」

俺は膝をつく、母さんが死んだ？あの元気で優しい母さんが？・・・。

「死んだ・・・母さんが・・・」

「龍牙・・・」

「嘘だ、嘘だ嘘だうそだうそだうそだ！！！！」

俺はその瞬間目の前が真っ暗になった。

第一話「原作ブレイクは主人公がやるとは限らない」（後書き）

・・・まさかのアリシアが生きてるという原作ブレイク、そしてほのぼの？からのシリ阿斯？展開。一度やってみたかったですけど・・・
・うむう・・・無理やりすぎてなんか多少微妙なできになってしまいました。しかも短い気がする・・・。ええい！ネガティブ思考力ツト!!。

次回は第二話「失うもの、得るもの」です。頑張ってください！！

第二話「失うもの、得るもの」（前書き）

では第二話です。シリアス展開続きます。あとアンチ管理局が入ってきます。そのあたり注意して見てください。

第二話「失うもの、得るもの」

「母さんが死んだ」

父さんからそう言われた後、俺はショックで気絶したらしい。ショックで気絶するなんて初めてだな……。俺は今ミッドチルダの葬儀場にいる、母さんの葬儀をするためだ。

「・・・・・・・・」

俺は椅子にもたれ掛かりただただ沈黙している。未だに信じられない、あの母さんが死んだ、元気で優しく、頭が良くて、けどちょっとどこかが抜けている母さん、俺は母さんの亡骸を見て思った。綺麗になつて。死んだ人があんな綺麗で安らかなって思わなかった。次第に目頭が熱くなる。だが俺は泣かない、泣いたって母さんは戻ってこない。すると父さんに

「無理をしなくていい、泣きたい時は泣け」

と言ってくれた。だけど俺は

「大丈夫だよ父さん」

所詮強がりだ、俺はそう思った。弱い俺は……。

母さんが死んで5年が過ぎた。俺と父さんはミッドチルダを離れ、今地球の原作の舞台、海鳴市に居る。ミッドチルダを離れたことはプレシアさん達には言っていない、父さんが「あいつにはもう迷惑はかけられんからな」らしい。そして俺は父さんのすすめで私立聖祥大学付属小学校に通ってる。そうあのリリカルなのはの主人公『高町なのは』が通ってる小学校だ。運命のイタズラか、あのバカ神様の仕業かおんなじクラスだ、しかも隣の席だ。

「父さん行つて来ます！」

「ああ、気をつけていけよ」

俺は元氣良く家を出た。母さんが死んだことから俺は立ち直った。いつまでもへこたれてはいられないだろ。父さんが頑張って仕事してくれてるんだ、俺もがんばらねえと。

「おはよー！」

「おう、おはよう」

「おっはー」

「ああ、おはよう」

俺はクラスの自分の席で突っ伏して、他の生徒の朝の挨拶を適当に交わす。ぶっちゃけ言う。俺朝苦手なんだよな・・・。

「真崎君おはよ」

「お、おう高町さんおはよ」

不意に声をかけられてあせった、まさかなのはが俺に挨拶してくるなんてな。俺のクラスの印象は「暗いやつ」「話しても素っ気無いやつ」と思われている・・・あながち間違いじゃねえがな。人付き合いあんま得意じゃねえし。コレばかりは転生前からの性格だから直せないな。ってか直すきねえし。

「どうしたの？なんか元気ないみたいだけど・・・」

心配してくれるなのは。優しいなこいつは・・・まあその優しさがたまぁに裏返るんだよなあ・・・。

「大丈夫だよ高町さん、ただたんに眠いだけだから」

「それならいいんだけど・・・」

「ちよつとなのは、何でそんなやつに話しかけてるのよ」

「アリサちゃん、そんなこと言っちゃだめだよ」

なのはの後ろに金髪の髪を腰までのばしている女の子と紫でウェーブがかかった髪の子が立っている。『アリサ・バンクス』『月村すずか』だ。

「そんなやつとは失礼だな、バンクスさん」

「ふんっ！」

うわぁおメツチャツンツンしてんな、アニメでもツンツンしてると

思ったが、実際に見ると本当にツンツンしてんなあ……。まあたまにデレるところが可愛いんだが。

「はあーいみんな席についてー」

先生が教室に入ってきた。生徒がわたわたと席に座る……。はええな、オイ。

いつもと変わらない授業を受け時間が過ぎていき、そして放課後。

「さて帰るかな……」

俺は鞆を持ち、学校を後にし家に向かった。

「そついや今日俺の誕生日だったな……」

誰にも聞こえない声でつぶやいた。まあ帰ったらいつも通りに父さんがケーキでも買ってきてるんだろうな、俺は少し足取りが軽くなった。そして自宅

「ただいま」

シーーン……

……父さん帰ってきてないのか？、いつも学校から帰ってくるときは居るのにな。俺は居間へ向かった。そして居間のソファーにもたれ掛かる。

「父さん残業でもしてんのかな？」

俺がそういつた瞬間

カッーン

俺の目の前に何かが落ちてきた。

「ん？なんだこれ？」

手にとってみるとそれは、紅い宝石に白いフレームがついたペンダントだった。それはデバイスにも見えなくもなかった、父さんのじやなさそうだし・・・

ブウン！

「うわぁ！」

突然宝石の部分が光り映像が流れ出した

どこかの荒野だろうか？

ドオオオオン！！

爆音と土煙が上がった、土煙が晴れるとそこに居たのは・・・

「と、父さん！？」

そう、黒くまるでスパロボOG外伝のラハ・エクスティムに似たBに身を包んだ父さんが居た。

「どうした！！俺を殺すんじゃないのか！！」

父さんの周りには見覚えがある服を着ている人たちが居た。その服は管理局の物だった。

「なんで管理局が父さんを！？」

すると空中にモニターが現れた

「さすがは真崎勅君だ、並みの局員では齒がたたなか」

倒れている局員の上司らしき人が苦笑する。

「ふん！俺を殺したくばSクラスの魔術師100人は呼ぶんだな！」

「ふむ・・・だがもうその必要がなくなったがな」

「なに？」

「アルカンシエルを起動した」

「な、なんだと！！」

『アルカンシエル』それは管理局の大型船に搭載される魔導砲で、弾を発射し、着弾後空間歪曲と物質消滅で対象を消滅する・・・とても恐ろしい兵器だ。

「貴様あ！！自分の部下共消滅させる気か！！」

「所詮そいつらは捨て駒だ、君さえ排除できればたいしたことでは無い」

「外道が!!」

「なんとも言う方がいい、さてあと3分で発射だ、せいぜい人生最後の3分間堪能するんだな。おっと転移はできんよ、君の居る場所に強力なジャミングをかけといた。いくら君でもこのジャミングの中では転移はできまい」

「くっ!!」

「それではさらばだ『剛拳の修羅神よ』」

モニターが消えた、父さんは拳を血が出るくらいに握り締めている。

「ここまでか・・・オウガ」

「何でしょうマスター？」

父さんが自分のデバイスに呼びかける。

「すまないなこんなふがないマスターで」

「いえ、マスターは私の中で最高のマスターでした、消えるときも一緒です」

「ありがとうオウガ、・・・龍牙」

俺は名前を突然呼ばれたのでビクン!とした

「先ほどのやり取りを見ていたか？今の管理局は腐っている・・・管理局を・・・あまり信用するな・・・」

父さんは重い口調でしゃべった。

「あと、復讐なんて考えるな俺や母さんもそんなことは望んでない・・・そういえば今日はお前の誕生日だったな・・・誕生日だといつのに帰れなくて、誕生日プレゼントも用意できなくてすまん。だが母さんからの誕生日プレゼントがあるぞ、おそらく今お前が持っているペンダント、それは母さんが魔力が無いお前のために作った特殊なデバイスだ」

俺は手に持っているペンダントを見る。

「お前には魔力が無い代わりに何か特別な力を持っている、おそらくその力を使えば起動できるだろう・・・母さんの最後のプレゼントだ、大切にしろよ」

「とう・・・さん・・・」

「母さんが死んでからお前に苦勞をかけてばかりだったな・・・けどコレだけは言わせてくれ」

父さんが一息吸う

「父さんと母さんはお前のことを愛していた」

俺はその一言で涙が溢れ出た。

「さようならだ龍牙、強く生きろ、そして自分の信じた道を突き進め」

そう言った瞬間映像が終わった。

「・・・・・・・・」

俺はガクンと膝から落ちペンダントを落とした。涙が止まらない初めてだこんなに涙を流したのは。

ピピピッ！

ペンダントのいや、デバイスのコアが光りだした。

「起動開始」

デバイスから起動音声が流れた。俺はデバイスを手に取った。

「質問します、あなたが私のマスターですか？」

デバイスが俺に問いかける、俺は迷わず

「ああ」

「御意、マスターあなたのお名前を、そして私に名前を付けてもらえませんか？」

「俺の名前は真崎龍牙、名前か・・・アレースお前の名前はアレースだ」

「アレース？どういう意味でしょうか？」

「ギリシア神話の戦を司る神の名前だ」

「アレース・・・」

「気に入らなかったか？」

「いえ、とても良い名前です」

「そうか気に入ってよかった・・・」

「？どうしましたマスター？」

「いや、何でもない・・・ちょっと散歩してくる」

「わかりました、遅くならないうち帰って来てきてくださいね」

まるで母親だな・・・俺は笑顔で

「ああ、わかった」

俺は家を出て海鳴市のある林に来た、ここはよく父さんと母さんとピクニックに来ていた。そして父さんの言葉を思い出した

「強く生きる、そして自分の信じた道を突き進め」

「自分の信じた道・・・」

俺はその言葉をつぶやく、俺は原作ブレイクの為に転生した、だが

転生しても俺には魔力が無く何もできなかった・・・どこがチートだよと思ってしまったあの時は。けど今の俺ならわかる、俺の内に流れる力が。それは魔力じゃない。

「そのとおり！」

「!？」

突然声がしたのであたりを見渡した、だが誰も居ない・・・

「ここよここ」

空を見上げると、そこには俺を転生させたバカ神様が居た

「バカ神ってヒドーイ!!」

人の心をよんだ!?

「そりゃ神だもん、当たり前でしょ！」

エッへと胸を張る。

「そういえばあなたようやく自分に流れる力に気づいたのね」

「ああ、魔力じゃないもつと別のものだ」

「そそ、あなたの体に流れる力の正体・・・それは『覇気』よ」

「覇気?スパロボOG外伝の修羅が持つ覇気か？」

「うん、しかもただの覇気じゃないわよ、あなたがその気になれば管理局を潰せる位の覇気。それがあなたの体の中にある」

管理局を潰せれるくらい？・・・どんだけだよ・・・。

「魔力に換算させれば軽くEXいく位ね」

「・・・」

もはや言葉もでん・・・。

「あ！」

「どうした！？」

「と○る魔術がはいってる時間だわ！」

俺はずっこけた、オイイイ！！神様がなに見てんだよ！。

「じゃねー頑張って生きなさいよ」

神様がフツと消える。・・・まじで神かあいつ・・・。

「・・・フウ」

思わずため息が出る。シリアスな空気が一気に薄れた・・・。

「頑張って生きるか・・・」

俺は空を見上げる。

「父さん、俺自分の道決めたよ、俺は力を手に入れた。けどコレは原作ブレイクのために使うんじゃない」

右手を空に掲げた。

「目の前で苦しんでいる人、助けを求めている人のために使う・・・それが俺の道だ!!」

俺はグッと手を握った。

「俺は生きる・・・生きて父さんを超える男になるぜ!!」

俺の大声が雲ひとつ無い青空に響く。

「さて帰ろかな、アレースが待ってる」

家に向かって走り出した。その時の足取りがいつもの何倍も軽い気がした。

第二話「失うもの、得るもの」(後書き)

白：ども！白き修羅です！龍牙が立ち直りました、いいですね決意を固める　主人公って（笑）さて今日はゲストをお呼びしました！ではどうぞ！

龍：おう、真崎龍牙だ

白：………

龍：なんだよ……

白：いや普通なら「この物語の主人公真崎龍牙だ！！」とか言っと期待したんだが

龍：何期待してんだよ！！めんどいからやんねえよそんなの

白：お前って性格安定してないな

龍：それはお前の文才力が無いからだ

白：………

龍：ん？どうした？

白：……斬鉄！！！！

龍：おわあ！！あぶねって！！ってかなんつつ技出しやがる！！

白・うるせえ！人が気にしてることをズバッと言いやがって！！

龍・はあ！？当たり前のこと言っただけだろおがって！？オイ待て！何鳴神 掲げてんだよ！！わかった！あれだすつもりだろ！！やめろ！！

白・うるせえ！！くらいい！虚空陣・疾風！！

ゴオオウウ！！！！

龍・ぐはあ！！

ボタン！！

白・はあはあ・・・ってやりすぎた！！・・・読者の皆様スイマセン特にネタのわからない方々。先ほどのやり取りはお気になさらず！では次回は龍牙の設定とデバイスの設定です！

？・ふえゝん原作主人公なのに少ししか出なかったの・・・

白・む？なぜお前がココに？まあいいや

ポンッ

？・ふえ？

白・安心しろ、お前の出番は三話から増えるから

？・本当に！？

白・ああ嘘はつかん!!

ダダダダ!!

?・貴様あー!!よくも妹に手を出したな!!

白・はあ!?何言っただこのシスコンバカが!!

?・誰がシスコンだ!!くらえ!奥義いい!!

白・ちい!!このバトルマニアがあ!!

?・誰がバトルマニアだ!!

ガキン!!

白&?・ウオオオオ!!

?・行っちゃったの・・・まあいいや!では三話でお会いしましょう!!

白・すみません後書きなのに長くなってしまいました本当にこれで
終わりです

?・見つけたぞ!!

白・うわぁー！まじしつけえー！

？・くらえー！！！！！！

終わりですムジデ、はい

キャラ設定

白・どうも作者の白き修羅です。今回は予告どうりにキャラ設定書きます。

龍・主人公の龍牙だ。

白・キャラ設定なので、内容結構薄いです。興味のある方はご覧ください。ちなみに無印時の設定です

白&龍・では、どうぞ！

名前

シンザキリュウガ
真崎龍牙

年齢

24
↓9才

容姿

フォルカ・アルバークを幼くした感じ

性格

心優しい性格で、困っている人がいればほっとけない性格。だが人

付き合いが苦手のため、あまり他人と関わりたがらない。何でもかんでも自分一人で抱え込んでしまうところがあり、思ったことをズバッと言ってしまう。やや口調が荒い

魔力ランク

なし

レアスキル

覇気

龍牙が魔力の代わりに持つ強大な力。魔力に換算すれば軽くSSSランクを超えるEXランク（ようは測定不能）に匹敵する。実は魔力よりも扱いやすく、様々な用途に利用できる（だが龍牙はそれを知らない）。

備考

神様の気まぐれによつて、リリカルなのはの世界に転生してしまった男。原作ブレイクのために転生したが、両親が死んだことによつて、自分の道を見つけ、決意新たに生きていくと決めた。悩みは魔力が無いため、たびたびバカにされる事。（バカにしたやつはなのは風にO H A N A S Iしている）
技のほとんどはヤルダバオトの技である。

白・まあこんなとこだな

龍・魔力ランクなしってなあ・・・

白・いいんじゃないか？、覇気あるし♪

龍・けどなあ・・・

白・さて、次はデバイス設定です！

龍・オイ無視すんな！！

デバイス名

アレース

性格

冷静で母性あふれる性格

待機時

紅い宝石に白いフレームがあるペンダント

セットアップ時

ヤルダバオトの姿になる。頭部もまんまヤルダバオトのため、顔が

見えない。

備考

龍牙の母親の李香が作成した特殊なデバイス、魔力で起動せず、龍牙の持つ特別な力、覇気で起動する

他のデバイスを一線越す性能のため、下手をすればロストギア扱いされる。龍牙は、アレースがもの扱いされるの非常に嫌う。「ミッド式でもないし、ベルカ式でもない、カートリッジがないけど、どちらかといえばベルカ式じゃね？」と龍牙が言う。

白・いいよねヤルダバオトって

龍・まあ否定はできんな

白・修羅神っていったらヤルダバオトだな！（個人的な考えです）

龍・ドンだけ好きなんだよ・・・俺はアガレス派なんだが

白・アガレスも捨てがたい！！

龍・どっちだよ！！

白・さて次回から無印スタートするぜ！

龍・おう

白・ようやくお前が無双できる日が来たなww

龍・ところで戦闘描写大丈夫か？

白・………

龍・おい！そこで黙るな！！

白・いいじゃん！いいじゃん！処女作なんだもん！！

龍・だあ！！うつせえ！！

白・まあ俺もできる限りがんばるさ

龍・頼むぜホント……

白・それでは！お開きです！

龍・オイ！しめ方雑だな！つたく、このバカ作者もがんばっていくんで感想などよろしくお願いします

白・誰がバカ作者じゃあああ！！喰らえや！！蛇翼崩天刃！！

バキィ！！

龍・ゴハア！！

龍・フツ、決まった・・・

キャラ設定（後書き）

白・今の私の目標は闇の書事件までいくことです！がんばっています！！

ヒウウウ〜ドサッ！

白・あ、落ちてきた

無印スタート第三話「新しい家族」（前書き）

しつこいようですが、無印編スタートです!!

お気に入り登録が10件越しました、登録していただいた方々、
ありがとうございます!! ちなみに念話は（）であらわします

それでは、どうぞ

無印スタート第三話「新しい家族」

「おりゃあー!」

バキィ!

一本の木がへし折れた。あれから一週間後、俺は今海鳴市の山奥で修行している。理由はこれから始まる原作のためである。

「ふう・・・、だいぶ覇気の使い方もなれたな」

「さすがです、マスター」

覇気は予想以上に強力だった。最初の頃は覇気の使い方があまりわからず適当に覇気を放出したら、危うく次元震が起きるところまでいつてしまった。その時はアレースにやたらと怒られた。

「さて、そろそろ時間だな。帰るぞアレース」

「御意、マスター」

俺は自宅に転移した、ん?なんで魔力無いのに転移したかって?。アレース曰く覇気は魔力のように使用することができるらしく、転移、念話、身体能力強化、回復術が問題なく使用できる。だがアレースがいないと俺は何もできない。だから俺はアレースを肌身離さず連れている。

「さて、晩飯でも作るか」

転生する前、俺は結構家庭的で、朝昼晩と飯は自分で作っていた。

「あれ？醤油ねえな」

醤油がないことに気づき、俺はテーブルの上にある財布を取った。

「ちょっと行ってくるか」

俺は家を出た。近くのスーパーに行って醤油を買った、なるべく安いやつ。ちなみに今午後5時だ

「・・・・・・・・」

俺は考えていた、なんで管理局が父さんを殺したのか？。父さんはとても優秀な局員だった。部下からの信頼も厚く、誰にも頼られる存在だったらしい。けど自分の納得のいかない時は自分の独断で行動することも少なくなかった。あくまでも俺の憶測だが、恐らく命令を聞かず、自分達の思いどおりにならない父さんが目障りになったのだろう。管理局の闇ならやりかねないだろうな……。

「・・・・そういえばあともう少しで無印スタートか」

無印スタートにあたって、少し気になることがある。まずフェイトのことだ。アリシアが生きているということは、プレシアはジェルシードを集める必要が無い。つまりなのはとフェイトが友達にならない

そこだけが今のところ一番気がかりだ。時の庭園の座標覚えとくべきだったな。・・・・ん？あれは・・・・

「なのはじゃねえか」

なのはが横断歩道を渡っている、しかし信号が赤になってしまった。
おいおい青信号で渡れよ・・・
ん？トラックが猛スピードで来たな・・・オイ！ヤベエ！あれは確
実に衝突コースだ！！。

「アレース！身体能力強化だ！」

「御意！」

俺は身体能力を強化した、間に合え！！。

なのは side

う~~~~、遊びすぎて帰りが遅くなっちゃたの・・・早く帰らない
とお母さんに怒られちゃうの・・・

青信号なの！急いで渡るの！。青信号が点滅して赤信号になっちゃ
ったの、早く渡らないと！あれ？トラックが・・・！ぶつかっちゃ
う！その瞬間思わず目をつぶっちゃった・・・

キキーーーー！！

「あぶねえ！！」

「えっ？」

side out

「……あぶねえー！ー！！！！。危うくなのはがトラックと衝突するところだった。するとトラックが慌ててその場を逃げ去った。オイこのヤロウ！！ナンバー覚えてぞ！（覚えてません）おっと今はなのはのことが第一優先だな。」

「大丈夫か？」

「ふえ？し、真崎君？」

なのはが閉じていた目を開けた。

「もう一度聞けど、大丈夫か？」

「えっ？う、うん」

「ならよかった」

俺は満面の笑みで言った。あれ？なのはの顔赤いな。

「あの真崎君……」

なのはがもつと顔を赤くする、あ、俺は今なのはを抱きかかえている形になっている。

「す、すまん！！」

俺はなのはから離れた。

「・・・あのさ、立てるか？」

「ふえ？う、うん大丈夫！」

元気よく立ち上がるなのは。よかったのはが無事で。

「ケガとかねえか？」

「うん大丈夫・・・って真崎君！」

「どした？」

「真崎君の右腕！」

「ん？あちゃ・・・」

俺の右腕から血が出ている。やっちゃったな。

「大丈夫、ほっとけば治るって」

「ダメなの！ばい菌とか入ったら大変なの！」

俺はなのはに手を引かれる。

「お、おい」

「わたしが手当てするから！」

なのはがそう言うのと俺を引っ張って走った。あれ？なのはってこんな強引だったか？俺はそんなこんなで高町家自宅にいる。んで俺は居間で椅子に座っている。右腕はなのはに手当てしてもらい、包帯を付けている。目の前にはなのはの父さん『高町士郎』がいる・・・わっけえなオイ

「なのはの父親の高町士郎だ」

「真崎龍牙です」

「真崎君、なのはを助けてくれてありがとう」

士郎さんが頭を下げる。

「いえ、たまたま通りかかっただけですから」

「それでも、礼は言わせてくれ」

「は、はあ・・・」

「よかつたら今日の晩御飯は此処で食べていけないか？」

「え！？いいですよ！！迷惑をかけるつもりありませんし・・・」

「いや、迷惑なんてとんでもない。な？桃子」

すると奥から『高町桃子』が出てきた。この人もわっけえ・・・。

「そうね、私達は迷惑なんて思っていないわ」

「・・・わかりました、いただきます」

「そうか！」

「腕によりをつけて作らないとね」

士郎さんが喜んだ表情をし、桃子さんは笑顔でキッチンに向かった。優しい人たちだな……。それから飯の時間、高町一家＋俺が食卓に並ぶ。なのはがちゃっかり俺のと隣に座っている。そして斜め右から強烈な殺意が来る……。『高町恭也』そしてニコニコして俺をみる女性『高町美由希』だ。

「じゃ真崎君、食べて食べて」

「はい、いただきます」

俺はまず目の前にある料理を食べた。

「・・・」

「どうかしら？」

「うまい・・・です」

まじでうめえ・・・俺の作った料理よりもうまいな。

「そう！口に合うようでよかったわ」

「なら俺らも食べるとしよう」

「「「いただきます!」「」」

「元気よく言う高町一家。いいなこついうのも・・・。」

「そういえば真崎君ってどこの小学校かよってるの?」

「なのはさんと同じ所ですよ」

「えっ? そうなの?」

「桃子さんがなのはの方を向く。」

「うん、わたしの隣の席だよ」

「へえ」

「おい真崎」

「・・・シスクゲフン! 恭也が話しかけてきた」

「何でしょう? 恭弥さん」

「なのはに手を出すなよ・・・」

「言うと思った・・・」

「大丈夫ですよ。俺となのはさんじゃ全然釣り合いませんって」

「そんなことないの!」

なのはが勢いよく立ち上がる。

「あらあら」

桃子さんが不適に笑う。

「あ」

なのはが顔を赤くして座る。

「き、きさま」

「ふふふ」

面倒だなシスコン兄は……。そして俺は綺麗に料理を平らげた

「さて、そろそろ帰ります」

「そうか、なら君の両親にも礼を言わないとな」

「え!？」

「ん?どうした」

「い、いえ……何にもありません」

言えない……両親がいないなんて……。

「そうか、桃子少し出てくる」

「ええ」

「では行こうか」

「はい・・・」

俺と士郎さんは高町家を出て自宅に向かった。そして自宅前、もちろん誰もいないので家は真っ暗だ。ちなみに今は7時だ。

「あ、あれゝ父さん達かえってきてないのかな」

「む、なら帰ってくるまで待つとしよう」

・・・逃げ場がねえ。

俺と士郎が自宅に入る、そして士郎さんが目にしたのは

「これは・・・」

仏壇に上がっている父さんと母さんの遺影を士郎さんが目にする。

「・・・」

「・・・ばれてしまいましたか」

「いつ亡くなった？」

「母さんは5年前で父さんは一週間前です」

「そうか・・・」

しばらく沈黙が続く。

「・・・真崎くいや、龍牙君」

「なんででしょう？」

「俺達の家族にならないか？」

「へ？」

思わず呆けた声を出してしまった

「け、けど」

「部屋なら問題ない、空き部屋ならある」

「いや、そういう問題じゃなくて・・・」

「ではどういう問題だ？」

「いや・・・その・・・」

「大丈夫だ、生活面でも俺達が補助する」

「けど、なのはさんがいるでしょう？いいんですか？同い年の男を自分の娘と一緒にさせて」

「君はそういうことをする男ではないとわかる」

「は、はあ・・・」

俺は少し悩む・・・俺はどうすればいい？俺は・・・

（マスター）

（どうした？アレース）

（マスターはどうしたいのですか？）

（俺は・・・）

（私は士郎様が言うとうりに、家族になったほうがいいと思います）

（なぜだ？）

（今のマスターには家族のぬくもりが必要です）

（・・・そう・・・だな）

「わかりました」

「ほんとうか!？」

「はい」

「そうか、よかった」

士郎さんが喜ぶ。

「では今日から家住みたまえ」

「え！今日からですか！？」

「ああ着替えだけ持っていけばいいさ」

「は、はい・・・」

「少し電話を借りるよ」

「はい」

士郎さんは電話の方へ行った。

（アレース）

（何でしょうマスター？）

（ありがとう）

（え？）

（アレースのおかげで踏ん切りがついた）

（そうですか、それはよかったです♪）

すると士郎さんが来て

「家族からは許可を取った、さて行くでしょう」

俺は着替えなどの準備をして、土郎さんと共に自宅を後にした。そして高町家

「おかえりなさい、龍牙君」

「は、はい」

思わずかたくなってしまった

「ふふふ、そんなかたくななくていいのよ。今日から此処があなたの家だから」

「今日から此処があなたの家だから」・・・簡単な言葉だが俺にはとても温かい言葉だった。

「今日からお世話になります!!」

俺はおもっいきりお辞儀をした。

「はい♪お世話します♪」

「真崎君!」

なのはが走って俺のところに来た。

「今日から家族になるって本当なの!？」

「ああ、これから宜しくな、なのはさん」

「違うよ」

「えっ？」

「今日から家族だもん、さん付けじゃだめだよ。なのはって呼んで」

ぐお！その上目遣いやメレ！マジで可愛いから！！・・・何考えてんだ俺。

「じゃあ・・・なのは？」

「うん！今日からよろしくね！リュウ君」

「ああ・・・ってリュウ君？」

「うん！今日からリュウ君って呼ぶ！、ダメ・・・かな？」

俺は首を横に振った。

「いいよ、リュウ君で」

「うん！」

やっべ・・・普通に可愛いなこいつは・・・。これが将来の魔王かあ・・・。

「どうしたの？リュウ君？」

「いやなんでもねえよ」

高町家の一員となった俺。これが俺の運命を変えるきっかけになる
とは・・・俺は知らなかった。

無印スタート第三話「新しい家族」（後書き）

白：・・・

龍：・・・

白：無印編スタートと言って置いてユーノとか出さなくてすいませ
ん！！

龍：まったくだな

白：いやぁ・・・ユーノ出すとこまで行きたかったんだが・・・ま
じで面目ない

龍：まったくだ・・・と言いたいがまあがんばれ、それしか言えな
いかな

白：いいやつだなお前・・・

龍：ほつとけ

白：では次回こそ！！無印編本格スタートです！！ジェルシードと
かユーノとかしっかり出します！！がんばります！！

龍：まあ作者も頑張っているので応援よろしくお願いします

第四話「紅き修羅、いざ参る」(前書き)

どうも、白き修羅です。突然ですが、私はここ最近書き始めたゆえ誤字脱字、駄文だらけのコピペ野郎です。ですが、あらすじのところに、「オリ主最強ですので、嫌いな人は回れ右で」と言いました。私にこんなことを言う立場ではないと思いますが、オリ主最強を否定するなるべく見ないください。そしてこの小説は私の解釈で進めていきますので、この小説を根本から否定するのはやめて欲しいです。新参者の癖にこのようなことを言って申し訳ありません。では気を取り直して。第四話スタートです。

第四話「紅き修羅、いざ参る」

高町家道場にて。俺は今恭也と試合をしている。

「うおおおお!!」

「はあああ!!」

ガキン!!

「グッ!!」

「そこだあ!!」

「クッ!! まだまだあ!!」

ギイン!!

激しい攻防戦が繰り広げれる。ちなみ恭也は木刀を使い、俺は籠手をつけて武器なしでいる。何故俺達が試合してるかというと、恭也が突然

「龍牙、俺と試合しろ」

「えっ? いや面倒なんだが・・・」

「異論は認めん、行くぞ」

んで今にいたる。

「はぁ!!」

ガン!!

「クッ!？」

「隙あり!!」

「そこまで」

士郎さんが制止させる。俺は恭也の顔面前に拳を止める。

「この試合龍牙の勝ちだな」

「クッ!」

恭也が悔しそうな顔をし、その場に座り込む。

「ふう・・・ほれ」

俺は恭也に手を差し伸べる。

「立てるか？」

「ああ大丈夫だ、一人で立てる」

「そっか」

「しかし恭也に勝つとはな、正直驚きだ」

「まあ父さんによく鍛えられてましたから」

俺は覇氣を使わなくてもある程度のやつなら普通に勝てる。よく父さんに護身術学んでたからな。けど恭也は強かった。少しだけ覇氣で身体強化しなかったら間違いなく負けていた。生身の人間であそこまでスピードが出るとは思っていなかった。

「龍牙」

「何だ恭也？」

「また今度試合してくれないか？」

「ああいいぜ」

「その時は俺が勝つ！」

「その台詞、そのままそっくり返してやるよ」

「フツ、言ってくれるな」

俺と恭也が笑い合う。俺達は試合をしているうちに次第に仲良くなった。最初は殺氣しか飛ばしてこなかったが今は笑い合う仲間となった。

俺は道場から出て、自分の部屋に来た。部屋の仲はある程度の家具がそろっている。もちろん全て元俺の自宅から持ってきたものだ。

「さてと・・・」

俺は着替えをし

「アレース、行こうか」

「御意」

部屋を後ににして玄関へ向かう。

「あら？龍牙君どこに行くの？」

不意に桃子さんに声をかけられる。

「ちょっと用事があつて・・・」

「そう、遅くならないうちに帰ってくるのよ」

「はい」

玄関からを出、人目のつかないところへ行く。人目の無いところに行かないと転移できないからだ。

「転移だアレース」

「御意、転移開始」

俺の足元に紅い魔法陣が出る。そして俺は転移した。転移した場所はいつも修行場所になっている山奥だ。

「アレースセットアップ」

「御意」

俺はバリアジャケットに身を包む。

「さて、結界張るかな」

俺は覇氣を使い、周りに結界を張る。魔力ではないため探知などはされない。俺はここ最近、覇氣の使い方に慣れてきた。完全ではないがな。覇氣を腕などに纏わせ、岩などを粉碎することはできるようになった。が、未だに撃ち出すことはできない。撃ち出すことができれば色々便利なんだが……。あと加減を間違えると俺の半径1キロメートルが覇氣で吹き飛んでしまう。まあ前みたいに次元震がおきる寸前まではいかなかったがな。

「アレース！右手に覇氣を集中させる！」

「御意！！」

右でに覇氣を集中させ……

「はあ！！！！」

おもいつきり撃ち出す！！

ピュウ〜シュウ……

覇氣はものすんげえー小さい龍になり、木にぶつかった瞬間消滅し

た。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・orz

「あのー・・・マスター？」

「何も言つなアレース・・・」

加減を間違えすぎた・・・。

「よし！もう一回だ！」

「御意！！」

俺はそれから3時間ずっと覇気を撃ち出す鍛錬をした。だがまったく成功しなかった。

「はあはあ・・・帰るかアレース」

「そうですね、暗くなってきましたし、桃子様が心配します」

「だな」

俺はバリアジャケットを解除する。

「するぞ、座標は元俺の自宅庭だ」

「御意、座標特定・・・転移開始」

俺は転移し、元自宅庭に来た。ここは誰もいないし、人目につかないからな。俺は走って家に帰った。
そして居間へ向かい

「ただいま」

「お帰りなさい龍牙君」

「お帰り龍牙」

「あつリュウ君お帰り！」

なのはが俺に飛びつく。

「おっと」

「あのねリュウ君、聞いて欲しいことがあるの」

「ん？なんだ？」

「あのね・・・」

俺はなのはから話を聞いた、その話の内容とは「フェレットが飼いたい」らしい、傷ついたフェレットをなのはが拾い、懐かれたため家で飼いたいとのことだ。絶対そのフェレットあの『ユーノ・スクライア』だよな・・・。

「何で俺に聞くんのだ？」

「お父さんとお母さんがリュウ君に許可もらったらいいって言われて」

「士郎さん、何ゆえ俺なんですか？」

俺は士郎さんの方を向く。

「俺達は飼うことは別にいい、だが家族の君にも許可をとらないとダメだろう？ ついでに恭也と美由希は許可した」

ええ……ここです承しなかったら俺KYじゃん……。

「リュウ君お願い……」

なのは、頼むからそんなうるうるした目で見ないでくれ……。

「俺は別に飼ってもいいぞ」

「ほんと!？」

「ああ、なのはがちゃんと世話するなら俺は文句いわないぜ？」

「ありがとうリュウ君!よかったねユーノ君!」

「キユ!」

なのはの足元でユーノが鳴く。いたんかい。ってかユーノがいるってことはジュエルシードがこの街にあるってことだよな? いつの間

に・・・。

（アレース少しこの街の魔力を調べてくれ）

（御意・・・こ、これは！）

（どうした？）

（この街の各所で微力ですが魔力反応が急激に増えています！）

（やはりか・・・）

（それになのは様のポケットからデバイスのような反応があります）

（そうかわかった）

俺はなのはの方を向く。

「ど、どうしたのリユウ君？」

「いやなんでもない」

「ならいいんだけど・・・」

「・・・・・・」

そんなこんなで一日が終わった。俺はベッドの上で考えていた。

「無印が始まったか・・・まあ俺のやることは決まっているがな」

そう、なのはとユーノのジュエルシード集めを手伝うことだ。ジュエルシード集めは危険がある、下手すれば死につながるような事だつてあるかもしれない。なのはに何かあつたら士郎さん達が悲しむかな。だから俺が守ってやらないと。そして気がかりなのは管理局だ。恐らく管理局もジュエルシードを回収しようとする。このことについては俺はあまり干渉はしない・・・だが俺に牙を向けるなら容赦はしないがな。

「・・・寝るか」

俺は目を閉じそのまま眠りについた。

そして翌日。俺は目を覚まし居間へ向かった。居間には新聞を読んでいる士郎さんがいた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

俺は椅子に座る。

「此処の暮らしには慣れたか？」

「はいおかげさまで」

「そうか、それは良かった」

「士郎さん、一つ聞きたいことがあります」

「なんだ？」

「何で・・・俺を家族に迎えようと思ったんですか？」

自分の娘を救ってくれただけで家族に迎え入れようとするか？いくらお人好しでもそんなことはしないだろ。

「・・・まず一つ、君はまだ幼い。幼い君をあの家にずっと一人にするのはダメだと思ってな」

「は、はあ・・・」

まあ俺は見た目は子供だからそう言われてもおかしくないな。

「そして二つ目、君はどこかなのは似ている」

「なのはと？」

「ああ、君は何でもかんでも自分で抱え込んでしまっただろう？」

「うっ！」

うわぁ・・・あつてる・・・。

「なのはも何でもかんでも自分で抱え込んでいる時があるからな、そのなのはと似ている君を、俺は放っておけなかった。これが理由だ」

「・・・ありがとうございます納得이었습니다」

「そうかならいいんだ」

「おはよう龍牙君」

桃子さんが起きてきた。

「おはようございます」

「ねえ龍牙君」

「はい？」

「なのは起こしてくれないかしら？」

「はあ、別にかまいませんが」

「じゃお願いね」

俺はなのはの部屋の前に来た。とりあえずノックか。

「おーいなのはー」

「……………寝てんな。」

「入るぞー」

部屋に入る、子供とはいえ女性の部屋に入るのは少し気が引けたが・
・俺はベッドの上のなのはに近づく。

「なのはー起きろー朝だぞー」

「うにゅ〜あと五分・・・」

「早く起きないと色々やべえぞって」

なのはの体をゆする。

「にゃ〜」

「うつ!」

俺の右腕ががちりホールドされる。引き剥がそうと思ってても全然剥がせない……。こうなったら・・・

スウ〜・・・

「起きろなのは!!!朝だぞ!!!」

「にゃ!~!」

なのはが飛び上がる。

「おはよなのは」

「お、おはようなの・・・」

「ほれさつさと居間に行くぞ」

俺はなのはの部屋を後にした。

「ひどいよ〜リュウ君〜」

「ばぐおぎばいばばわぶび（早く起きないなのはが悪い）」

俺は朝食を食べながら答えた。

「おい行儀悪いぞ龍牙」

「んぐっ・・・すまん恭也」

朝食を食べ終わり、急いで玄関に向かい

「行つてきまーす」

「にゃあー！龍牙君まつて〜」

俺はそそくさと家を出た。なんでなのはを待たないかって？俺となのはが一緒に歩いてると色々めんどくさそうだな〜っと思つてな。そして学校。

「だぁ〜〜ねみい・・・」

机にダレかかる俺。すると

「リュウ君ひどいの！先に行っちゃうなんて！」

クラスのみんながギョツとして俺を見る。

「なんで高町さんがあいつと・・・」

「ちっ声をかけてもらえるなんてうらやましい・・・」

おい外野聞こえてるぞって。

「じゃあねえだろ？なのは準備遅いんだから」

「にやは・・・ごめん」

「ちょっとなのは」

アリサとすずかがやって来た。アリサがなのはにちょいちょいと手招きする。

「なに？アリサちゃん」

「何であいつと一緒にいるのよ」

「え？だって」

「俺今なのは家にすんでんだよ」

「「ええ！！！」」

お前ら驚きすぎ・・・。

「なんで!？」

「俺両親がどっちも死んでな、実は俺となのはは親戚で今なのはの家に住ませてもらってるんだよ。な？なのは」

俺は目でなのはとアイコンタクトをとる。

「う、うんそうなの」

「龍牙君」

すずかに声をかけられる。始めてだなすずかに声かけられたの。

「なんだすずか？」

「両親が死んだって・・・」

「ああ、母さんは5年前に死んで、父さんは一週間前に死んだ」

「悲しくないの？」

「確かに悲しいさ、けど何時までも悲しんでられないだろ？」

「そう・・・なんだ」

「龍牙あのさ・・・ごめん変なこと聞いて・・・まさかあんたの両親がそんなことになってるとは知らなくて・・・」

・・・アリサが謝った？意外だな。

「気にすんなって」

「けど・・・」

「はいはい、これで暗い話は終わりだ、朝っぱらからこんな暗い雰囲気になったら今日乗り越えられないぞ」

「う、うん・・・」

「わかったわ・・・」

二人が暗い少し表情になる。気にすんなって言ってんだけどな。

「はいみんな席の着いて」

みんなが慌てて席に座る、相変わらず早いな、お前ら。

今日の授業はほとんど寝ていた。真面目に受けんの面倒だから・・・。そして放課後、俺は家に帰ろうとしたとき

「リュウ君一緒に帰ろう！」

「龍牙君私も・・・」

「私もいいわよね？」

「別にかまわんが」

んで今、なのはと一緒に帰っている。んで若干なのはが不機嫌なんだが・・・何故だ？。

「じゃあねなのはちゃん、アリサちゃん、龍牙君」

「おう、じゃあな」

「また明日ね」

「じゃあねずか」

俺達はすずかと別れ

「じゃ私はここで」

「ああ、じゃあな」

「ばいばいアリサちゃん」

アリサとも別れた。

「リュウ君今日ほとんど授業寝てたね」

「ああ、だって眠かったからな」

実際に眠かったし、今更小学校の授業受けても意味ないしな。

「にやはは・・・」

ーードウン！！

「「！」「」

（一瞬大気が震えた・・・）

（はい、神社の方向に魔力反応を探知！）

「龍牙君！ちよつと用事があるから先に帰ってて！」

なのはが走つてどこかへ行く。体力ないのに無理すんなよ……。恐らく向かった場所は神社だろう。

（どういたします？マスター）

（どうもこうもないだろ、行くぞ！）

俺もなのはの後を追いかける、が信号が俺の行く手を阻む

「ちっ！早く青に変われ！」

運悪く神社へ向かう道の信号機に全て引っかかった。

そして神社。

「ふうようやく着いた・・・」

「！マスター前方に魔力反応！！」

「！」

ドオオン！！

俺は木の後ろに隠れた。そこには白いバリアジャケットに身を包んだのはと、その足元にはユーノがいた。そしてなのはの前には黒くてとても大きな犬の怪物がいた。あの怪物はジュエルシードに取り込まれた子犬だろうな。気のせいかな原作よりも一回り大きくないか？

（どうします？マスター）

（少し様子を見よう、なのはが危なくなったら出るぞ）

（御意）

「レイジングハートお願い！」

「オーライ、シリリングモードセットアップ」

「えい！」

レイジングハートがシリリングモードへ変わりが桜色の帯が怪物を上げる。

（なのは様が有利ですね）

（・・・いや！）

「ガオオオオオオオオオオ！！！！！！」

怪物が咆哮を上げた瞬間帯が引きちげられた。

「嘘!!」

「ガアア!!」

ガキイイイン!!!

「きゃあ!!」

怪物の前足がなのはに当たる。だがとっさにプロテクションを張ったおかげで、身体的にダメージはなかったみたいだ。だがなのはは怪物の一撃で吹き飛んでしまった。そして怪物がなのはに向かって突撃をしようとする。

「なのは!!」

ユーノが叫ぶ。チッ!

(アレース、セットアップ!!)

(御意!!)

俺はバリアジャケットに身を包め駆ける。なのはをやらせてたまるか!!

なのはside

わたしは今、神社でジェルシードに取り込まれた子犬と戦っている

す。子犬は大きな黒い怪物になって、わたし達に襲い掛かりました。この前戦ったジュエルシードの思念体よりも手ごわいの……。

「レイジングハートお願い！」

「オーライ、シリリングモードセツトアップ」

「えい！」

レイジングハートをシリングモードに変え、桜色の帯で怪物を捕まえました。よしこのまま封印を・・・

「ガオオオオオオオオオオ!!!」

怪物が大きな雄たけびを上げ、捕まえていた帯が引きちげられてしまいました。

「噓！！」

「ガアア！」

怪物が前足を上げてわたしに振りかぶります。わたしはとっさにプロテクションを張りました。

ガキイイイン!!!

「きゃああ!!」

わたしは怪物の攻撃で飛ばされてしまいました。すると怪物がわたしに向かって猛スピードで突進してきました。

「なのは!!」

ユーノ君が叫びます。わたしはこのまま・・・わたしは目を閉じました。

ガァァン!!

・・・あれ、なんともない。目を開けるとそこには紅い鎧を身に纏い、白くて長い髪の人がいきました。

顔はヘルメット?みたいので見えませんでした。誰だろうこの人・・・。

side out

俺は今怪物の突進を覇気を纏わせた右腕で止めた。

「大丈夫か?」

「ふえ?・・・は、はい!大丈夫です!」

「そうか、フンッ!!」

俺はそのまま怪物を押した、すると怪物はズザザーと後ろに行く。

「あ、あなたは?」

ユーノが俺に話しかける、普通ならフェレットがしゃべった事を驚くところだが、俺は驚かん。

「今はそれどころではない、奴が来るぞ」

「グオオオオ!!」

怪物が再度突進する。標的は俺だ。

「「!!」」

「俺の後ろから動くな、アレース右手に覇気を集中させろ」

「御意」

俺は右手を掲げ

「おりゃあ!!」

怪物の頭部に思いっきり振りかぶる。

ゴギユガアア!!

「グギユウ!!」

怪物は叫び声似た声をあげ撃沈し、地面に大きなクレーターができる。

「フン!この程度か」

「す、すごい・・・」

「めちゃくちゃな・・・」

二人が何か言っているが俺は気にしない。

「封印するんだろ？早くしろ」

「えっ？あ、はい！」

なのはが怪物に近づく。そしてレイジングハートを怪物の額に向ける。すると怪物の額にシリアルナンバーが浮かぶ。

「レイジングハート」

「スタンディバイ、レディ」

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル？？封印！！」

「シーリング」

すると怪物は、桜色の光に包まれ、その身体を分解してゆく・・・。分解した後に残ったのは取り込まれていた子犬と、ジュエルシードが転がっていた。そしてレイジングハートをジュエルシードに近づける。ジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれる。フウ、なんとか終わったか。

「あ、あのあなたは一体何者ですか？」

ユーノが問いかける。

「わからないか？特にそこのお前」

ビシツとなのはに指を指す。

「にゃ！？え、えゝと・・・」

「はあ・・・しょうがないアレース」

俺はバリアジャケットを解除した。なのは達がとても驚いた表情をする。

「え、え、えええええゝゝゝ！！！！」

み、耳が・・・

「まさか龍牙さんだったなんて・・・」

「まあな」

「リュウ君も魔法使いだったの！？」

「まあそんなとこだな」

「けど魔力の反応がなかった気が・・・」

「えっ？」

「それは後々話す、それよりもこれどうすっかな・・・」

俺はクレーターに視線を向ける。

「た、たしかに・・・」

「よし！逃げるぞ！」

俺は走り出す

「あ！待って！リュウ君！」

「なのは！龍牙さん待って！」

俺となのはとユーノは全力でその場を後にした。俺のことについては家に帰ってから教えるとするかな・・・。

第四話「紅き修羅、いざ参る」(後書き)

第四話いかがだったでしょうか？駄文だらけでしょうが、頑張って書いたつもりですので、良い感想お待ちしています。ですが根本否定だけは勘弁してもらいたいです。

第五話「真実、そして金色の魔法少女との遭遇」（前書き）

ども、白き修羅です。MAX600さんとても参考になる感想ありがとうございます。これから感想に書かれた事を意識して書いていきます。後、久しぶりにあのキャラを出します。まあタイトルでわかると思いますが……。では第五話スタートです！！。

第五話「真実、そして金色の魔法少女との遭遇」

ジュエルシードを回収し終わった後、俺達は家に帰り「帰りが遅い」と士郎さんと桃子さんにガツツリ怒られた。うゝん桃子さん怒るとやたらとこええな。んで今俺の部屋になのは、ユーノがいる。ちょっといいからアレースの紹介もしといた。

「まず、お前らに紹介したいやつがいる、ほれアレース挨拶」

「始めまして・・・ではありませんね、マスターのデバイスのアレースと申します。今後ともよろしくお願いいたします」

「にゃ！ペンダントがしゃべった！」

「お前もしゃべるペンダント持ってたんだろ」

「あ、確かに・・・」

「龍牙さんもデバイス持っているなんて知りませんでした」

「まあ教えてないからな・・・さて、俺からお前らにいくつか質問させてもらうぞ。なんであそこにいた？そしてあの石はなんだ？」

まあ原作知ってるから説明は要らないが一応念のために聞いておく。

「あの一気に聞かれると・・・」

「なのは、僕が説明するよ」

なのはじゃ説明ができないと思ってかユーノが話し出した。話を聞いてみたがやはり原作どおりだった。ユーノはジュエルシードを発掘した後、管理局に向かう道中何らかの事故があり、ジュエルシードが海鳴市にばら撒かれてしまったとの事だ。んで一人でジュエルシードを回収しようとしたが、結局力が及ばず、念話で助けを求めたところなのはがその念話に答え、なのは力を借りて2個目のジュエルシードを封印し、今回は神社でジュエルシードが暴走したため、封印をするためにあの場にいたという。

「なるほど、大体経緯はわかった、あと一つ聞かせてくれ」

「なんですか？」

「そのばら撒く理由になった事故って一体なんだ？」

「それは・・・何者かに襲われたせいです」

「何者か？わからないのか？」

「はい、ジュエルシードを運んでいる時に突然襲われたので・・・」

襲われた・・・か、あまり穏やかじゃねえな。

「そうか・・・大変だったなお前は」

「は、はい・・・」

「んで、なのははこのままユーノの手伝いするんだろ」

俺はグリンと首を回しなのはの方を向く。

「えっ！え、え」と・・・うん」

「そっか、いいんじゃないか？」

「え？」

「それはなのはが自分で決めたことだろ？なら俺はなのはのやることに文句は言わねえよ」

「リュウ君・・・」

「大丈夫だ、俺も協力する」

「リュウ君が！？」

「ああ」

「今日みたいな事があつたらダメだろ？だから俺も協力する、異論は認めんぞ」

「は、はいわかりました、あの龍牙さん」

「なんだ？」

「そろそろ龍牙さんの事話していただけませんか？」

「それわたしも聞きたい！」

なのはが食いついてきたな・・・。

「ああ、最初に言うが俺はこの世界の人間じゃない」

「ええ！？」

「龍牙さんですか！？」

「ああ、俺はミッドチルダっていう世界の生まれだ」

「へえーそうだったんだ・・・」

「そういえば龍牙さんがデバイスを起動していた時魔力を全く感じなかったんですが、なぜですか？」

「そりゃそうだろ、俺魔力一切持ってないから」

「・・・え？それ本当ですか？」

「ああ、嘘はついてないぞ」

「じゃ、じゃありユウ君は何でデバイスを起動できるの？」

「それは覇気っていう力おかげだ」

「覇気？」

「ああ、俺は魔力が無い代わりにその覇気を使っている。覇気は魔力と同じように扱うことができるんだ、それに俺は魔力を使つてないから探知されたりされないし魔法使いとはいえないがな」

「そ、そうなんですか・・・」

「さて、他に質問はあるか？」

ユーノとなのはが向かい合う、念話でもしてるんだろ。

「いえありません」

「そうかならもうお開きにするぞ、もう寝る時間だ」

「うん、じゃおやすみリュウ君」

「龍牙さんおやすみなさい」

「ああ、おやすみなのは、ユーノ」

なのは達が部屋を出て行った。さて俺も寝るかな・・・

「マスター、暫しよろしいですか？」

「なんだ？」

「マスターにお見せした靱様の最後の映像がございましたね」

「ああ・・・」

「あの映像は靱様のデバイス、オウガからコピーされたものです」

「まあそうだろうな」

「そしてもう一つ、気になる映像がありました」

「気になる映像？」

「はい、ご覧になりますか？」

「ああ頼む」

「御意」

アレースの宝石部が光り、映像が流れ出した。その映像には小さな部屋に二人の人が映っていた、父さんともう一人・・・どこかで見たときあるおっさんだ・・・思い出した！前見た映像に映っていたモニターの奴だ！！。

「どういうことだ！！」

父さんがおっさんに向かってものすごい剣幕で怒なる。

「何がだ？」

おっさんがとぼけた表情をする。

「しらはつくれるな！！何故輸送船を墜落させた！！」

「・・・あの輸送船にはロストギアが積まれていた、しかも一つで

「はない21個ものロストログアがな」

「21個？まさかジュエルシードのことか？」

「なに！？」

「だから私は墜落命令を出したのだ」

「輸送船には通信したのか！？」

「いやしていない」

「何故だ！？」

「21個ものロストログアを所持した輩が素直に我らに手渡すと思うか？」

「だが！通信はすべきだ！それにあの輸送船には子供が乗っていた！！」

「子供……。」

「ほう、それは残念だ尊い犠牲を出してしまったな」

「貴様……！！」

「さて、そろそろ出て行きたまえ、私は墜落した輸送船からロストログアを回収しなければならぬ、おっとそういえば……墜落したのは地球というところだったな」

「なに!？」

「そういえば君は今地球に住んでいるのだったな、どうせだ君が回収してきてはもらえないかね？」

「断る!!」

父さんが扉に向かって歩き出す。

「どこへ行くのだね？」

「このことを上に報告する」

「やめたまえ」

「!」

おっさんが父さんの背中に銃を押し付ける。

「君にはこのことを黙ってもらわないとな」

「貴様!!」

「ついでだ、君は色々と邪魔になる。ここで消えてもらうつとするか」

「ちっ!」

バシィ!

「ぐう!」

父さんがおっさんの持っている銃を蹴り飛ばす。

「お、おのれ!!」

「オウガ! 転移だ!」

「イエスマスター」

すると転移が開始され、見たときがある荒野へと転移する。

「さて、これからどうするか・・・」

父さんが曇った表情をする。

「!マスター! 転移反応多数!」

すると管理局の服を着た人が大勢転移してきた。

「真崎靱、あなたを排除させていただきます」

局員達が一斉に武器を構える。

「オウガ! セットアップ!」

「了解!」

父さんがバリジャケットに身を包む。そしてアレースが映像を止める。

「・・・」

「マスター・・・」

「父さんが殺された理由・・・わかったな」

「はい・・・」

父さんはあのおっさんの不祥事を上に報告しようとして殺された・・・か。ふざけてるな・・・

「あともう一つわかったことがある、ユーノを襲った奴は管理局つてことだ、恐らくいずれジュエルシードを回収しに来た局員とあることがあるだろうな・・・」

「その時はマスターは如何なさるのですか？」

「決まっている、俺の邪魔をするならぶっ潰す。それだけだ、アレース力、かしてくれるな？」

「クスッ、何を仰っているのですか？マスター。私はあなたに最後まで一緒にしますよ、それが韌様、李香様の望みでもあり、私の望みです」

「ありがとうアレース」

俺はいい相棒に恵まれたな・・・。

「さて、寝るか」

ベッドにダイブする。今日は色々あったな……。今日はよく寝れそう。

俺がなのは達に協力して一週間がたった。ユーノにはあの映像を見せていない。まだその時じゃないと思ったからだ。そして何の問題も起きずに6個のジュエルシードを回収できた。一番苦労したのが原作でJFCのサッカーの試合の日に、ゴールキーパーの持っていたジュエルシードが暴走したときだな。あの木の怪物を倒すのは大したことなかった。だが危うく一般人に危害が加わりそうだったから助けた、その一般人が車椅子の少女で、あのキャラに似ていた気がするのが気かりなんだが……。その後原作通り落ち込んだのはを慰めるのは一番苦労した……。その日の夜、なのはが「一緒に寝てほしい」と言ったときはマジで大変だった……。んで今俺はすずかの家に招待され、俺、なのは、フェレット状態ユーノと恭也とすずかん家に来た。でけえ、家だなあ、オイ。前に見たときがあるがうんでかいな。なのはが呼び鈴を鳴らすと、メイドの『ノエル・K・エーアリヒカイト』さんが出迎えてくれた。

「いらっしやいませ恭也様、なのはお嬢様、龍牙様」

ノエルさんが挨拶をする

「お招きに預かった」

「こんにちは」

「どもつす」

「ではこちらにどうぞ」

俺達は、ノエルさんに案内されて家の中に入っていった。

そして案内された部屋では、アリサ、すずか、すずかの姉さん『月村忍』さんがお茶を飲んでいる。

「あつ！なのはちゃん、龍牙君、恭也さんいらっしやい」

すずかがこちらに歩み寄ってくる。

「よう、すずか」

「おはようすずかちゃん」

「なのはちゃん、龍牙君、いらっしやい」

『ファリン・K・エアリヒカイト』さんが声をかけてくれる。すると恭也が忍さんに近づいていく。

「フフ、いらっしやい恭也」

「ああ」

そう二人が言うとしし見つめあい二人とも別の部屋へ行く。俺となのは、そしてすずかアリサがいるテーブルの席についた。

「にしてもすずかの姉さんと恭也ラブラブだな」

「ほんとね」

アリサが微笑みながら言う。

「お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ」

「いいよねえ」

なのはがニヤついて言う・・・ちょっと怖いぞなのは・・・あ

「すまんトイレって何処かな？」

「ご案内いたします」

俺はノエルさんに案内され部屋を出た。

なのはside

「なのはってさ龍牙好きなんですよ？」

「アリサちゃん！？いきなりにやにを!？」

あ、かんじゃったの・・・。

「だってさ、なのはたまに龍牙の事顔赤くしてずっと見ているときあるし」

「うん、私もそれ気づいてた」

「すずかちゃんまで・・・」

「ね、ね何時なのはちゃん龍牙君の事好きになったの？」

「あ、それ私も聞きたいわね、この際だからしゃべっちゃいなさいよ」

アリサちゃんとすずかちゃんが興味津々に聞いてくるの・・・逃げられないの～。そしてわたしはリュウ君に助けられたことを事細かに話しました。そしてリュウ君は学校では暗い人と思われてるけど、実はとても優しく、なんども慰められたことがあって、気がついたら好意を抱いていたこと、全部話しちゃいました・・・。リュウ君がいなくてよかったの～。

「へえ～あいつがね、意外なもんね」

「確かに他の人と話したからないけど、時々優しい時あるよね」

「にやはは・・・」

「ードウン!!」

「「!」「」

「ジュエルシード!？」

「（ユーノ君!）」

「（すぐ近くにある!）」

ユーノ君と念話をする。

（ユーノ君！走っちゃって！）

（え？）

（ジュエルシードの方に走って！）

（なるほど！）

ユーノ君が走って森へ向かっていきます。

（リユウ君はどうする？）

（僕から念話しとく！）

（わかったの）

「ユーノ君、何処行くの？」

「ユーノどうかしたの？」

「何か見つけたみたいで・・・ちょっと行ってくるの」

「私も行くのか？」

「ううん、大丈夫」

わたしはそう言いユーノ君の走った方向へ向かいました。

side out

「しかしだっ広い家だな・・・」

俺はトイレから出た。しかしここまで広いと迷っだらうな、俺なら。

「まあこういう暮らしは少し懂れるな・・・」

・・・何言ってんだ俺。

ーードウンー！

「これはー！ー」

（龍牙さんー！ー）

（ユーノー！ジュエルシードかー！？）

（はい！なのはも向かっています！）

（わかった！すぐ向かう！）

俺はアリサ達がいる部屋に向かう。

「あれ？なのはは？」

「さっきユーノ追いかけて行っただよ」

「そうか、俺も後追いかけるかな」

「えっ？」

「なのは事だ、どっかで迷いそうだしな。ってことでちょっと行ってくる！」

「あ！ちよつと！」

俺は走ってなのは達の方へ向かう。アリサ達から見えなくなったことを確認すると

「アレースセットアップ！」

「御意！」

アレースを起動する。そしてなのは達の下へ駆けつける。なのはは既にレイジングハートを起動させている。

「リユウ君！」

「龍牙さん！」

ジュエルシード反応が強くなる。

「ユーノ！結界を張れ！」

「はい！」

ユーノが結界を張ると、周りの景色が変わっていく。そして激しい光が溢れ出す。すると、森の奥から

「にゃあああ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「……デカア！なんだあれ！？アニメで見たことあるがまさかここまで大きいとは……」

「まあ……あれだ子猫の大きくなりたいて思いが……叶ったんじゃないか？」

「う、うん……少しかかなり大きくなりすぎじゃないかな？」

「……なんで二人とも冷静なの？」

「いや……これでもショックを受けてるんだが……」

「僕も……」

「そう……なの……」

「けどこのままじゃ危険だね、元に戻さないと」

「確かにな……」

俺とユーノが気を取り直してそう言った。デカ猫は襲ってきそうにないな……。

「じゃ、ささつと封印をする・・・」

ボカアン!!

「二ギヤアア!!」

「なっ!?!」

その時、デカ猫の頭部に金色の魔力弾が直撃する。まさか!?!俺が振り向くと電柱の上に立つ金髪の少女。『フェイト・テストロッサ』がいた。なんでフェイトがここに・・・?

「バルディッシュ、フォトンランサー電撃」

フェイトはフォトンランサーを連発する。

「ちっ!」

俺は猫デカの前に立ち

「はああああ!!」

俺はフォトンランサーを叩き落していく。だが何発か落としかねず、デカ猫の足元に打ち込まれ、デカ猫が転倒した。

「リュウ君!」

なのはが俺に走って近づいてくる。

「大丈夫!？」

「ああ、俺は無傷だ・・・」

俺はすぐ側にある木の上に降り立ったフェイトを見る。そしてフェイトが俺達を見下ろす。

「同系の魔導師・・・ロストログアの探索者・・・」

フェイトが小さな声で言った。

「間違いない、僕と同じ世界の住人・・・それにこの子、ジュエルシードの正体を知ってる・・・」

フェイトの発言により確信したユーノ、そしてフェイトがなのはのレイジングハートを見て

「バルディッシュと同系の・・・インテリジェントデバイス」

「バル・・・ディッシュ・・・?」

フェイトの言葉でなのはが呟く。うん原作通りの台詞だな。

「あなたのデバイス・・・」

フェイトが俺を見て

「あなた・・・何者・・・?」

うん・・・この状況で「俺だ!真崎龍牙だ!」・・・とは言えな

いな・・・。

「・・・なに、ただの無名魔法使い（仮）だ」

「そう・・・」

するとフェイトがデカ猫の方を向き

「ロストロギア・・・ジュエルシード・・・」

フェイトがそう言うと

「サイスフォーム、セットアップ」

バルディッシュが変形し、鎌状の魔力の刃が発生する。

「申し訳ありませんが・・・頂いていきます」

その瞬間、フェイトが俺に向かって斬りかかる。

ガキン！！

「くっ！」

俺は右手でバルディッシュを防ぐ。

「なぜジュエルシードを！？」

「すみません・・・答えられません」

「なに・・・？」

「リュウ君！」

なのはが俺とフェイトの間に割って入ってくる。

「はぁ！！」

ギイン！！

「くうう・・・」

ガキン！！

フェイトがバルディッシュを振るい、なのはがそれをレイジングハートで防ぐ。そして互いに弾き合う。なのははデカ猫の前に降り立ち、フェイトは再び木の上に降り立つ。そして互いににらみ合っているが

「にゃああああ・・・」

「えっ！」

急に動き出したデカ猫の方を向いてしまう。

「バルディッシュ」

フェイトがその隙にフォトンランサーを放つ。原作通りか！！

「ちっ！！」

俺はなのはの前に立ち、左手に覇気を溜めていく。

「覇光龍壁！！」

ゴォア！！

俺は左腕を地面に殴りつける、すると俺の正面に龍の形状をした覇気がフォトンランサーを全て弾く。

「な！？」

フェイトが驚いた声を上げる。

「大丈夫か？なのは」

「うん・・・」

俺はなのはの安否を確認すると、フェイトの方を見る。フェイトは俺を警戒心バリバリで睨みつける。ふう・・・これ以上は無駄かな？。俺はデカ猫の足を掴み

「ほれ」

ブン！！

フェイトの方に投げる。

「どうやら俺達はお前には勝てなさそうだからな、こいつはお前が封印しろ」

「リュウ君!？」

「ちよっ!何やってるんですか!？」

俺の行動に慌てるなのはとユーノ。

(悪いが俺一人なら何とかあいつに勝てる。だがなのはがいるからな、なのはを守りながら戦うのは正直キツイ。ここはあっちにジュエルシードを渡して早々にお帰り願ったほうがいい)

俺は念話でこう言った。なのはとユーノは納得したような顔をして

(そうですね・・・この状況じゃ仕方ありませんね・・・)

(う~~~~)

「本当にいいんですか？」

「ああ、封印してる最中襲ったりしないから安心しとけ」

フェイトが俺を睨みながらデカ猫に近づく。そして、稲妻のような魔力がデカ猫を縛り、封印する。

そして、後には気絶した子猫とジュエルシードだけが残った。フェイトは、バルディッシュでジュエルシードを回収する。そしてフェイトがそのまま立ち去ろうとした。

「待って!」

なのはがフェイトに呼びかけた。フェイトは歩みを止める。

「何であなたはジュエルシードを集めるの!？」

なのはが問いかける。

「理由は言えない・・・けど・・・ある人のために集めなきゃいけない」

ある人?・・・

「それは母親のためか？」

俺はつい質問してしまう。

「違う、私の大切な人のため・・・」

フェイトはそう言うところの場を立ち去った・・・ある人のため?・・・プレシアさんのためじゃないとすると、一体誰だ?クソツ!、また謎が増えちゃったな・・・俺はただただ空を見上げていた・・・。

第五話「真実、そして金色の魔法少女との遭遇」（後書き）

白・ども作者の白き修羅です！うゝんなんかジュエルシードが散らばった理由がなんか強引な気がする・・・文才力の無いってマジ嫌だね・・・自分を呪うよ

龍・主人公の龍牙だ、ま、それは仕方ないんじゃないか？お前最近始めたばかりだし、これから頑張ればいいんだよ

白・お、おう・・・

龍・そういえばオリジナル技が出てたな

白・ああ霸光龍壁のことか？

龍・ああ

白・あれは俺の思い付きで追加したオリジナル技だ

龍・思い付きってお前・・・まああの技でなのは守れたからいいんだがな

白・だろ？では霸光龍壁の説明をいたします

霸光龍壁

左手に霸気をため、地面にその霸気を放ち操作することで自分の目の前に龍の形状をした霸気の壁で、相手の攻撃から身を守る。利き手の右手でやると地面を割ってしまうため、左手で使用する。

龍・利き手じゃ力入っちゃうからな

白・だから左腕なんだよ、さて次回も頑張って書きます。応援よろしく!!

龍・じゃあな

白・もうちょい心ある挨拶無いかよ

龍・無理俺の性格上

白・そ、そうか・・・

第六話「温泉旅行と再会。放て！『機神双獣撃』！！」（前書き）

どうも、白き修羅です。更新遅れました真に申し訳ありません。そういえば気づいたらPVが10000越えていました！。呼んでくださった皆様本当にありがとうございます！！今回のタイトルですが・・・わかる人にはわかります、あの技が出ます。ではテンション上げて、第六話どうぞ！！

第六話「温泉旅行と再会。放て！『機神双獣撃』！！」

やって来た連休日。フェイトの一件で頭を悩ませていたが、この連休中は何も考えずに休みを堪能しようと思っていたのだが・・・。

「温泉楽しみだね♪リュウ君♪」

「ああ・・・」

上機嫌で言うなのは。今俺達は車で海鳴市の山の中の温泉に向かっている最中だ。参加者はまず高町一家、アリサ&すずか、忍さん、ノエルさん、ファリンさん、んでフェレット状態のユーノだ。まあ原作通り。

（アレース・・・さつきからなのはが上機嫌なんだが・・・なんか嫌な予感しかないんだが）

（さて？何故でしょう？）

（いや俺が聞いているんだって）

（温泉旅行ということで気分が良いのでしょうか）

（それならいいんだが・・・さつきからチラチラ俺の方を見ているんだが・・・）

（・・・もうマスターもお気にしないでこの旅行を楽しめばいいでしょう？）

（あ、ああ・・・）

俺がアレースと念話をしているうちに、旅館についたようだ。

旅館についてまず、俺の楽しみである温泉に入ろうとしたのだが・・・頭を悩ませられる。何故なら

「リュウ君！一緒に温泉入ろう！」

なのはのこの発言のせいだ。さつきからチラチラ俺を見ていたのはこのためか・・・。一緒に入る？いやいや無理でしょ。だって・・・いや無理でしょ俺確かに今は肉体は子供だが精神は軽く30いつている。もしコレで入ったら・・・想像したくねえ・・・。

「なのは、男と女は一緒に入っちゃダメなんだぞ？」

「お母さんが10才以下なら一緒に入ってOK！って言ってたから大丈夫！」

もオオオオもオオオオこオオオオさアアアアん！！！！なになのはに教えてるんですか！！何ですか！？俺にたいする嫌がらせですか！？。「一緒じゃ嫌？」とうるうるした目で俺を見るのは。グツ！そんな目で俺を見るなああ！！精神がガリガリ削られるから！！クウ！こうなったら！

「なのは」

ポンツとなのはの肩に手を乗せ

「すまん!!」

レッツエスケープ♪

「ああ！リユウ君!!」

「男風呂に入ってくんなよ」入って来たらもう口聞いてやんねえからな」

となのはに言うておく、ついでにアリサに女風呂に連れて行かれそうなユーノをアリサの腕から回収する。

「キュ!!」

「あ！ちよつと!!」

後ろでギヤアギヤア言っていたが気にしない。俺はそのまま更衣室に走りこんだ。そして更衣室に誰もいないこと確認すると。

「ユーノ、お前も災難だったな」

「本当ですよ・・・もし龍牙さんが助けられなかったら・・・色々大変なことに・・・」

「気にすんなついでだ」

「ついで!？」

「ああ、ついで」

「は、はあ・・・」

「けどさ、お前男なんだから少しは興味あるんじゃないのか？」

「そ、そんなわけ・・・あ、けど少しくらい・・・」

「ごによごによと呟く、やっぱ淫獣決定だなこいつ。」

「さてユーノ、そろそろ人間の姿に戻っていいんじゃないのか？」

「えっ？ああそうですね・・・ってなんで龍牙さん僕が人間って！
？何時から気づいたんですか!？」

「最初からだ」

まあ強ち嘘じゃねえし。

「そ、そうですか・・・」

「とういうわけで戻つとけ、フェレット状態で温泉入って、毛とか
漂ってたら旅館の人に迷惑だろ」

「ま、まあ確かに・・・じゃあ」

ユーノがそう言うとユーノは光りに包まれる。光が収まると黄土色の
髪の少年がそこに居た。

「えっと・・・これでいいですか?」

「おう、じゃ入ろつぜ」

「はい!」

俺は走って温泉に向かった、一番はしゃいでんのつてもしかして俺?。

俺とユーノは温泉に浸かって極楽気分を味わっていた。

「ああ~~~~極楽極楽う~~~~」

「なんかおっさんくさいですよ」

「そうか?」

「そうですよ」

まあ精神だけは30歳いつてるから別に気にはしないがな。

「けど本当に極楽ですね」

「なあ」

「最近はジュエルシード集めで忙しかったですからね」

「確かにな。あ、ユーノ」

「はい？」

「ジュエルシード集まったらどうする予定なんだ？」

「ええつと・・・まず一族のみんなに色々報告して・・・それから・・・」

「それから？」

「考えてないです・・・」

「じゃあ高町家に来いよ」

「えっ？」

「あそこならお前が実は人間でしだって言っても快く迎えてくれるんだろ」

「考えてみます・・・」

「そつか、後さなのはに敬語じゃないんだから俺も敬語じゃなくていいんだぞ。なんか違和感ある」

「はi（ryじゃなくて、うんわかった」

「それでいい」

俺達はそのまま談笑をしていた。

風呂から上がると（ユーノはもちろんフェレットに戻った）俺達を待っていたのか、なのは、アリサ、さすががいた。

「リュウ君！旅館の探検しよ！」

となのはが言ってきた、まあ別にこれといってやることもないし別にいいか。

「別にいいぞ」

「じゃいこ！」

そうして俺達は探検を始めた。アニメだとあんましわかんなかったが、結構広いなこの旅館。

「そついえば龍牙君って綺麗な赤い髪してるよね」

「は？」

さすがが不意にそう言う。俺の髪が綺麗？確かに俺は生まれた時から赤い髪で、入学したての頃は教師に染髪疑惑をかけられたことがある。まあその時は父さんが来て、教師が父さんの赤い髪を見て染髪疑惑は解けたが。綺麗ってあまり言われたことないな。

「ほんとよね」

「しかもリュウ君の髪ってすごくさらさらなんだよ！」

威張って言うのは、オイオイなんでお前が威張るんだよ。

「へえ、龍牙君ちよつと触らせて」

「いいぞ、ほれ」

すずかの指が俺の髪に絡む。少しくすぐったいな……。

「うわ、さらさら、女の子の髪みたい」

「じゃ次私ね」

次はアリサが触る、髪から指を離すとアリサは半眼になり

「あんた男の癖になんつー髪質してんのよ……手入れとかしてんの？」

「いや全然」

髪にそこまでこだわらんから俺は、基本普通のシャンプーで洗っているだけで、全然手入れも施していない。

「……なんか羨ましいわ、手入れもしてないのにその髪質は……」

ぶつぶつ言い始めたアリサ。すると

「ハア―イ！おチビちゃん！」

突然オレンジ色の髪の女性がなのはに向かって声をかける。明らかにその女性はフェイトの使い魔の『アルフ』だ。あ、忘れてた、そういうえばアルフとのエンカウントがあっただった。俺はささっとすずかの背後に隠れる。なんで隠れるかって？アルフとは昔フェイト達と遊んでたんだよ、つまり俺の顔を知っている。見つかる何かめんどくさそうだな〜と思って隠れた。

「君かね〜♪ウチの子をアレしてくれちゃってるのは♪」

「・・・う・・・え・・・？」

アルフは睨みつけるようにそう言つと、思わず声を漏らすのは。オイオイ傍から見れば酔っ払いが子供に絡んでるようにしか見えんぞ？アルフ。

「あんまり賢そうでも強そうでも無いんだけど・・・ただのガキンチヨに見えるんだけど・・・」

かがんでなのは見るアルフ。なのはは一步後ずさる。本当ならこの後アルフが念話でなのはに何かしら言っただろうが。はあ・・・仕方ない。

ゴン！！

一気にアルフの前に立ち、思いっきり頭突きをかました。頭を抑え悶絶するアルフ。昔よくこうやってアルフを黙らせてた。

「ツ~~~~~！！なにすんだいアン・・・タ・・・？」

俺に気づいたのかハツとした表情になるアルフ。

「も、もしかして・・・龍牙・・・かい？」

「もしかしくてもそうだ、久しぶりだなアルフ」

「~~~~！！久しぶり~~~~」

アルフが抱きついてきそうだったので

ゴンー！！

再び頭突きをかました。

「な・・・なんで頭突きするんだい・・・」

「ん？なんか面倒だったから」

「ひ、ひど・・・」

頭を抑え涙目になるアルフ。なのは達が呆気にとられた表情をする。

「何をしてるんですか？アルフ」

アルフの背後から薄茶色の髪の女性が話しかけてきた。・・・まさか

「あっ！リニス！」

そうプレシアさんの使い魔『リニス』だ。あれ？なんでこいつが此処に？いやその前に、温泉旅行の頃にはもうプレシアさんとの契約がきれていなくなってるはずじゃなかったか？

「ほら！龍牙だよ！龍牙！」

アルフが俺に指を指す。オイ人に指を指すな、ちょっとイラついたので、ジャンプして

ゴンー！

「あだ〜〜！！！」

またまた頭突きをかます。悶絶するアルフをほっというて、リニスは俺に近づいて

「・・・龍牙・・・君？」

「よう、久しぶり」

「は、はいお久しぶりです・・・お元気でしたか？」

「みりゃわかんたら」

「フツ、そのようですね、え〜と龍牙君？その子達は？」

リニスはなのは達を見る。まあ紹介はしとくか。

「ああ、まずこいつは高町なのは、俺の通ってる学校のクラスメイトで、今こいつ家に世話になってる」

「そうだったんですか、龍牙君がお世話になってます」

ぺこりとなのはにお辞儀をするリニス、お前は俺の母親か？なのはそこで「いえいえ」とか言うな。

「んで、金髪の方がアリサ・バニングス、紫の髪の奴が月村すずか、どっちも俺のクラスメイトだ」

「「ど、どうも」」

同時に言う二人。シンクロ率たけえな。

「あの〜リュウ君？」

「ん？どした？なのは」

「その人達は？」

あゝこっちも紹介しないといけないか・・・。

「まずこの人はリニスっていうひとで、昔よく世話になってた。あの意味俺の姉的存在だ、んでさっき俺が頭突きました奴がアルフ、以上」

「ちょ！龍牙！もうちょつとましな紹介がないのかい！？」

「わかったよ、じゃ改めて、こいつはアルフ、昔よく遊んでた。以上」

「あんまし変わってないじゃん・・・」

しゃがみこみ床にのの字を書くアルフ。

「なのは、アリサ、すずか、悪いがこいつらと話したいことがあるから席はずしてくれ」

「う、うんわかった、じゃまた後でね」

「おう」

なのは達はこの場から離れた。今居るのは俺とアルフ、そしてリニスだけだ。

「しかしなんでアルフはなのはに絡んでたんだ？」

「いや・・・ちよつといろいろ・・・」

「いろいろねえ・・・まあいいや」

「けど驚きました、まさか龍牙君とこんな場所で再会できるなんて」

「こっちも驚いたよ」

特にリニス。・・・なんか視線感じるな・・・。

「・・・何時まで隠れてるんだ？なのは」

「「！」「」」

植木鉢の後ろから現れた。

「えへへ・・・」

「何時からそこに居た？」

「え〜と、最初から？」

「オーケー、後でなのはオシオキだな」

「ええ〜！！！！」

叫ぶのは。うるせえ・・・。

「冗談だ」

「うう〜酷いのリュウ君」

俺達のやり取りを見て、リニスとアルフが笑う。

「そういえばアルフが居るってことはフェイトもいるんだよね？」

「え？うん」

「そうか、じゃ呼んでくれ、フェイトを交えてお前等に色々聞いた
いことがある」

「わかった」

アルフが念話を始める。

「ねえリュウ君、フェイトって誰？」

「リニスの教え子で、お前と同年代の女の子だ。いいやつだからきつとお前とも仲良くなれるはずだ」

「そうなんだ」

「因みに俺の幼馴染でもある」

俺がそう言つと

「幼馴染・・・女の子の幼馴染・・・」

ブツブツ呟くのは・・・こええよつて。

フェイトSide

私は、ジュエルシードを探して山の中にいた。アルフとリニスは例の白い魔導師を見てくるといつて、宿泊施設に行っている。ジュエルシードの位置を大体わかったし、今夜には回収できるだろうと思っていた。そして私はふとあの紅い魔導師のことを思い出す。変なバリアジャケットを身に纏い、デバイスを起動してる筈なのに、魔力を一切感じない。しかも私の攻撃はまったく通用しなかった。白い魔導師よりもはつきりいつて強い、下手をすれば私以上。けどあのどこか強く、どこか心優しい声。少しだけ似てたな。あの子に・・・。

（フェイト！フェイト！聞こえる！）

アルフから念話が来た。

少し慌ててるようだけど・・・何かあったのかな？。

（聞こえるよアルフ。例の魔導師達は如何だった？）

（それどころじゃないんだよ！龍牙が、龍牙が今アタシの目の前にいるんだよ！）

え？龍牙？本当に？あの龍牙？

（それホント！？）

（うん！フェイトも早く来なよ！）

（わかった！！すぐそっち行く！）

私は急いで宿泊施設に向かった。

私は龍牙が言ってくれたあのことを思い出す。

「私・・・普通の人間じゃないんだ」

「普通の人間じゃない？」

「うん・・・私は・・・本当は・・・姉さんの・・・アリシア・テスタロッサの細胞を元に作られた・・・クローンなんだ・・・」

「へえー」

「へえーって・・・私普通の人間じゃないんだよ？」

「でも、お前はお前だろ？」

「えっ？」

「アリシアのクローン？それがどうした。フェイトはフェイトだろ？真崎龍牙はお前がクローンでもこれからもずっと、フェイト・テスタロッサと今までと変わらず接する。それだけのことだ」

「・・・本当に？」

「ああ、もしお前を馬鹿にする奴がいたら俺に教えろ、俺がそいつぶっ飛ばしてやる！」

「う、うん！」

「アリシアのクローン？それがどうした。フェイトはフェイトだろ？真崎龍牙はお前がクローンでもこれからもずっと、フェイト・テスタロッサと今までと変わらず接する。それだけのことだ」・・・あの時の言葉が心の奥に残る。今でも思い出すと心が暖かくなる。

「龍牙・・・！」

私は呟く。龍牙のお母さんが亡くなって、母さんと姉さんと一緒に葬式に出た、その時の龍牙の悲しい表情が頭を離れない。慰められなかった自分が憎い・・・そして龍牙は何も言わずに突然ミッドチルダからいなくなった。あの時は姉さんと一緒に一日中泣いた、母さんが何とかして龍牙を見つけようと思ったけど全然見つからなかった。それから数年が過ぎた・・・けどその龍牙があのだ宿泊施設にいる！そう思うと次第にスピードが上がる。私はスピードには自信がある。けど今の私はこれでも遅く感じる。もっと、もっと早く！

宿泊施設についてアルフ達の居る場所にたどり着いた。アルフの隣にいる見覚えがある赤い髪。

「龍・・・牙・・・？」

私がそう言つと赤い髪の子が振り向く。間違いない龍牙だ・・・。

「よっフェイト」

私は龍牙に向かって走った

ガバッ！

そして思いつきり抱きついた。そして気づいたら涙を流してた。

side out

「龍・・・牙・・・？」

呼びかけられたので、後ろを向くとフェイトがそこに居た。するとフェイトが俺に向かって走ってきて

ガバツ！

抱きしめてきた。

「龍牙・・・」

「な、なんだ？」

「会いたかった・・・」

フェイトが涙声で呟く。

「俺もだよ・・・あのさフェイト、そろそろ離してくれないか？」

俺達を泣きながら見るアルフとリニス「グスツ、よかったねえ！フェイト」とアルフが言う。だが・・・なのはの視線がめちやくちやいてえ。

「やだ」

「はい!？」

「久しぶりに会えたんだもん・・・あともう少しだけ・・・」

そろそろなのは視線がやばくなってくる・・・。

「落ち着いたか？」

「う、うん」

あれから五分抱きしめられ続けられた。うっんなんか・・・あれだな、まあ嫌じゃないからいいんだが・・・。

白「ロリコンめが」

ん？今なんか聞こえた気が・・・。気のせいか・・・いや絶対に気のせいだ・・・。

「あゝ」

なのはがフェイトに声をかける。

「フェイトちゃん・・・でいいんだよね？」

「うん・・・君は？」

なのはがそう聞くと

「私は高町なのは！なのはって呼んでね！」

「なのは・・・うん覚えた」

「じゃあ、これで私達お友達だね」

なのはが嬉しそうに言った。

「え・・・？友・・・達・・・？」

フェイトが呆気に取られたように呟く。

「うん」

「えっと・・・私で・・・よければ・・・でも・・・どうすればいいの？」

フェイトは自信なさげに問いかける。

「・・・簡単だよ」

なのはのその言葉に、フェイトは驚いた表情をして顔を上げる。

「友達になるの、凄く簡単」

そして、なのはは一呼吸置き

「名前を呼んで。初めはそれだけでいいの「君」とか「あなた」と

か、そういうのじゃなくて。ちゃんと相手の目をみてはつきりと相手の名前を呼ぶの。私、高町　なのは。なのはだよ！」

「なの・・・は？」

「うん！そう！」

初めて名前を呼んでもらい、なのはは嬉しそうに答える。フェイトも笑顔になる。よかったなフェイト。俺も心の中でそう呟く。

「あの・・・空気壊すように悪いんだけどさ・・・なんでフェイトはジュエルシードを集めてるの？」

ユーノがフェイトに質問する。ナイスだユーノ俺も一番それ聞きたかったからな。

「リニス・・・」

フェイトは心配そうな表情でリニスを見る。

「大丈夫ですよ、教えてもいいでしょう、特に龍牙君には聞いて欲しいですからね」

特に俺？なんでだ？。

フェイト達がジュエルシードを集める理由は原作と全く違っていた。プレシアさんが俺の母さんと父さんの死因を調べるために管理局の

データバンクから調べた結果。まず母さんは、ジュエルシードというロストギアを所持した犯罪者がジュエルシードを使い研究所で暴れ、それに巻き込まれて死亡した。となっている。そして父さんはその犯罪者と戦闘を行い、その末に両者相打ちとなり死亡、ジュエルシードはその戦闘のせいで管理外の地球に落ちた。と公になっている。そしてプレシアさんが地球に落ちたジュエルシードが悪用されないように、これ以上父さんと母さんのような被害者をつくらないように、そして俺みたいに悲しい人間をつくらないように、フェイト達にジュエルシード回収を頼んだらしい。フェイトの大切な人ってのは俺のことだったらしい……。ちっ……。管理局のやろう全てジュエルシードのせいにしてやがって……。でっち上げ方がえげつねえんだよ……。クソがッ！俺は血が出そうなくらい手を握り締めた。

「龍牙どうしたの？」

フェイトが心配そうに俺を見る。

「いや、なんでもねえ……。なんでも……。ねえんだ……」

「ならいいんだけど……」

暫しの沈黙が続く。

「……しかし管理局は嘘の情報を公にするんだな」

「……えっ！」「」

フェイト達が驚いた表情をする。

「まず、母さんが死んだ時、まだジュエルシードは発掘されてない、な？ユーノ」

「うん」

「本当かい！？」

「ああ、母さんが死んだのは数年前、ジュエルシードが発掘されたのは今年。まずそこから矛盾点が生じる。それに父さんは・・・」

「？」

「いや、なんでもねえ・・・」

あぶな・・・危うく父さんのこと言うところだった・・・こいつらには言うつもりはないからな・・・。

「そんな・・・私達が嘘の情報に踊らされるなんて・・・」

リリスが苦虫を噛み潰したような顔になる。

「あ、あの～」

「どうした？なのは」

「管理局って何？」

あ、まだこの頃なのははまだ管理局のこと知らないんだっけ？。
・・・まあ教えても別にいいだろ。

「管理局、正式名称は時空管理局って・・・説明めんどいからユニノパス」

「ええっ！そこで僕に振る！？・・・ま、別にいいけど・・・あのなのは、時空管理局ってのは・・・」

ユニノが管理局の事をこまごまと説明をした、俺とフェイト達は理解したが・・・なのはは理解していないようだ。

「管理局ってのは、えーとそうだな色んな世界の平和を守ってる警察みたいなもんだ」

「へえー、ようやくわかった！けど・・・なんでその管理局は嘘つくんだろうね」

「何か都合の悪いこともあるんだろ」

「何故二人の死因に嘘をつくんでしょう？」

「さあな・・・」

母さんとはかく、父さんは実は自分達が殺しました、なんて公にはできないからな。

「んで？これからお前等はどうする？」

「・・・」

沈黙する三人、だろっな今まで嘘の情報に踊らされてたんだ。ジュ

エルシードを集める理由もなくなつたろう。

「とりあえず、なのはとユーノがジュエルシードを集める理由は変わらないな」

「うん！」

「そういえば、なのはがジュエルシードを集めてる理由って・・・」

「うん、ユーノ君のお手伝い。自分の暮らしてる街や、自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから」

「そうなんだ・・・ねえなのは？」

「なに？フェイトちゃん」

「私達も手伝っていい？」

「えっ？」

「龍牙もこの事に関わってるんでしょ？」

「ん？まあな」

「私は龍牙を危険な目にあわせたくない、ジュエルシードに関わってるなら尚更だよ。龍牙が関わってるなら私も手伝う、少し強引な理由だけど・・・いいよね？」

「うん！もちろんだよ！」

「よかった・・・アルフもリニスもそれでいいよね？」

「うん、アタシはフェイトの決めたことに口出ししないよ！」

「私もです、フェイト、あなたが決めたのならそうしなさい。プレシアからは私から言っておきますから」

「ありがとう」

「決まったな」

「だね」

俺とユーノが頷く。

「そういえばフェイト、此処のジュエルシードは見つかったかい？」

「うん、大体場所は特定できたよ。後は封印するだけ」

「フェイトえらい！」

「さて、そろそろ飯の時間だな、お前等も一緒にどうだ？」

「一緒に一緒にしましょうフェイト」

「うん！」

そして夕食。フェイト達を夕食に招待した、とりあえず皆には、リニスは俺を昔よく世話とかしてくれた親戚といい、フェイトとアルフはリニスの教え子と紹介した。もちろん皆快く迎えてくれた。優しい人たちでマジ助かった。フェイトはアリサ達とも仲良くなり、今五人で楽しくおしゃべりをしている。

アルフは土郎さんと桃子さんと一緒に酒を飲んでいる。んで俺は隅っこの方で静かにジュースを飲んでいる。

「・・・いいもんだなこういうのも」

俺はそう呟いた。するとリニスが俺に近づいてきて

「龍牙君はなのはちゃん達と一緒におしゃべりとかしなくていいんですか？」

「ああ、俺はどっちかといえば静かな方がいい」

「・・・龍牙君って年齢に合わずごく大人っぽいところありますよね？」

「まあ、そりゃそうだろうな・・・」

「はい？」

「あ、いや、なんでもねえ・・・」

「そうですか・・・」

リニスは俺から離れて、アルフの所に行った。俺が転生者だって誰にも言えるわけねえからな。

その夜、布団に入って眠ろうとした所、ジュエルシードの反応を感じた。俺となのはは起き上がる。因みに何故俺がなのはと同じ部屋に居るからという。 「リュウ君と一緒にやなきゃヤダ! 」と士郎さんに駄々をこねて士郎さんもついで承してしまったらしい。 いや・ ・ ・娘に甘すぎんでしょ・ ・ ・。俺達とユーノは外へこそと飛び出した。

フェイトとアルフ、リニスと外で合流する。 なのはとフェイトは既にデバイスを起動している。俺は起動しない。 なのはとフェイトの二人なら大丈夫と判断したからだ。危なくなったら速攻で助けに入るがな。

「龍牙く魔力無いんだから来なくてもいいのに」

「ほっとけアルフ、魔力無くても大丈夫だ」

「けどアルフの言うとおりだよ、無理して来なくていいのに・ ・ ・」

「フェイトお前まで・ ・ ・」

「皆さん、しゃべってる場合じゃありませんよ。 見てください」

リニスの言葉で前を見ると、ジュエルシードの光が立ち上っている。ジュエルシードは、川の中で発動しているようだった。俺達が川の側に近づくと

「シャアアアア！！！！」

川の中から巨大な蛇が現れた。・・・舌をチロチロする仕草、水に濡れてテラテラ光る鱗・・・正直言つてキモイ。転生前の俺は蛇はあんま好きじゃなかったからな。ん？なのはが固まってるな。

「・・・・・・・・」

「どした？なのは」

「へ、へ、蛇イ~~~~~！！！！キュウ・・・」

「ちよっ！なのは！？」

なのはがボタンと倒れた。・・・あゝなのはって蛇苦手だったんだな。ただでさえ苦手なのにあのサイズで目の前に現れるとな・・・。

「龍牙、なのはと一緒に下がって。ここは私達がやるから」

「・・・わかった、お前等無理だけはすんなよ？」

「うん！」

「あいよ！」

「わかりました！」

フェイト達がデカ蛇の前に立つ。

「行くよ！」

最初にアルフが一気に間合いをつめ

「はっ！」

ドゴォー！！

「ギャツ！！！」

デカ蛇の胴を殴りつける、その一撃にデカ蛇は怯む。リニスがその隙を逃さず黄土色の魔法陣を発生させ

「貫け・・・轟雷！」

右手に魔力を集中させ

「サンダー・・・スマッシュャー！！！」

ゴォウ！！！！

「ギシャアアア！！！」

巨大な雷撃砲を放った。サンダースマッシュャーってフェイトの使ってた技だよな？リニスが使えるって事は元はリニスの魔法だったのか。

「フェイト！今です！」

フェイトはいつの間にか上空に居た。そして

「アークセイバー……!!」

黄色の魔力刃を放つ。

バァァン!!!

「ギャシャアアアアア!!!!」

魔力刃がデカ蛇の頭部に直撃し叫び声を上げその巨体を倒す。綺麗な連続攻撃が決まったな。綺麗

「すごいね……フェイト達」

「ああ」

フェイトがジュエルシールド封印するためにデカ蛇に近づく。ん? デカ蛇が少し動いた気が……。

「……!!! フェイト気をつける!!! そいつまだ!!!」

「えっ!」

ドガァ!!

「うう!!!」

俺が呼びかけたときはもう遅く、デカ蛇はカツ!と目を開きフェイト以上のある大きさの尻尾でフェイトを吹き飛ばす。

「「フェイト!!」」

リニスとアルフが悲鳴に近い声を上げる。

「チッ!アレースセットアップ!!」

「御意!!」

俺はアレースを起動し誰よりも早くフェイトの方に向かった。

フェイトSide

「ギャシャアアアアア!!!!」

私の放ったアークセイバーが巨大蛇の頭に直撃し倒れる。

「やったね!フェイト!!」

「流石でしたねフェイト」

「ありがとうアルフ、リニス」

私は龍牙の方を見る。龍牙は私の視線に気づいたのか、私の方を見て微笑む。私も微笑み返す。

「封印しましょうフェイト」

「あ、うん」

私は巨大蛇に近づきバルディシュを向ける。

「・・・！！フェイト気をつける！！そいつまだ！！」

「えっ！」

ドガァ！！

「うう！！」

「「フェイト！！」」

私の体は軽々と吹き飛ばされた。まずい！このままじゃ木にぶつかっちゃう！私は目を瞑った。

ガシッ

「・・・あれ？ぶつかってない。誰かに受け止められた感覚がある。リニスかアルフが間に合ったんだろうと思って目を開けると、そこに居たのは・・・」

「あ、あなたは！？」

あの時の紅い魔導師が居た。なんでこの人が・・・？。

「・・・フェイト無事か？」

えっ？この声もしかして・・・

「龍・・・牙？」

「おう、ようやく気づいたか」

私は正直いや、かなり驚いた。あの紅い魔導師が龍牙だったなんて・・・あれ？今私は気づいた。私は今龍牙にお姫様抱っこされている。それに気づいたとき一気に顔が熱くなった。

「どうした？」

「なんでもないよっ！」

「なら・・・いいんだが」

龍牙がゆっくりと地面に足を着き、しずかに私を降ろしてくれた。

「下がってるフェイト、ここは俺がやる」

「えっ？う、うん・・・」

龍牙が私の前に立つ。

「「フェイト！」」

リニスとアルフが側に近づいてきた。

「大丈夫かい！？」

「うん大丈夫だよ」

リニスが龍牙の方を向き

「龍牙君・・・ですか？」

「ああ、お前等も下がってろ」

「・・・はい」

一歩前に進む龍牙。そしてどこかの流派のような構えをし

「来い蛇公・・・ぶっ潰してやる・・・」

その瞬間龍牙から凄まじいほどの殺気があふれ出た。

side out

「来い蛇公・・・ぶっ潰してやる・・・」

俺はそう言っでデカ蛇に殺氣を向ける。殺氣に怯んだのか若干後ろに下がるデカ蛇。俺はデカ蛇に向かって跳んだ。

「はあああ！！おりゃあ！！」

バキヤアア！！！！

「グヒュ！！！！」

デカ蛇の頭部に思いつきり拳をぶつける。すると地面にデカ蛇の頭部がたたきつけられる。俺はそのまま追撃を加えようとするが

「シャアア！！」

ドゴオ！！

「グッ！」

尻尾が俺を吹き飛ばす。

「「「龍牙（君）！！！！」」」

フェイト達が叫ぶ。俺は空中で受身を取り、地面に着地した。

「ちっ・・・厄介だな・・・尻尾の速度が速すぎて目に追えねえ・・・」

「如何なさいます？」

「近接戦はキツイな・・・しゃあねえ、アレースあれやるぞ」

「あれですか・・・御意」

俺は両手に覇気を溜め、流れるように両手を動かす。右手は上から下に、左手を下から上に動かす。両手に青いオーラが纏う。そして

構えを取り。

「機神双獣撃！！！！せえい！せええい！！」

グオオオオオオオオ！！！！

両手から俺と同じ大きさの二匹の青い覇気で作った龍、覇龍を放つ。
覇龍はうねりながらデカ蛇に襲い掛かる。

「グシャアア！！」

覇龍はデカ蛇に直撃すると覇龍はまるで体内に入るように消え、直撃部が青く光る。そして

ガアアアアア！！！！

光る部分から一気に覇龍が飛び出てくる。そしてデカ蛇は叫び声一つ上げずにズシンツと倒れる。覇龍は空に向かって消えていった。
・ ・ ・初めて成功した・ ・ ・。

「フウ・ ・ ・フェイト、もう封印してもいいぞ」

「う、うん・ ・ ・」

フェイトが恐る恐るデカ蛇に近づく。バルディッシュをデカ蛇に向け。そして稲妻のような魔力がデカ蛇を縛り、封印が完了した。残ったのは小さな蛇とジュエルシードだけだった。俺はバリアジャケツトを解除する。

「ふう・ ・ ・なんとか終わったな」

「うん・・・龍牙さつきはありがとう」

「ん？ああ気にするな」

「しかし驚いたねえ、龍牙があんな強いなんてさ」

「ホントです。デバイスを起動してたようですが魔力は一切感じ取れませんでしたね、どうやってデバイスを起動したんですか？」

「まあ話してもいいが・・・まずなのはどうかしないとな」

「」「あ」「」

フェイト達が同時に声を上げる。忘れてたんかい・・・。俺とユーノがため息をつく。仕方ないから俺はなのはをおんぶする。

「話はなのはを部屋に置いてきてからだな」

「わかりました」

「わかったよ」

「おんぶいいなあ・・・」

フェイトが小さい声で何か言っていたが・・・。俺達は旅館に戻り、なのはを部屋に置いてきた。ついでにユーノも。そしてフェイト達の部屋で赴く。

「じゃあ話すか・・・まず」

俺はフェイト達に俺の力を教える。覇気でデバイスを起動したと言うとリニスとアルフが「そんな馬鹿な」と言ったので思いつきり頭突きかました。アレースは母さんが作った特別なデバイスだから覇気で起動できると言ったら黙った。そうして話を終えて部屋にさっさと戻って寝た。

翌朝。・・・何故こうなっている？

「むにゃあ・・・リュウくん・・・」

「スー、スー、龍牙あ・・・むにゅう・・・」

朝起きたらなのはが俺の布団に入ってきており、右手を抱き枕にしている。・・・そして何故かフェイトが横にいて寝息をたてながら左腕をガッチリ掴んで離さない。

「・・・・・・・・・・はあ」

思わずため息をつく。二人とも幸せな表情で寝ているので、起こす気にならなかった。俺頑張って時計を見るとまだ5時だったので、また寝ることにした。まあ・・・たまにはこういうのも悪くないかな・・・？

第六話「温泉旅行と再会。放て！『機神双獣撃』！！」（後書き）

白：・・・強引すぎオブザベストだったな・・・駄目だな・・・も
うちよつと頑張つてかないと・・・

龍：どつせええい！！

ブン！！

白：あぶな！！なにしゃがんだ！？

龍：てめえ途中変な電波飛ばしてきやつたな！？

白：ナンノコトカナ？ボクサツパリワカラナイ

龍：こおの・・・せええい！！

白：甘いな・・・ガアンフレイムッ！！

ゴオオウ！！

龍：がはあ！！

バタンッ

白：フッ・・・作者に勝てるわけないだろう？学べよ龍牙

？：ならば私なら構わないのだろう？

白・なっ！なぜあなたが此処に！？

？・・・貴様は悪だ！！疾風！！

ブォォン！！！！

白・ギァアアアア！！でも何か嬉しい！！！！

？・フン・・・この程度か・・・

龍・（あのバカ作者に勝ちやがった・・・ところで誰？）

すみませんネタに走りすぎました。この小説ですが、強引すぎるところも所々ございますが・・・頑張っていくので応援よろしくお願いします！根本から否定だけは真面目に勘弁して欲しいです。私メ
ンタルガラスなんで・・・感想などお待ちしてます。

第七話「俺チヨイ本気出すぜ？」（前書き）

熱中症になりました。まじしんどいです……。人生初めてですね
熱中症にかかるのは。でもがんばって更新しようと思います！タイ
トルは気にしないでください……。それに今回は短めですが……。
ではどうぞ！！

第七話「俺チヨイ本気出すぜ？」

温泉旅行が終わり、三日後。いつも通りに学校に通い、いつも通りになんも変わりなく学校が終わった（俺は全時間たっぷり寝ていた）。なのははどうかや桃子さんの手伝いがあるらしく今ここにいない。あとついでにユーノも。今日は特に何の用事がないので俺は一人でジュエルシードの搜索をしている。

「龍牙ー！」

お、フェイト達も来たな。

「あんた一人かい？」

「ああ、なのはは今用事あっていないんだよ」

「そうでしたか、なら私達だけで搜索しますか」

「ああ、そうしよう」

俺達の会話が終わると、ジュエルシードの搜索を始める。だが一時間も探してもまったく見つからない。

「全然見つからないねえ・・・」

アルフがため息交じりでそう呟く。

「うん・・・このあたりだと思っただけ・・・」

「ここは、ちゃっちゃと魔力流でも流し込んで強制発動させた方が手っ取り早いんじゃない？」

アルフが原作通りのプランを提案する。

「このような街中ではそれは危険じゃないでしょうか？」

「確かにな・・・だが早めに封印しないと思わぬ被害が起きかねない」

「それも・・・そうですね」

俺の発言に黙り込むリニス。

ドゥーン！！

「」「！」「」

「おつと強制発動させる必要がなくなっただか」

ジュエルシードの反応がした。どうやらこの辺の空にあるらしい・・・は？空？俺は辺りを見渡した。

「カーカー」

俺達の上空に一匹のカラスがいた。・・・？何やらデカイ、うんな

んかデカイ。カラスが俺達に近づくと

「カアアー！！！」

巨大カラスが俺達の横を通り過ぎた。そして迂回して再び俺達の方へ来た。

「ちっ！」

ドン！

「きゃ！」

巨大カラスがフェイトに突撃しようとしたため、俺はフェイトを突き飛ばす。巨大カラスはフェイトに当たらず、そのまま通り過ぎた。

「すまん、大丈夫か？」

「うん大丈夫」

「そうか、ならいいんだが・・・」

巨大カラスは俺達に突撃するため再び猛スピードでこちらに向かってくる。俺は巨大カラスの突撃コースに立ち

「カアアアー！！！」

ドゴォ！！

「グウ！！！」

「龍牙!!」

俺は巨大カラスに吹き飛ばされた。フェイト達が近づいてくる。

「龍牙大丈夫!？」

「ああ、問題ない」

「無理するんじゃないよ!あんな突撃止められるわけないじゃないか!」

「そうですよ、ここはバインドで止めてから・・・」

「あのスピードをバインドで捕まえられるか?お前等じゃさすがに無理がある、あのスピードは下手すればフェイト並のスピードだ、そう簡単に捕まえられるもんじゃない」

「確かにそうですが・・・」

「ならもう一回やる、次は絶対に捕まえる」

俺は一歩前が出る。

「来い!!デカカラス!!粉碎してやる!!」

俺がそう叫ぶと巨大カラスは俺の方に向かってくる。

「カァー!!」

再び猛スピードで飛んでくる、今までで一番早い。なら俺も少し本気出すか？

「アレース、覇気を両拳に溜めろ」

「御意」

俺はゆっくりと両腕を広げ

「ぬうん!!」

ガシィ!!

「ガッ!」

巨大カラスの嘴を受け止める。

「はああ!!」

そして巨大カラスを投げ飛ばし、それに猛スピードで近づき

「おおおおっ!!!! 双龍覇衝オ!!!!」

ドゴオオオ!!!!!!

両拳合わせ、思いつきり巨大カラスの胴体にぶつける。

「ガアッ・・・」

巨大カラスの動きが止まり

グオオオオオオオ！！！！

胴体の反対側から二体の覇龍が飛び出す。その瞬間、巨大カラスの体にひびが入り

パアアアン！！

巨大カラスの体がガラスのように砕け散った。ジュエルシードも跡形もなく消え去っていた……。

「……」

リニス、アルフが呆けた表情をしている。

「あーやりすぎたか？」

「……龍牙すごすぎ」

「確かに……ジュエルシードを封印じゃなくて跡形もなく破壊するなんて……」

アルフとリニスがそう呟く。だがフェイトは嬉しそうな顔で

「龍牙やっぱりすごいよ！私もそれぐらいになるように頑張らなくちゃ！」

なんかフェイトのやる気が上がったんだが……。ま、いいか。しかし……。ジュエルシードを破壊できるなんて思ってたな……。いいこと思いついた。俺はフェイト達に気づかれないようにニ

ヤリと笑みを浮かべた。

第七話「俺チヨイ本気出すぜ？」（後書き）

白・どうも白き修羅です。では次回また

龍・オイイイ！いきなり終わらせんな！！

白・なんだよ・・・今回の話あんまりいい出来じゃないからもう終わりたいんだが・・・

龍・いやいや・・・オリ技出したんだからせめて説明しろ・・・

白・おゝわかった、では双龍覇衝の説明をいたします。

双龍覇衝

両拳に覇気を集中させ、相手の胴に両拳をぶつけ、直接覇気を相手に流し込み、内部の魔力を破壊する。そしてその後、胴の反対側から二匹の覇龍が飛び出す。

龍・・・・なんともえげつない技だな・・・内部から魔力破壊するとか・・・

白・魔力の塊のジュエルシードにはもってこいの技だろ？

龍・確かに、ま、これから頑張つて書いてくれ

白・おう・・・頑張るぜ。次回「時の庭園にて、新たな魔法少女！？」です。ご期待ください！

第八話「時の庭園にて、新たな魔法少女!?」(前書き)

どうも、白き修羅です。活動報告で言ってた通り、パソコンが壊れました。ですが何とか友人から代用を借りて更新しました!持つべきものは友ですね(ホロリ)……。では第八話どうぞ!

第八話「時の庭園にて、新たな魔法少女!？」

雪が降り積もるクリスマスの夜、俺は妹に誕生日兼クリスマスプレゼントを買って会社から帰宅している最中だ。

因みに、あいつに買ったプレゼントは青い宝石のペンダントだ。あいつには青が似合うからな。

「あいつももう18か…」

俺はそう呟く。あいつは今日で18になる。早いものだな・・・だが何歳になってもあいつは俺の可愛い妹に変わりはない。そういえばあいつに好きな人がいるらしいな。まあ妹を幸せにしてくれるならどんな奴でも構わないがな・・・。あいつにその好きな人を聞いても顔を赤くしてすぐにそっぽを向く。なんでだ？小さい声で「鈍感…」と聞こえた気がするが、気のせいだろう。

「あいつ喜んでくれっかな? ……!?!」

ドクンッ!!

突然心臓のところが痛み出した。今まで感じたことがない痛みだ。まるで心臓をおもったいきり握りつぶされるような感覚。そして俺はその場に倒れ込んだ。

「があ……………」

あまりの痛みでまともに声が出せない。雪が頬に当たる、だが冷たさが全く感じられない。……ヤベエ……マジでヤベエ……俺は死ぬのか……。俺の意識はそこで途絶えてしまった。

「お……ん」

誰かの声が聞こえる……誰だ？

「おに……ち……!!」

あいつの声だ……何て言ってるんだ？よく聞こえねえ……俺は口を開こうと思ったが、全く口が開かない。するとあいつの声が徐々にハッキリ聞こえてきた。

「お兄ちゃん!!やだよ!死んじゃだよ!!私を……私を独りにしないで!!」

あいつの悲痛な叫び声が聞こえる……。俺が……。死？

「お兄ちゃん!!」

「!!」

俺はガバツと起き上がった。辺りを見渡す、いつもの俺の寝室だ。

「はぁ……」

「マスター如何なさいました？随分とうなされてたようですが……」

アレースが心配そうな声でそう言う。

「ああ…嫌な夢見ただけだ心配すんな」

「左様ですか…」

俺は体を寝かし、天井をずっと見る。あの夢は俺が死んだ時の…。何で今更思い出すのかね……。せめて…プレゼント渡してから死にたかったものだ…。

「雪華……」

俺の声が部屋に悲しく響く。

今俺、なのは、ユーノ、フェイト、アルフ、リニス遠見市のマンション屋上に居る。このマンションは、原作でフェイトが拠点にしていたマンションだ。今日は、フェイト達がプレシアさんに定期連絡の為に時の庭園へ向かう為、俺も同行することにした。何故かなのは達も付いてきた。因みに学校は休みだ。そして、フェイトが転移魔法を発動する。

「次元転移。次元座標 8 7 6 C 4 4 1 9 3 3 1 2 D 6 9 9
3 5 8 3 A 1 4 6 0 7 7 9 F 3 1 2 5。開け、誘いの扉。
時の庭園、テストロッサの主の元へ」

その詠唱と共に、魔法陣が足元に展開され、光に包まれる。久しぶりにあいつと会えるな……。俺がそう思っているうちに、俺達は時の庭園へ転移した。

転移が終わると、俺達は時の庭園のとある部屋の中に居た。

「此処に来るのも随分と久しぶりだな……」

「確かに龍牙君が来るのも5年ぶりですね」

「ここがフェイトちゃんの家？」

なのはが辺りを見回しながら、フェイトにそう尋ねる。

「うん」

「さて皆さん行きますよ」

リニスが部屋を出たので、俺達はその後を追って部屋を出た。

長い廊下を歩く俺達。懐かしいな、よくこの廊下でアルフと競争してたっけ？んでその後よくプレシアさんに注意されたっけ……。俺がそうこう思い出しているといつの間にか玉座の間の前に来てい

た。リニスが扉を開け、俺達は玉座の間に入った。

「お帰り！フェイト！」

フェイトに瓜二つの金髪の少女、アリシアが元気な声でフェイトに抱きついた。

「ね、姉さん！？」

フェイトは驚いた声を上げてアリシアに声をかけた。すると玉座の方から

「お帰りなさいフェイト。元気そうだなによりだわ」

プレシアさんが笑顔でそう言う。

「ただいま母さん」

フェイトも笑顔で答える。そして俺はフェイトの横に立ち

「お久しぶりですプレシアさん」

俺がそう言うとアリシアとプレシアさんが驚いた表情をする。

「龍牙君・・・？本当に龍牙君なの！？」

「はい」

「龍牙君！！」

ガバッ

「おっと」

アリシアが俺に抱きついてきた。そして再会したときのフェイトと同じように、涙声で

「龍牙・・・君、会いたかったよ・・・」

「俺もだよアリシア・・・あのさそろそろ離してくれないかな？」

「（ジーツ・・・）」

なのはの視線が痛いから・・・。

「うん・・・」

名残惜しそうに俺から離れるアリシア。

「龍牙君とはジュエルシードの回収先の宿泊施設で会ったんですよ」

「そうだったの・・・ところでその子達は？」

プレシアさんがなのはの方を向く。

「む、向こうの世界で友達になったの・・・」

フェイトの言葉を聞くと、プレシアは少し驚いた顔をした。フェイトは昔から他人と関わるの苦手だったからな、友達といっても俺ぐらいしか居なかったらしい。するとプレシアさんは直ぐに優しくそう

な表情になり。

「友達ができたの・・・よかったわねフェイト」

「うん！」

「あなた達の名前を教えてもらってもいいかしら？」

「た、高町なのはです！聖祥小学校3年生です！」

なのはが緊張しながらそう言った。何緊張してんだお前・・・。そしてユーノがなのはの肩から下り、光に包まれた。そして光りが収まり

「ユーノ・スクライアといいます」

ぺこりと頭を下げるユーノ。するとなのはが

「ふええ～～！！ユーノ君って人間だったの！？」

「えっ？言ってなかったっけ？」

「言っていないよ」

なのはは動揺している。

「まあ俺は知っていたがな」

俺がそう言つとなのはは

「えっ！？リユウ君知ってたの！？」

「ああ最初からな」

「ひどいのゝ教えてくれてもいいのにゝ」

うな垂れているのは。クスクスと笑うプレシアさんとリニス。

「それじゃ私も自己紹介するわ、私はプレシア・テストロッサ、その子たちの母親よ」

笑顔で言うプレシアさん。

「フェイトの姉のアリシア・テストロッサだよ！よろしくね！」

満面の笑みでアリシアはそう言う。

「フェイトちゃんのお姉さんかゝそっくりだね」

なのはのその一言でフェイトがビクツと身体を動かした。そしてフェイトが

「私は・・・姉さんの本当の妹じゃないんだ・・・」

「えっ？」「」

フェイトの言葉に、なのはとユーノが声を漏らした。

「フェイト・・・」

俺はフェイトの肩に手を置く。がフェイトはゆっくりと俺の手を下ろし、フェイトは首を横に振る。

「いいんだ龍牙・・・私はなのはに隠し事をしたくないから・・・あのねなのは・・・私は・・・姉さんの・・・アリシア・テストアツサの細胞を元に作らた・・・クローン・・・なんだ・・・」

フェイトのその言葉に、言葉を失うのはとユーノ。俺は腕を組み、黙ってフェイトの言葉を聞いている。

「こんな私でも・・・友達でいてくれる・・・？」

フェイトが震えた声でそう言った。だがなのはは笑顔になり

「当たり前だよ！だってフェイトちゃんもフェイトちゃんだもん！私は今まで通り変わらずフェイトちゃんと友達のままだよ！」

なのはの言葉でフェイトの頬に一筋の涙が流れる。

「ありがとう・・・なのは・・・」

フェイトがそう呟く。俺は黙ってフェイトを抱きしめる。

「りゅ、龍牙!？」

「フェイト・・・よく言えたな・・・偉いぞ」

「龍牙／＼／」

俺はフェイトから離れた。

「お前はもう自分がクローンだということに心を苦しめる必要はないんだ……だってよ……俺達が居るんだからな」

俺は笑顔でそう言った。

「う、うん！」

フェイトが笑顔になった。プレシアさんが優しい笑みで

「フェイト……本当によかったわね、優しい友達ができて……
龍牙君に会えて……」

「うん！」

プレシアさんの方を向き元気な声で言うフェイト。……このいい
雰囲気壊すようで悪い気がするが……

「さて……そろそろジュエルシードについて話し合いますか？」

するとプレシアさんが真面目な表情に変わり

「そうね……リニスあの話は本当なの？」

「はい……」

あの話とは管理局の父さんと母さんの死因の偽装についてだ。

「そう……龍牙君、李香が亡くなったのは5年前、ジュエルシードが発掘されたのは今年。で間違いはないわね？」

「ええ・・・ジュエルシードの本当の発掘者はユーノです」

「えっ！？そうなの！？」

プレシアさんがユーノに問いかける。

「はい、僕がジュエルシードの発掘を指揮しました、そして発掘を指揮した責任者としてジュエルシードを持って管理局に向かう最中に何者かに襲われて・・・」

「地球に落ちたのね・・・」

腕組をして黙り込むプレシアさん。

「けど・・・何故あの二人の死を偽装する必要があったのかしら・・・？それにジュエルシードの事まで・・・」

全てを知ってる側としては・・・黙ってるのは気が引けるが・・・。

「・・・確かに気にはなりますが・・・、今はジュエルシードの回収が最優先です。あれは危険な物です、早く回収しないと」

「・・・確かにね」

頷くプレシアさん。そして俺はユーノの方を向き

「ユーノ、ジュエルシードって別に全部集めても管理局に渡す気はないんだろ？」

「えっ？・・・うん・・・もう管理局に渡す心算はなくなったからね・・・」

「なら全部集まったら俺に任せてくれないか？」

「はい？」

俺は再度プレシアさんの方を向き

「ジュエルシードが全部集まったら、俺が全て破壊します」

「「ええっ！！」」

なのはとユーノが大きな声を上げる。

「龍牙君・・・ジュエルシードはロストログアなの？破壊するのはまず難しいわ・・・それに失礼だけどあなたは魔力がないんですよ？どうやって破壊するの？」

やっぱりそう言われたか・・・だが俺は

「大丈夫です俺には魔力の代わりがあります」

「魔力の代わり？」

プレシアさんは頭に？を浮かべて言う。

「ええ、俺には魔力の代わりに覇気というのがあります」

「覇気？覇気ってたまに聞く言葉だけど・・・そんなものが魔力の

変わりになるの?」

「はい、覇気は俺にとって魔力と同じように扱えるので問題ありませんし、それにジュエルシードは前破壊したときがあるので問題ありません。な、リニス」

リニスはこくりと頷く。

「この前回収しに行った時に確かに私達の目の前でジュエルシードを破壊しました。しかも跡形も無く」

リニスの言葉に絶句するプレシアさん。だが直ぐに気を取り直して

「わかったわ・・・龍牙君、ジュエルシードの事は任せるわ」

「はい」

俺はそう返事する。

「なのは、ユーノ、今までどおりサポートやらなにやら任せるぞ」

「任せてリユウ君!」

「わかった!」

「フェイト達も龍牙君のサポート任せるわ」

「うん!」

「あいよ!」

「はい！」

プレシアさんがそう言うのと三人がそれぞれ返事をする。

「なのは、フェイト、とりあえず、ジュエルシールドはお前等が持つていてくれ、そして全部集まったら俺に渡してくれ」

「「わかった（の）！」」

「よし「龍牙君！」「うお！？」」

アリシアが突然大きな声を上げたので思わず変な声を上げてしまった。

「ど、どうしたアリシア？」

「私も手伝う「ダメだ」何で即答なのかな！？」

「何でもだ、そもそもお前魔力があってもデバイス無いだろ？」

俺がそう言うが、アリシアは「フッフッフツ」と笑い

「コレなぐんだ？」

アリシアはポケットから、三角形の黄色い宝石を出した。

「まさか・・・デバイスか？」

「その通り！」

「姉さんも持ってたんだ！」

「うん！お母さんに作ってもらったんだ！」

俺はプレシアさんの方を向き

「作っちゃったんですか……」

「えーと……フェイトだけが持っているのは不公平じゃない？
応アリシアも魔力あるし……」

「はぁ……」

子煩悩ですか？とつい思ってしまう俺。いや……プレシアさんに
限ってそんな事はないはずだが……。

「けどアリシアには戦闘経験が無いわ、フェイト、アリシアに模擬
戦をしな」俺がやりましょう」えっ？」

「アリシアとの模擬戦は俺がします、それでいいよな？アリシア」

「うん」

アリシアは頷く。

「それじゃ何処でやります？」

「模擬戦の場所は私が転移するわ」

「お願いします」

プレシアさんと俺達の足元に魔法陣が展開される。

「それじゃ行くわよ」

そうして俺達は転移した。

転移した場所はどこかの世界の荒野だった。

「じゃいくよー！ブリューナク、セットアップ！」

「OK、セットアップ」

アリシアのデバイス、ブリューナクの電子音声が響く、その瞬間アリシアは黄色い光りに身を包まれる。光りが収まると、アリシアはフェイトと同じバリアジャケットに身を包み、ブリューナクはバルディッシュと同じ形状だった。だが全部同じというわけでもなく、マントの裏の色が青く、腰のベルトの色も青い。そしてブリューナクのコア部は緑色だった。

「ほう・・・じゃあ俺も、アレース！セットアップ！」

「御意」

俺もバリアジャケットに身を包む。

「わあゝ龍牙君のバリアジャケットかつこいい！」

「ん？そうか？」

「うん！」

「本当に魔力を感じない・・・」

アリシアは頷き、プレシアさんは腕を組む。

「アリシア、いつでもいいぞ」

「じゃあ行くよゝ！フォトン」

アリシアは周囲に三つの魔法陣を展開する。フォトンランサーか？。

「ソニック！！」

ギューイン！！

「！！！」

魔法陣から三日月状の魔力刃が回転しながら俺に向かってくる。なんだあの技！

「くっ！」

バックステップでかわそうとしたが、魔力刃は弧描いて追尾する。曲がるのかアレ・・・。

「ちっ！ふん！！はあ！！」

パン！ピキン！

魔力刃の一つは左腕で粉碎し、もう一つは蹴りで粉碎、そして最後は

「おりゃあ！」

バアン！！

裏拳で粉碎した。

「やるね、龍牙君、でもこれはどうかな？」

アリシアはそう言い、俺に向かって手をかざす。

「いっけー！フォトンバースト！」

黄色い魔力が俺に向かって放たれる。フォトンバースト？聞いたことある魔法だが……。俺はそれをかわそうとした瞬間

ボカアアアン！！

「うお！！」

俺は爆炎にのまれた。

アリシア
side

私のフォトンソニックが全部壊されちゃった！むむ、龍牙君なかなか強いなあ。けど私も負けないよ！。

「やるね、龍牙君、でもこれはどうかかな？」

私は龍牙君に右手をかざす、そして魔力を溜めて

「いっけ！フォトンバースト！」

フォトンバーストを放つ、龍牙君がよけようとした瞬間に魔力を中から破裂させる。

ボカアアアン！！

「うお!!」

フォトンバーストを爆発させる、龍牙君は爆発に巻き込まれる。・・

・やりすぎちゃったかな・・・？

「姉さんやりすぎ！」

「あ、やつぱり？」

「いくら非殺傷でも龍牙君もこたえるでしょう」

リニスがそう言うけど……正直心配だな……。

「龍牙くんだい z y」「うおおおおお！」「！？」

ブオオオン！！

突然龍牙君が叫ぶと煙が一気に晴れる。龍牙君は左手を地面につけている。よかつたゝなんともなくて……。あれ？無傷？

side out

あー忘れてた、フォトンバーストって原作でプレシアさんが使った魔法じゃねえか……。プレシアさん直伝の魔法か……。そんな魔法まで使えるとは、正直甘く見ていたな。今のフェイトよりも強いなアリシアは。にしても煙が邪魔だな、仕方ない

「うおおおおお！！」

ブオオオン！！

左腕を地面に打ち付ける。すると煙が一気に晴れる。

リニスたちが啞然としている。「あの威力くらって無傷とか……出鱈目すぎ……」とアルフが言うが気にしない。

「フォトンバースト受けて無傷だなんて、すごすぎだよ龍牙君……」

アリシアが驚いたように言う。

「さて…もう終わりか？アリシア」

俺の言葉にアリシアはムツとした表情になる。

「むうゝ！それは明らかに挑発発言だよ龍牙君！まだ終わりじゃないもん！ブリューナク！ランスフォーム！」

「YESマスター、ランスフォームセットアップ」

アリシアの呼び方に応じ、ブリューナクが変形し、イメージはアビスガンダムのランス槍状になった。
デバイスの形状が同じでも性能は別か…。

「行くよ！」

アリシアは俺の視界から姿を消した。

「速い！」

フェイトが驚きの声を上げる。

「龍牙君でもこのスピードについてこれるかな？」

縦横無尽に飛ぶアリシア。そして突然俺の背後を獲った。確かに速いな、だが

「はっ！！」

「！？」

俺の拳がアリシアの体の前で止まる。

「俺の勝ち、だな」

「うゝ」

アリシアは悔しそうな表情になる。

「あのスピードを見切るなんて…」

「いいところまでいったんですがね」

アルフとリニスがそう言う。

「正直あせった、まさかプレシアさんの魔法を使うなんてさ」

「えへへゝすごいでしょ」

「ああ、だけど・・・」

俺は一息置く。

「お前は手伝っちゃダメだ」

「!?!? 何で!?!?」

アリシアは怒った声で言う。

「手伝いたい気持ちはわかるが・・・今考えてみたらお前が海鳴市に来たらプレシアさんが此処に一人で居ることになるだろ? そした

らプレシアさん寂しがるぞ」

「あ・・・」

アリシアはハッとした表情になる。

「龍牙君、私はべっ」ですよね、プレシアさん、一人で此処に居るのは流石に寂しいですよ、ね、ね」え、ええ・・・」

俺はすごいスマイルでプレシアさんに言った。

「リュウ君なんか怖い」なんか言った？なのは」何も言っていないの！」

変なやつだなゝなのははゝ俺が怖いだなんてゝ。

「わかった、私ここに残るよ！」

「おう、そうしとけ」

俺がそう言った瞬間、リニスから念話が飛んできた。

（初めからアリシアを手伝わせる気がなかったのでは？）

（さあ？どうかな？）

とりあえずそう答えとく、本当はアリシアを戦わせたくない。アリシアとプレシアさんには何時までもフェイト達の居場所ではないから。

「所詮・・・偽善かな？」

「何か言った龍牙君？」

「いや、なんでもない」

まさかアリシアに聞こえてたとは・・・。

そうして模擬戦を終えて、時の庭園に戻った俺達。

「アリシアはもっと強くなれますね」

「そうかな」

「うん！姉さんなら強くなれるよ！」

「ありがとうフェイト！」

アリシア達が談話をしている。

「プレシアさん少しお話が・・・」

俺はプレシアさんに少し深刻な表情になって言う。プレシアさんが察したのか

「わかったわ、リニス達少し席を外してもらえるかしら」

「わかりました、さあ皆さん行きましょう」

俺とプレシアさんを除いた皆が玉座の間から出て行った。

「龍牙君話って？」

「この男の事知ってますか？」

俺はアレースを手に取り、あのモニターの男の画像を映す。

「この男は・・・」

「知ってるんですか？」

「ええ、この男の名前はグレゼン・バーグ、管理局に所属していて、階級は提督よ。この男のいい噂は聞かないわね」

「？」

「例えば、管理局で回収した一部のロストログアを私的に所持してるとか」

「!？」

なるほど・・・何であの男、グレゼンはユーノを襲ったのか？それはユーノの持つジュエルシードを奪うため、だろうな。合点がいったな。

「けど何で龍牙君はこの男の事を？」

「ちょっと調べ物してて・・・」

「そう・・・あまり深くは聞かないわ」

「ありがとうございます・・・」

プレシアさんには父さんの事を言うべきだと思ったのだが・・・、
何故か言い出せなかった・・・。俺は嘘ばかりの人間だな・・・。

そうして俺達は海鳴市に帰還するところだった。

「体には気をつけてねフェイト」

「わかったよ母さん」

「フェイト私の分まで頑張つて！」

「うん！頑張るよ姉さん！」

プレシアさんとアリシアがそれぞれフェイトに言う。

「それじゃ戻りますよ皆さん」

リニスは魔方阵を展開する。

「またなアリシア」

「うん！またね龍牙君！」

笑顔で言うアリシア。そして俺達は光に包まれ、海鳴市へ帰還した。まだ時間があつたのでジュエルシードの搜索を始めた。そして搜索を始めてから十分後、ジュエルシードの反応がしたので俺達はバリアジャケットを纏い、その現場へと向かう。

ジュエルシード反応がした場所の海鳴公園へと来たのだが……。確かアニメではここの暴走体は木の化け物だったはずなんだが……。俺達の目の前にいるのは

「キュシュエエエエエ！！！」

「」「」「……」「」「」

「……なんだあれ」

赤色の体に三角状の頭部、十本の長い足に筒状の口……。タコ？イカ？

「……イカ……かな？」

「タコ……じゃないかな？赤いし口あるし……」

なのはとフェイトは前のデカ猫を見た時の俺のようになっている。

「確かに見た目はあれですが危険なものには変わりありませんよ」

「そつだね……皆気を引き締めよう」

リニスとユーノの言葉でなのはよフェイトは正気に戻る。

「よし、みんな行くぞー!!」

先陣を切ったのはアルフだ。暴走体に一気に詰め寄り、胴体を殴る。

キーン!

だが暴走体はアニメと同じくバリアを張っていた。

「生意気に、バリアまで張るのかい!」

アルフは苦虫を噛み潰したような表情になる。

「アルフ離れて!」

フェイトの呼びかけにアルフは暴走体から距離をとる。

「いくよなのは!」

「うん!」

なのははデバインスフィアを生成し、フェイトは周囲に魔方陣を展開する。

「フォトンランサー! ファイア!」

「デバインシューター! シュート!」

それぞれ魔力弾を撃つ。

バァァンン！！！！

暴走体に魔力弾が直撃すると爆炎が巻き起こる。

「やったかな？」

「・・・まだだ！」

煙が晴れるとまったく無傷の暴走体が姿を現す。

「思った以上にバリアが硬いよ！」

「来ます！」

ブシューウウウウ！！！！

暴走体は俺達目掛けて筒状の口から黒い墨を吐き出す。俺達は上空に飛ぶ。

ジュウウウウ・・・

すると墨のあたった場所は音を立てて溶け出した。

「なっ！？」

「あの墨は強力な酸付き・・・か、なのは！フェイト！リニス！あいつに強力な魔法撃ち込め！！」

「うん（はい）！！！」

なのはレイジングハートを暴走体に向け、魔力を溜める。そしてフェイトは黄色の魔法陣を、リニスは黄土色の魔法陣を展開する。

「いくよ！デイバイイン・・・」

「貫け・・・轟雷！！」

「バスターーーッ！！」

「サンダー・・・スマッシュャーーッ！！」

桃色と黄色、黄土色の砲撃を撃つ。

ポオオオオン！！！！

さつきよりも大きい爆煙が巻き起こる。うお・・・すげえな、あんなだけの威力の砲撃くらったらひとたまりないな・・・。因みにちゃんと結界は張ってるぞ、ユーノがな。って、あ？

「・・・おいおい」

「どうしました・・・っ!？」

煙の中からゆっくりとあらわれる暴走体。

「そん、な・・・」

「私達の攻撃が・・・」

なのは達は啞然とした表情になる。

「キュシュエエエ!!」

ブシュウウウ!!

「ちっ!!」

暴走体が勢いよく墨を吐く。それをかわす、そして音を立て溶ける地面。ちっ……面倒だな。

「お前等下がってろ、俺がやる」

「ちよっ! 龍牙! やめなよ! 一人でやるのは危険だよ!」

「そうだよ! 一人じゃ無理だよ!」

「大丈夫だ」

ユーノ達が制止を呼びかけるが俺はその一言だけ言い、地面に下りる。

「さて……」

俺は構えをとり

「この拳で倒す!!」

右足を一步下げ

ブン！！

暴走体の背後に飛ぶ。そして

「ぬうん！！」

バギイ！！

「ギユフウ！！」

胴体に思いつきり裏拳をかます。だがまだ終わらない

「おおおおおっ！！」

ズガガガガッツ！！

左足で蹴りを何度も打つ。ピキピキと暴走体のバリアがひびが入っていく。

ズガア！！

そして暴走体を上空に蹴り飛ばす。すると暴走体は重力に従って落ちてくる。俺は右手を振りかぶり

「おりゃあっ！！」

バギイ！！

「ギユビュ！！」

渾身のストレートを打ち込む。暴走体のバリアは碎け散り、気持ちいくらいに吹き飛ぶ。ちっ、ジュエルシード自体は破壊できなかったか・・・まだまだ未熟だな俺は。

「……………」

なのは達は呆けた顔をしている。

「おーい、呆けた顔してないで早く封印してくれ」

「あ、うん、わかったの」

なのはは暴走体を封印する。そしてその場に残ったジュエルシードをフェイトが回収する。

「今回は龍牙君がいなかったら大変でしたね・・・」

「ホントだよ・・・ホント頼りになるよ」

「世辞はいいさ、さてかえ」「ちょっと待ってくれ」?

突然背後から声をかけられた。声のする方を向くと、そこにはデバイスである杖を持った黒髪の少年のがいた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらいたい」

『クロノ・ハラオウン』がそこにいた。遂に管理局が来たか……。俺は知らず知らずのうちに拳を強く強く握り締めていた。

第八話「時の庭園にて、新たな魔法少女!?」(後書き)

白・どうも！やらかしてしまった作者、白き修羅です！！

龍・やらかした小説の主人公の龍牙だ・・・ところで、なにをやら
かしたんだ？

白・アリシアのことですよ

龍・あーなるほど・・・

白・正直不安さ・・・アリシアってあんなしゃべり方でよかったの
かな？

龍・確かに・・・まあいいんじゃないか？別に。俺的にはアリシア
がデバイスを持っていたことが驚きなんだが

白・龍牙ナイス！！そうだよ！アリシアのデバイスの説明しなきゃ
な！！

龍・お、おう・・・

デバイス名

ブリューナク

性格

冷静で常にマスターであるアリシアを気にかけている。ようは心配性

待機時

バルディッシュと同じ金色の三角の宝石

セツトアップ時

バルディッシュと形状が同じだが、コア部のところが緑色

備考

プレシアがアリシアの為に作成したインテリジェントデバイス。形状はバルディッシュを基本として、プレシアが更に手を加えたデバイスで、バルディッシュにはない『ランスフォーム』がある。因みに、アリシアの魔力ランクはB+である。

龍・槍か・・・なかなか考えたものだな

白・うゝんフェイトと同じで鎌でもよかつたんだがな、けど同じにするとなんか面倒だな〜と思って、ちょうど遊戯王の動画みたらブリューナクということで槍にした

龍・うおい！ブリューナクの名前ってそこから取ったのかい！！

白・おう、もちろん後悔はしていない

龍・少しはしろよ！バカやろう！！

白・なんだと・・・

龍・あつ！口が滑った！おいやめろ！ジリジリ迫り寄ってくるな！！

白・このヤロウ！！凍牙氷「蓮華・・・」

ドゴオ！

白・ぐはあ！！

龍・おおー綺麗に吹き飛んだな・・・ってあんたこの前の・・・

ハクト・フン・・・何処で油を売っているかと思ったら此処に居たか、作者よ。

白・ちよつ・・・あなたここに来ちゃだめでしょ・・・

ハクト・？何故駄目だと言っただ？・・・まあいい私は戻る・・・はやてが待っているからな。

龍・・・・行っちゃった・・・何者だあいつ？

ふう・・・早くパソコン帰ってきて欲しいです。感想等お待ちして

います。

第九話「管理局との邂逅、龍牙の思惑」(前書き)

どうも、白き修羅です。いや、まさか今日も更新できるとは・・・
ちよつと内容はあれかもしれませんが・・・今回の龍牙は少しだけ
頭が冴えます。では九話どうぞ！

第九話「管理局との邂逅、龍牙の思惑」

海鳴公園のジュエルシードを回収した俺達、そしていずれは来るであろう者がそこに居た。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらいたい」

クロノがそう言うつとアルフから念話がくる。

（龍牙！管理局が！）

（ああ、わかっている・・・）

そして皆に念話を送る。

（皆、ここは俺が話を付ける）

（わかった）

（わかったの）

（任せますよ）

なのは達から了承を得たのでクロノの前に一歩出る。

「クロノといったか、確かこの世界は時空管理局の管理外だった気がするが・・・」

「ああ、そうだが・・・その口振りからすると管理局の事は知っているようだな」

「・・・ああ」

俺はバリアジャケットを解く。

「俺の名前は真崎龍牙。殉職した真崎靱の息子だ」

「なに!？」

すると突然上空にモニターが現れる。そこには緑色の髪の女性。
『リンディ・ハラオウン』が映っていた。

「龍牙君!あなた龍牙君なのね!？」

「はい・・・久しぶりですねリンディさん・・・」

「ええ久しぶりね」

ニコツと笑うリンディさん。リンディさんは父さんと親友で度々会ったことがある。

「リュウ君知り合い？」

「まあな」

なのはの問いに答える。

「話をするなら皆私の所に来てはくれないかしら？」

「いいですよ。皆もいいよな？」

「リュウ君が言うなら・・・」

「私も・・・」

「僕もだよ」

「（気乗りはしないけど・・・）アタシは構わないよ」

「私もです」

「なら決まりね。クロノ彼らを私達のところへ」

「はい母さ、じゃなくて艦長。ではこちらに来てくれ」

俺達はクロノの近くに集まる。そしてクロノは転移魔法を発動し、視界が光りに包まれた。

転移が完了したらしく視界が戻る。リンディさんがここに居るって
いうことはここはアースラだろうな。

「こつちだ」

俺達はクロノの後について行く。因みにユーノは人間状態に戻り、なのはとフェイトはバリアジャケットを解除している。なのはは辺りを物珍しそうにキョロキョロ見渡している。恥ずかしいからヤメレなのは……。俺はユーノに念話を飛ばす。

（ユーノ、お前がジュエルシードを発掘したことは伏せておけ）

（えっ？なんで？）

（管理局ではジュエルシードは犯罪者が持ってたことになっている。もしお前が発掘しましたって言ったら恐らくお前はその犯罪者の共犯と思われるしまうからな。もしそうになったら色々面倒なことになってくる。）

（う、うんわかったよ・・・）

ユーノは不満そうな表情になる。そして俺達はリンディさんが居るであろう部屋の前に来た。そしてクロノは扉を開ける。

「艦長、来てもらいました」

俺はその部屋を見て少し引いた。アニメでもそうだったが、茶釜、盆栽などがいたるところに並べられている。配置が適当すぎるだろ・・・。

「お疲れ様、まあ皆さん、どうぞどうぞ楽にして」

笑顔で言うリンディさん。とりあえず俺達はお言葉に甘えて畳に座

る。クロノはリンディさんの横に立っている。

「私はリンディ・ハラウン、この戦艦アースラの艦長をしています。龍牙君は私の事知っていると思うけど」

「まあ、はい」

俺は相づちをうつ。

「あなた達の名前を教えてくださいませんか？」

「あ、はい私は高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアといいます」

「フェイト・テストロッサです」

「アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ」

「同じく使い魔のリニスといいます。主はフェイトではありませんが」

それぞれが自己紹介をする。そして皆の自己紹介が終わるとリンディさんは俺の方を向き

「龍牙君・・・李香さんと鞠君の事は本当に、本当に残念でした・・・心からご冥福をお祈りするわ」

リンディさんが悲しげな表情で言う

「ありがとうございます・・・」

俺は下を向きそう言う。

「ですが俺達がここに来たのはそんな話を話すためではないでしょう？リンディさん」

「そうね・・・では、皆様の話を聞きたいと思います」

「すみませんが具体的にどのような話をすればいいですか？」

「あなたがジュエルシードを集める理由とかね」

「集める理由ですか？それなら簡単なことです。ジュエルシードは俺達の住んでいる街、俺達の周りの人に危害が及ぶ。それを回避するためにジュエルシードを集めています」

俺がそう言うのとリンディさんは微笑み

「そう・・・立派だわ、けどジュエルシードはロストログアと呼ばれるものでとても危険なもの・・・民間人のあなた方が関わる必要はないわ・・・」

リンディさんは真面目な表情になる。

「これより、ロストログア・・・ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「・・・えっ!?!」

「・・・・・・・・」

なのは、ユーノ、アルフが驚いた声をあげ、リニスと俺は黙っている。

「君達は今回の出来事を忘れて、今まで通りに元の世界で過ごすといい」

クロノがリンディさんの言葉に続けてそう言うとアルフが立ち上がり。

「ちょっと待ちなよ！！アタシ達にもうジュエルシードについて関わるなってことかい！？」

「次元干渉に関わる事件だ、民間人が出る話じゃない」

クロノの言葉に更に声を荒げるアルフ。

「勝手な事言ってるんじゃないよ！！大体あんた達管理局は「アルフ」ヒッ！」

危うくアルフはあの事について言うところだったので、俺はアルフを射殺するような視線で見る。

「アルフ、少し落ち着け・・・話が進まないだろ・・・」

「あ、う、うん・・・」

怯えるように座るアルフ。すまないなアルフ・・・今あの事を言われてしまったら面倒なことになるからな・・・。

「まあ急に言われても龍牙君達も気持ちの整理がつかないでしょ。今夜一晩ゆつくりと考えて答えを出して、それから改めてお話をしましょう?」

リンディさんはそう言うが、俺はその言葉の意味に直ぐに気づいた。

「気に入りませんね・・・」

「えっ?」

リンディさんは「何のことかしら?」というような表情をするので俺は言葉を続けた。

「さつきクロノは民間人が出る話じゃない、と言ったな」

「あ、ああ」

「なら何故今夜一晩ゆつくりと考えて答えを出した上で改めて話す必要があるんですか?」

俺の言葉にリンディさんは言葉を詰まらせる。そして俺の言葉が未だに理解できていないのは達。だがリニスは直ぐに気づいた。

「なるほど・・・そういうことですか」

「気づいたかりニス・・・リンディさん、あなたはとても信用できる人だと思っていたようですが・・・どうやら違ったようですね・・・」

「リュウ君どういうこと？」

「お前まだ気づいてないのか・・・管理局は万年人手不足だ、このアースラのクルーだって若い人ばかりだ。恐らく武器を持って戦えるのは指の数だけしかない、それに比べて俺達は十分といってもいいほど戦える。つまり結論を言えばだな・・・リンディさんはな・・・俺達の力を利用したいんだ」

俺の言葉にクロノが怒りを露にして

「お前！黙って聞いていれば！母さん何か言い返してください！！この男の言っていることは違つと！」

クロノがそう言うがリンディさんは何も言わない。

「か、母さん・・・？」

「沈黙は肯定と受け止めますよ」

するとリンディさんはようやく口を開く。

「御免なさい・・・龍牙君の言う通りです・・・クロノも知ってるでしょうけど管理局は万年人手不足。このアースラのクルーも武装局員も数え切れるくらいじゃない・・・今の戦力でジュエルシードを回収するには難しい。先程のあなた達の戦闘を見ました。なのはさんとフェイトさんの魔力を観測した結果、管理局でもまず少ないAAAランクだというのが判りました。そしてそのAAAランクの攻撃に耐えるバリアを軽々と破壊した龍牙君、あなた達の協力を得れば確実にこの事件は解決する。私はそう思いました・・・御免なさい、あなた達を利用するような真似をしようとして・・・本当

に御免なさい・・・」

「そんな・・・」

リンディさんは沈痛な面持ちになり、クロノは啞然としている。

「・・・・・・・・」

俺は黙って立ち上がる

「龍牙？」

「お前等帰るぞ・・・俺はこの人を信頼するのを辞めた。俺の信頼を裏切った人と話すことはない」

俺は扉に向かって歩みを始める。

「待つて！」

リンディさんに呼び止められたので歩みを止める。

「どうしたら・・・あなたの信頼を取り戻せるの？」

俺はその言葉を待っていましたと言わんばかりに笑みを浮かべる。

「あなたという人は！」「リニス待て」龍牙君・・・」

リンディさんのその言葉に食って掛かるリニスだが俺はリニスの発言を止め、振り向く。

「そうですね・・・俺のこれから出す条件を飲めばいいでしょう」

「条件？」

「ええ・・・まず一つ」

俺は右手の人差し指を立てる。

「ジュエルシードですが、全て回収し終えたら俺はあれを全て破壊するつもりです、あれは人が管理するもんじゃない。まずジュエルシードの破壊についてとやかく言わないこと」

「なっ！？お前何を言っ「クロノ黙ってなさい！」か、母さん・・・」

リンディさんに怒鳴られ小さくなるクロノ。

「二つ目は？」

俺は中指を立て

「二つ目は破壊する時なんです、恐らく何かしらのトラブルが生じるでしょう。例えばジュエルシードが暴走するとか・・・もしそんなことが起きたら被害が確実に起きます。ですから何処か暴走とかしても大丈夫な場所の確保。今のところ以上です。さてこの二つの条件を飲みますか？飲みませんか？」

「バカなことを！ジュエルシードを破壊する？ふざけた冗談はやめろ！」

やっぱ突っかかってきたかこのKYは・・・。

「冗談か如何かはこの映像を見てからにしろ」

アレースを手に取り、映像を映す。それは前のデカカラス戦の映像だ。とりあえずジュエルシードを破壊するところだけ見せた。

「そんな・・・ありえない・・・」

クロノが絶句している。

「龍牙君、先程の条件飲むわ」

「母さん!？」

「私達はあなたがジュエルシードを破壊することには何も言わないわ。それに場所の確保も任せて」

「リンディさんが物分りのいい人で良かったですよ。それじゃ俺達はこの一件が終わるまで管理局に協力するので」

俺は笑顔で言う。クロノは未だに納得のいかない表情である。

「さて話はここまでです、なのは帰ったら魔法のことやらなにやら士郎さんと桃子さんに言うぞ」

「ふえ！何で!？」

「今までジュエルシードは運よく学校が終わったり、休みの日に暴走してただろ？もし学校行っている時に暴走したらどうするんだ？

学校を途中で抜け出したら色々大変だぞ？だからせめて土郎さんと桃子さんに了承を得とかないな。多分ジュエルシードの一件が終わるまで休むことになると思うぞ」

「う、うんわかったの・・・」

「それじゃリンディさん今日はこれで失礼します」

「わかったわ、クロノ彼らを送って頂戴」

「わかりました・・・」

クロノは渋々そう言った。俺はなのは達に念話をする。

（すまん勝手に色々進めて・・・）

自粛の言葉を言う。だが皆は

（別に構わないの！リュウ君がそうしたいなら私は文句なんて言わないよ！）

（なのはの言う通りだよ龍牙。龍牙のおかげで話がついたし）

（龍牙がいなかったら僕ら利用されてたかもしれないし）

（まあ管理局に協力するのは嫌だけど、龍牙が決めたんなら仕方ないね）

（私も同感です）

皆いいやつだな・・・。

（皆ありがとう・・・）

俺はそう言い、念話をやめる。

そうして俺達は管理局に協力することを決めた後、フェイト達は自分達のマンションに帰った。俺達も家に帰ることにする。そして家に帰ったら直ぐに居間に土郎さんたちを集める。

「なのは、龍牙君、大事な話とは一体なんだ？」

「ええ、今から話します・・・」

俺となのはは土郎さん達に俺はこの世界の人間じゃなくてミッドチルダという世界の生まれだという事、魔法の事、ジュエルシードの事を話した。最初は皆半信半疑だったが、ユーノが人間の姿に戻った事により土郎さん達は信じてくれた。

「ねえねえ龍牙君、私にも魔法って使えるのかな？」

美由希が目キラキラしてそう言って来たのだが・・・

「魔法を使うにはリンカーコアという特殊な器官が必要になってな、こればかりは生まれつき持っていないと魔法を使うことはできない。それに地球の人はリンカーコアは持ってないんだ、比率として

は一億人に1人くらいだな。まあ、なのはその一人ということだ」

「なんだあゝ残念」

美由希はため息をつく。

「龍牙君、先程言っていたジュエルシードというのは危険なものなんだな」

士郎さんはまるで歴戦の猛者のような眼で俺を見る。これは嘘はつけないな……。

「はい……下手をすれば命に関わります」

俺の言葉に恭也と桃子さんが驚愕の表情をする。

「だがなのはとユーノ君、そして龍牙君もジュエルシードに関わっているのだろうか？」

「……はい（うん）」「」

士郎さんは「フム……」と言い腕を組む。すると恭也が

「なのは、龍牙、ジュエルシードに関わるのはもうやめないか？」

「えっ？」

「今からでも遅くはない……なのははもちろんだが龍牙、お前は俺達の家族だ。家族に危険な真似をして欲しくないんだ……」

「恭也（お兄ちゃん）・・・」

恭也の言葉に少し揺らぐのは、だが

「ありがとうお兄ちゃん・・・けど今更やめれないよ・・・だってもし今やめちゃったらかこの街が、私達の周りの人に危険が降りかかっちゃう、私はそんなの嫌なの」

「なのは・・・」

すると士郎さんが組んだ腕を下ろし

「わかった」

「えっ!？」

「父さん!？」

「いいんだ恭也・・・なのはが初めて自分で決めたことだ、俺はなのはのやりたいことに口は出さない。それに龍牙君がなのはを守ってくれるだろう。そうだろう？」

士郎さんが不意にこちらを向いてきたので少しあせるが

「もちろんですよ」

俺がそう言つと士郎さんは笑顔になる。

「任せたぞ、龍牙君。さてユーノ君」

「は、はい！」

士郎さんはユーノの方を向く。

「君は今までフェレットとして生活していたが・・・今から人として生活してくれ」

「え、えっ？」

「君も俺達の家族だ。だからフェレットにならないで人の姿でこれから生活してくれユーノ君」

「はい！」

ユーノは今までで見た笑顔の中で一番良い笑顔をしている。そういえばユーノって両親いないんだっけ……。良かったなユーノ父親と母親ができて。

「フフツ、息子が増えたな」

「そうね」

士郎さんと桃子さんは顔を合わせて言う。

（龍牙）

ユーノから念話 came。

（どうした？）

（龍牙の言う通りこの人たちは皆すごくいい人だね！）

（だろ？）

俺達は念話でそういう会話をした。

あの日からユーノは家では人間の姿ですごしている。因みに士郎さんから自分の部屋をもらった、その時とてもはしゃいでいた。だが外出の際はフレット状態だ。そして士郎さんから学校を適当に理由を作ってもらって欠席の連絡をもらっている。ジュエルシードの方も管理局の協力もあり順調だ。だが俺がクロノの命令を無視して行動すると何時もキレられる。正直めんどい・・・、まあ慣れたが。ジュエルシードは残り6つとなった。アースラのクルーがジュエルシードを搜索している。そして今俺達はアースラの中で待機している。

「あと残り6つだね、後もう少しだ」

「ああ」

「長いようで短かったねえ」

俺達が談笑をしていると、うるさいくらいに呼び出しコールが鳴る。俺はモニターを開く。

「あい？」

「龍牙か？クロノだ、ジュエルシートが見つかった、直ぐに出勤してくれ」

「了解、場所は？」

「海鳴市近海の海上だ」

「よし、皆行くぞ」

俺達はジュエルシートの元へ向かう。俺は思った。無印が終わりを告げてきているのだと……。

第九話「管理局との邂逅、龍牙の思惑」（後書き）

白・どうも、作者の白き修羅です

龍・主人公の龍牙だ

白・今回の話は少し強引だった気がするな・・・

龍・何時もじゃね？

白・それ言っちゃ終わりでしょ・・・

龍・まあ・・・確かな

白・次回で無印が終わりに向かうぞ

龍・ようやくか、お前にしては頑張ったほうかな？

白・ああ

龍・（あれ？何時もと違ってなんか向かってこないぞ？）な、なあ・
・

白・ん？どうした？

龍・いやなんでもない・・・じゃあ俺行くぜ

白・ああじゃあな

龍・ああ

白・．．．行つたか、龍牙無印が終わるときお前の試練が始まるぞ．
．．頑張って乗り越えろよ．．．

次回で無印が終わる．．．かもしれません。すいません曖昧で．．．
感想お待ちしています。

第十話「龍牙の本気。貫け！『轟覇機神拳』！！」（前書き）

どうも、白き修羅です。3日連続更新！頑張りました。今回で無印
終わり！ます？すんませんめっちゃ曖昧で！俊さんの指摘で、この
小説の誤字などが修正出来るのでとても有り難いです！では第十話
どうぞ！

第十話「龍牙の本気。貫け！『轟覇機神拳』！！」

「デイベイン……」

「轟け…轟雷！！サンダー……」

「我が覇気を受けよ！！」

「バスターー！！」

「スマッシュシャツ！！」

「せえい！せええい！！」

バアアアン！！！！

「グオオオオ！！！！」

海鳴市近海上空で轟音と共に爆発にのまれる鯨型の暴走体。この暴走体は原作通り6つのジュエルシードが発動した。だが原作とは違い、俺達がここに来た時に一つのジュエルシードが発動したときそれに反応するように他のジュエルシードも発動した。正直焦ったが大した問題ではなかった。

「ジュエルシード6つ全て封印完了しました！」

『エイミィ・リミエッタ』から連絡が入る。なのはとフェイトが

3つずつジュエルシードを回収する。

すると空にモニターが開き

「お疲れ様、これで全部のジュエルシードが回収し終わったわね」

笑顔で言うリンディさん。

「すごいわあなた達・・・どうあなた達管理局に入らない？」

サラリと勧誘するなって…

「なのは、フェイト、考えてみたらどうだ？」

「「えっ？」」

なのはとフェイトは頭に？を浮かべる。

「管理局に入ればこの街をもっと守りやすくなるし、エイミィにデバイスの強化とか頼めばいいし」

俺の言葉に少し頭を悩ませるのはとフェイト。

「うーん…考えてみる…」

「私も考えてみる」

「そう、良い返事を待っているわ」

リンディさんは機嫌がいいように言う。

「さてリンディさん、場所の確保は出来ましたか？」

俺の問いにリンディさんは表情を変え

「ええ場所はOKよ。今日にする？それとも今日は休んで明日にする？」

俺は間髪入れず

「直ぐに頼みます」

「わかったわ、一度アースラに帰還してちょうだい」

「了解です。リニス、アースラに転移頼む」

「わかりました。皆さん私の周りに集まってください」

俺達はリニスの周りに集まる。リニスは転移魔法を発動する。そして俺達はアースラへと転移した。

「皆さんお疲れ様。龍牙君、場所なんだけど第80管理外世界『ダイダロス』を確保できたわ」

「ダイダロス？」

「ええ」

リンディさんはコクリと頷く。

「第80管理外世界ダイダロス。報告ではつい最近、強力な魔法生物との戦闘があった場所で、そこにアルカンシエルを使用したらしいわ」

「アルカンシエル・・・」

俺は呟く。アルカンシエル・・・父さんの命を奪った兵器・・・。

「龍牙君？」

「は、はい!？」

不意にリンディさんに声をかけられたので少し驚いた声を上げてしまった。

「どうしたの？随分と怖い顔してたけど・・・」

「な、なんでもありません・・・」

俺って顔に出やすいんだな・・・。

「さて・・・なのは、フェイト、ジュエルシード渡してくれ」

「「えっ?」」

「俺一人でダイダロスに行く。だからここでジュエルシードを渡し
といてくれ」

俺がそう言うが、なのはとフェイトは

「私達も行くよ!!」

二人同時にそう言った。何ではもる？

「リュウ君！私も行くよ！リュウ君一人で行かせると何か心配だから！」

「そうだよ龍牙、一人で行くだなんて言わないで。私達も一緒に行く」

「なのはとフェイトの言う通りだよ。今まで一緒にやってきたじゃないか」

「水臭いよ龍牙」

「まったく、龍牙君は何でもかんでも一人で突っ走りすぎです」

まったく・・・こいつ等は・・・どうせ挺子^{ていこ}でも動かないだろうな・・・仕方がない。

「・・・勝手について来い」

「「「勝手について（くよ）（いきます）!!」」」」

皆が大きな声で言う。そして俺はリンディさんの方を向き直り

「ということです、リンディさん、俺達をダイダロスへ転移してください」

「わかったわ」

そうして俺達はジュエルシードとの決着をつけるために、第80管理外世界ダイダロスへと転移した。

転移が終わる。そこは何処かで見た事のある荒野だった、俺は辺りを見渡す。すると百数十キロメートルサイズの一つの巨大なクレーターが俺達の視界に映る。こ、これは・・・

「うわ・・・随分と大きなクレーターだね」

ユーノが思わず声を漏らす。ここは恐らく父さんが死んだ・・・。間違いない、この荒野は父さんが最後に戦った場所・・・。俺は拳を強く握る。

「アルカンシエルはこれほどの威力ということですね」

「すごい・・・」

お前等少し緊張感持てよ・・・。

「なのは、フェイト、ジュエルシードを」

「わかったの」

「うん、わかった」

レイジングハート、バルディッシュからそれぞれジュエルシードを出す。20個のジュエルシードが地面に落ちる。

「さて・・・お前等、俺から離れろ。なるべく遠くな」

「リュウ君、またそんなくジュエルシードを破壊できるのは俺だけだ。お前等は足手まといになる」えっ？

俺は少しきつめに言う。

「・・・わかりました」

「えっ？」

「リニス！？」

リニスの言葉に驚いた声を上げるなのは達。

「龍牙君の言うことも一理有ります。ジュエルシードを破壊できるのは龍牙君だけ。私達が龍牙君に加勢しても足手まといになるだけでしょう・・・」

「そんな・・・」

なのはとフェイトが沈んだ表情になる。

「龍牙君は皆に怪我をさせたくないんですよ。だからさっきもなのはちゃんにきつめに言ったんですよ。ですよね？」

リニスが笑顔で俺の方を向く。

「リュウ君・・・」

「龍牙・・・」

なんはとフェイトが俺を見る。・・・リニスには適わないな。

「ああ・・・俺は皆に傷ついて欲しくない・・・だから皆には後ろで見ていて欲しい。俺の戦いを」

「「龍牙（リュウ君）・・・」」

俺の言葉になのは達が沈黙する。

「・・・わかったの、リュウ君。私後ろで見てるよ、リュウ君の戦いを」

「ああ」

なのはにそう言い

「龍牙・・・本当は心配だけど龍牙なら絶対大丈夫って信じてるから！」

「おう、少し心配ってのが気になるが・・・」

フェイトに言う。

「すまない、ユーノ、アルフ、お前等も言いたいことがあると思うが・・・あまり時間をかける訳にはいかない。皆下がってくれ」

「うん（はい）！」「」

皆が空に飛び、俺から遠く離れる。

（ユーノ、俺の周りに結界を）

（わかった）

ユーノが俺の周りに大きな結界を張る。すると突然空にモニターが出る。リンディさんか。

「何ですか？」

「龍牙君がどうやってジュエルシードを破壊するか見させてもらうわ」

「・・・まあいいでしょう」

とりあえずそう言っとくか。俺はジュエルシードに近づく。1個は俺が破壊した。だがこれ全てを破壊できるか？俺は心の片隅でそう思う。いや、できるできないじゃない、やらなきゃいけないんだ。俺はジュエルシードに触れようとした瞬間

ーゴオオウ

「！？」

俺の予想通り、ジュエルシードが発動し。しかも20全で一気だ。大きな光りが起きる。俺は光りから距離をとる。

「ちよっ！？何この魔力！？」

エイミイの大きな声が聞こえる。

「今までのジュエルシードの発動なんて可愛いくらいにすごいよ！」
確かに・・・1個かけているとはいえ20個全てが発動している。
次第に光りが収まって来ると、暴走体らしきものが見えてきた。

「・・・おいマジかよ」

俺は驚愕した。俺の目線の先にいるのは、全身が骨のようなもので構成されていて、鋭利な黄色い爪が生えており、背中からあばら骨のようなものが飛び出ている。その姿はスパロボOGのアインストクノツヘンそのものだった。何故にあの姿？。

「ヴ・・・ヴォオオオオオオオ！！！！」

暴走体（以降クノツヘン）は雄たけびを上げ、俺は2メートル程後ろに押された。音圧だけで！？

「ヴォオオオ！！」

クノツヘンは俺に鋭い爪で襲い掛かってくる。

「くっ！！」

俺は後ろに飛んでかわす。確かにスピードはあるが・・・フェイトとアリシアほどではない!!

「はぁぁぁあ!!」

クノッヘンの懷に詰め寄り

「はぁあ!!」

右拳を当てようとしたが

「ヴアア!!」

ガギイ!!

「ぐぁあ!!」

俺はクノッヘンの右手で払い飛ばされたが、何とか受身をとる。

「くっ!!」

やはり今までの暴走体とは全然格が違うな・・・。正直アインストクノッヘンの姿だから甘く見ていたな。俺は右手は上から下に、左手を下から上に流すように動かし、青いオーラを両手に纏わせ

「機神双獣撃!! せえい! せえい!!」

グオオオオオオオ!!

両手から覇龍を撃つ。覇龍はクノッヘンに襲い掛かる。

「グガアアア！！！！！」

バシユン！！

「何！？」

覇龍がクノッヘンの爪の一撃で消滅する。まじか……。

「ヴオオオオ！！！！！」

ビキィビキィ……

クノッヘンが雄たけびを上げると、背中のおばら状の骨が大きくな
っていく。そして

「ガアア！！！」

骨がクノッヘンの背中から外れ、ブーメランのように回転し俺に向
かってくる。俺は直ぐに上空に飛ぶ。

だがクノッヘンはいつの間にか俺の目の前にいた。

「ヴオオオアア！！！」

ズバア！！！！

「ぐうう！！！！！」

俺の体がクノッヘンの爪で袈裟に切り裂かれ、切られた傷から血が
流れる。

「ぐっ、はぁぁ!!」

俺はクノッヘンを殴ろうとするが、後ろに飛んでかわす。

「マスター大丈夫ですか!!」

アレースが心配そうな声で言う。

「ああ、少し痛むが問題ない・・・」

・・・フウ、俺はふと思う。俺はまだ未熟だ、本気を出しても覇気を50%くらいしか引き出せない。そしてさっきの今まで20%だ。20%の力じゃ無理か・・・仕方ない、やるか・・・

「アレース、本気でやるぞ!」

「御意!!」

俺は覇気を高めていく。

「おおおおおおっ!!!!!!」

大気が震え、ユーノの張った結界がピシピシとひびが入ってく。クノッヘンは再び俺に襲い掛かる。

「遅い・・・」

ガシッ!

「ガアア!？」

クノッヘンの振りかぶった左腕を難なく受け止める。

「ガア!！」

受け止めた腕を振り払おうと、力を込めるクノッヘン。

「どうした？振り払えないのか？」

クノッヘンは、空いた右腕の爪で俺を切り裂こうとするが

「ぬうん!！」

バキィー!!

「グガアアアア!！」

爪を粉々に粉碎し

「はぁ!！」

ブン!!

俺はクノッヘンを投げ飛ばす。クノッヘンは地面にぶつかると、もかく様に起き上がる。

「そろそろ終わらせる・・・」

俺は右手は上に、左手を下にする。そして両手をそれぞれ流すよう

に動かし

「全てを・・・粉碎する!!!!」

構えを取り

「はあああつ!!!!!!」

ゴオオオオオオオオ!!!!!!

俺の体か、覇気が放出され、大地が轟音と共に覇気で削られていく。大地は俺の立つ場所だけ残っていた。

「す、すごい・・・」

リンディさんが啞然とした声で呟く。俺は覇気を両手に纏わせていく。

「はあつ!!」

クノツヘン目掛けて飛ぶ。俺は右腕を振りかぶり

「おりゃあつ!!」

ドゴオオ!!!!!!

「ゲアガアア!!!!!!」

思いっきり振り下ろす。そして構えを取り

「おおおおおおっ!!」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴ!!……!!

何度も残像が残るくらいに拳を浴びせる。

「グオ……オオ……!」

「でやあっ!!」

バキヤアア!!

そして鋭いアッパーで上空にクノッヘンを上げる。右手に覇気を溜め

「貫け、覇龍!!」

グオオオオオオオオ!!!!

巨大な覇龍を放つ。覇龍は巨大な口を開け、クノッヘンを喰らい、上空に上がっていく。そして結界を砕き更に空に行く。そして俺はこの技の名を力強く叫ぶ。

「奥義! 轟覇機神拳!!!!」

その瞬間

ボゴオオオオオン!!!!

「グガアアアア!!!!!!」

覇龍はクノッヘンを喰らったまま、巨大な爆発を起こす。クノッヘンはどしゃー!という音と共に、地面に墜落する。そしてゆっくりと起き上る。

「ヴウウウ……」

ピキッ ピキイ……

クノッヘンの体にひびが入っていく

「ヴァアアアア!!!」

パキンッ!!

クノッヘンは叫び声を上げ、粉々に砕け散る。

「……やったの?」

リンディさんがそう言う。

「『『『龍牙(リュウ君)!!!』』』」

なのは達が俺の近くに集まってくる。

「リュウ君やったね!」

「龍牙すごいよ!あの暴走体を倒すなんて!」

「僕は龍牙ならできると思ってたよ」

「アタシもだよ！さすが龍牙だね！」

「まあ、少し危なっかしいところもありましたが」

皆笑顔でそう言う。

「龍牙君」

俺はモニターの方を向く。

「何でしょうリンディさん？」

「先程の戦闘について……いろいろ話してくれないかしら？」

「えっ？」

すると目の前にクロノが転移してきた。

「さあ龍牙！キビキビ吐いてもらっぞ！」

ビシッと指を指し言うクロノ。

「はぁ……めんどくせえ……」

俺は大きなため息をついてうな垂れた。けどまあ……終わったな・

「聞いているのか龍牙！？」

ホントこいつ一回ボコしておくか・・・？俺はそんなことを思いながら皆と共にアースラに戻った。

side 三人称

龍牙がジュエルシードを破壊してから少し後のこと・・・

「私は貴官にジュエルシードを回収しろ。と言ったはずだが？」

「はい・・・」

どこかの部屋で、二人の人が居た。一人は緑の髪の女性、リンディだ。そしてもう一人は口髭を生やした老人だ。

「・・・もういい、下がりたまえ」

「はい・・・失礼します。グレゼン提督」

リンディは一礼し部屋を出て行った。

「フンッ・・・21個も得られなかったのは惜しかったが・・・ま

あいい、ロストロギアなら他にも有るからな・・・」
グレゼンは椅子に座り、髭を触る。

「しかし・・・真崎龍牙・・・か、親子揃って私の邪魔をするとはな・・・」

「如何なさいます？」

何の音も立てずグレゼンの背後に白衣を着た、黒い髪の男性が立っていた。

「ジードルか・・・そうだな・・・いつかは目障りになる・・・韌のようにな・・・殺せ」

「クククッ、承知いたしました」

ジードルは影の中に沈むように消えた。

「読めぬ奴だ・・・まあいい、あの小僧さえ殺せばそれでいい」

グレゼンは口を歪めて笑う。龍牙の知らないところで、不穏な影が動き始めていた。

第十話「龍牙の本気。貫け！『轟覇機神拳』！」（後書き）

白：どもー作者の白き修羅です！

龍：主人公の龍牙だ

白：いやー内容はともかく、無印終わった！（？）

龍：お疲れ様だな

白：おう…長かったな、今回は番外編です。アリサとかすすかを久しぶりに出します。

龍：あいつ等出るのか？まあ別に良いけどな

白：では次回でお会いしましょう！

龍：じゃなー

読んで下さった皆様。感想など頂けるととても嬉しいです。ドシドシ感想を！

第十一話「転校生と誘拐事件」(前書き)

ども！白き修羅です！久しぶりにこつちを更新します。内容がおいしいところ多々ありますが・・・温かく見守ってください・・・

第十一話「転校生と誘拐事件」

俺はクノツヘンとの戦いの後、リンディさんとクロノに俺の力について色々聞かれたが

「説明するのが面倒です、俺の力についてあまり聞かないでください。あ、これはあの時言っただけだった条件の一つです。俺、言いましてよね？あの時条件を言った時、今のところは、と言いました。だからまだ俺は条件全て言い終わってなかったんで」

と言っておいた。まあクロノは突っかかってきたが、リンディさんがそれを了承してくれたので助かった。

そして、クノツヘンとの戦闘から二日後。どうやら俺が前住んでいた家に、新しく人が住んだらしい。まあ別にどうでもいいっちゃあどうでもいいんだがな……。そして俺となのは久しぶりに学校に来た。俺は机にだれかかる。

「あんた達、随分と久しぶりね」

気づけばアリサとすずかが、俺の机の前に立っていた。

「ああ・・・色々用事あったからな・・・な、なのは」

俺はなのはの方を向き言う。

「う、うん、そうなんだ」

なのはは、わざとらしく言う。

「ふゝん・・・まあいいんだけど・・・」

「けど一週間も休んでたんだもの、本当に心配したよ」

「ああ、ありがとすずか」

「ありがとすずかちゃん」

俺となのはの言葉に笑顔になるすずか。すると先生が教室に入ってきた。

「はい皆席についてー」

他の生徒が席についていく。

「突然ですが、今日からこのクラスに新しいお友達が二人やってきました」

先生のその言葉にクラスがざわつく。

「この時期に転校生？しかも二人も・・・」

俺は机に肘をつき、小さい声で呟く。

「先生！その二人って男ですか！？女ですか！？」

俺の二つ後ろの男子生徒が無駄に大きな声で質問する。

「二人とも女の子です」

おお〜と男子が騒ぐ。まあ、どうでもいいが……。俺は窓の外を見る。

「それでは入ってちょうだい」

ガラッと、音を立て扉が開くのがわかる。男子が更に騒ぐ。

「はい静かにー、じゃあ自己紹介お願いね」

俺は窓をずっと見てたので気づかなかったが

「アリシア・テストロッサっていいいます！よろしくね！」

「……………は？元気な声で挨拶する声が聞こえ

「フェ、フェイト・テストロッサです。よろしく……………」

……………へ？恥ずかしいのか、小さな声で挨拶する声が聞こえる。アリシア？フェイト？俺はそちらの方を向く。そこに居たのは、聖祥小学校の制服に身を包んだアリシアとフェイトが居た。……………はい？

「アリシアさんとフェイトさんは、双子の姉妹です。みなさん仲良くしてあげてください」

先生がそう言う。

そしてHRが終わり、生徒達がアリシアとフェイトの席に群がっていく。そしてなのはがアリシアとフェイトの近くに駆け寄り

「フェイトちゃん！アリシアちゃんも！な、何で！？」

驚いているのか、叫びながら言うのは。

「あ、なのはちゃん！えつとお母さんがn「学校に行ってみない？
とでも言われたんだろ？」あ！龍牙君も！うんそうだよ！」

アリシアが俺に気づいたらしくそう言う。・・・やっぱりそうでしたか。前にプレシアさんが、俺の通っている学校はどんな所かって聞いてきたし。「ジュエルシードの件が終わったらフェイト達を学校に通わせようかしら・・・」って独り言、言ってたし。あの、独り言は本当だったのか・・・すると生徒達が俺の方を向き

「真崎君と高町さんこの子達の知り合い！？」

「どういう関係！？詳しく教えて！-」

と言いながら俺達を囲む。

「にゃあああああ！？」

殴り、裏拳、頭突き、蹴りをそれぞれかましといた。男子生徒はピクピク動きながら床に倒れた。

「・・・文句あるやつ前に出て来い・・・それと誰がリア充だコラ」

そう言うと、他の男子生徒が後ずさって行く。

「ったく・・・」

椅子にドカツと座る。

「龍牙・・・あんた結構ケン力強い？」

アリサが聞いてきたので

「さあな」

それだけ言っといた。

そしてHRの騒動は直ぐに収まった（ほとんど俺が黙らせたんだが）そして何時も通り学校が終わった。まあ俺は何時も通り寝ていたが・・・。それとフェイト達から聞いたんだが、前の俺の家に新しく入居したのは、テストロッサー家らしい。どうやら義務教育が終わるまで海鳴市に居るとのことだ。俺としてはアリシア達と会えるのは嬉しいことだからいいんだけどな。

「ごめんリュウ君！私用事あるから先に帰るね！」

そう言いながら走っていくのは。

「私達も母さんに頼まれごとあるから帰るね」

「バイバイ！龍牙君！」

フェイトは軽く手を振り、アリシアは手を元気よく振りながら帰って行った。

「・・・さて、俺もボチボチ帰るとしますかね・・・」

俺がダルそうに席を立つと

「龍牙君、よかったら一緒に帰らない？」

「ってゆーか一緒に帰るわよ！」

すずかとアリサがそう言ってきた。

「ああ、わかった」

そうして俺は、すずか、アリサと一緒に帰ることになった。

「ふわぁ~~~~・・・」

俺は盛大に欠伸をした。

「あんだ・・・授業中あんな寝てるのにまだ寝たりないの？」

「・・・ああ、寝たりないな」

その一言にすずかが苦笑し

「あはは・・・けど龍牙君って何時も寝てるけどテストは80点台だよな」

「ホントよね・・・家で勉強でもしてんの？」

「いやしてない」

「え～～～!!」

アリサが驚きの声を上げて、すずかは横でクスクスと笑っている。すると、黒いワゴン車がゆっくりとスピードを落としながら走ってきた。そして、俺達の近くを通り過ぎようとした時、突然ドアが開き、二人の男が降りてきてアリサとすずかの口を塞ぎ、車内に連れ込んだ。

「ん～～～!!」

「!?!この!!」

俺は男達に殴りかかろうとしたが、ドアが閉まりワゴン車は猛スピードで走っていった。

「ちっ!!アレース!二人の生命反応を追っぞ!!」

「御意!!」

俺はアレースに導かれるままに走った。くそっ！アリサ、すずか！俺が着くまで無事でいろよ！！

アリサ side

私とすずかは、突然車に連れ込まれた。そして連れてこられたのは、山奥にある廃墟だった。そこで私は、すずかとは別の部屋に監禁された。ここには私達を連れ込んだ実行犯らしき人物達を含め、5人の男たちが居る。私は足と腕を縄で縛られて、身動きが取れない。

「ちょっとアンタ達！どうせ身代金目的の誘拐でしょ！？だったら私1人いれば十分の筈よ！すずかは解放して！」

怖くてたまらなかったけど、勇気を振り絞ってそう叫ぶ。すると私の言葉に男達は一瞬静まり返り、突然笑い出す。

「くはははは！まあ、俺達は金目的だからお嬢ちゃん一人いれば事足りるわけだが、雇い主の目的は、もう1人のお嬢ちゃんの家だからな」

男の言葉に私は疑問を持つ。すずかの・・・家？

「すずかの家が目的？どういう事よ！」

私はそう問いかけた。すると男達はニヤニヤと笑みを浮かべ

「お嬢ちゃんは知らないだろうから教えてやるよ。もう1人のお嬢ちゃん家の一族はな、人間じゃないんだよ」

「えっ・・・？」

私はその言葉を聞いたとき、思わず声を漏らした。人間じゃない・・・？　すすかが？

「人の姿をしているが人じゃない。人の血を吸って生きる化け物。つまりは吸血鬼さ」

「嘘よっ！！」

私は叫んで否定した。すすかが化け物？絶対嘘！そんなことはない！　すすかが・・・化け物だなんて・・・。

「嘘じゃないさ、その一族は吸血鬼だけあって、全体的に身体能力が高い。心当たりがないか？」

その男が放った一言で。私は思わず考えてしまった。確かに、すすかの体育の成績はずば抜けてトップだ。

「心当たりがあるようだな？」

私の態度で悟ったのか、そう言われて、私は動揺する。

「た、確かにすすかは体育の成績は一番よ！けど、唯それだけだわ！」

私は、必死に反論する。

「それは子供だからだな」

「そ、そんな・・・そんなこと・・・」

私は否定しようとするが、声が弱々しくなってしまう。

「もう少しすれば嫌でも分かる。あの月村の一族は、人間とは違
と」

「ち、違う・・・すずかは・・・すずかは・・・」

友達と言おうとしたが、次の言葉が出てこない。

「まあ、そんな事で悩む事はもう無い」

「えっ？」

突如言われたその言葉に、遂疑問の声を漏らす。

「あのお嬢ちゃんとはもう会う事も無いだろうからな・・・ククク」

「!?!?どういうことよ!?!?」

私は次の言葉を言おうとしたけど

「ククク・・・他人の心配をしている場合か?」

すると一人の男が私に近づく。

「こいつはとてもタチの悪い幼女趣味でな・・・」

「うるせーよ、人の趣味にケチつけんじゃねえよ！・・・なあこのガキ俺の好きにしていいいか？」

「・・・ああ、だが殺すなよ？殺してしまつては金が手に入らないからな」

「へへへわかつた・・・」

男がゆっくりと近づいてくる。

「い・・・いや・・・来ないで・・・」

男はいやらしい笑みを浮かべながら、どんどん近づいてくる。

「ヒヒヒ・・・恐怖に怯える表情・・・そそるねえ・・・じゃあ、いただきk「おりゃあ！！」へ？」

バゴォン！！

「ギャハア！！！！」

どこかで聞いたことのある声と一緒に、突然ドアがその男に飛んできた。男はドアと共に吹き飛んでいった。ドアがあったであろう場所には、一人の男の子が立っていた。赤い髪に、どこか怖そうで、どこか優しそうな目をしている男の子・・・まさか・・・龍牙！？

「このガキ！！何しやg」でえいい！！」「！？」

バキィ！！

「ぐがあー！！」

「せええいー！！」

ドゴォー！！

「ギャー！！」

「はああー！！」

ゴンツー！！

一瞬で男達は悲鳴を上げて、倒れていった。そして龍牙は私に近づき、縄をといていった。

「アリサ、大丈夫か？」

そう聞いてきた。その時の龍牙の表情は何時もの表情ではなく、とても優しい顔だった。私はいつの間にかとても安心していた。

s i d e o u t

「アリサ、大丈夫か？」

男達を気絶させたあと、俺はアリサに近づきそう問う。

「う、うん・・・大丈夫よ・・・」

そうアリサが言う。俺はとりあえずホッとする。

「・・・すずかは他の部屋か・・・」

俺はそう呟き、部屋の出口に向かう。

「待って！」

アリサが俺の腕を掴む。

「どこに行くのよ!？」

「・・・すずかを助けに行く」

俺がそう言つと、アリサは

「一人でなんて危険よ!!」

そう怒鳴るアリサ。俺はアリサの手を静かに腕から離し

「大丈夫だ、俺なら心配要らない。お前はここで待ってる」

そう言い、俺はアリサをその場に残して走る。

「龍牙!!」

アリサが叫ぶが、俺はそれを無視して部屋を出た。

「マスター 此処です」

すずかが居るであろう部屋の前に俺は来た。

「行くぞ・・・」

バコオン！！

俺は扉を思いっきり蹴り飛ばした。その部屋にはソファーに座っている一人の男。そしてその横に、物騒な刃を腕につけた二人がおり、縛られ床に座り込んだすずかが居た。

「りゅ、龍牙君！？」

すずかが叫ぶ。そしてソファーに座っていた男が立ち上がる。

「これはこれは・・・他の者達は如何したのな？」

「・・・ぶつ潰しておいた」

「ちっ・・・だから人間は使えないのだ・・・」

男は眉間にしわを寄せて言う。

「その口振りからするに、お前は人間じゃないってことか？」

その男は、口を三日月状にして笑い出す。

「その通り！！私は夜の一族の一人！架宮影次だ！！」

腕を広げて自己紹介をした影次。俺はそれよりも気になる単語があった。

「・・・夜の一族？」

「フフフ、知らないか？ならば教えてやろう」

男がそう言つと、

「やめてっ！」

すずかが叫ぶ。だが、影次の言葉は止まらない。

「我々は普通の人間とは違う。人間の血を用いてあらゆる事を可能にする者・・・それが夜の一族」

「・・・んで？その夜の一族のお前が、すずかを何故攫った？」

「フフフ・・・答えてやろう・・・この娘・・・月村家もな、夜の一族なのだよ・・・」

影次はそう言い、言葉続ける。

「しかし、その月村の当主があんな何も知らない小娘であつてたまるものかー！」

「・・・なるほど、大体理解したよ・・・あんたはすずかを攫い、

忍さんを脅迫して月村家当主の座から引き降ろそうって魂胆なわけだ」

「フフフ・・・もの判りのいい人間は好印象を持つぞ・・・それより・・・そこに隠れている小娘よ、出て来い」

俺は後ろを向く。すると、出口の所にアリサが居た。アリサは部屋に入ってきた。

「ア、アリサちゃん・・・」

すずかは弱弱しく、アリサの名前を呼ぶ。

「う・・・嘘よねすずか！この男が言った事なんて、全部嘘よね！？」

アリサはすずかに叫んで問いかける。

「・・・・・・・・・・」

すずかは、苦しそうな表情で目を瞑っていたが、

「・・・・・・・・・・本当だよ・・・」

静かにそう呟いた。

「・・・月村の一族は・・・人間じゃないんだよ」

そう呟いて瞼を開いたすずかの瞳は、血のように赤く染まっていた。あれが夜の一族の証か・・・。

「すずか・・・その目っ!？」

アリサが驚いた声を上げ叫んだ。

「この赤い瞳が、夜の一族の証・・・人の血を吸う吸血鬼、化け物なんだよ!」

すずかは、自虐的に叫ぶ。

「ゴメンねアリサちゃん・・・私・・・ずっとアリサちゃん達の事騙してた。私は人とは違うのに・・・化け物なのに、騙して皆と友達になろうとしてた・・・だからね・・・」

顔を上げたすずかの赤い瞳からは、涙が溢れていた。

「私の事はいいから・・・逃げてもくだらねえ!!!」龍牙君!？」

俺は遂声を上げてしまった。俺はさらに

「すずかが化け物?だからどうした!?!お前はお前だろ!?!それに化け物っていうのはな、人を殺して、何にも感じない、涙すら流さない奴の事をいうんだよ!?!お前は涙を流すことが出来る!お前は立派な人間じゃねえか!?!だからそんな事言うんじゃないよ!?!!!」

声を荒げて叫ぶ。そして次いでアリサが

「そうよ!・・・最初すずかが化け物って聞いたときは確かに驚いたわ・・・けどすずか!ハッキリ言わせてもらおうわ!アンタが吸血

鬼だろうと化け物だろうと、アンタは私の友達よ!!」

「龍牙君・・・アリサちゃん・・・」

すずかは啞然として言う。すると影次が

「フフフ・・・茶番だな・・・さてそろそろ終わりにするか・・・」

影次の言葉に、横に立っている二人がピクツと動く。

「・・・そいつは自動人形ってやつか・・・」

俺がそう言うのと、影次は驚いた表情をする。まあ原作知ってるから言える事なんだが・・・。

「ほう、これを知っているのか・・・おもしろい、だが知っているだけでは何にもならんぞ?」

「フン・・・どうかな?」

俺は構えをとり、覇気を全身に行き渡らせる。

「来いよ人形共・・・我が拳を持って粉碎してやる・・・」

俺がそう言った瞬間、人形の一体が俺に猛スピードで突っ込んでくる。そして右手の刃を振り上げる。普通の人間なら全くに反応できずに、命を刈られるだろうが・・・俺は違う!!

「クハハハハ!!! 死ね小僧!!!」

「龍牙（君）！！」

「遅いッ！！！！」

バキヤアアッッ！！

俺は無造作にぶん殴った。人形は、向かってきたスピードよりも速く壁に激突し、バラバラに碎け散った。

「な・・・なに・・・」

影次は驚愕した表情になる。

「この程度で俺を殺すだと？・・・」

俺は影次を睨む。

「くっ、い、行け！！」

二体目が向かって来る。俺はジャンプして人形の胴体を蹴り付け

「空円脚！！でええいい！！」

ズバン！！！！

そのまま回転蹴りし真空波を放ち、人形を真っ二つにした。

「ヒッ、ヒイ！！」

真っ二つになった人形は吹き飛びながら、影次の頭上に落ちてきた。

「ぎゃああああー!!」

そのまま人形の下敷きになった。

「ちっ・・・たいしたことなかったな・・・」

小さな声でそう呟く。俺はさすがの元に行き、縄を解いた。

「これで安心だぞ、すずか」

「龍牙君・・・」

すずかは、安心しきった表情になる。だが、突然ガラッと音がした。振り向くと影次が人形を退けて、アリサに拳銃を向けていた。

そして

ーパアン

銃声が鳴り響く。

「ぐ・・・ううー!!」

「!?!? 龍牙!?!」

俺は直ぐにアリサの前に移動し、腹部に銃弾を受けた。どうやら急所は外れたようだ。

「はぁあ!!」

バキィ!!

「ゲアア!!」

影次を思いつきりぶん殴り、確実に気絶させた。

「くう・・・」

バタンツ

俺は腹を抑えながら倒れてしまった。

「龍牙（君）!!」

アリサとすずかが俺の側に走ってくる。

「アンタ！何やってんのよ！私の代わりになんて・・・」

涙声になりアリサが言う。

「・・・俺は・・・もう・・・嫌なんだ・・・」

「えっ？」

アリサは下げていた顔を上げる。

「もう・・・俺の周りの人が死ぬのは・・・見たくはない・・・」

「龍牙・・・」

・・・やべ・・・意識が・・・朦朧としてきた・・・

「龍牙君！今お姉ちゃん達呼ぶから！！」

「龍牙！！死ぬんじゃないわよ！！」

アリサ達がそう言うが・・・俺は意識を失ってしまった。

第十一話「転校生と誘拐事件」(後書き)

十一話終了です。次回からA S編にぐつと近づきます。感想お待ちにします!!

第十二話「そして齒車は動き出す」（前書き）

・・・物語は、誰もが思わぬ方向へ動き出す。それは少年達を幸せにするか・・・不幸にするか・・・

第十二話「そして齒車は動き出す」

「ぐ……うう……」

不意に俺は目を覚ます。

「ここは……?」

俺はベットのの上にいた。辺りを見渡すが、知らない部屋だ。外は暗い、夜まで俺は寝てたのか?…あれ?確か俺はすずか達を助けに行つて、それからアリサを庇つて影次に撃たれて……

「……とりあえず起きるか」

俺はベットから降りようとしたが

「ぐっ!」

腹に激痛が走り蹲る。そして俺はあることに気づく。

「!?!アレースが居ない!?!」

何時も首にぶら下げているアレースが居なかった。まさか気絶したときに、あの廃墟に落としたのか!?

「がああ・・・！」

俺は腹の痛みに耐え、ベットから降りる。

「ア、アレース・・・」

するとガチャツと扉が開いた。部屋に入ってきたのは忍さんのようだ。んてことはここはすずかの家か？忍さんが俺を見ると顔色を変えて

「龍牙君！！ダメよ無理をしちゃ！」

そう言って抱きかかえ、俺をベットに戻す。

「し、忍さん・・・俺のペンダント知りませんか？」

「えっ？ああこれのことね」

忍さんはポケットから白いペンダントを出した。アレースだ。

「傷の処置をする時に預からせてもらったわ」

忍さんはアレースを手渡す。俺はホッとした。

（まったく心配したぞ、アレース）

（申し訳ありません、マスター…）

念話でアレースと会話をする。

「大切な物なのね」

「はい・・・母さんが最後に俺に残してくれたものですから・・・あと物じゃないです。俺の相棒です」

「相棒？」

「あ、いえ気にしないでください」

ペンダントが相棒って思われたら変人にしか見えないからな・・・。

「そう・・・龍牙君、すずかを助けてくれて・・・本当にありがとう・・・」

頭を下げてそう言う忍さん。

「いえ・・・友達として当然の事をしたまです。礼を言われることなんてしていませんよ」

「けど、お礼くらいは言わせて・・・ね？」

「は、はあ・・・」

俺達がそういうやり取りをしていると、部屋に誰かが入ってきた。アリサとすずかのようなだ。

「「龍牙（君）！！」」

アリサとすずかが走って俺の所に来る。

「あんた大丈夫なの!？」

「まだ痛むが…問題はないな」

「本当によかったよ…」

「心配かけたみたいだな…済まん」

俺は体を起こして言う。

「あの…龍牙君?一つ聞きたいんだけど…」

「はい?」

忍さんが急に真面目な表情になり

「私達の事…もう知ってるわよね?」

「…夜の一族の事ですか?」

「ええ…龍牙君とアリサちゃんには、私達の…夜の一族について教えないとね…」

それから忍さんは、夜の一族の事を教えてくれた。夜の一族は人間の血を力の源に、いろんな事が出来る。ヨーロッパで発祥して、古くから細々と続いている一族。普通の人間より、筋力や生命力が優れている事。ファリンさんとノエルさんは、夜の一族が生み出した自動人形で、2人はその中でも人間性を求めたエーディリヒ型ってタイプの自動人形らしい。俺が戦ったあの自動人形は完全に戦闘を目的として作られたタイプらしく、感情も何もないただの殺戮人形

だっただけ。破壊して正解だったな。

「それでね、一族の間の約束で、誓いを立てるかどうかが、選んで欲しいの」

「誓い？」

アリサが首を傾げる。

「今まで知った一族の秘密を忘れて過ごすか・・・知ったまま、一族と共に秘密を共有して生きていくか」

誓いか... まあ答えは決まってる。

「忘れたくないですし、誰にも口外するつもりはないです。な、アリサ」

「当たり前よ！誰が他の人に言うもんですか！」

何時もの強気な口調で言うアリサ。

「龍牙君、アリサちゃん...」

「俺達は友達だ、ずっとな」

「あの時も言ったけど、さすがが私の親友なのには変わり無いわよ」

「龍牙君・・・アリサちゃん・・・ありがとう・・・」

涙を流して言うすずか。俺はすずかの涙を拭う。

「泣くなよ、お前には笑っていてほしいんだからさ」

俺がそう言つと、すずかは顔を赤くなった。

「龍牙君・・・／＼／」

「・・・フン」

なぜかアリサがそっぽを向いた。

「どうした？」

アリサは、明らかに怒った声で

「何でもないわよ!」

と言った。

「そんな顔するなよ、せつかくの可愛い顔が台無しだぞ？」

「か、可愛いって／＼お、お世辞なんていらないわよ!」

アリサは顔を赤くして言う。俺はため息を吐き

「はぁ・・・俺は世辞なんて言わねえよ」

俺はそう言う。ホントに俺は世辞とか言わねえし。すると忍さんは俺を見て

「龍牙君・・・すずかの婚約者になってくれないかしら？」

数秒間時が止まった。そして

「・・・へ？」

思わず変な声を上げてしまう。

「お姉ちゃん!？」

すずかが何か言おうとしたが、その前に忍さんが

「いいじゃない。すずか、龍牙君の事好きなんですよ?。」

はい!?!すずかが俺の事を!?!いやいや有得ない!俺のような男を

すずかが好きな訳・・・

「う、うん／＼わ、私は良いよ・・・こ、婚約者でも・・・」

すずかが頷く。まじですか？するとアリサが

「ちよっとすずか！何言ってるのよー！」

すずかの前に来てそう言うアリサ。いいぞアリサ！もっと言ってくれ！

「すずかは龍牙の事好きかもしれないけど、私だってー！」

「・・・私だって？」

俺がそう呟くと、アリサは自分の言動に気付き、顔を赤くする。

「まさか・・・アリサちゃんも？」

「う、うう／＼」

唸るアリサ。おいおい・・・まじですか？（二回目）。

（クスッ、マスター男冥利に尽きますね）

笑いながらアレースが念話を飛ばす。

（うつさい！！絶対つり合わないって！！まじでー！！）

俺は念話で叫ぶ。アリサはずっと唸っており、すずかは顔を赤くし

て、俺の事を何度もチラチラ見ていた。

「いやいや俺よりもぜったにいい男いんでしょうが・・・」

俺は家に帰るまでずっと小さな声で呟いていた。

俺はもう夜遅いということで、忍さんに家まで送ってもらった。そして忍さんに、何で俺の帰りが遅くなったか事情（夜の一族云々を抜かして）を、土郎さんと桃子さんに言ってもらい、俺は怒られずにすんだ。本当に助かった・・・土郎さんはともかく、桃子さんに怒られたくないから・・・。

「しかし龍牙君、傷の方は大丈夫なのか？」

土郎さんがそう聞いてきた。

「大丈夫ですよ、しっかりと処置してもらいましたから」

「ならいいのだが・・・」

土郎さんは安心した表情になる。俺は横をチラツと見る。俺の左にすずかが座り、俺の右にアリサが座っている。何故かは知らんが、すずかとアリサまで家について来たのだ。すずかとアリサは、なのはの所に行く

「私負けないから!!」

声を合わせて二人が言う。

「ふえ〜、な、何が????」

全く何のことかわからない様子だ。忍さんとは笑みを浮かべてそんな三人を見ていた。

あの誘拐事件から一週間が経った。あの事件から、ずかとアリサがアプローチするようになった。その度になのはとフェイトとアリシアからの視線が怖くなるのだが・・・まさかあいつ等も俺の事を? いやいや絶対に有得ないだろ。まずなのはには、ユーノがいるかな。

そして俺は公園で一人、ベンチに座って考え事をしていた。それは来るべき『闇の書事件』についてだ。まずはあいつに、『八神はやて』会わないとな。それから、守護騎士達と協力体制を得ないといけない。あいつらと戦うのは面倒だからな。そして・・・リインフォースの消滅を防ぐ。

「やることは山ほどあるな・・・ん?」

俺は立ち上がる。さっきまで人が居たのに、急に居なくなった。ど

うやら結界が張られたようだ。すると目の前に、5体の西洋鎧が現れた。

「アレース、セットアップ」

「御意」

バリアアケットに身を包む。鎧はギギギと動く。

「・・・アレース、あれに生体反応は？」

「有りません。どうやら無人で動いているようです」

「そうか・・・なら・・・」

俺は構えをとり

「気兼ねなくやれる!!」

鎧が俺目掛けて走って来た。そして俺を斬りつけようと、手に持った剣を振る。

「ふんっ!!」

ギイン!!

右手でそれを受け止め

「ぬうん!!」

バギイイン！！！！ ガチャアアン！！

左手のストレートで、鎧を殴る。すると鎧は綺麗に吹き飛び、後ろの二体を巻き込む。鎧はピクリとも動かなくなった。

「衝撃を与えると止まるのか・・・」

残りの二体が向かって来る。俺は間合いに入っただのを確認し

「霸光龍壁！！はああ！！」

地面に左手を打ちつけ、霸龍を発生させる。

ゴオオウウ！！！！ ガシヤアアアン！！！！

霸龍に当たり、宙に舞う鎧。ガシヤンと音を立て、地面に落下した。

「一体何だったんだ・・・」

俺はバリアジャケットを解除した。だがそれは間違いだったようだ。

ザスッ！

「クッ！？」

首元に何か刺さった感覚がした。俺は直ぐにそれを抜く。注射器？

「フククク・・・すばらしいよ、真崎龍牙君！！」

背後から声がしたので振り向く。そこに居たのは、黒い髪に、科学

者のような白衣を着た男が立っていた。

「失敗作とはいえ、その傀儡子達を無傷で倒すなんてな・・・フククク、実に興味をそそられる」

不適な笑みを浮かべてそいつは笑う。

「お前・・・何者だ？」

「おつと失礼」

男は紳士のようなお辞儀をし

「私の名前は『ジードル・ファルクス』グレゼン・バーグの命令で君を殺しにきた」

グレゼン・・・だと！？やはり来たか！！

「俺をころs「けど正直君を殺す気はないんだよ」何？」

「フククク・・・私は君にとっても興味を持っている。君を殺すなんてとんでじゃないが勿体無い・・・フククク・・・」

チツ、笑い方がいちいちウザイな・・・

「じゃあ何がもくてきできた・・・ん・・・だ？」

突然視界がぐらつき、いつの間にか俺は地面に倒れていた。

「フククク・・・ようやく効いてきたか・・・」

おれはおもいだした。さつき、ちゅうしゃきがささったことを。

「てめえ．．．なにやりやがった．．．？」

「フククク．．．大の大人でも2秒もすれば眠りにつく睡眠剤だよ。だが君は二分で効いた、まさかそこまで持つなんて思っていなかったよ！！」

「くっ．．．」

「フククク．．．」

じーではおれにちかづき、あれーすをとった。

「このやろう．．．！あいぼうを．．．はなしやがれ．．．！！」

「なあに大丈夫だ。君の相棒は奪わないよ．．．だが、ちよつと、メモリを弄るだけだ．．．あ、そうだ．．．君が次起きる時には、あるものは無くなっているかもね．．．フクククッ！！」

「な．．．んだと．．．」

「フククク．．．さて、君の血を貰^{サンプル}っていくとするかね．．．もともとそれが目的だったわけだし．．．それでは．．．御機嫌よう、真崎龍牙、いや『紅き修羅』よ．．．」

そのことをさいごに、おれのしかいはくらやみにつつまれた．．．

なのはside

突然だけど、今日はフェイトちゃんとアリシアちゃんが家に遊びに来ます！すごく楽しみなの！

「おじゃまします」

「お、おじゃまします・・・」

玄関から、フェイトちゃんとアリシアちゃんの声が聞こえました。私は玄関に向かったの。

「いらっしやいフェイトちゃん！アリシアちゃん！上がって上がって！」

私はそう言い、二人を私の部屋に連れて行きました。

「へえ〜ここがなのはちゃんの部屋か〜」

アリシアちゃんがキョロキョロ見渡しています。何か恥ずかしいの・・・。

「そういえばここ最近、アリサとすずかの龍牙へのアプローチが激しくなっているね」

「た、確かに・・・」

フエイトちゃんの言う通り、一週間前からすずかちゃんとアリサちゃん、龍牙君にくつつきすぎなの!!! まさか二人も龍牙君の事を・

・
「（負けてられないの!!!）」

私は心の中でそう呟きました。

「あれ？ところで龍牙君は？」

「リュウ君はちょっと出かけてくるって言ってどこかに行っちゃったの」

「そうなんだ」

「どこに行っただろう？」

「うーんわからないの・・・」

リュウ君は時々どこか遠くを見ていて、放っておけばどこかに消えてしまいそうな時があります。そんなリュウ君を私が支えてあげないと!!!

そして・・・龍牙君はこの日、帰って来ませんでした・・・。

side out

ここは何処だ・・・？あれ？俺の目の前に誰か居る。茶色い髪の子
イドポニーの少女と、金色の髪のツインテールの少女が・・・二人
は何かを言っている。どうやら俺の名前のようだ。俺の名前を・・・
何で・・・俺はこいつ等を見ると・・・変な感覚になる。止める・・・
俺の名前を呼ぶな・・・

止める止める止止めるめる止めるやめるやめるやめるやめるやめる
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ！！！！オレノアタマノナ
カヲクルワスナ！！オレノナマエヲヨブナ！！

「うわあああ！！！」

「ひゃあああ！！！」

俺はガバツと起き上がった。どうやら俺はベットのの上にいるようだ。
あれ？なんかデジャブった。

「び、びっくりした〜」

俺は突然声がしたので、横を向くと、茶色の髪に、車椅子の少女が

居た。

「ようやく起きたと思ったら、大きな声上げるんやもん、ごっつ驚いたわぁ・・・」

「す、すまん」

俺のその言葉に、少女は首を横に振り

「別にええつて。あ、私八神はやていいいます。はやては平仮名ではやてや、よろしゅうな」

八神・・・はやて？何だ？俺はこの少女を知っている（見た事がある）

「・・・」

「？どうしたん？」

はやては、俺の顔を覗き込む。

「いや、何でもない。おっと、俺も自己紹介しなきゃな、俺は真崎龍牙。龍の牙と書いて龍牙だ。よろしくな」

「龍牙君か！うん覚えてたで！」

はやては笑顔になって言う。するとガチャツと部屋の扉が開く。金髪の女性が入ってきた。

「はやてちゃんってあれ？あなた起きたのね、よかった」

金髪の女性はそう言いながら俺の側に来る。

「はやて、この人は？」

「えつとな、この人は私の親戚の『シャル』っていうんや」

シャル・・・俺はこの人も知っている（見た事がある）

「よろしくね、ええつと・・・」

「真崎龍牙だ」

「龍牙君ね、けど公園に倒れているなんて驚きましたよ」

「そやでーしかし何であそこに倒れとったんや？」

・・・公園？確か俺はあそこで・・・ジューデルって奴に襲われて・・・！！アレースは！！あ、あるな・・・

「別に無理して言わなくてもええんよ」

「あ、ああ」

「龍牙君、家は何処？もう夜遅いし家まで送りますよ？」

「ああ、たの・・・む・・・」

あれ？確か父さんと母さんは死んで、俺の住んでいた家はもう誰か住んでるし。

「家？・・・俺の帰る・・・家・・・」

「龍牙君？」

俺は頭を抱えた。

「わからない・・・俺の帰る家が・・・わからない」

「「えっ」

はやてとシャルマルが驚愕の表情になる。

「じゃあ、お父さんとお母さんは？」

「・・・父さんは殺されて・・・母さんは事故で・・・」

その言葉にシャルマルがバツの悪そうな表情になり

「ごめんなさい・・・」

「いやいいんだ、別に気にしないし」

「そっか、龍牙君も両親いないんや・・・」

「も、ってことはまさかはやても？」

「うん、小さい時にどっちも事故で・・・」

「そうなのか・・・」

俺は下を向いて俯く。

「なあ龍牙君、行くとこないんならここに居たらええやん！」

俺ははやての方を向き、驚きの表情をしてしまった。

「い、いや確かに行くところは無いが・・・絶対迷惑だろ・・・？」

「迷惑あらへん！シャルも別にええやろ？」

「えーと、はやてちゃんが言うなら・・・」

「ということや」

俺は悩む。だが

「・・・じゃあ、頼んでもいいか？」

「もちろんやでー!!」

満面の笑みになり、目の前でガッツポーズをするはやて。俺は・・・この少女の笑顔を守らなければいけない。だから俺はここに居なきゃいけない。俺はこの時そう思った。

第十二話「そして齒車は動き出す」（後書き）

フフフ・・・白き修羅様は今この場にはいらっしやらないゆえ、私が代理で来ました。そうですね、私は黒き道化師。とでもよんでくださればけっこうです・・・さて、真崎龍牙様ですが・・・お気づきでしょうが、転生者としての記憶が虫に喰われた様に消滅しております。そして・・・なのは様達との記憶さえも・・・フフフ、夜天主、八神はやて様との邂逅をはたした龍牙様。さてさて、これから先どうなるのでしょうか・・・フフフ

A・Sスタート第十三話「戦いへの序曲」(前書き)

A・S編に突入です。それにともない、書き方を変えました。では、第十三話どうぞ。

A・Sスタート第十三話「戦いへの序曲」

「・・・という事は、真崎は記憶喪失ってことか」

ポニーテールの女性『シグナム』が、腕を組みながら言う。

「まあな・・・けど全部忘れたって訳じゃないんだ。所々の記憶が消えてて・・・」

龍牙は頭を指でコンコンと、叩いてそう言う。

「記憶喪失か・・・辛くないのか？」

赤髪の少女『ヴィータ』がそう問いかける。

「・・・正直・・・辛い」

「「・・・」」

その一言に、沈黙が続く。

「もう！暗い話はなしや！」

はやてが場の空気を変えようとそう言う。

「龍牙君お腹減ってへん？」

確かに腹へってんな・・・と心の中で龍牙は呟く。

「ああ」

「私達はもう食べたから、龍牙君の分今から作るわ！その間にお風呂入るとき！」

はやてはそう言いキッチンへ向かった。

「・・・優しい奴なんだな、はやてって」

龍牙は小さな声で呟く。

「はやての料理はギガうまなんだぜ！！」

笑顔で言うヴィータ。

「（・・・ギガうまって何だ？）」

そう思う龍牙であった。

「ふっいい湯だな」

妙におっさんっぽく言った龍牙。

「ふう・・・アレース」

「何でしょう?」

龍牙は首にぶら下げているアレースに声をかける。

「俺の記憶が無くなった原因ってなんだろうな」

「申し訳ありません・・・私のメモリも何箇所か欠けていまして・・・」

「お前もか・・・」

龍牙は黙り込む。

「（俺の記憶が何故無くなったのかは知らない。だが幾つかは覚えていることがある。まず一つ。俺の両親は時空管理局に勤めていたことだ。それだけはしっかりと覚えている。・・・そして、母さんは事故で死に、父さんは管理局の提督。グレゼン・バークって男に殺されたって事だ。俺は管理局を許さない・・・絶対に。・・・あれ?）」

ふと疑問を浮かべる。

「・・・おかしいな、つい最近までこんな気持ちじゃなかった筈じゃないかった気がするんだが・・・」

彼は思う。自分は管理局の事をここまで恨んでいたか?こんな・・・腸が煮えくり返えそうなほど・・・。

龍牙は風呂から上がり、居間に行く。

「上がったぞ」

「あ、龍牙君！たった今できあがったところやで！」

どうやら晩飯が出来上がったようだ、料理が食卓に並べられている。どれもおいしそうなものばかりだ。

「ささっ、たとと食べて」

龍牙は椅子に座り

「じゃ、いただきます」

手を合わせて言う。まず手前の料理から箸で掴み、料理を口に運ぶ。

「・・・めっちゃうまい！」

遂叫ぶ。はやてはその言葉を聴いて、安心する。

「口に合うようでよかったわ」

「はやてはすごいな！こんなうまい料理作れるなんて！」

「フフッ、褒めても何もでえへんよ」

笑いながらそう言うはやて。するとはやては龍牙の顔をジッと見てきた。

「どうしたはやて？」

「龍牙君ようやく笑った」

「え？」

「龍牙君ずっと暗い顔して心配したんやで、けど笑顔見れて安心したわ」

龍牙は知らず内に笑みをこぼしていた。

「心配かけてごめんな」

はやては首を横に振る。

「ええって」

満面の笑みでそう言ったはやて。

「（本当に優しいんだな・・・）」

心の奥でそう感じた龍牙であった。

晩飯を食べ終え、龍牙はソファに座ってブーツとしている。龍牙の足元で青い毛並みの犬『ザフィーラ』が一欠伸をする。

「龍牙君、二階に空いてる部屋があるからそこで寝ればええよ」

「・・・ホントすまないな・・・こんな見ず知らずの俺にここまでしてくれて」

「別にええって、私がしたいからしてるだけやし。それに・・・」

「それに？」

はやては一息置き

「同じ屋根の下で暮らすやから、龍牙君も今日から家族や」

はやてのその言葉は、龍牙の心に響く。

「フフ・・・ありがとうはやて」

龍牙は微笑み、はやての瞳を真っ直ぐ見て言う。はやては、そんな龍牙の微笑を見て、顔を赤くする。

「／／／！！あ・・・う・・・ほ、ほな私はもう寝るから・・・おやすみ！」

はやては頬を赤く染めながら、自室に行った。

「家族・・・か」

龍牙はその言葉を呟き、再び笑む。

「お、龍牙飯食ったのか」

ヴィータがアイスを持って、龍牙のところに来る。

「飯の後のアイスは格別なんだぜ！特別に龍牙にもやるよ！」

ヴィータはアイスを手にとってそう言う。

「お、サンキュー」

龍牙はヴィータからアイスを受け取る。龍牙はアイスを口に運ぶ。

「確かにうまいな」

「だろ！」

龍牙とヴィータは、顔を見合わせて言う。

「……………」

龍牙は何故か、曇った表情になる。

「龍牙、どうした？」

龍牙の顔を覗き込むように言うヴィータ。

「…………もし…………俺の記憶が戻らなかったらって考えたらちょっと怖くなっただよ」

「龍牙・・・」

「・・・すまんヴィータ、暗い事言っちゃって」

ヴィータの方を向き、謝る龍牙。

「別に気にすんなって！・・・あのさ、記憶戻ればいいな」

「・・・ああ」

龍牙は頷く。するとシグナムが居間に入ってくる。

「ヴィータ行くぞ」

「・・・うん」

ヴィータは立ち上がり、シグナムの所に行く。

「どこにいくんだ？」

龍牙の質問に、シグナムが答える。

「・・・大切な用事だ」

シグナムは、僅かだが表情を曇らせる。龍牙はその様子を見て

「わかった、深くは聞かないさ」

「すまん・・・」

シグナムは龍牙に背を向け

「真崎、主はやてはお前が此処に居ることを大変喜んでいる。お前は主の側にずっと居てやってくれ」

シグナムは背を向けたままそう言う。

「・・・ああ、だけどさ」

龍牙は、ソファから立ち上がり

「お前も、ヴィータもシャルもザフィーラも、みんな家族なんだから？お前等もはやての側にずっと居てやれよ」

「・・・行つて来る」

ただそれだけを言つて、シグナムは居間から出る。そしてその後をヴィータが追いかけた。

「・・・」

龍牙は、ソファに深く腰を掛ける。

「けど・・・シグナムとヴィータはどこに行ったんだろうな？」

足元に居るザフィーラに声を掛ける。ザフィーラは首を傾ける。

「ハハッ、お前に聞いてもわからないか」

苦笑する龍牙。そして龍牙はアレースを手に取り

「・・・なあ、アレース。家族って・・・大切なもんだよね？」

「はい・・・マスター」

「父さんは復讐するなって言っただけさ・・・俺は父さんを殺した管理局を・・・絶対に許さねえ・・・絶対にだ・・・」

龍牙は拳を強く握り、肩を震わす。ザフィーラは龍牙をジーと見る。

「ん？しゃべるペンダントは珍しいか？」

ザフィーラを見て、龍牙はそう言う。

「さて・・・もう寝るかな」

龍牙は自分に宛がわれた部屋に向かった。

「・・・真崎・・・龍牙か・・・」

誰もいない部屋で、ザフィーラが呟く。

「うわあああー!!」

「ぐおおおお!!」

バタンッ!

海鳴市のオフィス街の路地裏にて、悲痛な叫び声が響く。

「・・・雑魚いな。こんなじゃ大したたしにならないと思うけど」
長柄のハンマー『グラーフアイゼン』を右手に持ち、赤いゴスロリのような服を着たヴィータが、足元に倒れている二人の魔導師を見て呟く。そして左手に持つ本を、自分の前に広げる。

「ぐ、ぐう・・・」

「があ・・・」

二人の魔導師から、小さい光りの玉が出てきた。

「お前等の魔力、『闇の書』の餌だ」

すると、闇の書と呼ばれる本が輝き、光の玉はその本に吸い込まれる。

「あああああ!!!!」

「がああああ!!!!」

魔導師は、叫び声を上げて気絶した。

「収穫はどうだ？」

ヴィータの背後に、どこかの騎士のような服を着たシグナムが立っていた。

「大したことなかったよ。所詮雑魚だからな」

「そうか・・・」

シグナムは踵を返す。

「ヴィータ、次に行くぞ」

「うん」

シグナムとヴィータは歩き始める。

「みんな家族・・・か」

ヴィータがそう呟いた。

「真崎の言葉だな」

「うん・・・龍牙ってさ・・・何か不思議だよな」

「・・・確かに。近くに居るのに、どこか遠くに居るように感じる・・・不思議な男だ」

シグナムは眼を閉じて言う。そして二人は、夜の海鳴市を飛ぶ。

「ふわ～・・・よく寝た・・・」

大きく欠伸をした後、体を伸ばす龍牙。

「・・・あ、そっか・・・俺はやての家に居るんだっとな」

ふと時計を見る龍牙。時計の針は、昼の12時だった。

「12時か～・・・って寝すぎだろ俺!!」

そう声を上げ、ベットから降り居間へ向かった。

「おはよう!!」

滑り込むように居間に入ってきた龍牙。

「・・・もうこんなにちはの時間やで」

ジト目で龍牙を見て言うはやて。

「ハハハ・・・」

龍牙は空笑いする。

「そうや、いつまでもその服着てるわけにもいかんやろつ思て、龍牙君に似合うような服買ってきたで」

はやては、ソファーにある袋を指差して言う。

「まじか！ありがとうはやて！」

礼を言い、袋の中の服を出す。取り出した服は、赤系統の服だった。

「龍牙君、赤に合いそうだなゝって思て買ったんよ」

「髪が赤いからか？」と呟く龍牙。

「私今から図書館行くから、お昼はテーブルの上に置いてるから食べてな」

「ああ、わかった」

「シャル」

「はい」

はやては、シャルを呼ぶ。

「ほな行つて来るわ」

「行つてきますね」

「おう、いつてらっしゃい」

はやてとシャルマルは、居間を後にする。

「さて、飯食うか」

テーブルに座る龍牙。「おおーうまー!」と龍牙が叫んでいたのは、別の話である。

「龍牙君・・・どうしちゃったんだろう・・・」

空いている席を見て、アリシアが呟く。

「昨日・・・帰ってきてないんだよね」

「うん・・・」

フェイトがそう言つと、なのはが頷く。

「早く帰ってくればいいね・・・」

「そうだね・・・」

なのは達の場の空気がとても暗い。なのはとフェイト、そしてアリシアは昨日一晩中魔法を使って龍牙を探した。だが結局見つからなかった。

「・・・リュウ君」

彼の名を呟くのは。そんななのはの手を、フェイトが優しく握る。

「龍牙なら・・・絶対大丈夫だよ」

「うん・・・そうだよね！」

なのは達の表情が、幾分明るくなる。だが、彼女達が元に戻るのは・・・後の事だろう。

夕方4時。龍牙は居間で新聞を読んでいる。彼は一つ疑問に思っている

「俺って何でこんな感じ読めるんだ？」

自分は小学生の筈なのに、何故ここまで難しい漢字まで読めるんだろう？と。因みに、彼の見ている漢字は、薔薇バラと林檎りんごである。

「もしかして俺って記憶失う前って・・・!」

龍牙は立ち上がり

「ものすごく天才だったかもしれない!!」

それはない。

「・・・・・・・・」

すると、図書館に行っていたはやてとシャルが帰宅した。

「ただいま」

「お、おかえりはやて」

「どうしたんや龍牙君？新聞片手に拳握って」

「え？い、いや・・・何でもない・・・」

少し恥ずかしくなり、龍牙は再び座る。

「あれ？ヴィータ達は？」

「ヴィータは遊びに出かけてるぞ、ザフィーラはその付き添いでな。んでシグナムはヴィータ達を迎えにいった」

「そつかゝほな龍牙君、晩御飯の支度するから手伝ってくれへん？」

「わかった」

「えゝと私は？」

シャルはそう尋ねる。

「シャルは休んでてええよ」

「わかりました」

自室へ行ったシャル。そして龍牙とはやては、キッチンへ行った。

「どうだ見つかったか？」

海鳴市の市街地の上空で、ザフィーラがヴィータにそう聞く。

「いるような・・・いないような・・・昨日出てきた三人の妙に大きい魔力反応・・・あいつ等が捕まれば、一気に60ページはいきそうなんだけど・・・」

「別れて探そう・・・闇の書は預ける」

「オッケー。ザフィーラ、あんたもしっかり探してよ？」

「心得た」

ザフィーラはそう言い、どこかへ飛び去っていった。

ヴィータはアイゼンを振る。

キュイイイイイン！！

それと同時にヴィータの足元に、赤いの魔方阵が展開される。

「封鎖領域、展開」

「Gefangnis der Magie」

紫の球型の結界がヴィータを中心に広がってゆく。すると空間が切り離され、街から人が次々と消え、魔力を持つ者だけが取り残された。

「魔力反応、大物みつけ！いくよ、グラフアイゼン！」

「Jawohl」

ヴィータは、大きな魔力を持つ者の所へ向かった。

「リュウ君……どこに行っただろう……」

自室に居たなのは、小さな声で呟く。

「!？」

すると、突然海鳴市に結界が張られる。

「結界!？」

なのは立ち上がる。

「対象、高速で接近中」

レイジングハートが、警告する。

「近づいてきてる!?!?こっちに!?!？」

なのは急いで、家を出た。

とあるビルの屋上で、なのはが、こちらに向かって来る者を待つ。

ギューウ!!

空から、魔力の球が、なのは目掛けて飛んできた。

「くっ!!」

なのはは、左手を掲げプロテクションを張り、魔力球を防ぐ。

キイイイイイン！！

「うつー！！」

「はああああ！！」

「えっ！？」

魔力球の反対側から、ヴィータがグラーファイゼンを振りかぶる。
なのはは咄嗟に、右手でプロテクションを張る。

ギイイイイイイン！！！！

「キャアー！！」

あまりの力になのはは耐え切れず、吹き飛ばされビルから落下する。
ヴィータはそれを追う。

「うつつ、レイジングハート！」

「Stand by ready set up」

なのはは落下しつつ、レイジングハートを起動させ、バリアジャケッ
ットに身を包む。

「そういえばな、今日図書館で友達で来たんだよ！」

グツグツ鍋を煮込みながら、はやては言う。

「へえ、どんな奴だ？」

隣で野菜をザクザクと切る龍牙が、そう聞く。

「月村すずかつて子なんよ」

その名前を聞いて、龍牙の手が止まる。

「月村・・・すずか？」

「そやで」

「・・・・・・・・」

龍牙は、その名前を頭の中でリピートする。彼は何とも言えない違和感を感じる。その瞬間、突然結界が張られた。

「!？」

「（マスター、街に結界が張られました）」

アレースが念話で言う。

「（わかった・・・）そういえば、ヴィータ達遅いな・・・もしかして迷ってるのかな？・・・心配だからちよつと行って来る」

「わかったで、龍牙君も迷わへんようにな」

「ああ」

龍牙は、小走りで居間を出て行った。

街の中を走る龍牙。

「人が居ない・・・」

龍牙は周りを見渡すが、人一人として居なかった。

「ヴィータ達は大丈夫か？」

走りながら呟く龍牙。

「近くに、生態反応探知。ヴィータ様です」

「何だと!？」

「そして、ヴィータ様の近くに強力な魔力反応確認」

「くっ！・・・仕方がない・・・アレース、セットアップ！」

「御意！」

紅いバリアジャケットに身を包み、龍牙は駆け抜ける。

バコオオン！！

爆煙の中から、なのはが飛び出してくる。

「いきなり襲いかかれる覚えはないんだけど！」

ヴィータは、なのはを攻撃しようと接近する。

「どこの子！？一体何でこんな事をするの！？」

だがヴィータは、なのはの言葉を無視し

「くらえー！ー！！」

なのはにグラーファイゼンを振り下ろす。

「Flash Move」

なのはは、それを軽くかわす。

「ちっ！」

思わずヴィータは舌打ちをする。

「Shooting mode」

レイジングハートの形状が変わる。なのはは、レイジングハートをヴィータに向ける。魔力を集中する。

「話を・・・！」

「Divine・・・」

「っ！？」

「聞いてってばー！！」

「Buster」

ドオオオオウ！！

レイジングハートから、桃色の砲撃が放たれる。しかし、その砲撃の前に紅い何かが現れた。そして

「おりゃあっ！！」

ゴオオオウ！！！！

ディバインバスターは紅い何かに、地面に向かって弾かれる。

「えっ！？そ、そんな・・・！？」

なのはは驚愕する。ディバインバスターを弾いたのは他でもない・

「誰だがしらねえけどよ・・・家族を傷つけるのは・・・絶対に許さねえ！！」

紅い甲冑を身に纏った獣を思わせる外見に、白い髪をたなびかせる一人の男。真崎龍牙だったのだから・・・。

A・Sスタート第十三話「戦いへの序曲」(後書き)

なのはの前に姿を現した龍牙。だがそれは彼女の望まぬ・・・敵としてであつた。

次回「望まれぬ戦い」お楽しみに。

第十四話「望まれぬ戦い。前編」(前書き)

IKAさん、コラボありがとうございます！さて今回は、原作でいう、一話目に当たります。都合で前編、後編に分けました。ではどうぞ

第十四話「望まれぬ戦い。前編」

「ヴィータ、大丈夫か？」

龍牙は、背後にいるヴィータの安否を確認する。

「う、うん…ってその声！まさか龍牙か！？」

「ああ」

頷く龍牙。そして龍牙は、なのはを視線を捉える。

「そんな…？なんで…なんでリュウ君が！？」

なのはが叫ぶ。

「…お前…俺を知ってるのか…？」

「なに言ってるの！？私だよ！なのはだよ！」

「なの…は？…があ！！」

龍牙は激しい頭痛に襲われ、膝をつく。

「リュウク「あたしを無視すんじゃないー！！」！？」

ヴィータは、グラーフアイゼンを振る。

「グラーフアイゼン！カートリッジロード！！」

「Explosion」

グラーフアイゼンの排熱口から煙りが出る。するとグラーフアイゼンの形状が変わり、片側に噴射口、その反対側はピック状に変化した。

「龍牙、離れる！！」

龍牙はヴィータの前から離れる。

「ラケーテン・・・」

噴射口から火が吹き、ヴィータは回転する。そしてその勢いのまま、なのはに向かう。

「うおおお！！」

グラーフアイゼンを振る。なのははプロクテクションを張る。

ピキイイン！！

「えっ！？」

ヴィータの一撃はプロテクションを破り、レイジングハートにひびを入れる。

「ハンマァー！！！！！！」

グウンー!!

「きゃああー!!」

なのははビルの中に吹き飛ばされた。

「ケホツケホツ・・・」

「でええいい!!」

「!?!」

ヴィータはなのはにグラーファイゼンを再び振る。

「Protection」

ボロボロになったレイジングハートが、なのはを守ろうとプロクテクションを張る。

ギイイイ!!!

「う、ううー!!」

「この・・・ぶち抜けええ!!」

「Roger(了解)」

パアアアン!!!

プロテクションは砕け、グラーファイゼンなのはバリアジャ
ケットに当たる。

「あああ！！」

なのはは壁に激突する。

「はあ・・・はあ・・・」

カシュン！

ヴィータがグラーファイゼンを振ると、二個の薬莢が出る。そして、
ヴィータはなのはに止めを刺そうと近づく。

「手こずらせやがって・・・けど、もう終わりだ」

ヴィータは、アイゼンを振り上げる。

「（こんなので・・・終わり？嫌だ・・・助けてよあ・・・リュウ
君・・・）」

なのはは、外に居る龍牙を見る。そして・・・ヴィータはアイゼン
を振る。

ガキイン！！

黒いデバイスを持った者が、アイゼンを受けとめた。金髪の少女、
フェイトだ。

「ごめんなのは・・・遅くなった」

「ユーノ・・・君」

ユーノが、なのはの肩に手を置く。

「ちっ！仲間か！？」

「・・・友達だ」

ヴィータはフェイトから距離をとる。フェイトは、ヴィータにバルディシュを向け

「Scythe form」

バルディシュの形状は変形し、鎌状の魔力刃を発生させる。

「何でなのはを？」

フェイトはそう問いかけるが

「うるせえ！誰が答えるか！！」

アイゼンを向けてそう言うヴィータ。

「なら・・・嫌でも聞き出すから」

フェイトはヴィータに一気に近づく。

「なっ！？」

ヴィータはその速度を捉えきれなかった。フェイトはバルディッシュで、ヴィータを斬りつけようとするが

「はぁあ!!」

「っ!？」

そこに龍牙が現れる。フェイト目掛け拳を振るが、フェイトはそれをかわす。

「かわしたか…」

フェイトとユーノは驚愕する。

「そん・・・な・・・何で龍牙が・・・!？」

「どうしてなのはを襲った子と一緒に!？」

二人のその言葉に、龍牙は揺らぐ。

「お前等も・・・俺を知ってるのか・・・？」

「何言ってるんだよ!僕達の事を忘れたの!？」

「（何でだ・・・何で俺はこいつ等を見るとこんなにも変な気持ちになるんだ・・・）」

龍牙は、何ともいえない違和感に襲われる。

「くっ！ヴィータ、一旦外に出るぞ！」

「う、うん！」

龍牙とヴィータは、ビルの中から出た。

「リュウ君！あっ……」

なのはは、ガクンと倒れる。

「ユーノ！なのはの手当てお願い！」

「わかった！」

フェイトも龍牙達の後を追ひ、ビルから出た。

「なのは、動かないで」

ユーノはなのはの傷を治癒していく。

「本当にごめん……管理局に龍牙の搜索を頼みに、プレシアさん達と行って来たんだ。まさか帰ってきたら龍牙となのはがこんなことになってると思わなくて……」

「そう……だったんだ……」

「けど……何で龍牙が……」

「……リュウ君」

弱弱しく龍牙の名前を呟くのは。

「ここまで来ればいいだろう」

龍牙とヴィータは、街の上空で止まる。

「・・・来たか」

龍牙の視線の先には、フェイトが居た。

「…ヴィータ、下がってる」

「わかった…」

ヴィータは頷き、龍牙の後方に行く。

「行くぞ…！」

龍牙は、フェイトを迎え撃とうと構える。

なのは達の敵となった龍牙。彼は記憶を取り戻すのだろうか…後編に続く。

第十四話「望まれぬ戦い。前編」(後書き)

後編は近日投稿します。楽しみに

第十五話「望まれぬ戦い。後編」(前書き)

更新しました！今回、龍牙が暴走します。では、十五話どうぞ。

第十五話「望まれぬ戦い。後編」

「行くぞ!!」

龍牙は、フェイトに近づき

「はああ!!」

拳を振るが、軽くかわされる。

「龍牙!!」

フェイトは龍牙に呼びかけるが、龍牙は攻撃の手を止めない。

「いでよ、覇龍!!」

グオオオオオオ!!

右手から、覇龍を放つ。

「くっ!!」

フェイトは覇龍を避けようとするが、覇龍はフェイトを追尾する。
だがそこに、アルフとリニスが現れ

「でりゃああ!!」

「はあ!!」

ギイン！！

二人でプロテクションを張り、覇龍を受け止めた。

「ちっ・・・まだ仲間がいたのか・・・」

龍牙は思わず舌打ちをする。

「フェイト大丈夫！？」

「うん、大丈夫だよアルフ」

「しかし・・・どういことですか？何故・・・龍牙君が・・・」

リニスはフェイトにそう聞くが

「わからない・・・まるで私達の事を知らないような・・・」

「私達を知らない？それは一体・・・！？来ます！！」

「おおお！！」

龍牙が再び襲い掛かるが、フェイト達は散り散りになり龍牙から距離をとる。

「（散り散りになったか・・・一番厄介そうなのは・・・あいつだ！！）」

リニスを標的にし、龍牙は突っ込む

「やはり私の方に来ましたか・・・計算通りです！」

ブウン！！

「何っ！？」

突然龍牙の足元に魔法陣が展開され、龍牙の両足はバインドにかけられる。

「これは設置型のバインドです。龍牙君が私の方に来るのは大体予想できましたから、即座に設置させてもらいました」

「・・・だが、まだ腕がうご・・・！？」

ブウン！

龍牙の腕は、アルフによってバインドにかけられる。

「龍牙、動きが単純過ぎないかい？」

「くっ・・・」

「じゃあさつさとっ」「うおおおお！！」「！？」

ドコオオ！！

「うああ！！」

アルフの目の前に浅黒い肌の大柄の男性。ザフィーラが現れ、アルフを蹴り飛ばす。

「リニス！！でええい！！」！！」

ゴアアン！！

「くううう！！」

ヴィータが、リニスをアイゼンで吹き飛ばす。

「簡単に捕まるなんて、情けないんじゃないか？龍牙」

バインドにかけられている龍牙に、意地の悪そうに言うヴィータ。

「う・・・なんも言えねえ・・・」

「龍牙？お前は真崎龍牙なのか？」

「ああ」

ザフィーラの質問に、龍牙は頷いて言う。

「アルフ！リニス！」

フェイトが動こうとした時、シグナムがフェイトの前に現れる。

「あなたは！？」

「・・・レヴァンティン！カートリッジロードー！！」

「Explosion！！」

シグナムのデバイス。『レヴァンティン』の排熱口から煙が出る。するとレヴァンティンの刀身に、紅蓮の炎が纏う。

「紫電一閃!!」

シグナムはフェイトに斬りかかる。フェイトはバルディッシュで防ごうとするが

ズバァァン!!

「!?!」

バルディッシュは、レヴァンティンによって切り裂かれた。

「うおおお!!」

もう一度攻撃を加えようとするシグナム。だが

「ブレイズキャノン!!」

ゴオオオオウ!!

「ッ!!」

突然の砲撃に、シグナムはフェイトから距離をとり、かわす。シグナムは砲撃をした方を見る。そこにはデバイスを構えたクロノが立っていた。

「クロ助遅い!!」

「誰がクロ助だ!!」

クロノはコホンと咳払いをし

「時空管理局執務官、クロノ・ハラOWNだ!大人しく武器を捨てて投降してもらおう!」

クロノはシグナムにデバイスを向けて言う。

「クツ・・・管理局か・・・」

シグナムは苦虫を噛み潰したような表情をする。・・・だが、シグナムよりも早く管理局(、)、という単語に龍牙はいち早く反応する。

「管理局・・・だと・・・」

その瞬間、龍牙は怒りの感情があふれ出した。そして

「うおおおおおおお!!!!!!」

バキイン!!!!!!

「「「「!?!?!」」」」

龍牙は吼え、バインドを力任せに破壊した。

「はあああああ!!!!!!」

「なっ!?!」

バキィィ!!

「ぐあああ!!」

クロノの眼前に、龍牙が突然現れ、右の拳でクロノは落とされた。

「クロ助!!」

アルフはクロノの名を叫ぶが、クロノは気絶しておりそのまま落ちていく。

「おおおおお!!!!!!」

ドコオオ!!

「あぐっ!!」

龍牙は一気にアルフに詰め寄り、踵落としてクロノと同じくアルフを落とす。

「龍牙君!やめ!!」でりゃあああ!!!!」

ドゴオ!!

「うつうつ!!」

リスは腹に龍牙の拳をくらい、吹き飛ばされる。そして龍牙はゆっくりとフェイトの方を向く。

「りゅ、龍牙・・・」

フェイトはそう呟く。

「はああ!!」

まるで獣が獲物に襲い掛かるように、龍牙はフェイトに近づく。

「龍牙!!」

ユーノが龍牙の前に行き、止めようとするが

「邪魔だああ!!!!」

バキヤアア!!

「うつ!!」

ユーノはもろに裏拳を受け、ビルに激突した。龍牙はフェイトに殴りかかるうとする。

「うおおお「やめてえ!!」!!」

龍牙は拳を止める。そして声をした方を向く。視線の先には、ビルの屋上に涙を流しながら龍牙の事を見つめるのが居た。

「リュウ君もうやめて!!どうして・・・どうしてリュウ君がフェイトちゃん達を傷つけなきゃいけないの!?!」

「あ……があ……」

龍牙はフェイトから離れる。

「がああ……あああ!!!!!!」

龍牙は再び頭痛に襲われ、悲痛の叫びを上げる。

「リュウ君!!っ!?!?!?!」

なのはは胸の辺りに、異質な違和感を感じた。視線を下げるとなのはの胸の辺りに、人間の手がなのはの胸を貫き、リンカーコアを露出させた。リンカーコアの輝きは徐々に小さくなっていく。

「リュウ……君……」

なのはは力が抜けたように、バタンと倒れる。

「なのは!?!」

フェイトが、なのはのもとに向かう。

「ぜえ……ぜえ……」

龍牙は痛みに耐え、肩で息をしていた。すると龍牙の頭の中に、声が聞こえてくる。

……何故……なのはを助けなかった?

「（何だよ・・・あいつは・・・敵だろ？」

・・・違う・・・なのは、お前の家族だ

「（家族・・・だと？俺はあいつを知らない！）」

・・・知っている筈だ。だってお前は・・・

「（やめろ・・・何でだ・・・何であいつが倒れた瞬間・・・こんなに胸が苦しくなる・・・何でだ・・・）」

龍牙は天を見上げ

「があああああああ！！！！！！！！！！」

グオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

龍牙のバリアジャケットの色が一瞬だけ藍色になり、天に向かって巨大な覇気を放出した。その覇気は結界に当たり、結界は破られる。

「結界が！？」

（ヴィータちゃん、ザフィーラ、シグナム！早く逃げましょう！集まる場所はいつものところで！）

シャマルから念話が送られる。

（わかった！）

（承知した）

（待ってくれ！龍牙が！！）

ヴィータは、膝をついている龍牙を見る。

（・・・真崎は私が連れて行く。ヴィータ達は散り散りになって逃げろ！）

シグナムのその言葉に、ヴィータ達は動く。

「しっかりしろ、真崎」

シグナムは龍牙の肩に手をやる。

「シグナム・・・か？」

「ああ・・・逃げるぞ」

龍牙は力無く頷く。そしてシグナムは龍牙を連れ、どこかへ飛び去っていった。

フェイト達は、シグナム達が逃げていくのを黙って見ているしかなかった・・・。。。

第十五話「望まれぬ戦い。後編」（後書き）

後編終わりました。結界を破壊したのはなのはのディバインバスターではなく、龍牙の覇気にしてみました。感想、アンケートどしどしお待ちしています。

ちよつと息抜き番外編『王様ゲーム。新たなフラグ?』(前書き)

ども、本編より先にこんなネタが思いついたので書いてみました。

ちよつと息抜き番外編『王様ゲーム。新たなフラグ?』

龍牙が八神家に来て数日後のこと・・・

「突然やけど、王様ゲームをするで!」

突然のはやての提案に、龍牙、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラが首を傾げる。

「王様ゲーム?何ですかそれは?」

シグナムがはやてにそう聞く。

「王様ゲームってのはな、王様一人くじで決めて、王様は、○番が○で○をする、○番と○番が○をするとか色々命令出来るんや」

「なるほど・・・」

「おもしろそうですね」

「やろうぜ、やろうぜ!」

シャマルとヴィータは、断然乗り気のようにうた。だが龍牙とザフィーラは大して興味を示していない様子だ。

「龍牙君は強制参加やで!」

「はい!?まじすか!?!」

「まじやで」

悪い笑みを浮かべるはやて。そしてはやては、更なる提案をする。

「因みに、王様の命令を出来ない人は・・・今日の晩御飯なしや！」

「くくくくえつゝ!?」「くくく」

ザフィーラを抜かした四人が、息びつたりに叫ぶ。

「じゃ始めるで」

はやては何処からともなく、バラエティ番組で使われているくじ箱を出す。

「私からいきますね」

シヤマルがくじを取り出す。

「次はアタシだ！」

次にヴィータがくじを取る。

「では、次は私が・・・」

シグナムがくじを取る。

「・・・俺か」

龍牙は少々ダルげにくじを取る。

「最後は私やね」

最後にはやてがくじを取り出した。

「・・・んで？誰が王様なんだ？」

「フッフッフ・・・私やで!!」

王、と書かれたくじを見せる。

「ほな早速命令するで・・・2番の人が3番の人とポッ○ーゲームやで！」

「何故にポツキ○ーゲーム？」

龍牙の問いに、はやては

「王様ゲームにポッ○ーゲームはつき物やろ」

はやてはそう言う。

「誰が2番と3番なんや？」

すると、腕をわなわなしながら龍牙が

「お、俺が2番だ・・・」

「アタシが3番だ」

ヴィータがくじを手を持ちながら言う。

「ところではやて、ポッ〇ーゲームって?」

「ヴィータ、耳かしてな」

チヨイチヨイとヴィータを手招きし、ヴィータの耳元でボソボソと言うはやて。

「えっ!?!???まじか!そんなことしないといけないのか!?!」

「そやで」

ヴィータは顔を赤くしながら、はやてにそう言う。そしてはやては頷く。

「じゃ早速始めてな」

はやてからポッ〇ーを一本手渡す。

「そ、それじゃ・・・」

龍牙はポツキーの端を咥える。

「う・・・う・・・」

ヴィータも端を咥える。正直ポッ〇ーの長さはあまりないので、龍牙とヴィータの顔が近い。

「ポッ〇ーゲームはじめ」

開始の言葉に、龍牙とヴィータはポッ〇ーを食べ始める。

「（龍牙の顔がだんだん近づいて・・・）」

ヴィータは知らず内に顔を赤らめていく。すると、龍牙はヴィータに念話を送る。

（ヴィータの眠って綺麗だな、なんかずっと見ていたいな）

（！？イキナリな言ってんだ！？）

その瞬間

パキッ

ポッ〇ーが折れた。

「あらゝ折れてもったゝ」

確かにポッ〇ーは折れたが、ヴィータ以外気づいていなかった。ポッ〇ーが折れる瞬間、龍牙の唇とヴィータの唇が僅かに重なったことを。

「~~~~／／／」

ヴィータは居間から猛スピードで出て行った。

「？どうしたんだヴィータは？」

「何でやる？」

一同何故ヴィータが居間を出て行ったのか全くわからない様子だった。

そして、ヴィータは自分の部屋のベットで悶えている。そしてはやてに買ってもらったぬいぐるみを抱き

「・・・初めてだな、眼が綺麗って言われたの」

ヴィータはそう呟く。するとまた顔を赤くする。

「うゝゝ／＼／＼何で龍牙のことを考えるとこんなに顔をが熱くなるんだよゝゝ」

ヴィータは龍牙の事を考えながらそう呟いた。

それから数日間。龍牙がヴィータに話しかけようとしても、ヴィータは顔を赤くして直ぐに逃げてしまっていた。

「・・・俺、嫌われたのかな・・・はあ・・・」

と的外れなことを呟いていたのは、別の話である。

ちよつと息抜き番外編『王様ゲーム。新たなフラグ?』(後書き)

龍牙のフラグ無自覚確定の回wシグナム、ヴィータ、シャマルはヒロイン候補なので、一番先にヴィータにしてみました。近日十六話を投稿しますので、お楽しみに。

第十六話「龍牙と守護騎士達」(前書き)

第十六話投稿しました。今回は抜け目のない龍牙の回です。ではどうぞ

第十六話「龍牙と守護騎士達」

「遅いで！」

と八神家に帰宅した、龍牙、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフイーラがはやてに怒られる。

「すまん」

「申し訳ありませぬ…」

「ごめん…」

「ごめんなさい…」

「…申し訳ありません」

龍牙達はそれぞれ頭を下げ、謝る。

「…まあ、みんなちゃんと帰ってきたことやし、大目に見るで！次から帰りが遅くなりそうだったらちゃんと連絡すること。ええな？」

「……はい（おう）」「……」

「ほな、晩御飯食べよか」

皆、居間へ向かった。

そして晩御飯を食べ終え、皆風呂に入り、それぞれの時間を過ごしていた。

「私先に寝るからな、おやすみ」

「ああおやすみ、はやて」

はやてはそう言うと、車椅子の車両を動かして自分の部屋に行った。

「……」

龍牙はソファーに座り、黙り込む。すると居間に、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが入ってきた。

「真崎…話がある」

「…わかった。とりあえず防音の結界張るか。アレース」

「御意」

龍牙は結界を張った。

「それはデバイスだったのか…魔力の反応がないから只のペンダントかと思ったんだが」

「とりあえず紹介しとくか…アレース挨拶」

「マスターのデバイス、アレースと申します。以後お見知りおきを」

アレースは自己紹介をした。

「アレースは魔力を持ってない俺にしか使えない奴なんだ」

「「「!?」」」

シグナム達は驚いた表情をする

「魔力を持ってないだと？なら何故あの魔導士達と戦えたのだ？」

シグナムの問いに、龍牙は答える。

「俺は魔力を持たない代わりに、覇気つての持ってた。それを使って飛んだり、戦うための力に変えたりするんだ」

龍牙はそう言う。

「だからバリアジャケットを纏っていても魔力を感じなかったのね」

「そういうことだ。… あるいは何でシグナム達はあんな所に居たんだ？」

龍牙がそう聞くと、シグナム達は沈黙する。

「… 主を助けるためだ」

沈黙を破ったのは、ザフィーラのように。

「ザフィーラ！」

「別に構わんだろうシグナム…龍牙はもうすでに我々に関わりを持つてしまった。教えておいたほうが良いだろう」

「う、うむ・・・」

ザフィーラの提案に、シグナムは渋々了承した。

「それでは・・・話すでしょう」

ザフィーラは自分達がしている事を全て話した。はやての病気は魔法のないこの世界では直らず、このままだと死んでしまうこと、そしてそれを防ぐ為にシグナム達は闇の書という魔導書を完成させ、はやての命を救うこと、その為に色んな生物の魔力の源。リンカーコアから魔力を蒐集していること、全てを龍牙に話した。

「主の死を回避する為に、我等は闇の書の完成を目指しているのだ・・・」

「そうだったんだ・・・」

龍牙は、暗い表情で言う。するとシグナムが

「真崎・・・一つ質問がある」

「何だ？」

「あの魔導師達はどうかやらお前の事知っている様子だったな。まさ

かだと思うが・・・お前が記憶を無くす前は管理局の人間だったのではないのか？」

シグナムはそう言う。

「シグナム！！ちょっとまて」「ふざけるな」「えっ？」

龍牙は立ち上がり、座っているシグナムの胸倉を掴む。

「俺が管理局の人間だと！？ふざけんじゃねえ！！管理局は・・・俺の・・・俺の父さんを！！」

だが龍牙はそこで言葉を止めた。

「ちっ！！」

龍牙は舌打ちをしてシグナムを離し、居間から出て行った。居間に残されていたのは、気まずい空気になった守護騎士達だ。

「何だっただんだ一体・・・」

「・・・シグナム、先程の言動は軽率すぎたな」

「なに？」

シグナムはザフィーラの方を向く。

「龍牙は少なくとも管理局の人間ではないだろう。むしろ・・・恨んでいる方だ」

「恨んでいる？それはどういうことだ？」

「・・・本人に聞け。あと、龍牙に謝っておけ」

ザフィーラはそう言つと寝転び、寝始めた。

「・・・・・・・・」

シグナムは黙り込んだ。未だにこの場には、気まずい空気が流れていた。

時空管理局本部のデバイス修復室で、アルフ、リニス、ユーノ、フエイト、クロノが居た。

「バルディッシュ・・・」

フエイトが所々にひびがあり、装置に入っているバルディッシュを見て呟く。その横にはレイジングハートがあった。

「破損状況は・・・あまり良くないですね・・・今自動修復をしています。基礎構造の修復が終わったら一度再起動して部品交換をしないと・・・」

リニスはモニターを見てそう言う。

「なのは大丈夫かな・・・？」

「今は医務室で休んでいるけど・・・龍牙のことが相当ショックだったようだね・・・」

クロノは、龍牙に殴られたところをさすりながら言う。

「龍牙・・・本当にどうしたんだろうね」

「・・・なのは所に行つて来る」

フェイトは部屋を後にした。

「・・・」

医務室で一人、なのははベットに体を倒していた。

「リュウ君・・・」

彼の名を呟く。自分の家族で、自分が恋をした少年。なのはにとって、その龍牙が敵という事実に未だ信じられないようだ。

「なのは」

フェイトが医務室の入り口に立っていた。

「フェイトちゃん・・・」

フェイトはなのはに近づく。なのはは、体を起こす。

「なのは、体は大丈夫？」

「うん・・・フェイトちゃん？」

「私も大丈夫・・・」

暫しの沈黙が続く。すると、医務室にリニスが入ってきた。

「フェイト、なのはちゃん、あなた達に渡しておきたいものがあります」

「「えっ？」」

リニスは、青くて丸い宝石を取り出す。

「これは？」

「龍牙君が自分に何かあったときに、あなた達に渡してほしいと言っていました」

フェイトに宝石を渡す。

「では私はこれで」

リニスは医務室から出て行った。

「何だろうこれ・・・!？」

ブウン

宝石は光りだし、映像を流し始めた。その映像には、龍牙が映っていた。

「龍牙（リュウ君）！？」

「あーコホン・・・あれ？ちゃんと映ってるかな？・・・まあいいや、なのは、フェイト。お前等がこの映像を見てるってことは、俺に何かがあっってお前等の側にいれなくなってしまったんだろう・・・すまない・・・」

「龍牙（リュウ君）・・・」

「・・・あとこの映像を見ているころには、お前等は闇の書の守護騎士達と戦い、そしてデバイスを壊されただろうな」

「「！？」」

「そこでだ、リニスに頼んで直してもらうついでに、レイジングハートとバルディッシュにカートリッジシステムつてのを付けてもらえ。カートリッジシステムは、守護騎士達のデバイスにも搭載されている。毒をもって毒を制すだ。だがカートリッジシステムは使用者の身体への負担が大きい・・・お前等が本当に強くなりたいのなら・・・カートリッジシステムを付けろ・・・そして最後に」

龍牙は一息置き

「なにがあっても、俺はお前等の所に絶対に帰ってくる！！それだ

けを忘れないで欲しい。じゃこれで映像は終わりだ・・・」

と龍牙は締めくくる。

『あ、そうだ、この機器は映像が終わったら自動的に壊れる仕組みだから。そこところよろしく』

「「えっ!?!」」

ボンッ!!

宝石は煙を上げて碎け散った。煙がなのは達を包む。

「ケホッ、ケホッ・・・うゝリュウ君ひどいの」

「けほっ・・・もう龍牙ったら・・・」

なのはとフェイトは咳き込みながらそう言う。

「・・・フェイトちゃん、私・・・信じる。龍牙君が戻ってくるのを!」

「うん!私も信じる!」

なのはとフェイトは顔を見合わせて笑顔で言う。

そして翌朝

「・・・朝か」

龍牙はゆっくりと起き上がる。

「ふあゝ・・・」

とりあえず龍牙はベットから降り、居間へと赴いた。

龍牙が居間に入る。居間にはシャマルとシグナムがソファに座っており、シグナムの足元にザフィーラは寝転がっていて、ヴィータはテレビを見ていた。どうやらは yet はまだ起きていないようだ。

「シグナム、ザフィーラ、ヴィータ、シャマル、おはよう」

「あ、ああ、おはよう・・・」

「・・・おはよう」

「おう、龍牙おはよう」

「おはようございます」

それぞれ挨拶をかわすと、シグナムの隣に龍牙が座る。

「・・・」

「・・・」

シグナムと龍牙は黙ったままだ。

「・・・その真崎」

「なんだ？」

シグナムは龍牙の方を向き

「昨日はすまなかった・・・」

頭を下げるシグナム。すると龍牙は

「別に気にしちゃいないさ・・・俺の方こそごめん・・・ついカッとなっちゃってさ」

龍牙も謝罪の言葉を言う。

「・・・それで真崎・・・何故お前がそこまで管理局を恨んでいるのか・・・教えてはくれないか？」

シグナムの言葉に、ザフィーラ、ヴィータ、シャマルが龍牙の方を見る。

「龍牙、それアタシも聞きたい」

「私事です」

「頼む・・・教えてくれ・・・」

シグナム達がそう言う。

「（あれを・・・俺は教えていいのか？・・・）」

シグナムのまっすぐな瞳が龍牙を悩ませる。そして

「・・・わかった・・・後で俺の部屋に來い」

と龍牙は言う。そして守護騎士達は知るだろう・・・彼の背負い込むものの一つを・・・

第十六話「龍牙と守護騎士達」（後書き）

次回、龍牙がついに他の人間に、靱の死について明かします。それが見て守護騎士達がどう思うのか・・・そこに注目してください。

第十七話「背負いし者の決意」(前書き)

十七話更新しました。今回は完全に龍牙と守護達との回です。あと短いですが・・・ではどうぞ

第十七話「背負いし者の決意」

龍牙の部屋で、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラはアレスの映している映像を見ている。

「さようならだ龍牙、強く生きろ、そして自分の信じた道を突き進め」

映像の中の勅が、力強く言う。そして龍牙は映像を止めた。

「・・・これが・・・俺が管理局を恨む理由だ・・・」

龍牙は暗い表情で言う。

「まさか・・・こんなことが・・・」

シグナムは腕組みをし、そう呟き

「ひつぐ・・・こんなの・・・酷すぎるじゃねえか！・・・つく！」

「・・・龍牙君が・・・可哀想すぎます・・・」

ヴィータは泣きじゃくり、シャマルも瞳に涙を溜めている。

「グレゼンという男は・・・外道だな・・・」

ザフィーラはギリツと齒を食いしばる。

「真崎・・・済まない、お前を疑ったりして・・・」

「気にすんな。俺もお前の立場なら同じ事言っただらうぜ」

龍牙は笑いながら言う。直ぐに表情を変え

「それに・・・これはお前等が悲しむことじゃないんだぞ？」

「「「えっ？」」」

「・・・これは俺の問題だ・・・だから、お前等が悲しむ必要は・・・」

パン！

「！？」

龍牙は、頬を叩かれた。シグナム達は驚く。何故なら、龍牙を叩いたのはあの温厚なシャマルだからだ。

「シャマル・・・」

「龍牙君・・・そんな・・・そんな寂しい事言わないでください！」

シャマルは言葉を続ける。

「私達と龍牙君は家族です！家族は、楽しいこと、悲しいことを共感し合えるものなんです！だから・・・龍牙君はもっと私達の事を

頼ってください！！そうすれば・・・少しは龍牙君の悲しみも和らぐ筈です！！」

涙を流しながら叫ぶシャマル。

「・・・けど・・・俺は・・・」

ガバ！

ヴィータが龍牙に抱きつく

「ヴィ、ヴィータ？」

「龍牙・・・アタシは何かあっても龍牙の味方だからな！！」

ヴィータは涙声でそう言う。

「ヴィータの言う通りだ。真崎、お前はあの時言っただろう？『みんな家族』だと・・・」

シグナムはまっすぐな表情で言う。

「・・・龍牙、我等ヴォルケンリッターはお前の味方だ・・・それを忘れるな」

ザフィーラは狼の姿なので表情は伺えないが、恐らくシグナムと同じく、まっすぐな表情をしているだろう。

「・・・ありがとう・・・みんな・・・」

龍牙は瞳に浮かぶ涙をこすり言う。

「・・・そうだ、みんなにお願いがある」

「「「「「?」「」「」

「俺も・・・蒐集を手伝う」

龍牙のその言葉に、シグナム達は驚く。

「俺もはやてを助けたい！頼む！俺も手伝わせてくれ!!」

頭を下げて龍牙は言う。

「・・・わかった」

「!」

龍牙勢いよく頭を上げる。

「龍牙、共に主はやてを救おう!」

「ああ!」

龍牙は頷く。

その時の龍牙の表情は、清清しく、何処か力強い表情だった。そして、守護騎士達と龍牙の決意は固まった。

・ ・ ・ だが龍牙の内にある、
「負」の力は ・ ・ ・ 未だ消えてはいな
かった ・ ・ ・ 。

第十七話「背負いし者の決意」(後書き)

十七話終了です。気づけばお気に入り登録数が100件越していました。こんな駄文だらけの作品を登録してくださって本当に嬉しいです!!これからもテンションを上げていけそうです!!

第十八話「束の間の安息」（前書き）

どうも、テイルズオブエクシリアが楽しみではない、白き修羅です。都合上、原作のなのは、フェイト、クロノとのギル・グレアムくだりを抜かしました。あらかじめご了承ください。

第十八話「束の間の安息」

「これを持ちまして私達アーススタッフは、ロストログア『闇の書』の搜索。および魔導師襲撃事件の捜査を担当することになりました」

リンディは、アーススタッフ。そしてなのは、フェイト、リニス、アルフ、ユーノに言う。

「そして事件発生地の近隣に、臨時作戦本部を置くことになります。・・・因みに司令部は、被害者のなのはさんの保護をかねて、なのはさんのお家の近所になります！」

「ふえ！？」

リンディの言葉に、なのはは驚く。

「確かになのはの近くに管理局が居れば、また襲われる心配もないし、少しは安心かな？」

ユーノが顎に手をそえ言う。

「そして真崎龍牙君の事については友人達である、フェイトさん達に任せようと思います。それでは、これで作戦会議は終了です。それぞれの持ち場に戻ってください」

リンディがそう言うと、アーススタッフ一同が、それぞれの持ち

場へと向かった。

「フェイトちゃん、頑張ろうね！」

「うん！」

「その前にデバイス直らないと何も出来ないけどね……」

「あう……」

「……しっかりしてくださいよ」

リスがあきれ半分で呟く。

「にはは……」

「（……なのは表情が幾分良くなってきてるな……何かあったのかな？）」

なのはの様子にいち早く気づいたユーノであった。

とある岩山地帯

「はぁぁぁ!!」

バゴオオ!!!

「グギヤアア!!」

岩のような甲殻に覆われたドラゴンが、龍牙の一撃で砂煙とともに地に伏した。

「シグナム、蒐集を頼む」

「わかった」

闇の書に、ドラゴンのリンカーコアが吸収された。龍牙は倒れているドラゴンを見ながら

「・・・ごめんな、急に襲ったりして・・・けど、はやてを救っためなんだ・・・本当にごめん・・・」

龍牙はそう悲しげな表情で言う。

「・・・優しいのだな、真崎は」

シグナムはそう言うと、龍牙は後ろを向き

「所詮は・・・偽善だろうな」

そう呟いた。

「・・・・・・・・」

その龍牙の背中はどこか悲しげだというのは、その場に居たシグナムしか知らなかった。

「・・・・これで闇の書は80頁か・・・・まだまだ先は長いな・・・・」

「

龍牙は八神宅居間で、闇の書のページを見てそう呟く。

「だが真崎の協力のおかげで、以前より蒐集スピードが上がっている。今まで手を出せなかった強力な魔法生物も、真崎のおかげで蒐集できている・・・・このままペースで行けば、完成も近づくだろう。真崎には本当に感謝をしなければならないな」

シグナムが龍牙を褒める。「よせ・・・・」と龍牙は顔を赤くしている。

「けど龍牙の攻撃ってほとんど殴る、蹴る、打ち出すくらいしかないよな」

「まあ俺の技は基本的、そういう風なものしかないからな」

「確か・・・・機神拳といったか？あの技の一撃一撃は凄まじいな・・・・」

ザフィーラは同じ拳を使う者として、龍牙の技に興味を持っていた。

「龍牙、今度俺と組み手でもしてくれないか？」

「ああ、別に構わないぞ」

「真崎！私も頼めるか！？」

シグナムは龍牙に近づき言う。

「あ、ああ・・・わかった・・・」

「龍牙君達、何の話してるん？」

キッチンから、はやてが出てきてそう言う。

「今日の晩御飯は何かな～って話をしてんだんだよ」

龍牙は誤魔化すように言う。

「今日は秋刀魚の開きに、モズクスープやで」

はやては笑顔で答える。

「はやてのモズクスープギガうまなんだよな！晩飯がめっちゃ楽しみ！」

「・・・食い意地をはるな、ヴィータ」

「まあまあ、いいじゃない。はやてちゃんの料理はおいしいんだし、ヴィータちゃんがそう言うのも頷けるわよ」

「・・・確かにな」

はやては、守護騎士達のやり取りを見て笑っていた。龍牙は、その様子を見て思う。

「（・・・俺は、はやての笑顔を、そして、シグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラ達家族を守っていかないとな・・・）」

龍牙は優しい笑みで、そう心の中で呟いた。

そしてなのはが襲われてから一週間。

「なのはちゃん、フェイト、レイジングハートとバルディッシュの修理が終わりました」

リニスはそう言い、レイジングハートをなのはに、バルディッシュをフェイトに手渡した。

「「ありがとうございます（ござます）！！リニス（さん）」」

なのはとフェイトはリニスに礼を言う。

「・・・本当なら、感謝は龍牙君にしないといけないんですが・・・」

「えっ？」

「デバイス達の修理に使った部品は・・・前に龍牙君が何かあった時の為につて、龍牙君のお母さんの残したデバイスの部品を龍牙君が出してくれたんですから・・・」

「そう・・・だったんだ・・・」

「・・・ありがとう、リユウ君・・・」

「それと、頼まれていたカートリッジシステムをデバイスに組み込んできましたから・・・実はプレシアはカートリッジシステムを組み込む事に反対してたんですよ？」

「えっ？母さんが？」

「はい・・・」

リニスは頷き

「カートリッジシステムは身体への負担が大きいです。使い始めは平気かもしれませんが・・・負担が蓄積されて、数年後には大きな事故へ繋がる可能性もあるのです・・・あなた達のような、身体が出来ていない子供は特に」

リニスのその言葉に、なのはとフェイトは暗い表情になる。

「ですが・・・あなたがどうしても言うので、プレシアは根負けしたんですよ。・・・そして、私からあなた達に言いたいことがあります・・・今回の闇の書の件が片付いたら、しっかりと検査を受けてもらいます。いいですね」

「はい（うん）！」

なのはとフェイトは、元気よく頷く。

なのは
主人公は再び羽を取り戻した。そして・・・もう一人の主人公は家
族を守る為に戦う。それぞれ意思がぶつかり合うとき、物語はどう
進んでいくのかは・・・神すら知らないことである・・・。

第十八話「束の間の安息」（後書き）

次回から戦いが本格的に始動します！感想お待ちしています！！

ちよつと息抜き番外編「シャルクツキング！」（前書き）

どうも、白き修羅略して白さんですw今回は息抜きに、番外編です。
題名で大体わかると思いますが・・・内容が薄い気がします・・・

ちよつと息抜き番外編「シャルクツキングー!」

「おはよ」

「おはようございます、龍牙君」

龍牙が朝起き居間に行くと、シャルがソファに座っていた。

「あれ？他のみんなは？」

「はやてちゃんとシグナムと一緒に図書館に行って、ヴィータちゃんとザフィーラは蒐集に行きました」

「そつか」と呟き、龍牙はシャルの隣に座る。すると

グウ

と龍牙の腹になる。

「腹減ったな・・・」

「私が何か作りましょうか？」

「シャルがか？」

「はい！」

「（シャルルの料理か・・・気になるな）じゃあ頼めるか」

「頼まりました！少し待っていてくださいね」

シャルルは気分よく、キッチンへ行った。そして・・・龍牙の期待は裏切られることになってしまった・・・。

「・・・シャル・・・この黒くて緑色のは？」

「チャーハンです！」

シャルルがチャーハンと称す料理は、チャーハンとは形容し難かしい色をしていた。

「・・・・・・・・」

シャルルはジッと龍牙の事を見ている。

「（ぐっ・・・見た目はあれかもしれないが、味は良いかもしれない）」

龍牙は腹をくくり

「いただきます！！ムグッ・・・」

チャーハン？を口に運ぶ。龍牙は再び期待を裏切られてしまった・・。

「ど、どうですか・・・」

「・・・・・」

龍牙は体を震わせながら、シャルルの肩に手を置き

「・・・すまんシャル、正直に言わせてもらっ・・・」

「は、はい・・・」

「あんまり・・・うまくない・・・」

「（ガーン!!）」

シャルはかなり落ち込んだ表情をした。

「・・・シグナムに言われたんですよ・・・」

「？」

「『お前は料理をするな、お前の作る料理はもはや兵器だ』って・・・」

シャルは涙を溜めながらそう言った。龍牙はため息をはき

「モグモグモグ!!」

「!？」

チャーハンを口に一気にいれた。

「ムグムグムグ・・・ングツ・・・ふう・・・シャル！」

「は、はい！」

シャルは、突然大きな声で名前を呼ばれたので、驚きながら返事をした。

「俺が料理を教えてやる！」

「・・・はい？」

呆氣にとられた表情をするシャル。

「だ・か・ら！俺が料理教えてやる！一緒にシグナムの鼻を明かしてやろうぜ！」

「はい！」

「まずは正しいチャーハンを教えてやる！」

それから、龍牙の料理教室が始まった。

「シャル！もうちょい火加減弱く！」

「は、はい！」

それから一時間後

「シャマル！米に何で栄養ドリンク混ぜるんだ！？」

「食べたら元気が出るようにって思って・・・」

「そこは普通卵なんだよ！！」

「は、はい」

そして三時間後・・・

「シャゝマルゝ！何でスッポン入れてるんだよ！そこはソーセイ
ジか蟹にしろ！！」

「はい！」

そして・・・明け方。

「ただいま」

「ただいま戻った・・・」

はやてとシグナムが帰宅したようだ。二人が居間に入ると、シャルが出迎えてくれた。龍牙はソファで寝転がっていた。

「おかえりなさい！はやてちゃん、シグナム」

「おかえり・・・」

元氣なく龍牙が言う。

「・・・あれ？随分とええ匂いするけど・・・何の匂いなん？」

「チャーハンです！」

「チャーハン？龍牙君が作ったんか？」

「いいや、シャルだ」

「「・・・えっ？」」

龍牙の一言で、はやてとシグナムは凍りついた。

「シャ、シャルが作ったんか！？」

「・・・また兵器が作られたか・・・」

「シグナム！そこまで言うのなら食べてみて！」

シャルがそう言うが、シグナムは嫌そうな顔をして

「・・・断る」

と言った。すると龍牙が

「騙されたと思って食べてみるよ、シグナム」

「む・・・わ、わかった」

若干乗り気ではないシグナム。シグナムは食卓へ赴いた。

シャルが、テーブルにチャーハンを置く。

「見た目は良いようだな・・・で、では・・・」

シグナムは恐る恐るチャーハンを口に運ぶ。

「!?!」

シグナムは驚愕した。

「う、うまいだと!?!」

「えっ!?!」

はやては、つられてチャーハンを口にする。

「めっちゃうまいやん!シャルいつの間に料理うまなったん!?!」

「秘密です♪」

嬉しそうに言うシャル。

（龍牙君！ありがとうございます！龍牙君のおかげで、シグナムに鼻を明かす事ができました！！）

シャルは、龍牙にそう念話を送る。

（そっか♪教えたかいがあつたよ）

（それでなんですが・・・また料理教えてくれませんか？）

（おう、いいぜ！）

龍牙はシャルにガッツポーズをした。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

ヴィータ達が帰宅する。

「ヴィータ！ザフィーラ！シャルが料理うまくなったで！！」

「えっ！？ホントかよ！？」

「ホントです！」

「まさかシャルがここまで上達するとは・・・むう・・・」

シグナムはあまり納得がいかないようだが、またシャマルが作ったチャーハンを食べ、不本意ながら納得したようだ。

「本当にありがとうございますね、龍牙君！」

その時のシャマルの笑顔は、龍牙の見た中で一番良い笑顔をしていた。

ちよつと息抜き番外編「シャルクツキングー！」（後書き）

新たなフラグ立ちw龍牙の料理の腕ははやて並みなので、シャルに教えることが出来ました。そしてシャルの料理に耐えられる龍牙の胃袋の強さw近日、第十九話投稿します。お楽しみに。

『表と裏』（前書き）

どうも、白き修羅です。本編を更新を来週中にする予定の私です。今回の話？は特に意味があつて、特に意味のある回です。ではどうぞ

『表と裏』

俺は誰も信じれない。

何故なら、俺は誰にも心を傾けないから…

俺は誰も許せない。

何故なら、全てが俺の敵だから…

俺は誰も触れれ無い。

何故なら、俺が触れる者全てを傷つける…龍の牙だから…

俺は孤独^{ひとり}であり続けよう…

俺が誰かを愛せるまでは…

俺は戦い続けよう…

俺が誰かを守りきるまでは…

俺たちは『表と裏』。

お前は俺。^{リュウガ}そして俺はお前。^{リュウガ}

俺たちは共に生き続けよう…俺^{リュウガ}が朽ちるまでは…。

『表と裏』（後書き）

意味がわからない。という人も多いでしょう。別に深い意味はありません…。では近日更新します。お楽しみに！

第十九話「激突」(前書き)

ども、白き修羅です。久しぶりの更新なんで、文章等おかしいかも
しれませんが・・・では十九話どうぞ

第十九話「激突」

「……真崎……龍牙、か……」

モニターを見て、『ギル・グレアム』が呟く。

「真崎？……まさか殉職した『剛拳の修羅神』。真崎勅准尉の……」

猫のような耳、尻尾を生えている、髪の高い女性『リーゼロッテ』がそう問いかける。

「息子だよ……まさか、闇の書の娘と一緒に居るとはな……」

グレアムは髭を触りながら言う。

「……どうなしますか？」

ロッテと同じく、猫耳と尻尾が生えている、髪の長い女性『リーゼアリア』が問いかける。

「もし……計画の邪魔になるようなら、消しますか？」

アリアはそう言うが、グレアムは首を横に振る。

「……彼は殺すわけにはいかないんだよ……もし彼を殺してしまったら、勅は私を許さないだろう……」

「「？」」

リーゼ姉妹は頭に？を浮かべる。

「彼は、闇の書の蒐集に手を貸しているんだろう？ならこのまま完成まで手伝ってもらおう。ロツテ、アリア、彼と守護騎士達のフォローを頼むよ」

「「はい、父様」」

リーゼ姉妹は、姿を消した。

「・・・」

グレアムは机の引き出しから、一枚の写真を取り出す。そこに写っていたのは、グレアム、その隣に真崎靱、そしてその腕に抱かれた、赤髪の一人の赤ん坊だった。

「すまない・・・靱。君の息子を利用するような真似をして・・・私は君に許されないだろう・・・闇の書を封印したら、罪を受け入れよう・・・それまでは・・・」

グレアムは写真を見ながら、そう呟いた。

「・・・君！・・・が君！」

「・・・・・・・・」

「龍牙君！！」

「！？」

耳元で大きな声で名前を呼ばれて、びつくりした表情をする龍牙。

「・・・話ちゃんと聞いてるん？」

「す、すまん・・・もう一度言ってくれ・・・」

「もう・・・今日はすずかちゃんが家に遊びに来るから晩御飯は鍋やでって言ったんよ」

頬を膨らませてはやては言う。

「そうか・・・」

龍牙は曇った表情になり、顔を下げる。はやては、「はぁ・・・」
とため息をはき

「・・・そういえばここ最近みんな最近家空けることが多いな・・・
あ、でも、別にええんよ？みんなここでの生活に慣れてきたし、そ
れぞれやりたいことがあるんやったらそれでいいかなって……」

はやては暗い表情で言う。そしてはやてはハッとし

「わたしは気にしとらんのよ？それに・・・もともとわたしは独り
やったから・・・」

はやてのその言葉を聞き、龍牙は一度目を閉じ

バッ！

はやてを優しく抱きしめた。

「りゅ、龍牙君！？／＼／」

「・・・お前はもう独りじゃない。俺やシグナム達がいる。だからそんな悲しいこと言うなよ」

「う、うん／＼／」

龍牙ははやてから離れた。

「（はやては・・・一人で抱え込むタイプなんだな。俺と同じだ・・・）」

龍牙はそう感じた。

「管理局か…」

「でも、ちよろいよ。返り討ちだ！」

ヴィータが武装局員の数をものともせず、そう啖呵をきった瞬間、魔導師たちが一斉に散解してゆく。
ヴィータは予想外の行動に呆気にとられる。

「（何故あのまま捕まえなかった？あれだけの人数がいたにも関わらずだ・・・何故攻撃を仕掛けてこなかった？あれではこちらに時間を与えただけだ。時間？まさか！）」

ザフィーラが気づいたときには、もうすでに叫んでいた。

「上だ！」

「ステインガーブレイド・エクスキュションシフト！！」

魔力で形成された、無数の短剣がザフィーラとヴィータに襲いかかり、ザフィーラがとつさに展開した障壁とぶつかり合う。

ギイン！！

巨大な爆発と轟音が響く。

「はぁ、はぁ…やったか？」

煙が立ち込めており、状況が把握できない。

「・・・！？」

煙が晴れる。そこにいるのはかすり傷ひとつ無いヴィータと三本の短剣が腕に刺さったザフィーラが居た。

「ザフィーラ！」

ザフィーラの腕を見て、ヴィータは思わず悲痛な叫び声をあげる。

「大丈夫だ。この程度でどうにかなるほど、やわじゃあ……ない！」

パキン！

ザフィーラが腕に力を込めると、短剣はあっさり折れた。あれほどの攻撃をしたにも関わらず、ダメージを受けた様子はない。クロノは思わず苦虫を噛み潰したような顔をした。

「上等！！」

ヴィータは攻撃を仕掛けたクロノを睨みつける。アイゼンを握る力も自然と強くなる。宙を浮いている魔導師を叩きのめそうとした瞬間、その魔導師がビルを見て、声をあげた。

「なのは！フェイト！」

ビルの屋上に立ち、ヴィータ達を強い眼差しでこちらを見る二人の魔導師。前回の戦いでデバイスごと叩きのめしたはずの二人。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「セットアップ！！」

桃色の光と金色の光が二人を包む。なのはとフェイトは今までと違うデバイスの様子に、若干戸惑う。しかし、リニスからの説明を聞き、理解した。これが相棒の授けてくれる、新しい力なのだ。そして二人はゆつくりと目を開き、ヴィータとザフィーラを見上げる。

「あれって……」

ヴィータとザフィーラは驚かずにはいらなかった。ベルカ式特有のカートリッジシステム。こちらに対抗するためにの自分のデバイスに組み込むとは思わなかった。

「私たちはあなた達と戦いに来た訳じゃない」

「話を聞かせて。闇の書の完成を目指す理由を」

なのはとフェイトは蒐集をする理由について問いかける。がヴィータは

「あのなあ、ベルカのことわざにこんながあるんだよ……」和
平の使者は槍は持たない』ってな」

ヴィータの言葉の意味がサッパリ分からず、なのはとフェイトはお互いに顔を見合わせ、首を傾げる。
そしてヴィータは得意げに話を続ける。

「話し合いをしようってのに、武器を持ってくる奴がいるかよ。ばーか」

「なっ！？いきなり有無を言わず攻撃を仕掛けてきた子が、それを言う？」

「それにそれはことわざではなく、ただの小話だ」

「うつせーよ！」

ザフィーラツツコミにヴィータは開き直る。その瞬間、上空で爆発音がした。紫の光とともに何者かが結界を突き破り、近くのビルに降り立つ。

（遅いぞシグナム）

（すまない・・・先程こちらに戻ってきたばかりなので・・・）

ザフィーラとシグナムは念話をする。

「あたしはあの白いのをやる！手をだすなよ」

そう言うと、ヴィータはなのはを睨みつける。

「ならば俺はあの使い魔の相手をしよう。あちらもそれがお望みのようだからな」

ザフィーラは組んでいた腕をとく。その視線の先にいるのは自分と同じ狼を素体にした使い魔。

「ならば私の相手はあの黒衣の魔導師か。おもしろい、前回に比べて力をつけたようだ」

シグナムはレヴァンティンを鞘から抜く。シグナムは自分の血が騒ぐのを感じていた。

「・・・その前に、教えてください」

なのはがシグナムにそう問いかける。

「・・・何だ？」

「リュウ君・・・いや、龍牙君はどこに居るんですか？」

その質問に、シグナムは

「残念だが、答えるわけにはいかない・・・」

「何故ですか!？」

「・・・こちらにも事情がある」

シグナムはレヴァンティンを構え

「これ以上、管理局に話すことはない…行くぞ!」

守護騎士達と少女達の戦いが始まった。

「それにしても・・・シグナム達遅いなあ・・・」

はやては時計を見て呟く。

「（・・・さつき結界が張られた・・・シグナム達のじゃないな。恐らく・・・管理局）」

龍牙は立ち上がる。

「シグナム達迎えにいつてくる」

「わかった、なるべく早く帰ってきてな」

「ああ」

龍牙は頷き、玄関へと赴いた。

「くっ・・・ここまでとはな・・・」

ザフィーラは苛立つ。前回とは違いなのは達は自分たちヴォルケンリッターと互角に戦っている。しかも管理局はこの場から逃げられないように、結界まで張っている。結界を破ろうにもシグナルとヴェイ

ータは手が放せない。シャルとの思念通話も何故か途切れてしまった。明らかにこちらが不利。ザフィーラは、どうするか考えた瞬間

（ザフィーラ！）

龍牙から、念話が来た。

（龍牙か！？）

（ああ、結界の中に入ろうとしたけど、局員が外を固めてる。俺が無理やり穴あけて、加勢するか？）

（いや、こちらは何とかする。それよりもシャルのもとに向かってくれ。思念通話が突然途切れた。それから、シャルに結界を破壊させてくれ。闇の書のページを使ってしまうが、それでもしないとどうにもならん）

（・・・わかった、シャルを助けたら俺が結界を破壊する）

（この結界は強力だ。そんなことができるのか！？）

（俺を信じる！必ず破る！！）

（わかった！龍牙頼んだぞ！）

（おう！）

龍牙は、シャルの下へ急いだ。

「搜索指定ロストロギアの所持及び使用の疑いで、貴女を逮捕します」

クロノは自分のデバイス、S2Uをシャルルの頭に突きつける。

「（念のためにユーノ呼ぶか・・・）」

そうクロノが考えた矢先、エイミィから慌てた声で通信が入る。

「クロノ君！何者かがそっちに接近中！気をつけて！

その瞬間クロノとシャルルの間に、龍牙が割って入ってくる。

「っ！？」

クロノはとっさに空を飛び、距離をとる。龍牙は、シャルルの前に立ち

「遅れてごめん、けがはないか？」

「はっ、はい！大丈夫です！それよりもシグナムたちが……」

「わかってる、すぐに結界を破壊する。だがその前に……」

シャルルにそう告げると目の前に居るクロノを見る。

「龍牙！！今君がしている行為は執行妨害であり、管理局への敵対行為だ！闇の書を渡せば、弁護の機会を与えることができる！」

クロノは龍牙を睨みつけながら叫ぶ。

「・・・断る。誰が管理局の指図を受けるもんかよ！！」

龍牙は構えを取り、そう叫ぶ。

「くっ・・・いくら君でも、投降するつもりが無いのなら力づくで逮捕させてもらう！ブレイズキャノン！」

「Blaze Cannon」

ゴオオウ！！

クロノは、砲撃を放つが

「でやああ！！」

バアアン！！！！

龍牙の裏拳で、弾き飛ばされた。

「はああ！！」

「くっ！？」

龍牙はクロノに詰め寄り拳を、振りかぶったがかわされた。

「おおお!!」

ガキーン!!

追撃の回し蹴りを、S2Uで防ぎ吹き飛ばされる。何とかクロノは、体制を立て直そうと思ったが

ドコォ!!

「ぐっ!!」

何者かがクロノに蹴りをいれ、アスファルトの道路に叩きつけた。アスファルトに埋もれたクロノは気を失っているようだ。龍牙は、仮面をつけた、謎の男に視線を移す。管理局を攻撃した。つまり管理局の人間ではないということだろうか?と龍牙は推測し、少し警戒気味に

「あんた何者だ?なぜ俺を助けた?」

「・・・闇の書を使わせろ。お前たちに死なれては困るのだ。減った分のページはまた集めればいい。仲間が傷ついてからは遅かるう」

龍牙は、シャマルに念話を送る

(シャマル、コイツを知っているか?)

(知りません。現れたのは初めてです。もしかしたら闇の書の力を狙っているのかも...)

念話を終え、龍牙は再び仮面の男を見る。闇の書を狙う者なら・・・
と思ったが、先程手を貸してくれたので、龍牙は

「・・・さっき助けてくれたことには礼を言う。けど・・・お前の
提案は受け入れられない」

「なに？」

「結果は俺が破壊する!!」

龍牙はそう言うと、ビルの屋上へと跳んだ。シャマルはその後を追
った。その場には、仮面の男だけがさびしく居た。

「・・・って、私は何の為にここにきたの・・・？」

仮面の男。もといリーゼロッテがそう呟いた。

屋上に来た龍牙は、シグナム達に念話を送る。

（シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、聞こえるか？今から結果を破
壊する。巻き込まれないように気をつけろ！）

（（（応っ！）））

「はあああああ!!!!」

龍牙は、右手に覇気を溜め

「貫け、覇龍ッ!!」

グオオオオオオオオ!!!!

一匹の覇龍が、結界に向かう。そして

パキイイイイン!!!!

覇龍によって、結界は砕かれた。

「うわぁ・・・すごい」

シャマルはあの強力な結界を破壊されたのを目の当たりにし。絶句する。

「シャマル、シグナム達連れて先に帰れ」

「龍牙君は!?!」

「俺は管理局をまいておく。大丈夫、必ず帰ってくる。あと、はやてには俺は用事があるから遅く帰るって伝えといてくれ」

「・・・わかりました!」

シャマルは眼を閉じシグナム達に念話を送った。

「・・・龍牙君、後は任せました!」

シャマルはそう言うと、この場から離脱する。それと同時に、シグナム、ヴィータ、ザフィーラも離脱して言った。

「ふう・・・行っただか」

少しため息をつき、後ろを向く。そこには、10人ほどの局員が居た。

「・・・こいよ管理局・・・相手してやる」

龍牙は構えをとり言う。

「ただいま」

「ただいま」

「今戻りました・・・」

「・・・」

シグナム達は、帰宅し居間へ入った。すると、そこにははやてと、すずかが居た。

「あ、みんなおかえり」すずかちゃん、この人たちが私の家族なん

「よ」

「月村すずかっています。よろしくおねがいしますね」

すずかはニコツと笑い言う。ヴィータ達は

「よろしくな！」

「よろしくね」

「よろしく頼む・・・」

「・・・」

とそれぞれ言う。ザフィーラは狼の姿なので、しゃべることが出来ないのはご愛嬌である。

「あれ？龍牙君は？」

はやては龍牙が居ないことに気づき、そう問う。

「龍牙君なら、用事があるから遅く帰るらしいです」

「そっかー残念やな」

「あの・・・はやてちゃん」

「ん？なんやすずかちゃん？」

「さっき言ってた龍牙君って・・・」

「この家に住んでもう一人の子やよ。優しくてカッコいい子やで」

はやてがそう言つと、すずかが

「そうなんだ・・・私の友達にも龍牙君って子がいるんだ」

「へえゝどんな子なん？」

興味津々にはやては聞く。

「優しくて、とても頼りがいがあつて、カッコいい子だよ」

はやては「へえゝ」と言う。

「今度会つてみたいなあ」

「うん・・・私も会いたいな」

すずかは、誰にも聞こえない小さな声で呟く。

「えっ？」

「なんでもないよ、私もその龍牙君に会つてみたいな」

すずかはそう言い、窓の外を見る。

「（龍牙君・・・）」

彼の名を、頭の中で呟いた・・・

「・・・大したことなかったな」

龍牙は半ば呆れながら言う。龍牙の足元には、局員が倒れていた。皆気絶しているようだ。

「さてと・・・そろそろ・・・!?」

龍牙は、こちらに向かって来る魔力反応を感じた。龍牙はそちらを見る。そこには、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、リニスが居た。

「」「」「龍牙（リュウ君）!!」「」「」

なのは達が龍牙の名前を呼ぶ。

「ちっ・・・片付いたと思ったら・・・お前等が居たか」

龍牙は構える。

「待つて！私達はリュウ君と戦いにきたわけじゃないの！」

「なんだと？」

「私達は、リュウ君と話しをしに来たの！」

「話し？」

なのは頷く。するとフェイトは一步前に出て

「龍牙、教えて。何で闇の書の完成させようとするの？」

その問いに、龍牙は言葉を詰まらせる。管理局に教える心算はない・
・と頭に言い聞かせていたが。龍牙は

「・・・助ける為だ」

「」「」「えっ？」「」「」

「闇の書を完成させなきゃ、ある奴が死んじゃう。俺はそいつを助ける為に闇の書を目指す」

龍牙はそう言い、この場から立ち去ろうと後ろ向く。そして、足を動かかそうとした瞬間

「「待つてー!!」「」

なのはとフェイトに呼び止められ、つい足を止めた。

「私・・・待つてる！」

「龍牙は、絶対私達の所に帰ってくるって！」

その二人の言葉に、龍牙の心が揺られる。

「（なぜこいつ等は敵である俺にここまで執着する？まさか・・・俺が記憶を無くす前は）・・・ちっ！」

龍牙はその場から立ち去った。

「リュウ君・・・」

「龍牙・・・」

なのは達は、飛んで行った龍牙を姿が消えるまでずっと見ていた。

「ただいま〜〜！」

龍牙は、勢いよく居間の扉を開けた。

「あ、龍牙君！遅かったやないか〜！もうすずかちゃん帰ってしもうたよ」

「悪い悪い！・・・すまん腹減ったんだが・・・まだあまつてる？」

「そう言つと思って残しといたんよ〜」

「お、はやてサンキュー！」

龍牙は食卓に赴いた。そして龍牙は思う

「（そうだ・・・俺は、はやてを助けるんだ・・・絶対に！！）」

鍋の具を食べながら、心の中で、そう言い聞かせる龍牙。

――いい具合になってきたじゃねえか？・・・よお？

――いいねえ・・・そろそろ・・・が出るころかあ？

――そんな時は・・・楽しませてもらうぜえ・・・！！

闇は・・・動き出す。

第十九話「激突」(後書き)

ロツテまさかの空気wもう次の話は出来上がっているので、近日更新したいと思います!!感想お待ちしています!!

第二十話「守るために。『獣化』」(前書き)

どもー白き修羅です！今回の話は、龍牙再び！？の回です。

第二十話「守るために。『獣化』」

なのは達との戦いから三日後。

海鳴市では夜。とある別世界の霧が立ちこめる森林に、シグナムが1人で蒐集に来ていた。

「はあ…はあ…クツ！」

「キイイイイ！！」

シグナムは鋼の体を持つ巨大なカマキリと戦っていた。だがこの巨大カマキリは予想以上に強く、シグナムの攻撃が全く届いていなかった。

「せめて…ヴィータが居てくれれば…」

苦虫を噛み潰したような表情になる。

「キイイ！」

「！？」

巨大カマキリはシグナムに襲いかかる。

「あれ？シグナムは？」

風呂からあがった龍牙はソファーに座っているシャルルに問いかける。

「一人で蒐集に行きましたよ」

「一人で？」

「はい」とシャルルは頷く。

「……」

黙り込む龍牙は、妙な胸騒ぎがしていた。

「龍牙君、どうしました？」

「いや…なあシャルル、シグナムはどこに行ったのかわかるか？」

「え？ええとですね…」

「チッ！…まずい…な」

シグナムは巨力マキリに右肩を斬られていた。シグナムは傷口を

抑える。

「カートリッジはもう無いか…」

シグナムはレヴァンティンを見てそう呟く。

「キィ！！」

「はっ！！」

ガキン！！

巨大カマキリの一撃を受け止めるシグナム。だが

「うわああ！！」

シグナムは軽く飛ばされる。巨大カマキリはシグナムに追撃を加えようとする。

「っ！？ここまでか…！！」

シグナムが目を閉じた瞬間

「シグナム！！」

「！？」

突然シグナム誰かに突き飛ばされた。特徴的な紅いバリアジャケット、龍牙だ。そして

「キイイイ！！！！！」

ズバァァ！！！！！！

巨大カマキリは目の前にきた龍牙の体をクロスに切り裂いた。傷口からは、鮮血が流れる。

「し、真崎！？」

シグナムは直ぐに龍牙を抱え、巨大カマキリから離れた。

「真崎！しっかりしろ！」

龍牙はバリアジャケットが解除され、シグナムの腕の中で意識朦朧としている。

「何故だ…何故私を…」

「……だからだ…」

「えっ？」

龍牙は苦しそうに何かを言った。

「マスター 駄目です！！喋ってはいけません！！」

アレースは制止の言葉を言うが、龍牙は止まらない。

「俺達は…家族だろ？…家族は助け合うもんだ…だからだよ…」

龍牙は途切れ途切れに言った。

「ッ！？…真崎、直ぐ家へ…！？」

「キィ！！」

巨大カマキリがシグナム達を見つけ、襲いかかる。

バアン！

「ぐあ！！」

シグナムは巨大カマキリの腕で、払い飛ばされた。巨大カマキリの視線の先には、横たわっている龍牙がいる。巨大カマキリは、龍牙に近づき、その巨大な鎌を振り上げる。

「真崎いいい！！！！」

シグナムの叫びが、森の中に響いた…

「（俺は…死ぬのか？記憶も取り戻せずに…はやても助けずに…俺はこんな所で死んでしまうのか？…まだ俺は死ぬ訳には…）」

龍牙は大きな鎌を振り上げた、巨大カマキリを見てそう思う。そし

て龍牙の頭の中に声が聞こえる。

——生きてるか？

「（当たり前だ…俺はこんな所で死んではいけない！）」

——流石は…か…そうか、なら…

——…一度、かわれ狂え

「（！？）」

その刹那、龍牙の視界が真っ黒に染まった。

「真崎！！」

巨大力マキリは鎌を振り下ろす。

キーン！！

「ギッ！？」龍牙はいつの間にか立ち上り、バリアジャケットを身に纏い鎌を受け止めていた。

「真ざk…?」

シグナムは龍牙に違和感を感じた。

「……」

ブウン!!

「ギギイ!」

巨大カマキリは、龍牙に投げ飛ばされた。

「……ウウ……」

顔を下げている龍牙は小さく唸り、顔を上げた瞬間

「ガアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

グオオオオ!!!!!!

龍牙は黒い覇気に包まれる。そしてバリアジャケットの色は、紅から藍色になり、両肩部に不気味な眼が現れ、至る所に紅い玉が付き、髪は血のように真っ赤に染まり、邪悪な姿へと変貌した。

「グオオ……」

獣のように唸る。

「ガアア!!!!」

龍牙は巨大カマキリに一気に近づく。巨大カマキリは龍牙を切り裂こうと鎌を振ったが

「キイイイ！」

「ガアア！！！」

バギン！！！！

龍牙の裏拳で悉く碎かれた。そして黒いオーラを脚に纏わせ

「グオオオ！！！」

ドゴオ！！

「ギッ！」

巨大カマキリは軽々と蹴り飛ばされた。巨大カマキリはヨロヨロと起き上がる。

「ガアアア……」

龍牙は巨大カマキリに左手を向けた。

キュイイイイイン！！

覇気で黒い球体を作り

「デイバ……ン……バ……アアア！！！！」

右手で球体を殴る。すると

ゴォン！！　ゴアアアア！！

球体は一直線の砲撃になり、巨大カマキリの胴体を貫いた。

「ギ…ギイ…」

ドンー！！

大きな音を立て、巨大カマキリは絶命し倒れた。

「す、凄い…」

シグナムはつい声を漏らす。

「グウウウ…」

龍牙は巨大カマキリの体に飛び乗り

「グオオオ！！」

ドゴォー！ドゴォー！ドゴォー！

狂ったように、巨大カマキリの体を殴り始めた。

「真崎止める！！そいつはもう…」

龍牙はゆっくりとシグナムの方を向く。

「グウウ……グオオオオ!!」

龍牙は大きく吼え、シグナムに襲いかかる。

「くっ!」

シグナムは龍牙から距離をとる。

「やめてくれ真崎!! 私はお前と戦いたくない! 目を覚ませ!!」

シグナムの言葉は龍牙の耳には届いておらず、龍牙は止まらない。

「オオオオ!!」

ガキーン!

龍牙の拳を、レヴァンティンで受け止める。

「っ!!」

シグナムは徐々に押されていく。

「真崎……!!」

「グアオオ!!」

バン!

「ぐあ!」

シグナムはレヴァンティンを弾き飛ばされた。龍牙は拳を振りかぶり

「ガアアオオ！」

「ッ！？」

シグナムは目を閉じた。

「……？」

だが、殴られた感覚が無く、シグナムは目を開ける。龍牙の拳はシグナムの眼前で止まっていた。

「グッ…オオオ…！」

龍牙の頭の中に、声が響く

「――やめろ…！やめろ…！」

突然頭を抑え、苦しみ始めた。

「グアアアアアアアアアア！！！！……」

ボタン！

龍牙のバリアジャケットは解除され、その場に倒れこんだ。

「真崎！？」

シグナムは龍牙を抱きかかえた。龍牙の顔は真っ青で、唇は紫色になっている。そして胸の傷からは、血が止めどなく出ている。シグナムは急いで八神宅へ向かった。

居間でシャルとザフィーラは、龍牙とシグナムの帰りを待っていた。どうやらは yet はもう自室で眠っているようだ。

「龍牙君とシグナム遅いわね…」

シャルは心配そうに呟く。

「龍牙と一緒になら大丈夫だろう…」

とザフィーラが言う。

ガチャ！

玄関の扉が開く音がした。ドタバタと足音がし、居間の扉が開かれた。

「シグナム、龍牙君おかえ…！？」

「龍牙！？」

シャルとザフィーラは、血だらけの龍牙を見て慌てる。

「シャル！真崎の治療を！」

「は、はい！」

シグナムは急いで龍牙をソファーに下ろす。

「龍牙君！しっかりしてください！」

シャルは治癒魔法をかける。

そして三十分後…

龍牙は何とか一命を取り止め、自室で静かに寝ている。シグナム、シャル、ザフィーラ、そしてヴィータが、龍牙の部屋に居た。

「何で龍牙はこうなったんだよ…」

ヴィータはシグナムの方を向き、問いかける。

「…蒐集対象の攻撃から…私を庇って…」

「こんな大怪我してる…ということね…」

シャルはそう言い、黙り込むこむ。

「真崎…」

シグナムは何か言いたそうに龍牙の事をみる。

「…ヴィータちゃん、ザフィーラ行きましょう」

「何でだよ！アタシは龍牙の側に居たい！」

「いいからいいから」

ヴィータは少し暴れながら、シャマルとザフィーラに引きずられ部屋を出て行った。

「…スー…スー…」

「……」

静かな寝息をする龍牙を、シグナムはただ見ている。

「…すまない、真崎……」

シグナムの瞳から、一つの雫が流れた。

「私の不甲斐なさで…お前を苦しめてしまった…本当にすまない…」

僅かだが震えているシグナムの手を、誰かが突然優しく触れた。

「…シグナム…」

「真崎！」

龍牙の手を、シグナムは両手で包む。

「あれ…？俺、何でここに？あのデカカマキリは？」

「覚えて…ないのか？」

「ああ…」

コクリと龍牙は頷く。

「…あの生物は私が倒した。心配するな」

「そっか、さすがだなシグナム」

龍牙はそう言う。

「っ……」

シグナムは下を向く。

「なあシグナム…何で泣いてるんだ？」

「な、泣いてなどいない！」

顔を赤らめて、大きな声で言うシグナム。

「…ホント？」

「本当だ！」

「ならいいんだ」

龍牙は優しい笑顔で言う。

「!?!?!失礼する!?!」

シグナムはそそくさと部屋を出て行った。

「シグナムどうしたんだ?」

龍牙は首を傾げる。

「あそこであの笑顔は反則だろう?!?!」

シグナムは顔を赤くしたまま、扉の前で呟く。

「…それにしても…何なんだ…この胸のモヤモヤは…私は…私はも
しかしたら…」

初めての感情にシグナムは気づいた。

「私は…真崎に好意を抱いてるのか…?」

シグナムの呟きは、天井に消えていった。

――ちつつまんねえな……しかたねえ、
今だけは引いてやるよ……

――今だけはな……

第二十話「守るために。『獣化』」(後書き)

龍牙の暴走。『獣化』時の姿のイメージは、ビレフォールの神化の姿です次回もお楽しみに！

第二十一話「終わりへの歩み」(前書き)

連続更新です！！！ではどうぞ！！

第二十一話「終わりへの歩み」

「人間じゃ……ない？」

なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、リニスそしてプレシアがいるのは、リンディ達のアジトとなっているマンション。局員の張った結界が龍牙に破壊された後、闇の書について説明を受けていたのであった。

「使い魔でも人間でもない疑似生命……あまりいい響きじゃないわね……」

プレシアは、腕を組み言う。余談だが、何故プレシアがここにいるのかというと、龍牙が今回の事件に関わっているということで、プレシア自身が管理局に協力することにした。

「……守護騎士達ならともかく、一番問題なのは龍牙だな……龍牙は完全に僕達と敵対している……龍牙の戦闘能力は……認めたくないけどここにいるみんなの力を合わせても勝てるかどうか……だね」

クロノのその言葉で、場の空気が悪くなる。

「……龍牙君のことは、これまでと変わらずフェイトさん達に任せます！」

リンディは場の空気を変えようと、話題を変えた。

「それと、あの仮面の男についても色々調査しないとね」

どこまでも空気の読めない発言をしたクロノであつた・・・。

「くそつ、はやてから貰つた騎士服をこんなにしゃがつて」

闇の書を片手に、アイゼンを杖の代わりにしながら、砂漠をヴィータはふらつきながらも歩く。ヴィータの騎士甲冑はボロボロだ。だがヴィータは歩みを止めない。しかし体に負つた傷は並大抵でない。砂に足を取られ、熱い砂の中に倒れそうになる。

「あつ！」

ヴィータは思わず声をあげた。両手は塞がっており、どうすることもできない。ぎゅっと目をつぶる。

「……？」

ヴィータは恐る恐る目を開ける。ヴィータの視界に入ったのは、炎のように紅い鎧。それを見た瞬間、ヴィータは気づいた。

「りゅ、龍牙！？」

「おう、ヴィータ大丈夫か？」

龍牙は、ヴィータを抱きかかえながら言う。

「だ、大丈夫だ！」

龍牙の手を振り払い、ヴィータは立ち上がろうとするが

「うつ・・・」

力なく倒れこむ。

「はぁ・・・」

龍牙はため息をつき、ヴィータをお姫様だっこをした。

「／／／龍牙！？／／／」

「全く、無理すんなよな」

「う、ごめん・・・」

ヴィータは小さな声であやまる。

「・・・なあ、龍牙」

「何だ？」

「傷は・・・もう大丈夫なのか？」

ヴィータの問いに、龍牙は頷きながら

「ああ、まだ全開じゃないけどな・・・まあ、ヴィータを抱えられるくらいはなんともないよ」

フェイスのせいで、表情は伺えないが、龍牙は笑っているだろう。

「（・・・龍牙はやっぱ優しいな・・・）」

ヴィータは顔を赤くしながら、龍牙の腕の中でそう感じた。そして二人は家に戻っていった。

「「はやて!」!」」

勢いよく病室の扉が開かれる。

「あつ、龍牙君にヴィータ!来てくれたん?」

いつもと変わらぬ様子のはやてを見て、龍牙とヴィータはほっと胸を撫で下ろす。病室にはシグナムとシャルもいる。

「みんな心配すぎや。ちょっと胸がつつただけやのに」

「でも突然はやてちゃんがいきなり倒れたんですから、心配したんですよ」

すると、はやての主治医。石田先生に小さな声で話しかけられた。

「皆さん、少しお話が…」

はやてを除く、みんなが、病室から出た。

石田先生の話によると、麻痺の速度があがってきているらしい。そのため、入院をして本格的に治療をする必要があると言われた。だが、麻痺は十中八九闇の書が原因であり、魔法のないこの世界ではどう足掻いても治療はできない。どのくらいまで時間が持つかかわらない。麻痺の進行を止めるためには、闇の書の完成を急ぐ必要がある。八神家のリビングで、そう結論が下された。

「これからは、もっと強力な魔法生物から蒐集しないと…」

「ああ、早く闇の書を完成させねえと…」

シグナムと龍牙がそう言う。

「なあ、闇の書が完成したら、はやての病気は本当に治るんだよね？」

「闇の書が完成すれば、主は莫大な力を得る」

当たり前だという表情のシグナムに、ヴィータは不安を隠せない様子だった。何か大切なことを忘れている。ヴィータにはそんな気がしたのだ。そして、龍牙も同じ事を考えていた、何か…何か大切な事を…忘れているような…と。

「じゃあ私はこれで。龍牙君、気をつけて帰ってきてくださいね」

「ああ」

シャルは病室から出て行った。守護騎士と龍牙は交代ではやてに付き添っていた。それは、はやてを心配させるわけにはいかないという考慮からだった。蒐集の方は龍牙と守護騎士達の奮闘により、クリスマスには間に合いそうだった。

「（あと・・・もう少しだ・・・あともう少しで闇の書が・・・）」

「・・・龍牙君、また考え事してるやろ」

「あ、わるい・・・考え事してた・・・」

話がかみ合っていないく、はやては

「はあ・・・そんな龍牙君にもう一度言うな？・・・なのはちゃんたちもまた来てくれるって言うてくれてな……」

楽しそうに、新しくできた友達について話しているはやてを見て、龍牙の中に少し罪悪感が生まれる。すずかから写真付きのメールが来たとき、龍牙達は驚愕した。つい最近戦った魔導師が、同じ町に住んでいる小学生だったのだから。結局すずか達と鉢合わせしない

ように、はやてのお見舞いに行くということで話は落ち着いた。

「さてと、そろそろ俺は家に戻るぜ。明日はヴィータが来てくれると思う」

「うん、ありがとな龍牙君。みんなのことよろしくな」

いつの間にか、空はすっかり暗くなっていた。そろそろ蒐集に行く時間だと思い、龍牙は席を立つ。そんな時だ。

「？はやて？」

はやては、龍牙の手をぎゅっと握りしめる。龍牙は、はやてがどこか不安で悲しそうな表情をしていることに気づく。はやてはどこか、か細い声で言う

「あの子、龍牙君。もしも私が死んだら、シグナムもヴィータもシヤマルもザフィーラも居なくなってしまう。もしも闇の書を龍牙君に渡すことが出来れば、何も心配は無いんよ？・・・そやけど、闇の書は次の転生先を選べへん。もしもみんなが居なくなったら、龍牙君が一人ぼっちになるんじゃないかって・・・」

それだけではない。自分が死んだら、闇の書は、守護騎士達はまた誰かのもとに転生してしまう。新しい闇の書の主が、シグナム達に温かい食事や綺麗な服を用意してくれるかわからない。そして、自分が死んだら、龍牙は一人残される。自分と同じ、家族を失った人。その悲しみを知っている龍牙が、またそんな悲しみにあつのは、はやては嫌なのだ。

「ッ・・・」

いつもの明るさ、陽気さも無く、ただ泣き震えているはやてを見て、龍牙は

バツ

はやてを優しく抱く

「大丈夫だ」

「えっ？」

「はやての病気は絶対に治る・・・心配しなくてもいい・・・守るから、はやても、シグナムもシャルもヴィータもザフィーラも、みんな・・・みんな俺が守る・・・！だから…大丈夫・・・」

そう強くはやてに言い、龍牙は離れる。

「だから・・・笑っていてくれはやて。俺は・・・はやてにはいつもの笑顔でいてほしいんだ」

「龍牙君・・・」

「だから・・・泣くな・・・な？」

龍牙は笑顔で言う。はやては涙を拭い

「うん！そやな、私がネガティブになるのはもうおしまいや！」

「そう、そのいきだ！」

龍牙とはやては笑む。同じ境遇だからこそ・・・わかるのだろうこの思いは・・・。

「ねえ、すずか。はやてのお見舞い、次はいつ行く？」

「うん。どうしようかな？はやてちゃんの都合も考えないといけないし……………」

「メールで尋ねてみればいいんじゃないかな？そういえば、はやては翠屋のクリスマスケーキが楽しみだって言ってたよね。なのはのお母さんが翠屋のパティシエだって知った時、驚いてたよ」

今は昼休み。アリサ、すずか、フェイト、なのは、アリシアの5人は、屋上で昼食をとっていた。

話の種になっているのは、つい最近仲良くなった少女についてだった。その少女はもちろんはやてのことである。

「あ、そういえば言うの忘れてたんだけど・・・」

一同は、すずかの方を向く。

「はやてちゃんの家に、男の子がいるんだけど・・・その男の子の

名前が龍牙君っていうらしいんだ」

「「「!?!?!」」」

すずかの言葉に、なのは、フェイト、アリシアが反応する。

「へえーあいつと同じ名前か……会ったことはあるの?」

アリサがそう言うが、すずかは首を横に振る。

「いつも用事で居ないんだって」

なのは達は念話をする。

（フェイトちゃん、アリシアちゃん……もしかして……）

（うん、私も同じことを考えてた……）

（龍牙はこの前『助ける為に闇の書を目指す』って言ってた……
もしかしてその助けたい人って……）

（はやてちゃん……）

そうなのはは、念話で言う。

「龍牙君がどこにいるかわかったの!？」

リンディが、驚きの声を上げる。

「あくまでも可能性ですけど・・・」

「なのは、その情報はどこで？」

「えっと私の友達に、八神はやてちゃんっていう子がいるんです。その子の家に遊びにいった友達から聞いたんです」

クロノは「ふむ」と腕組みをする。

「しかもその友達はやてちゃんの家に行っても、その『龍牙君』はいつもいないらしいです」

なのはのその言葉に、リンディは暫し沈黙し

「・・・そのはやてさんの周りを調査しましょう。もしかしたら、守護騎士達も姿を現すかもしれません」

あまり乗り気ではないが、なのは達は頷いた。

「ジードル・・・何故命令を背いた？」

時空管理局本局のとある部屋で、グレゼンは青筋を浮かばせ、目の前に居る黒髪の男。ジードルに問う。

「いやゝちよつとした手違いがありましたねえゝ」

ジードルはニコニコした表情で言う。

「・・・ちつ！次は仕留めろ・・・絶対にだ！！」

「お断りします」

「何だと・・・？貴様！・・・グフツ！！」

グレゼンの口から、赤い何かが流れ出す。グレゼンは視線を下に移すと、腹のところに、一本の剣が刺さっていた。

「き、貴様あ・・・」

グレゼンは倒れこむ。

「フクク・・・あなたのような小さな野望を持った人間は・・・もう要らないんですよ」

「な、なに・・・」

ジードルは不適に笑う。

「フククク・・・それでは、死んでください。グレゼン・バーク」

バアアン！！！！

ジードルは、グレゼンの頭を拳銃で撃ちぬいた。

「まあ・・・せいぜい役に立ってくれた事には・・・感謝しますがね・・・フクク」

そう呟くと、ジードルはグレゼンの首にかかっている、青いペンダントを荒々しく取った。すると、青いペンダントは一瞬ふれ、黒く、龍の頭部を模したペンダントへと変わった。

「やはり、あなた自身が持っていましたか・・・フクク・・・」

ジードルの口は、三日月状にゆがみ

「これで・・・私の計画に一步近づいた！！後は・・・フククク！！！！」

ジードルは影の中へと消え去った・・・。

一つの物語の・・・終焉は近い。

第二十一話「終わりへの歩み」（後書き）

確信に近づいていくのはたち。動きつつある闇。龍牙の運命はどうなるのか！？次回もお楽しみに！！

『思い』（前書き）

ども、連続更新中の白き修羅です。今回は龍牙の今の心境を書いてみました。

『思い』

「・・・き！しん・・・！！」

「・・・・・・・・」

「真崎！！」

「あ、ああ、なんだシグナム？」

「蒐集が終わったぞ」

シグナムはそう言う。

「真崎どうした？やはり・・・前の傷が・・・」

「いや、それは大丈夫なんだ・・・ちょっと考え事を・・・」

「ならいいんだが・・・」

シグナムは少し安心した表情をする。

「それじゃ、帰るか」

「ああ」

龍牙とシグナムは帰宅した。

龍牙は、自室で考えていた。それは、あの高町とテストロッサという少女達についてだ。

「（あいつ等は間違いなく、俺が記憶を失う前に出会っている・・・）」

龍牙はベットに寝転がる。

「（記憶を取り戻せば・・・この違和感は消えるのかな・・・）」

龍牙はそう考えるが、ある少年の言葉を思い出す。

『戻ったとき・・・忘れていた頃の記憶を逆に失うことだってありえる』

その言葉を思い出し、龍牙は頭を抱える。

『覚えてるから会っくんじゃなくて、会いたいから会っくんじゃないのか？』

再び、その少年の言葉を思い出し、龍牙は笑む。

「・・・そうだな、今更悩む必要はないよな・・・」

龍牙は起き上がり

「お前に会わなきゃ、俺は覚悟を決めれなかったかもしれない・・・感謝するぜ、ヴァン・・・」

少年の名前を呟く龍牙。

「龍牙くん！ご飯できたで」

「おう！今行く！」

龍牙は部屋をでた。

彼は戦う。記憶を取り戻す為に・・・そして、家族を守る為に・・・

『思い』（後書き）

今回の話しは、IKAさんの作品とコラボした後の後のはなしでした。

第二十二話「闇の書、覚醒」(前書き)

連続更新完了!!!この調子でA's完結を目指します!!!

第二十二話「闇の書、覚醒」

「主の着替えと本を取ってきてくれないか？」

そうシグナムに頼まれ、龍牙は家に帰っていた。魔導書は、クリスマス前には完成しそうだった。龍牙は歩くスピードを上げる。今日は珍しく、ザフィーラを除く守護騎士全員が揃っていた。ちなみにザフィーラが居ないのは、動物は病院に入れないからという理由もある。

「（何の本がいいかな…）」

はやては読書が好きである。家には沢山の本があるが、はやてのとだから、何度も読んだらうと龍牙は考えていた。

「今度は図書館から適当に借りてくるかな・・・」

龍牙がそう呟いた瞬間、辺りの雰囲気が一変する。自分の周りの空間だけが、切り取られる感覚。何度も感じたことがある。

「マスター！！」

「わかっている！！」

龍牙は瞬時に理解したが、時は既に遅く、龍牙の体にはバインドが掛けられていた。一つや二つではなく、五重もの拘束魔法によって、龍牙は身動きが出来ないでいた。龍牙は空を見上げる。宙を浮いているのは、デバイスを手に持ち、バリアジャケットを身に纏っている、クロノだ。クロノはトンツと地面に着地する。

「お疲れ様、クロノ」

クロノのすぐ横にモニターが出現し、リンディはクロノに労いの言葉をかける。

「八神はやての周りを調査して正解だったよ。君が一人になるのをまっていたんだ」

クロノは、龍牙にそう言うが、その一方で、龍牙は必死に拘束を解こうとしていた。しかし五重のバインドがそう簡単に外れる筈もなく、それを解除する魔法が使えない龍牙にはどうすることも出来なかった。

クロノとリンディが連絡を取り合っている間に、龍牙は守護騎士に念話を試みていた。管理局に見つかったこと、はやてを連れて早く逃げるように伝えようとしたが、いくらやっても通じないのだ。

「（くっ！つなぐれ！！）」

そんな時だ。蒐集に出かけていたザフィーラから、思念通話が届いた。

（龍牙―――）

（ザフィーラ、何があった！？）

いつもとは違う、弱々しいザフィーラの声。はやて達の身に何かが起こったかもしれないという考えが龍牙の脳裏をよぎった。

（リンカーコアを奪われた。俺だけではない、シグナムもシャマルもヴィータもだ。頼む、主を守つ——）

プツンと念話が途切れる。その瞬間、龍牙の頭の中に、声が聞こえる。

「おいおい・・・このままでいいんかよ？このままじゃ・・・

「みんなどうなるか、わかったもんじゃねえぞ？

「（ならどうすれば・・・！）」

「簡単だ・・・かわれ狂え

「さて、龍牙君。大人しく・・・！？クロノ！？」

リンディは驚愕する。龍牙の髪が、蒼に変わり、目はつり目になり、瞳の色は黄色になった。

「おらあー！！」

バギン！！

リュウガは荒々しくバインドを砕いた。

「な、なに！？」

クロノは驚きの表情をする。バインドは得意な魔法であるし、それなりの自信がある。だがそれを、デバイスを起動せずに解いた。

「おいおい・・・バインド一つ砕いたくらいでんな驚くんじゃねえよ。あくわりい・・・五重だったなあ・・・」

リュウガはニヤつきながら言う。

「お前・・・何者だ!？」

クロノの問いに、リュウガは笑う。

「俺？俺は俺だよ。^{リュウガ}さてと・・・フンッ!！」

ドコォ!!

「ガハア!!」

リュウガはクロノの腹を拳で殴る。クロノは、コンクリートの壁に叩きつけられ、気絶した。

「ちっ!・・・んだあ?しけてやがな・・・つまんね・・・」

リュウガがそう言うと、目を瞑る。すると髪の色が赤に戻っていった。

「・・・っ!？」

龍牙は、倒れているクロノを見て驚く。

「こ、これは・・・！？こんなことしてる場合じゃねえ！！アレー
ス！！セットアップ！！」

「御意！！」

龍牙は、バリアジャケットを身に纏い、はやての下へと急いだ。

「い、一体・・・なんだったの・・・？」

リンディは全く状況の把握が出来ておらず、そう呟いた。

「この子達はね、もうとつくの昔に壊れていたんだ。そのくせ、ただのプログラムなのに、人間みたいに振る舞っていたの。貴女への感情も全て作りモノだったのにな」

「だから、あなたの家族も、思い出も、全てニセモノ。守護騎士は貴女を助けるために、無駄な努力をしていただけ」

はやては突然病室から転送され、戸惑うことしか出来なかった。なのはとフェイトが宙を浮き、ヴィータが拘束され、ザフィーラが倒れている。そして、二人の視線に促され、その先にあるのは、シャルとシグナムの服。中の人だけが、抜け殻のように消え去ってしまったのだ。その光景が目に入った時、はやては絶望の淵にた

たされた。さらに、絶望へとたたき落とすべく、なのはとフェイトは追い討ちをかける。

「もうやめて…お願いや…龍牙君…」

泣きじゃくりながらも、かすれるような声で、はやては救いを求める。

「誰も助けにこないよ。貴女みたいに、呪われた人間を助けてくれる人間なんかいないんだ」

「そうだ！この子をもう壊しちゃてもいいよね？だって、もともと壊れてるんだから」

無邪気かつ残酷な口調で、二人はカードを掲げる。はやては必死に手を伸ばす。やめてくれと叫ぶ声に、二人は耳を貸すはずがなかった。

「（闇の書で不幸になった人間の苦しみを味わうがいい）」

二人の仮面の男は、心の中でそう呟きながら、ヴィータとザフィーラを消滅させる。その瞬間、はやては

「いやあああああ！！！！！！」

『Freilassung（解放）』

はやての悲痛の叫びと同時に、はやての足元に白色の魔法陣が展開される。だがそれは、禍々しい紫色に染まった。

「はやて（ちゃん）！！」

バインドと、ゲージから抜け出したのはとフェイトは、はやてを見て驚愕する。はやての面影はどこにもなく、そこにいるのは、黒い翼を生やした銀髪の女性。目から涙を流しながら

「また、全てが終わってしまう……。いったい幾度、こんな悲しみを繰り返すのだろう。運命は変わらなかった……。主はやて、貴女の願い、私が叶えます」

『Gefangnis der Magie』

銀髪の女性がそう言うと、闇の書がそう呼応し、白く光り出す。同時に、突き上げられた右手に、小さな魔力集束していき、塊が出来あがる。それは大きくなり

「ディアボリック・エミッション」

集束していた黒い塊はさらに小さく凝縮される。

「闇に、染まれ」

そう言い放った瞬間

「おおおおおおおおお！……！！！」

ドゴオオ！！バキイ！！

「ぐああ！！」

「ぐうう！！」

一つの紅が仮面の男二人を吹き飛ばし、銀髪の女性の腕を掴み攻撃を中断させた。

「な！？」

「龍牙（リュウ君）！？」

「くっ！」

銀髪の女性は龍牙の手を振り払い、距離をとる。龍牙は、銀髪の女性を睨む。それと同じく、銀髪の女性は龍牙を睨む。

闇の書と紅き修羅の戦いが、幕を開けた・・・

第二十二話「闇の書、覚醒」(後書き)

ふう・・・連続更新は疲れます・・・いよいよA'sも終わりに近づいてきました！！感想お待ちしています！！

第二十三話「悲劇」(前書き)

ども、白き修羅です。いよいよA Sがクライマックスに近づいてま
いりました！！テンション上げていきます！！

第二十三話「悲劇」

「・・・あんだ、闇の書の管理人格か？」

龍牙は、目の前の女性にそう問う。

「はい・・・何故それを？」

「なんとなくだ・・・はやてはどうした？」

「主は今、夢を見ています・・・永遠なる夢を・・・」

「夢・・・だと？」

管理人格はこくりと頷く。

「真崎龍牙・・・そこをどいてください。主や守護騎士達は・・・
あなたを愛しく思っている。私はそんなあなたを傷つけたくはない。
・・・」

管理人格はそう言うが、龍牙はフンと鼻を鳴らし

「断る！お前を倒して、はやてを呼び戻す！！お前等！手伝え！！」

「「うん（はい）！！」」

「・・・愚かですね」

管理人格はそう呟いた。すると

「なのは!」

「「フェイト!!」」

ユーノ、アルフ、リニスが来た。

「心配になってきてみたけど・・・まさかこんなことになってる・・・って龍牙!？」

アルフは龍牙の姿を確認し、驚く。

「・・・安心しろ、今は味方だ」

龍牙はそういい構える。

「くるぞ!!」

管理人格がついに動き出した。

「ロツテ達の思念通話が途切れた・・・クッ・・・そろそろか」

グレアムはそう呟き、デバイスを手にする。

「行くでしょう、闇を終焉にするために・・・」

グラムはそう言うと、海鳴市へと転移した・・・。

「はぁ・・・はぁ・・・」

海鳴市閉鎖空間にて、龍牙、フェイト、ユーノ、リニスは肩で息をしていた。なのはとアルフは、この閉鎖空間で逃げ遅れた民間人の保護へ向かい、ここにはいない。

「私達の攻撃が・・・全くきかない・・・？」

リニスは思わず歯を食いしばる。

「チツ！・・・さっさとはやてを・・・はやてを解放しやがれ！！」

龍牙は押し殺したような声で言う。

「それは出来ません。主は我が内で安らかな眠りについている。悲しみから永遠に逃れるために... 龍牙、あなたもわかるでしょう？ 家族を失った悲しみを・・・」

「くっ！」

図星をつかれ、言葉を止める。だが

「確かに・・・俺だって悲しみから逃げる為に夢を見ていたい・・・
だけど！悲しみを乗り越えて、前を向いて歩かなきゃ、人は強くは
なれない！！はやて、そうだろ！！」

「」「」「龍牙・・・」「」「」

管理人格は目を閉じ

「・・・無駄です、あなたの言葉は主には届きません」

すると管理人格が、龍牙達に右手をかざし

「あなたも・・・永遠に眠れ」

キン！！

何本もの魔力で形成された、赤い短剣を飛ばす。

「させないよ！」

フェイトが、短剣を砕いていった。

「テ、テストロッサ・・・」

「龍牙！ボーっとしちゃだめだよ！」

フェイトは龍牙にそう言う。

「・・・ああ！」

龍牙は頷き

「機神双獣撃！！はあ！！はああ！！！」

グオオオオオオオオ！！

二体の覇龍を管理人格に放った。だが

「はああ！！！」

バシユン！！

管理人格はいとも簡単に覇龍を打ち消した。

「う、嘘だろ・・・」

「……」

管理人格は無表情のまま、闇の書のページをめくり

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫
け、閃光……」

大気中の魔力が流星のように、闇の書の手を集まる。そして手を振り下ろすと

「スターライト…ブレイカー」

ゴオオオオオウ!!!

桃色の砲撃がに放たれる。

「チツ!!」

龍牙達は何とか砲撃をかわすが、龍牙は気づいた。その砲撃の先に、
なのはが居る事を。

「まずい!!」

龍牙は砲撃よりも早く、なのはの下へ飛んだ。

「なのは!アンタ、一体何やってんのよ!」

「アリサちゃんに、すずかちゃん!」

「何でここ一般人が!」

アリサとすずかは、なのはのもとに駆け寄った。

「そんなのこつちが聞きたいわよ！人が急に消えて…一体何が起こつてるのよ…」

「それは…」

なのはは言葉に詰まる。一般人が結界の中に取り残されているとは思わなかったし、その一般人はクラスメートのアリサとすずかであったからだ。

「なのは、取りあえず二人を安全な場所に移動させないと！二人はアタシに任せて！」

「お願いします、アルフs「なのは！後ろ！！」えっ！？」

なのはが後ろを向くと、桃色の砲撃がなのはに迫っていた。

「ッ！？」

なのはは咄嗟にプロテクションを張ろうとしたが

「うおおおおお！！！！！！」

龍牙が砲撃の前に現れ、砲撃を受け止める。

「くう・・・おりゃあっ！！！！」

ゴオオオオオオオオオ！！！！

龍牙は砲撃を空へと弾いた。

「リュウ君!!」

「えっ!? 龍牙!?!」

なのはが龍牙の名前を呼んだ瞬間、アリサとすずかが反応した。

「あんた龍牙なの!?!」

「? ああ・・・お前、俺の事知ってんのか?」

龍牙はそう言うが、アリサは声を荒げ

「何言ってるのよ! 私を忘れたの!?!」

アリサの言葉に、龍牙は

「・・・すまん、俺は記憶が無くなっていてな・・・お前等は俺の事を知ってるかもしれないが・・・俺は覚えていないんだ」

「記憶が・・・無い!?!」

なのはは驚く。

「リュウ君記憶が無くなったの!?!」

「ああ・・・言ってなかったか?」

「言っていないの!?!」

龍牙は「あゝ」といった声を出し。

「そんなことより、高町！そいつら安全なところに連れて行け！！」

「わかったの！！」

龍牙は再びフェイト達の下へ飛んだ。

「龍牙君……」

「あいつ……何で……」

アリサとすずかはそう呟いた……。

フェイト達は、未だ管理人格との戦いに苦戦していた。こちらの攻撃は全く通用していない。あの龍牙の攻撃でさえ、いとも簡単に防がれた。そして、フェイトは一つの手段を選んだ。自分の渾身の一撃を、管理人格に叩き込む。

「いくよ、バルディッシュ！！ハーケン……セイバー！！」

バルディッシュの魔力刃は輝きと大きさを増す。

「はぁぁあ！！」

フェイトは管理人格に向かい、その閃光の戦斧を振り下ろす。その瞬間、はるか上空から声が聞こえた。

「闇の書よ・・・これで終焉だ・・・!!」

上空に居るグラムが、氷結のデバイス。デュランダルを構え、管理人格目掛けてエターナルコフィンを発動した。

「なっ!？」

エターナルコフィンの射線上に、奇しくもフェイトが居た。このままだと、あの魔法をくらってしまう。フェイトがそう思った瞬間

「どけえ!! テスタロッサ!!」

ドンッ!

龍牙は、フェイトを突き飛ばした。その瞬間

キイイイイン!!!!

「龍牙!？」

龍牙はエターナルコフィンが直撃し、右半身が凍りついた。

「ぐっ・・・この・・・いけ! 覇龍!!」

グオオオオオオオ!!

まだ凍りついていない左腕で、覇龍を打ち出した。

バコオオン!!!!!!!!

「!」

覇龍はデュランダルに当たり、グレアムは思わずデュランダルを手放してしまった。

バサッ

龍牙の背後に、闇の書を開いた管理人格の姿。

「しまっ……!」

「……龍牙……我が内で……眠るといい……」

管理人格がそう呟き、龍牙の身体が光に包まれる。

『Absorption』

そして……龍牙は闇の書に吸収された。

「そ、そんな……龍牙あああ——!」

フェイトの悲痛な叫びがその場に響いた。

第二十三話「悲劇」(後書き)

闇の書に取り込まれた龍牙!!彼はどうやって乗り切るのか!!?次回お楽しみに!!

第二十四話「護るために『神化』」

(前書き)

ども〜白き修羅です！タイトルでわかるように・・・ついに！！です！！！では第二十四話、どうぞ！！

第二十四話「護るために『神化』」

「ま、まさか・・・」

これは誤算だった。管理人格目掛け、エターナルコフィンを放ったところまではよかった。だが、エターナルコフィンの射線上に、あの金色の魔導師が居て、さらにその魔導師を突き飛ばし、代わりに龍牙がくらってしまった。しかも龍牙の放った攻撃が、デュランダルに当たり、思わず手を離してしまった。

「くっ・・・まさか・・・龍牙君が・・・」

グレアムはそう呟いた・・・。

フェイトは絶望していた。あの龍牙が自分を守り、自分の目の前で消えてしまったのだから・・・

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトの近くに来る。

「フェイトちゃん！リュウ君は!？」

「龍牙は・・・闇の書に・・・吸収されて・・・」

フェイトは震えた声で言う。

「そんな・・・リュウ君が・・・？」

「なのは！フェイト！くるよー！！」

なのはとフェイトはハツとし、管理人格に視線を向ける。管理人格は無表情のままだ・・・だが

「ッ！！」

管理人格は体を抱え苦しみだした。さきほどの表情と違って変わり、苦痛に耐える表情をしていた。

「闇の書さん！！どうしたんですか！？」

なのはは心配そうに言う。

「もうすぐ崩壊が始まる。いずれ私と主は防御プログラムに取り込まれるだろう・・・」

「そ、そんな・・・」

「そしたら・・・龍牙君とはやてちゃんは・・・？」

ユーノとリニスは一瞬絶句した。どうすれば・・・いい・・・？なのは達そう考えたが・・・答えは見つからなかった・・・。そしてその

瞬間、管理人格は光りに包まれた。

・・・はやては今、車椅子に乗って真っ暗な暗闇の中に居た。

「眠い・・・」

はやてはそう呟く。すると、目の前に銀色の髪と赤い瞳をもった女性が見えた。

「そのまま御休みを、我が主。目を閉じて・・・心静かに夢を見てください」

「・・・夢？」

はやては呟く。

「健康な身体。愛する者達と、ずっと続いていく暮らし。眠ってください。そうすれば、夢の中であなはずっと、そんな世界にいられます」

「（確かに・・・そんな世界には憧れるわ・・・このまま夢見てよ
うかな・・・）」

はやてがそう思った瞬間。どこからか声が聞こえた。

『悲しみを乗り越えて、前を向いて歩かなきゃ、人は強くはなれない！！はやて、そうだろ！！』

「龍牙君！？」

力強い龍牙の声が、はやての耳に届いた。そしてはやては目を閉じ

「管理人格さん・・・やっぱりダメやわ・・・」

「えっ？」

「確かにさっき言ってたような世界には憧れとる」

はやては言った。

「ならば何故？」

「けど、わたしはこんな幸せ望んでない。これはただの夢や」

「主はやて、貴女はもうつらい現実に向かう必要はないのです」

銀髪の女性の言葉を聞き、はやては目を開く。その瞳は真っ直ぐと女性を見据えていた。

「覚醒の時に、今までのこと少しは解ったんよ。望むように生きられへん悲しさ。私にも少し解る。シグナム達と同じや！」

「主……」

「それに……私と同じ悲しみを知っている龍牙君を置いて、私人で夢見るなんて、私はできへん!!」

そんなはやての言葉を聞き、女性の紅い瞳から涙が流れる。

「しかし、もうどうにもなりません。暴走は進みすぎています。例えば管理者権限を使っても、止まるかどうか……。破壊は、絶望は、悲しみの連鎖は終わりません……」

女性の頬に手を添えて、はやては優しく告げる。

「諦めたらあかん。今のマスターは私や、マスターが諦めん限り、貴女も諦めたらあかん!わかったな、リインフォース!」

「リイン……フォース……?」

「貴女の名前や!もう『闇の書』とか『呪いの魔導書』とか言わせへん。私が呼ばせへん!」

「私の……名前……」

「そうや!強く支える者、幸運の風、祝福のエール。『リインフォ

ース』。それが私が付けた貴女の名前や！」

リインフォースの紅い瞳から、大粒の涙を流す。

「主・・・私に・・・名を下さるのですか・・・？」

「当たり前や！リインフォースは私の家族や！家族に名前があるのは当然やろ！？」

「私を・・・家族とまで・・・」

すると、リインフォースは立ち上がる。

「わかりました、我が主。家族を守る為に、私も運命に逆らってみましょう」

「うん！」

リインフォースの言葉にはやては頷く。その瞬間、はやてとリインフォースは白い光に包まれた。

「おいで……私の騎士達」

リインフォースが光りに包まれた後。ビルの屋上に、四つの魔法陣が展開される。紫と赤と緑と白の四色の魔法陣から、四人の人影が出現し、ゆっくりと目を開いた。四色の光がビルを飛び、海を越えた。向かうのは、新たに生まれた夜天の王のもと。四色の輝きが、白銀の光を守るように囲んでいた。巨大な黒い球体と、小さな白銀に輝く球体。その場にいる全員が固唾をのんで見守る中、閃光が走る。なのは達は思わず目を閉じた。一瞬の間の後、なのは達の目に映ったのは、光を囲む四人の人影。

「シグナム！」

「ヴィータちゃん！」

なのはとフェイトはそう名前を叫ぶ。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

「主在る限り、我らの魂尽きること無し」

「この身に命在る限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

シグナム、シャマル、ザフィーラが言葉を紡ぎ、ヴィータを最後に、

白銀の球体が砕け散る。そこにいるのは、黒い服を着て、十字の杖を手にしたはやてであった。

「はやてちゃん！」

なのはがはやての名を呼ぶと、はやては「もう大丈夫」と笑顔になる。そして空色の瞳を天に向け、はやては杖を高く突き上げる。

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風リインフォース、セツトアップ！」

杖の先端に、光が集まる。リインフォースとの融合が始まった。それと同時に、白い上着と帽子、黒い腰当を纏う。

「はやて…」

ヴィータは涙で潤んだ瞳ではやてを見つめる。

「…すみません」

「あの、はやてちゃん、私達・・・」

シグナムの謝罪とシャマルの弁明をはやては遮った。

「ええよ、みんな解ってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど、細かい事は後や。今はおかえり」

「・・・ところで・・・真崎はどこに？」

シグナムの問いに、フェイトの表情は暗くなる。

「・・・龍牙は闇の書に吸収されて・・・」

「！？そんな！！」

シグナム達は驚愕する。すると、上空からクロノが降りてくる。

「すまないな、時空管理局執務官。クロノ・ハラOWNだ。時間が無い、簡潔に説明する。あそこの黒い澱み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する」

クロノは黒い澱みを指差し、なのは達にそう言う。

「僕等はそれを何らかの方法で停めないといけない。停止のプランは、現在一つだけだ・・・軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる」

「クロノのその言葉に、なのはとヴィータは反論する。

「そんなことしたら、龍牙君はどうなるの！？」

「それにアルカンシエルをこんな所で撃つたら、はやての家がぶっ飛んじゃうじゃんか！」

ヴィータは両手で大きくバツテンを作る。

「なら、一体どうすればいいんだ！？」

クロノは若干自暴自棄ながらに言う。

「奇跡を・・・奇跡を待つしかないな」

クロノの背後で、グレアムが呟く。

「！？あなたは！？」

クロノが驚いた声を上げる。

「奇跡・・・だと？」

シグナムがそう言うと、グレアムは頷く。

「彼なら・・・真崎龍牙君なら・・・奇跡を起こすだろう・・・あの男の・・・真崎靱の息子なら・・・！」

グレアムがそう言い放った。その時、

ギューウウウンッ！！

黒い淀みが膨れ上がる。

「夜天の魔導書・・・呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の・・・闇」

はやてが呟くと、黒い淀みが砕ける。そしてそこに居たのは・・・

「あ、あれって・・・」

フェイトは目を疑った。防衛プログラムであろうそれは色は違えど、

フレームは植物の蔓^{つる}に似た物で構成され、黒い頭髪を靡かせ、灰色の甲冑を身に纏った獣を思わせる外見。

「リュウ君のバリアジャケットと・・・同じ・・・？」

そう・・・龍牙のバリアジャケットと同じ形状をしていた。

「グウウウ・・・」

うなり声を上げ、防衛プログラムの口部が展開し

「□□□□□□――！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

突然雄たけびを上げ、なのは達に襲い掛かった。

「・・・あれ？」

俺はふと目を覚まし、辺りを見渡す。ここは・・・ミッドチルダの、

俺の家？

「龍牙——！朝よ——！」

「は、は——い——！」

俺は誰かに呼ばれたので、居間へ向かった。

居間の扉を開けると、そこに居たのは……

「む？ようやく起きたか、龍牙」

「もう、休日だからって寝すぎよ」

父さんが新聞を見ながら食卓に、母さんがキッチンで料理を作りながら、笑顔で俺を見た。

「父……さん？……母……さん？」

俺は目の前の光景を疑った……父さんと母さんが……何で……？

「ほら、早く座りなさい」

「う、うん……」

俺は椅子に座った。母さんは料理を食卓に運び、椅子に座った。

「それでは食べようか。いただきます」

「いただきます」

「い、いただきます」

俺はついつられてそう言った。俺は料理を食べた・・・母さんの料理・・・おいしいな・・・

「今日は珍しく李香も休みだし・・・皆でどこかへ遊びにでも行くか」

「それいいわね！私見たい映画があるの！」

「お前は子供か？はしゃいでどうする・・・」

「あはは・・・」

父さんのツッコミに、母さんは空笑いする。いつもの父さんと母さんだ・・・俺は今とても嬉しいんだろうな・・・けど・・・

「父さん、母さん・・・ありがとう・・・けどさ、これは『夢』なんだろう？」

「「ッ・・・」」

「俺が・・・一番見たくて・・・一番望んだ・・・夢」

俺がそう言つと、暫しの沈黙が続いた。

「・・・そうだ、これはお前が望んだ・・・夢だ」

父さんがそう言う。

「・・・」

俺は席を立った。

「ごめん・・・父さん・・・母さん・・・俺、行かなきゃ・・・あ
（、）（い）（つ、）（等を・・・護るために・・・」

「・・・そうか・・・なら俺は止めん。それがお前の選んだ・・・
答えなら」

「私達は・・・いつでも龍牙を見守ってるからね！」

父さんと母さんの言葉に、俺は強く背中を押された。

「龍牙・・・俺の頼みを聞いてくれないか？」

「？」

「・・・ギルに伝えてくれ・・・俺はお前を許そう・・・親友とし
て・・・と」

俺は頷く。

「ああ、わかった！」

そして俺は踵を返し

「父さん・・・母さん・・・例え夢の中でも・・・また会えて嬉しかった！！それじゃ・・・行つて来ます！！」

「行つてらっしゃい、龍牙！！」

「行つて来い！お前の道を貫く為に！！」

そして俺の体は、光りに包まれた。

「行つたか・・・」

「そうね・・・」

二人はそう呟いた。

「本当に強くなったわね、龍牙」

「当たり前だ！！俺達の息子なんだからな！！」

「フフッ、それもそうね」

その言葉を最後に二人の体は、美しい光りの粒子となり・・・消え

ていった。

「そ、そんな・・・」

「つ、強い・・・下手をすれば・・・真崎並だ・・・」

シグナム達は片膝をつき言う。

「□□□□□□！！！！！！」

もはや声にもならない雄叫びを上げ、防衛プログラムはなのはに近づき

「□□□ツ！！」

「キャアア！」

なのはは防衛プログラムの拳を受け、吹き飛ばされる。

「『『『『『なのは(ちゃん)!!!!!!』』』』』」

ガシッ!!

「・・・?あれ?」

吹き飛ばされていたはずなのは、誰かに抱きとめられた。なのは視界に入った、『紅』によって気づかされる。

「よ、なのは。大丈夫か?」

「りゅ、リュウ君!?」

「『『『『『『!?』』』』』」

皆が驚いた表情をした。

「リュウ君!!今『なのは』って!!リュウ君、記憶が!?」

「おう、バッチリだ」

「□□□□ッ!!」

防衛プログラムは龍牙目掛け突っ込んできた。

「なのは!下がってろ!!」

龍牙はなのはを後ろに降ろし

「でりゃああ!!」

「□□□!!!!」

バキイン!!!!

「「!?!」」

龍牙と防衛プログラムは、互いに拳が当たり吹き飛ば

「龍牙!!」

フェイト達が、龍牙の下へ来る。

「龍牙君、大丈夫!?!」

「ああ・・・」

龍牙は、はやてに視線を移す。

「・・・戻ってきたか、はやて」

「うん! 龍牙君の言葉のおかげや!!」

「そっか、本当によかった」

龍牙は安心した声を上げる。

「□□□□!!」

防衛プログラムは、ゆっくりと起き上がった。

「・・・お前等、下がってる。あいつは俺が何とかする・・・」

「なっ!?!」

「真崎!何を言っている!!」

「そつだよ!あんな強い奴、一人じゃ無理だよ!!」

皆が龍牙に制止を呼びかける。だが龍牙は

「俺は・・・自分が出来ないことを言ったことはない!!」

「『『『『『ツ!?!』』』』』」

皆は気づく。確かに、龍牙は一度も自分が出来ないことを言ったことは一度もない。

「お前等は見えていてくれ・・・俺の戦いを!!」

龍牙はそう言い残すと、防衛プログラムに向かっていった。

「・・・いいのか高町!テストロッサ!真崎を行かせて!!」

シグナムはそう声を荒げて言う。

「うん・・・大丈夫!!」

「龍牙なら・・・絶対何とかする!!」

少女達は信じている。不可能を可能にすることができる・・・彼の事を・・・。

「はぁあ!!」

「□□□!!」

ギイン!!

龍牙と防衛プログラムの蹴りがぶつかり、火花を起す。そして両者は距離をとる。

「・・・さしずめ『アインストバオト』。といったところか・・・」

龍牙は、防衛プログラム（以降アインストバオト）の姿を見て、皮肉ぶりに言う。そして龍牙は「フウ・・・」と息をはき

「・・・防衛プログラム。もしお前に意志があるのなら・・・少しだけでもいい、動きを止めてくれ」

すると龍牙の言葉に应じるように、アインストバオトは動きを止めた。龍牙は少し驚いたが、言葉が続ける。

「意志はあるんだな……なあ……防衛プログラム。もうやめにしないか？…お前が居ると、はやて達が苦しむ。大人しく消えてはくれないか？」

龍牙はそうアインストバオトに言うが

□ □ □ □ ! !

雄叫び上げ、龍牙を睨む。

「やはり、力でしか無理か……」

龍牙は静かに眼を閉じる。

「力でしか力を止められぬなら・・・力を以て道を示さねばならぬのなら・・・俺もさらなる力を求めよう……アレース……俺の覇気全てを以て新たなる力を俺に示せ……！護るべき者達のために……！争覇の先に真道があることを信じて……！俺は今、阿修羅の道を往く……！アレース……！！」

「御意！」

「おおおおおおおお おお おお おお おお おお !!!!!!!!!!!!!!!」

龍牙は眩き白き光に包まれる。

そして…光が晴れると、バリアジャケットの色が紅から、美しい白に変わり、バリアジャケットの肩部など、様々な場所の先端などが紅くなり、髪の色は、鮮やかな赤に変わった。

そして、龍牙は構え

「刮目しろ！！これが『神化』を遂げた、俺とアレースだ！！」

龍牙は吼える。

最強の『修羅』が時空を越え、ここに誕生した

第二十四話「護るために『神化』」

（後書き）

ついに神化した龍牙！！次回、無双&ご都合主義全開でいきます！
！

第二十五話「決着。『真覇猛撃烈波』」

（前書き）

今回、防衛プログラムと決着！！

第二十五話「決着。『真覇猛撃烈波』」

「きれい・・・」

なのはは、龍牙のバリアジャケットを見てそう呟いた。

「あれが・・・真崎の・・・」

「龍牙君・・・」

はやては拳をギュツと握った。すると、シャルマルが手はやての手を優しく包んだ。

「大丈夫ですよ、はやてちゃん。龍牙君なら・・・絶対に大丈夫です」

シャルマルはニコツと笑い言う。

「せやな・・・龍牙君・・・絶対に勝って・・・!」

はやてはそう願った。

「□□□ーッ!!!!」

アインストバオトは、龍牙に向かう。

「・・・」

ドコオ!!

「!!!??」

アインストバオトは龍牙の音速を超える、光速の拳で吹き飛んだ。

「・・・遅い」

そう龍牙が呟いた瞬間

キン!!

「□□□!?!」

鋭い眼光に、アインストバオトは怯む。そして

ブウン!!

龍牙は一瞬にして、アインストバオトの眼前に飛び

「□□ツツ!!」

バアアアア!!!!

スフィアから、砲撃が放たれる。

「（もし俺がここで避ければ・・・間違いなくなのは達に・・・だが!!）」

龍牙は構える。

「俺に避ける選択肢などはない!!真霸光拳!!」

両腕に覇気をため

「貫けええ!!!!」

ゴオオオオオオ!!!!

龍牙は両腕から覇気を連続で乱射する。

パキイン!!!!

スフィアは放った覇気で全て砕け、アインストバオトに何発か直撃した。

「□□□□・・・」

「・・・クロノ!!」

「な、何だ突然!!」

急に名前を呼ばれ、あたふたしたクロノ。

「こいつをアルカンシエルでぶっ飛ばすつもりだったんだろ? けど、もうその必要はねえよ」

「な!? まさかお前!!」

龍牙は「ああ」と頷き

「このまま俺がコアごとぶっ潰す!!」

「そんな事、お前に出来るのか!?!」

「出来る!! だから言ってるんだ!!」

「ッ!!」

龍牙の勢いに、ついクロノは押される。

「クロノ、龍牙君に任せましょう」

クロノの横にモニターが出現し、リンディが言う。

「・・・龍牙!! 必ずあれを止める!! いいな!!」

ビシッと指を指しながらクロノは言う。

「お前に言われなくてもそうする・・・お前等! 少し離れてろ!!」

龍牙は一気に詰め寄り、アインストバオトの胴体に拳打をくらわせ、背後に移動し

ドゴオオ！！バキイン！！

覇気を纏わせた蹴りを高速で何発も放ち、蹴り飛ばす。そして龍牙は蹴り飛ばした所へ行き

バキィ！ゴオオ！！ゴアア！！！！

拳と脚の連打をあて、上空へと吹き飛ばす。それと同時に、龍牙は上空へ跳び

「でえええええいつ！！！」

バアアアアン！！

両腕から覇気を放ち、アインストバオトはその覇気によって地面に叩きつけられる。

「□□□□ツ・・・！！！」

アインストバオトはもがくように唸るが、龍牙の攻撃は止まらない。

ガキイン！！

龍牙はアインストバオトを上空から、跳び蹴りをあてる。

「っおおおおおおっ！！！！！！！」

ゴオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

「『『『『『『『『『『？』』』』』』』』」

龍牙の作った空間から、一匹の龍が現れた。その龍の頭部には、ア
INSTバウトが居た。

「うおおおおおお！！！！！！ここだああああ！！」

龍牙が吼え、アINSTバウトの胴体に腕を突き入れた、その時

バギイイインン！！！！！！

轟音と共に、アINSTバウトの胴体はコア諸共貫かれた。

「□□□□□□□□——————ツツ！！！！！！？？？？」

アINSTバウトが雄たけびを上げると

パアアアアアア！！！！！！！！！！

激しい光を放つ。なのは達は思わず、その眩しさで目を瞑った。

そして数秒が経ち、光りが収まる。なのは達は目を開けると、そこ
にはアINSTバウトの姿は無く、白いバリアジャケットを纏い、
右手に光りの球を持った龍牙だけがいた。

第二十五話「決着。『真覇猛撃烈波』」

（後書き）

次回、A Sラストです！お楽しみに！！

第二十六話「一つの終わり」

(前書き)

ついにA S 編終了!! 長かった・・・内容が多々おかしいところが
ございますでしょうが、どうぞ!

第二十六話「一つの終わり」

「リュウ君!!」

なのはを先頭に、皆が龍牙の方に飛んでくる。

「・・・ッ!!」

龍牙はガクツと膝をつく。

「龍牙君大丈夫!？」

はやてとリインフォースが龍牙に駆け寄る。

「ああ・・・ちょっと覇氣を使いすぎた・・・」

龍牙にとって覇氣とは、いわば生命エネルギー。ここまで使用すれば疲弊するのも当たり前だろう。

「リインフォース、ほれ」

龍牙はリインフォースに光りの球を差し渡す。

「龍牙・・・これは？」

「俺が何とか初期化した・・・防衛プログラムだ・・・これを組み込めば・・・お前は消えずにすむ」

「ほ、本当ですか!？」

龍牙はコクリと頷く。

「アレースの中に、プログラム初期化システムを搭載してあつてな・
・それを使って、防衛プログラムに直接打ち込んだ。まあ・・
成功するかどうかは・・賭けだったけどな・・」

龍牙のその言葉に、リインフォースは涙を流し

「龍牙・・ありがとう・・」

リインフォースはそう言うと、まるで抱くようにで光の球を吸収した。龍牙はその様子を見て、思わず安心する。するとクロノが

「龍牙・・先程の力について、話を聞かせてもらおう」

龍牙に近づこうとするが、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィ
ーラがそれを遮る。

「みんな!! 一体何を!!」

はやてがシグナム達のとつた行動に異を唱えようとするが

「主、申し訳ありません・・龍牙の身柄を管理局に渡すわけには
いかないのです・・」

シグナムはそう言う。

「シグナム、それは一体どういうことや？」

はやてはそう問う。するとヴィータが

「管理局はな・・・龍牙の父さんを・・・!!」

ヴィータが言葉を続けようとしたが

「素晴らしいっ!!」

上空から声が聞こえ、龍牙達はそちらを見る。

「てめえ・・・ジードル!!」

龍牙達を見下ろす、ジードル・ファルクスがそこに居た。

「龍牙・・・あの人は？」

フェイトは龍牙にそう問う。

「あいつが・・・俺の記憶を消した奴だ」

「「「「!?!?!」」」」

「あの人が・・・龍牙君の記憶を・・・」

「おっと、君達は初めて会っね・・・私はジードル・ファルクス。
第零研究所の局長だよ」

ジードルはそう言い、お辞儀をする。

「しかし・・・本当に驚いたよ・・・まさか記憶改変を打ち消すとは・・・そんな君に朗報だよ！君の憎んでいる、グレゼン・バークは私が殺しておいた！！」

「「なっ！？」「」

クロノと龍牙は驚いた。

「ぐれぜんばーぐ？」

はやては「なんのこっちゃ」といった表情をする。するとクロノの横にモニターが開き

「グレゼン・バーク。管理局に所属しているの提督よ・・・」

リンディが言う。

「あなた・・・本当に彼を殺したの！？」

「フクク・・・ああ、本当だよ」

ジーデルは不適に笑いながら言う。

「そういえば・・・リンディ・ハラウン。君にジュエルシード、そして今回の闇の書の件を回したのは・・・グレゼンだったよね？」

「そ、そうよ・・・」

「フクク・・・皮肉だねえ・・・真崎靱を殺した男の命で動いていたなんて」

「「「!?!?!」」」

「何ですって!?!」

リンディは驚愕した。

「まあ・・・詳しい話は、真崎龍牙君に聞きたまえ。それでは・・・失礼するよ」

「待ちやがれ!!」

「フクク・・・次に会う時を楽しみにしてるよ・・・紅き修羅よ・・・」

ジードルはその言葉を最後に、まるで元からそこに居なかったように消え去った。

「くっ・・・」

龍牙は力なく倒れた。

「リュウ君!!」

「急いで龍牙君をアースラの医務室へ!!」

そうして、龍牙はアースラの医務室へ運ばれた。どうやら、度重なる疲労、覇気の使用のしすぎで気絶したようだ。それ以外体には異常が無いとのことらしい。はやての方も、侵食も完全に止まっただけで、リンカーコアも正常作動していて、不自由な足も時を置けば自然に治癒することだ。そしてはやてとシグナム達は、保護観察処分となった。無論、龍牙もだが・・・。

そしてアースラの会議室にて。龍牙、なのは、ユーノ、テストロツサ一家、アルフ、リニス、はやて、ヴォルケンリッター、リンディ、クロノ、そしてエイミイがここに居た。

「あのジードルって男が言ってた通り、グレゼン提督の死体が彼の部屋で発見されたわ・・・」

「そうですか・・・」

龍牙は腕組みをして言う。

「龍牙君・・・話してもらえるかしら?・・・鞠君の事を・・・」

リンディは神妙な顔で龍牙にそう言う。

「わかりました・・・今からある映像を見せます・・・アレース、頼む」

「御意・・・」

龍牙はテーブルにアレースを置き、アレースは映像を流した。

「そんな・・・まさか、グレゼン提督が・・・」

「こ、こんな事が・・・」

「酷い・・・」

リンディは心底驚いたようだ。自分に命令を出していた男が、まさか鞠を殺したとは。クロノは未だ信じられないようだ。そして・・・今のところ龍牙にとって一番の問題が発生した・・・。

「えっぐ・・・ひっぐ・・・可哀想だよ・・・」

「うっつ・・・ぐすつ・・・龍牙・・・っ!」

「・・・こんなの・・・こんなの酷すぎる!」

「・・・つく!・・・えっぐ!」

龍牙は今、なのは、フェイト、アリシア、ヴィータに抱きつかれて、
まともに身動きが取れない。

「・・・龍牙・・・何で言わなかったの?」

クロノが龍牙にそう問う。

「・・・俺一人でどうにかしようとしていた・・・けど・・・グレ
ゼンが死にしまったから、どうにもできなくなったがな・・・」

龍牙は目を閉じながら言う。

「・・・がない・・・」

「えっ?」

クロノは立ち上がり

「こんなの信じられない!! 管理局が・・・こんな事をするわけが
ない!!」

クロノはそう叫ぶ。だがその瞬間、龍牙がクロノの目の前に立ち

グイッ!!

「龍牙君!?!」

思いつきりクロノの胸倉を掴み

「てめえは『世界はこんな筈じゃ無い事ばかりだ』と分かっている筈だ・・・てめえが信じていた管理局だけはそんな事は無いと心のどこかで思ってるかもしんねえ・・・だがな、時空管理局もあくまでその『世界』の一部に過ぎねえ!!・・・管理局にも『こんな筈じゃ無い』事が溢れてるんだよ!!」

龍牙はクロノをバツと離す。クロノは椅子に座り込む。

「そんな事もわかんねえようじゃ・・・ただの『ガキ』だ・・・『執務官』失格だな・・・」

「ッ!？」

「クロノ!？」

クロノは部屋から走り出してしまった。

「リュウ君!少し言いすぎだよ!」

なのはが龍牙にそう言うが

「あいつはまだ『ガキ』なんだよ・・・あれくらい言わないとわかんねえさ・・・」

「・・・」

龍牙の言葉になのは達は沈黙する。

「父さんを殺したグレゼンはもう居ない・・・もうこの話は終わりです。リンディさん、グレラムさんは今何処に？」

「グレラム提督？彼はあの後急に倒れて、今医務室に居るわ」

「わかりました。ちょっとグレラムさんの所に行つて来ます」

龍牙はそついい残し、部屋を出た。部屋に残つた者達は、気まずい雰囲気だつた・・・。

「・・・・・・・・」

グレラムはベットに横たわり、医務室で静かに天井を見ていた。その時

コンコン

「誰だい？」

グレゼンがそう言うと、龍牙が部屋に入ってきた。

「龍牙君・・・」

「・・・グレラムさん。少しお話よろしいでしょうか？」

「ああ、構わないよ」

龍牙はベットの近くの椅子に腰をかけた。

「・・・」

「・・・」

二人は何も喋らず、ただ沈黙し時間が過ぎていった。そして、沈黙を破ったのはグレアムだ。

「・・・しかし驚いたよ・・・あの闇の書を・・・いや、今は夜天の書か・・・あれを本当にどうにかするなんてね・・・さすがは・・・
・ 鞠の息子だ・・・」

「・・・グレアムさん」

「・・・鞠は・・・私を許さないだろう・・・」

グレアムは言葉を続ける。

「彼の息子である君を利用し・・・さらには君を危険な目に合わせ
てしまった・・・そんな私を・・・彼は許さないだろう・・・」

グレアムは目を閉じ言う。そして

「グレアムさん・・・父さんから、あなたに伝言です」

「!?!」

「『俺はお前を許そう・・・親友^{とも}として』と・・・」

「靱が・・・私を・・・」

グレアムの瞳から、涙が流れた。

「俺はあなたとは本当に小さいときに会ったから、あなたの事はあまりわかりません・・・父さんはきつと・・・あなたがどんな事をしても・・・あなた許してたでしょう・・・だって・・・あなたと父さんは親友^{とも}なんですから」

「ッ・・・」

「それじゃ、俺はこれで」

龍牙は一礼し、立ち上がり部屋を出る。

「・・・靱、君は・・・私を許してくれるのか・・・ありがとう・・・」

誰も居ない部屋で一人、グレアムはそう呟いた。

「・・・何でお前がここに？」

龍牙は医務室の前で立ち止まっていた。何故なら目の前に、クロノが居るのだから。

「……グレゼン提督の事について本局から連絡があった……彼は……管理局で回収したロストロギアを私的に所持していたことが……明らかにになった……」

明らかに暗い表情でクロノが言う。

「……それで？」

「すまなかった!!」

クロノは頭を下げた。龍牙は驚いた表情をする。

「僕は……確かに『世界はこんな筈じゃ無い事ばかりだ』と分かっていて……信じていた管理局だけはそんな事は無いと心のどこかで本当に思っていた……だけど、君に言われたとおり、時空管理局もあくまでその『世界』の一部に過ぎなかった……僕は……僕は……」

龍牙はクロノの肩に、ポンツと手を置き。

「自分でそれをわかったんなら……もう俺は何もいわねえよ」

「龍牙……」

「フツ……『ガキ』顔から、ようやく『執務官』らしい顔になったじゃねえか？」

「ッ！？放っておけ！！」

「ハハッ・・・もし悩みでもあったら俺のここに来い。相談相手ぐらいにはなってるやんよ」

龍牙は手をひらひらさせながら、この場を去った。

「・・・全く・・・本当にくえないやつだよ、君は・・・」

クロノはそう呟き、自然と笑みをこぼしていた。

そんなこんなのにざこざがあったが、俺は海鳴市の高町宅へと帰宅した。土郎さんと桃子さんに『心配した』と怒られた。けどリンデイさんの弁解により、それ以上怒られずにすんだ。そしてあの時あの場に居た、アリサとすずか達にも会い、魔法について色々話した。まあ、二人とも驚いたのは当たり前前の話だが・・・。

そして俺は、八神宅へと赴いた。リインフォースの様子を見るためだ。

「よっ」

俺は居間に居るはやて達にそう言う。

「あ、龍牙君！」

「おう、龍牙！」

「いらっしやい、龍牙君」

「む、龍牙か……」

「……」

「龍牙、来たのですか」

はやて達がそれぞれそう言う。

「はやて、管理局に入るってホントか？」

俺の問いに、はやては頷く。

「私のせいで色々な人に迷惑をかけた……だからな罪滅ぼししたいんよ……本音言うとな、龍牙君のお父さんをあんな目に合わせた管理局に入るのは……あんま乗り気やない……けど、管理局

に入らんと、簡単には罪滅ぼしなんかできないんよ・・・」

「・・・はやて」

はやては贖罪の為に管理局に入る。それが例え、自分が気に入らなくても・・・。フツ・・・強い娘だよ。

「そうだな・・・俺も・・・罪滅ぼしすっかな・・・」

「えっ？」

「いや、何でもねえよ・・・さて、俺はもう帰るよ。今日はリインフォースの様子を見に來ただけだったし・・・どうやらリインフォースは大丈夫そうだな」

「はい・・・おかげさまで」

「そっか、ならいいんだ」

俺は踵を返し

「じゃ、また来るよ」

「あ！龍牙！」

ヴィータが俺の服の袖口を引っ張る。

「ん？どした？」

「前の約束！！」

約束・・・？

「・・・なんだよ！もう忘れたのかよ！今度一緒に新しいアイス屋に行くって約束したじゃんか！」

「あ、ああ、そうだったな！すまんすまん！時間が空いたら一緒に行こうな」

俺はヴィータの頭を撫でる。

「約束だぞ！！」

「ああ」

俺は頷き、玄関を出た。

「龍牙」

玄関を出て数歩歩いた時、リインフォースに呼び止められた。

「何だ？」

「・・・龍牙、単刀直入に言います。あなたは、主と騎士達との思
い出が・・・」

「!?!?!まさか、気づかれるとはな」

俺はリインフォースの方を向き

「ああ、そうだ。俺の記憶から・・・はやてとヴィータ達との思い出が無くなった」

俺の言葉に、リインフォースは表情を変える。

「やはりですか・・・」

「吸収されて、抜け出すときに・・・だろうな」

「・・・悲しくはないのですか?」

リインフォースの問いに、一瞬迷ったが

「・・・確かに悲しい・・・けど幸いにもはやて達の事は、しっかりと覚えてる。だからさ」

一息置き

「思い出ならまた作ればいいじゃねえか」

「!?!」

「一度消えた記憶を取り戻すのは難しい・・・けど、思い出はいくらでも作れる!だから、悲しむことはねえんだよ」

俺は笑いながら言う。

「・・・強いですね・・・あなたは・・・」

「弱さ・・・弱いから、こんな風にしか言えないんだ」

「・・・」

「じゃあな、体。大事にしろよ」

俺はそう言い、歩んだ。

そうだ・・・俺は作る。新しい思い出を・・・消えた思い出よりも・・・もっと楽しい思い出を・・・!!

・・・少年達の一つの戦いは終わった。少年達には・・・暫しの安息が・・・訪れるだろう・・・

第二十六話「一つの終わり」

（後書き）

白・A S 編終了!!

龍・ようやく・・・だな

白・お、久しぶりに来たな

龍・まあ・・・色々あったからな・・・しかし、リインフォースの
ところはご都合主義全開だったな・・・

白・言うな・・・さて、次回からしばらくの間、空白期に入ります
!!

龍・お楽しみに!

空白期 「お悩み相談？」（前書き）

ども！白き修羅です！空白期は軽くこんな話から始めてみます。
はどうぞ！

空白期 「お悩み相談？」

クリスマスからはや二週間。高町一家やテストロッサー一家、そして八神一家はクリスマスの日はそれぞれ目一杯楽しんだそう。それは後々語るとしよう…

そして、翠屋にて。ピークの時間も過ぎ、翠屋の隅っこのテーブルで、二人の少年が居た。片方は綺麗な赤髪が目立つ。龍牙だ。そしてもう片方は、黒髪の少年。クロノだ。龍牙は机に肘をつき、クロノの話を聞いている。どうやら龍牙は若干…いや、かなり不機嫌そう。

「グレラム提督は希願退職をするそう。罪を償うらしい…僕はそれは正しい選択だと思う…だけど問題は上層部だ！グレゼン提督の真崎勅准尉殺害の件で、もはや死んだ人間に対して、罪をどうこうできるなはしではない。よってこの件は終わりだ。だぞ！ふざけているにも程がある！それに…って龍牙聞いているのか！？」

「…あのよ…確かに悩みがあったら相談に来いとは言ったがな…」

龍牙は思いつき机を叩き

「ここ一週間毎日来ることはねえだろ！！」

するとクロノも机を叩き

「いつでも相談や話相手になると言ったのはお前の方だろう!？」

その言葉に龍牙はプチゅっとキレた。龍牙はクロノの体を引っ張り「てめえ!まだ悩み聞く位なら別に良いが、毎日愚痴聞くこちらの
みになってみやがれ!!このクロノ・KY・ハラオウンが!!」

ギリギリギリギリ!!

龍牙はクロノにコブラツイストをきめる。

「あだだだだ!!!!龍牙止める!」

「黙れ!このクロノ・グチオウンが!!」

バツ!ギリリリリリ!!

龍牙はクロノの体を倒し、腕固めをきめる。

「ちよっ!?!さつきと名前が!!ってイタタタ!!龍牙ギブ!ギ
ブ!折れる!本当に折れてしまう!!」

「折れる!KY愚痴野郎は折れてしまえ!!」

「ちよっ!まつ!あ~~~~~~~~~!!!!
!!!!!!!!」

それから十分後。

「……………まだ痛い……………」

ポツリとクロノは呟く。

「ったく……………これに懲りたらもう毎日くんな、こっちも色々忙しいんだ」

クロノは龍牙の方を向き

「……………けど、何だかんだ言っても……………話はちゃんと聞いてくれるんだな」

クロノがそう言う。

「そろそろ帰るよ」

クロノは席を立ち上がる。

「おう帰れ。もし明日きたら腕固めじゃすまさねえぞ?」

「はは……………もう固め技だけは勘弁だな……………それではな」

クロノはそう言い、翠屋を後にした。

「……………まあ、前よりは丸くなった。かな?」

龍牙は笑いながら呟いた。

空白期 「お悩み相談？」（後書き）

何だかんだで仲のいい二人の回でした！基本平日の更新は難しいので、休日などに更新したいと思います！

空白期「クリスマスパニック!?」(前書き)

ども〜白き修羅です。今回の話は、少しキャラ崩壊があります。ご了承ください。

空白期「クリスマスパニック!?」

雪がしんしんと降り積もるクリスマス。龍牙は八神宅でクリスマスパーティをするために、準備をしていた。因みに余談だが、龍牙は闇の書事件から、一週間に二、三回は八神宅にとまっている。

「っと…ツリーはこれでOKかな…」

龍牙はツリーのでっぺんに飾りを置いて呟く。

「龍牙君、セッティングからなにやらありがとな」

「気にすんなって」

龍牙は笑いながら言う。

「さて・・・そろそろあいつ等がくるころk ピンポーン 来たか」

「…………おじゃましまーす!」「…………」

龍牙は玄関に赴く。玄関には、なのは、フェイト、アリシア、すずか、アリサが居た。

「よう、お前等。まあ上がれ」

龍牙はそう言い、なのは達を上がらせる。

「なのはちゃん達いらっしやい！」

「わあゝおっきいツリー！」

アリシアはツリーを目にしてそう言う。

「ツリーは龍牙君が全部やってくれたんやで」

「へえゝ！龍牙君すごい！」

「いや・・・別に」と龍牙は若干照れながら言う。

「はやてちゃん、ケーキもって来たよ」

「それ翠屋のケーキやん！ありがとな、なのはちゃん！」

はやてがなのはにそう言う。

「皆さんいらっしやい」

「よー！お前等！」

シヤマルとヴィータがキッチンから来た。

「はやてちゃん、準備終わりましたよ」

「了解やゝ後はシグナムとリインフォースが「ただいま戻りました」噂をすればやな」

シグナムとリインフォースが居間に入ってきた。

「さあて、ほなクリスマスパーティー始めよか！」

「「「「「おう！」「」「」」」」

「「お、おう・・・」」

なのは達は元気よく言う。その後シグナムとリインフォースが続いて言う。

「メリゝクリスマス！」

「「「「「メリゝクリスマス！！」「」「」」」」

パン！パン！

はやての声かけの後になのは達が続ぎ、クラッカーが鳴る。

テーブルの上に幾つもの料理が並べられている。

「みんなどんどん食べてな！」

「じゃあ早速ケーキを」

ヴィータは真つ先にケーキを口に頬張る。

「~~~~!!このケーキゲキうまだな!!」

「フフ、当たり前だよ。お母さんが作つたんだもん」

「ムグ・・・相変わらずうまいな・・・」

龍牙はケーキを頬張りながら言う。

「おいしい」シャルまた料理の腕上げたな」

「龍牙君のおかげです」

シャルが嬉しそうに言う。

「あの・・・龍牙？」

「ん？どした？リインフォース？」

「あなたに渡しておきたい者があります」

「はい？物じゃなくて者？」

リインフォースはこくりと頷き、一つの箱を龍牙に手渡す。

「私からのクリスマスプレゼント・・・といったところでしょうか」

「フッ、ありがとなリインフォース」

リインフォースは顔を赤くして「いえ……」と呟く。その瞬間なのは達の視線が一気に怖くなり「くっ……出し抜かれたか……」
「思わぬ伏兵ね……」
「プレゼント用意できなかった……」と言った声が聞こえた……気がした。

「じゃあとりあえず空けてみるぜ」

「そうしてください」

龍牙が箱の包みを開けた瞬間

「どっかーん!!」

そんな声と共に小さな何かが箱の中から飛び出してきた。飛び出した小さな何かは、龍牙の周りをクルクルと飛び回る。

「初めまして! 2代目祝福の風リインフォース・ツヴァイです! よろしくです〜!」

身長約30cm『リインフォース・ツヴァイ』が龍牙の前にいた。

「……リインフォース?」

龍牙はリインフォースの方を向き、ホワイ???といった表情をする。

「私が龍牙のサポートの為に生み出したユニゾンデバイスです」

「ちょっと待て・・・俺は魔力どころかリンカーコアを持っていないんだぞ？そんなんでユニゾンできるのか？」

「問題ありません。その為にアレースと龍牙の身体を解析したのですから」

「だからアレースを貸してくれって言ってたのか・・・」

龍牙は顎に手を添えて言う。

「（まさか・・・こういう形でツヴァイが生まれるなんて・・・まあ、今のはやてにはリインフォースがいるからな・・・やはりこの世界は予測が付きにくいな・・・）んで？サポートって例えばどんな？」

「龍牙の使用している、覇気を更に使いやすくするといったものです。あの『神化』という姿も長時間使用できるようになるでしょう」

「へえ〜そいつはいいな。『神化』は最高でも十分しか持たなかったし・・・」

龍牙はリインフォース・ツヴァイの方を向き

「さて・・・お前の呼び名はリインフォースだと被るから・・・リインでいいな？」

龍牙の問いに、リインは頷く。

「はい！リインでいいOKです〜！」

「んじゃあ早速ユニゾンしてみますか？」

「はいです！」

リインは龍牙の差し出した手に触れ

「ユニゾン・イン！」

龍牙とリインは光に包まれユニゾンした。

そして光が収まり、俺は手を握ったり開いたりする。

「リイン、問題ないか？」

「はい！全て良好！相性もばっちり！最高です！」

嬉しそうにリインが言う。・・・あれ？気のせいかな目線が高いよう
な・・・。俺はなのは達の方を向くと

「ふえ〜〜・・・」

「うわあ〜〜・・・」

「・・・か、かつこいい・・・／／／」

「大人龍牙君・・・／＼／」

俺は思わず首を傾げる。

「・・・真崎、鏡を見てみる」

シグナムにそう言われ、居間の鏡を見ると

「うおー!!」

俺はめっちゃ驚いた。そこに居たのはいつもの小さい俺じゃなく、まんまフォルカ・アルバークだったから。しかも身体の奥から力が湧いて来る・・・。

「（なるほど・・・体が小さいとまず覇気を最大限に発揮できないのか・・・これは知らなかった・・・だからそれに対しての対策か・・・）」

俺はそう考え

「よし、リイン。もういいぞ、ユニゾン解除だ」

「了解です!」

俺とリインはユニゾン解除し、目線が何時も通りに戻る。

「ま、とりあえず、これからよろしくな」

「はい!よろしく願いします!とうさま!」

「ホワイ???」

少し時間が止まった。俺ははリンに問いかける。

「リ、リン?ワ、ワンモアプリーズ?」

「リンでOKです!」

「いや!その後!」

「え、え〜と・・・とうさま？」

「それ!!」

俺はリインにビシッと指を指して言う。そして俺はリインフォースの方を向き

「リインフォース・・・どういうことだ？」

「リインは結果として龍牙のデータを元に生み出した存在です。いわば、龍牙の子供同然です」

「・・・どんな理屈だよ・・・はあ・・・」

俺は特大のため息をはいた。するとリインが

「・・・とうさまって呼んじゃダメですか・・・？」

うぐう!!!!!!上目遣い+涙眼・・・何時ぞやのなのはとフェイトを思い出す・・・

「と・・・とうさまで構わん・・・」

つい負けてしまった・・・何で俺はこっぴつに弱いのかね・・・。

「と〜さま〜えへへ〜」

リインは俺の飛びついてくる。

「・・・まあ、何はともあれありがとな、リインフォース」

「フフ・・・あなたには返しても返しきれないほどの恩があります。気になさらないでください。それと・・・娘を大事にしてください」

「おう、わかつ・・・た？」

あれ・・・なんか気のせいかな・・・気になる単語が・・・娘？

「おいリインフォース・・・お前・・・今娘つて・・・」

「はい。リインは私が生み出しました。ですから母親は私です」

「「「「「異議あり！！！！」」」」」

なのは達がリインフォースの言葉に異論を唱える。

「リ、リインフォース・・・主である私を差し置いて龍牙君と子供を作るやと！？」

「こればかりは譲れません♪だって・・・フフフ・・・♪」

リインフォースは不敵な笑みをこぼす。あれえ？リインフォースってこんなキャラだったのか？すると次になのはが

「リュウ君はまだ小学生だよ！子供なんてまだ早いよ！」

「もう出来てしまったものは仕方ありません」

「絶対私は認めないよ！」

ギヤーギヤー！！！！

なのは達はギャーギャー騒ぎ始めた。全く……騒がしい……俺はソファアに座る。

「大變だな、龍牙」

「まあな……モグッ……」

俺は口に料理を入れる。その瞬間

「**ングツ！！**」

見事にのどに詰まった……水！水！俺はとりあえず、目の前にあった飲み物に手をつけた。

「む、龍牙、それは酒……」

ザフィーラの言葉を聞く前に、俺は一気飲みしてしまった。

「 . . . g% & \$ # (& % & ! ! ? ? ? ? 」

思わず変な声をあげ、床にたおれてしまい、目の前が白くなった。

ボタンッ！

「『『『『『『『』!?!?』『』『』『』『』『』『』」

龍牙が突然倒れ、さっきまでもめていたなのは達が、一斉にそちらを向く。

「龍牙!」

リインフォースが龍牙を抱き起こす。

「一体何が・・・」

「ザフィーラわかるか?」

ザフィーラはこくりと頷き

「のどに食べ物詰まったらしく、目の前にあった酒を一気飲みしたらこうなった」

「それで・・・」

そしてその時

バツ!

龍牙が突然リインフォースに抱きついた。

「なっ／／／龍牙／／／」

よく見れば龍牙の頬は赤く染まっている。ようは酔っている。

「はっはっはあゝゝゝどうした？リインフォースゝこれぐらいでなにはずかしがってんの？かわいいやつあゝ」

チュツ

龍牙はリインフォースの頬にキスをした。

「／／／／！！！？？？」

ボンー！ パタン

リインフォースは顔を真つ赤にし、倒れた。龍牙はゆっくりと立ち上がり。

「あゝなんかすんごくでんしょんがあがってきたゝゝえい！」

龍牙はシグナムに抱きつく。

「し、真崎／／／？！」

「シグナムもかわいいよなゝゝ」

「なっ！？私がかわっ！？」

「はむ」

「ひゃあああ／／／／！！！！」

龍牙は一瞬の隙をつき、シグナムの耳をあま噛みした。シグナムはヘナヘナと倒れこむ。

「シ、シグナムを一瞬で・・・」

「す、すごい・・・」

なのは達は一步後ずさる。

「龍牙なにやってんのよ！全くなんも」ふう・・・「ふあああ／／／！！！」

アリサは威勢よく前に出たが、龍牙に耳に息をかけられ、ふにやふにやした。

「ふっふっふうっ・・・」

龍牙はなのは達の方をゆっくりと向く。

「ちよっ！リュウク」おりゃあ~~~~「にゃあああ／／／！！！」

なのはの歡喜の断末魔の後に

「あひゃあああ！！！！／／／」

「ふああああ！！！！／／／」

「ひゃあああん！！！！／／／」

「ふわああん！！！！／／／」

「ひゅわあああ！！！！／／／」

それぞれ叫び声を上げた。

そして翌朝

「うん・・・」

龍牙は頭を抑えながら起き上がる。

「とうさま！おはようございますう！！」

リンが龍牙の元に飛んでくる。

「おう、おはよう。って俺なんで部屋で寝てるんだ？」

龍牙は首を傾げながら言う。

「確か昨日、食い物が喉に詰まって、飲み物飲んで・・・ダメだ・・・
その後の記憶がねえ・・・リン、はやて達は？」

「下で寝てますう」

「そっか」

龍牙はベットから降り、居間へ赴いた。

「・・・なんじゃこりゃ・・・」

龍牙は目の前の光景を目にして、思わず呟く。居間には、はやて達が幸せな表情で床に倒れ・・・寝ていた。

「な、なにがあつたんだ・・・」

「とうさま野獣ですう!」

「はい?どういうこと?」

龍牙は全く訳のわからない様子だった。

そして・・・はやて達が結論づいたことは一つ。

「「「「「「「「「「龍牙（リュウ）君に酒は飲ませないようにしよう・・・」」」」」」」」」」

と。

空白期「クリスマスパニック!?」(後書き)

やらかしたwなんか完全にギャグ回になってしまった・・・リイン
フォース・ツヴァイことリイン登場!!これで龍牙も更に強化され
ました!!次回お楽しみ!

『夢』（前書き）

ども、白き修羅です。今回は短いです。そして何気に意味深的な感じ
です。ではどうぞ

『夢』

どこかの花畑だろうか色鮮やかな花がさいている。そしてそこに・
・二人の人影ある。

「何故です…何故あなたは去るのですか、…！」

左目が美しい紅、右目が鮮やかな翠の虹彩異色の女性が、左目は太陽のように煌めく黄金、右目は女性とはまた違う、美しい碧の虹彩異色の男性に声を荒げて言う。

「もう・・・お前の傍に俺が居る必要が無くなったからだ」

「そんなことは有りません！私には・・・私には、あなたが必要です！」

男性はゆっくりと振り返り、その瞳で女性を見る。

「必要は無いさ・・・何故なら・・・お前はもう強いからだ」

「えっ？」

「お前はもう充分に強くなった。俺が護る必要がなくなるくらいな・
・それにお前には…が居る」

「っ・・・」

男性は踵を返す。

「さらばだ・・・オリヴィエ・・・良き王になれ・・・」

「待つて!...!!」

「む・・・」

龍牙はむくつと起き上がり、眠い目を擦る。

「んん・・・何だ・・・今の夢？」

「どうなさいました？マスター」
アレースは龍牙にそう問う。

「いや・・・変な夢を見たなーって」

「変な夢？」

「ああ・・・ま、別に気にすることじゃねえよ（オリヴィエ・・・
どうかで聞いたことある名前だけど・・・まいっか）」

龍牙はベットに寝転がり

「さてもう一眠りしますかね・・・」

「わかりました」

「・・・ZZZ」

龍牙は再び眠りに着いた。

彼がこの夢の本当の意味を知るのは・・・まだ後のことである。

『夢』（後書き）

夢のお話でした。

近日中に空白期最新話更新します。お楽しみに

コラボ番外編『二人の紅き修羅』

（前書き）

どもども！白き修羅、略して白修羅です。今回の話は私の初コラボの回です！そして今回はコラボさせていただくのは、サーシェス先生の作品。魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s！転生した紅と蒼の修羅神！です！ではどうぞ！！

コラボ番外編『二人の紅き修羅』

「ということで、魔法少女リリカルなのは『紅き修羅の力を持つ者』の世界にイレギュラーが発生したので、フォルカ君に行ってもらいます!!」

フォ「ちよつと待て!何だいきなり!つてかあんた誰!？」

俺は当然の如くツツコミを入れた。家で寝てたら突然こんな所にいるし・・・目の前の奴は変なこと言ってるし・・・何が何だかわからん・・・つてか魔法少女リリカルなのは『紅き修羅の力を持つ者』つてなんだ？

フォ「あなたの居る世界とは違う、言わば平行世界よ」

心を詠んだ!？

「だつて私神様だもん♪」

まじで・・・?この人が神様・・・?なんて言うか・・・

フォ「なんで神様つてろくな奴居ないんだろう・・・」

「ひどい!!」

事実だろ・・・

フォ「んで?その世界に発生したイレギュラーつて?」

「あなたの世界に現れた、アインストよ」

な、なに・・・！？アインストが・・・！？

フォ「・・・わかった。その世界に送ってくれ」

「はいはい、それじゃいつてらっしゃい！」

俺の足もとに突然、大きな穴が空いた。・・・落ちるな

フォ「ってわあああー！」

落ちた。

「あなたが行く世界は転生者が居るから、その子と協力してね」後、
姿は子供になっちゃうから」

その言葉を最後に、俺の視界は真っ黒になった。

フォ「わあああー！！！！」

ドサッ

俺は地面に勢いよく落ちた。

フォ「いてて・・・ここは・・・？」

俺は周りを見渡す。そこは見覚えのある・・・リリカルなのは原作の舞台。海鳴市の公園だ

フォ「ん？やっぱ子供姿になってるな・・・」

あの神様^{バカ}に言われたとおり、身体が子供になっているのを確認し、とりあえず立ち上がる。

フォ「どこにアインストが・・・」

「マスター！前方に空間湾曲を確認！」

アレスのその言葉と同時に、突然空間が歪み、その歪みから何かが複数現れた。

フォ「クノツヘンに・・・グリート。それにゲミュートまで!？」

およそ50体前後のアインストの軍勢が現れた。まずいな・・・ここで奴等を倒さないとこの街の人に危害が・・・

フォ「アレス！セットアップ！」

ア「了解！セットアップ！」

俺はバリジャケットを身に纏い、アインスト共に突っ込む。

フオ「はああ!!」

バギン!!

クノッヘンに裏拳を決め吹き飛ばす。後方にいた数体のクノッヘンとグリートを巻き込み消滅する。

「
□□□□!!」

フオ「ちっ!」

俺はグリートの触手攻撃を上空に跳びかわし

フオ「機神爆砕撃!」

重力を利用し、グリートに向けて一直線に膝蹴りを当てる。

ゴガアア!!

グリートが轟音と共に爆発する。

フオ「貫け! 覇龍!!」

グオオオオオオ!!!!

右手に覇気を溜め、覇龍をゲミュートに撃ち出す。

「
□□□□!!??」

バゴオオオン!!!

ゲミュートは覇龍を避けようとしたが、覇龍はゲミュートを追尾しその胴体を貫き、爆発した。

フォ「大したことないな・・・このまま全部潰す!!」

俺がそう叫んだ瞬間、アインスト達の動きが変わった。

「「「「
□□□□!!!!!!」」」」

アインスト達は一つに纏まると、とてつもない咆哮を上げ光りに包まれた。

そして光りが晴れだすと、一つの姿が現れた。俺は思わず目を疑った。そこに居たのはアインストレジセイアだった。

フォ「なん・・・だと!?!」

「
□□□□!!!!!!」

レジセイアは触手攻撃を仕掛けてきた。グリートよりも早い!!

フォ「くう!!」

手足を触手に捕まれ、身動きが取れない。

フォ「く・・・フェルナンドがいれば・・・」

今は居ない相棒の名を呟く。レジセイアの胸部が光り、エネルギー

を溜めていく。ここ・・・までなのか・・・？俺がそう覚悟した瞬間。

「???「おりゃあっ!!」」

「バキヤアアア!!!」

「□□□!??」

レジセイアは誰かに殴られ、吹き飛んでいく。その時触手の拘束が解かれた。

「???「クロノに妙な反応があるから調査してくれって、頼まれて来てみたら・・・面白いのが居るな」」

俺は声が出た方を見る。そこには紅い鎧に、たなびく白い髪。・・・俺と同じバリアジャケットを身に纏っている奴がいた。

「フォ「あ、あんたは?」」

龍「俺か?俺は真崎龍牙。まあこういえば分かるか?転生者だ」

「フォ「!?!」」

「こいつがああ神様の言っていた転生者?」

龍「しかし何でアインストが此処に居るんだ?」

「フォ「俺の世界に居たアインストが、この世界に来たらしい」」

龍「ほお・・・それでお前はあれを倒すためにこの世界に来た。と
いったところか？」

フォ「あ、ああ。そうだ」

龍牙は「はあ」とため息をはき。

「どうせあのバカが呼んだんだろうな。そういえばお前名前は？」

フォ「フォルカ。フォルカ・ナカジマだ」

龍「ナカジマ？・・・なるほど・・・ってことは・・・」

「
□ □ □ ! ! !」

フォ「!？」

龍「む？」

吹き飛ばされていたレジセイアは、ゆっくりと起き上がった。

フォ「龍牙頼む！あいつを倒すのを手伝ってくれ!!」

俺がそう言つと、龍牙は

龍「ああ。アイツをこのままにするとこの街に被害がでる。手を貸
すぞフォルカ。さあ・・・行くぞ！」

フォ「ああ！」

俺と龍牙はレジセイアに向かって駆けて行った。

「□□□ッ！！！！」

ギユアアアア！！！！

レジセイアは胸部から砲撃を放つ。

龍「下がれ！フォルカ！」

俺はフォルカの前に立ち

龍「霸光龍壁！！」

ゴオオウウ！！！！

地面に左手を打ちつけ、霸龍を発生させる。砲撃は霸龍によって遮られた。そして俺とフォルカは両腕に霸気を溜め

龍&フォ「機神双衝撃！！せえい！せえい！！」

グオオオオオオオ！！！！！！

俺の放ったの霸龍は、レジセイアの左腕の触手部を、そしてフォルカの放った霸龍は、右腕の爪を砕いた。フォルカはレジセイアが怯んだ瞬間、レジセイアの背後に移動した。

フォ「でえええい!!」

ドコオオオン!!!

フォルカの凄まじい蹴りで、レジセイアはこちらに吹き飛んできた。

龍「うおりゃあ!!」

バギイイ!!!

右足に覇気を纏わせ蹴り上げる。

フォ「龍牙!!」

ガギイ!!

上空に飛ばされたレジセイアを、フォルカが踵落として叩き落とす。

龍「はああああ!! 貫け、覇龍!!!!!!」

グオオオオオオオ!!!!!!

右手から巨大な覇気を放つ。レジセイアは覇龍に喰らわれ、遙か上空に行く。

「
□□□——!!!!!!?????」

ゴオオオオオオン!!!!

レジセイアは覇龍に碎かれ爆発し、跡形もなく消え去った。

フォ「名づけて『双龍轟撃破』ってか？」

フォルカが俺の近くに降り、そう言う。

龍「フツ、それもいいな」

フォルカはバリアジャケットを解く。・・・まんま俺だな。とりあえず俺もバリアジャケットを解く。

フォ「うわ・・・まんま俺だな」

龍「同じこと考えてるし・・・」

フォ「へ？」

龍「いや・・・何でもない」

アレース「マスター、クロノ様から通信です」

龍「わかった、つなげてくれ」

龍牙の目の前にモニターが開く。

ク「龍牙、調査は終わったか？」

龍「ああ、とりあえず問題は解決した」

ク「問題？それは一体」

プツン

龍牙は通信を切った。

アレース「よいのですかマスター？後でクロノ様のお怒りを受けますよ？」

龍「構わねえよアレース。何か言ってきたら絞めとくから」

アレース「（見た目は同じでも話し方とかが全然違いますね）」

フォ「（確かにな）」

俺がアレスと念話をしていると

「おつかれ〜〜〜！！」

空から神様が降りてきた。

神「バカで通すのやめてくれない！？」

フォ&龍「事実だろ」

俺と龍牙は見事にハモツた。

神「二人してひどい!!」

神様はorz状態になる。だが直ぐに立ち上がり

神「さて、フォルカ君!あなたのこの世界での役目を終えたので、元の世界にかえします!」

フォ「ああ、頼む」

俺の体が光りに包まれた。

龍「もう行くのか?」

フォ「ああ。俺は元の世界でやらないとことが有るからな」

龍牙は「そうか」と目を閉じ

龍「今度会うときは、ゆっくりと話してもしたいものだ。また会おう、フォルカ」

フォ「ああ!」

俺と龍牙はかたく握手をかわした。

神「てゝんそう!」

その神様の言葉と共に、俺の視界は光りに包まれた。

「行ったか・・・」

「そうですね」

俺は踵を返す。

「さて、かえろうアレース」

「その前にクロノ様に報告です」

「あーそうだったな・・・」

面倒だな・・・もし何か行ってきたら腕十字固めでも決めとくか。
それにしても・・・

「（フォルカ・ナカジマ・・・か。ってことは今はstriker
sだな）」

俺は笑みを浮かべ

「頑張れよ？『転生せし紅き修羅神』よ」

俺は歩み始めた。自らの未来に向かって・・・

フェ「フォルカ！何処に行ってたんだ！！」

フォ「俺達と同じ転生者のところだよ」

フェ「スバル達を説得すのにたいは……って転生者のところ！？」

フォ「ああ」

俺はこくりと頷く。真崎龍牙……すごい人だったな……また会ったら手合わせでも願おうかな？

フェ「なあ！なあ！その転生者ってどんな奴だった！？」

興味津々にフェルナンドが聞いてくるが

フォ「秘密だ」

フェ「何だよそれ……！！」

フェルナンドはうなだれる。

フォ「（また会おうぜ。『紅き修羅』）」

俺はこころのなかでそう呟いた。

同じ力に同じ姿。合間見えるはずのない彼等を引き会わせたのは、
正に神様の^{バカ}気まぐれであつた・・・

神「最後の最後までこの扱い!？」

コラボ番外編 終

コラボ番外編『二人の紅き修羅』 (後書き)

白・どうだったかな？変じゃなかったかな？

龍・さあ？それを決めるのはサーシェスさんだろ

白・だな・・・サーシェスさん如何でしたか！？変なところがあったらご指摘お願いします！！

龍・バカ作者の初コラボの回でした

空白期「レッツ看病!!」(前書き)

更新しました。今回は完全にシグナムの回です。では、どうぞ!!

空白期「レッツ看病!!」

烈火の将シグナムだ。突然だが、私は真崎の事が好きだ。・・・家族としてではなく、一人の女として・・・。キツカケは真崎に助けてもらった時だろうな・・・真崎に好意を抱いたのは。ただ・・・好意を抱いているのだが問題がある・・・それは・・・

真崎と一緒に居る時間が極端に無い。

主はやてと高町、テストロッサ姉妹、月村、バニングスはいつも学校で会って一緒に居る。ヴィータは真崎とアイス屋に行っている。シャマルは真崎に料理を教えてもらっており、一緒に居る。リインフォースに限っては娘（私は認めては居ない）のリインに会いに行くという口実で真崎と一緒に居る。

「何故私はこんなにも真崎と一緒に居る時間がないんだ!!」

と思わず叫んでしまいそうになってしまった。むう・・・口実でもつけて一緒に居る時間でも作るか?・・・やはり模擬戦でも申し込むか?・・・何故私は戦う事しか考えられん。クツ、戦うことしか出来ない自分が憎い。そして・・・私にも転機が訪れた

朝。

「真崎が風邪ですか？」

「そや、今日それで学校休むらしいで」

シグナムは腕を組む。

「それで、真崎はどうしているのですか？」

「今二階の部屋で寝てるで。私はこれから学校行くから、シグナムは龍牙君の看病頼むな？」

「シャル達はどうしたんですか？」

「ザフィーラ以外みんな用事があつて居ないんよ。だからシグナムにしか頼めへん。だから頼むで」

「は、はい！わかりました！！」

何時にも無くシグナムは元気で言う。

「ちゃんとお昼ご飯も食べさせるんやで。ほな行ってくるわ」

はやては鞆を手にし、居間を後にした。

「・・・真崎の様子でも見に行くか」

シグナムは龍牙の部屋に向かった。

「真崎、入るぞ」

シグナムは部屋の扉を開けた。

「あ」

ちょうど龍牙は着替え中で、上半身裸だった。

「・・・すまない！！！！」

シグナムは急いで扉を閉めたが、ある事に気づいた。

「おいシグナム、もう入ってきていいぞ」

ガチャと扉を開ける。

「全く、ノックぐらいしろよな」

「す、すまない・・・真崎・・・胸の傷の痕・・・まだ残っているのだな」

シグナムは暗い表情で言う。

「・・・ああ、何故かこの傷跡だけは治せないんだ・・・っと」

龍牙はふらつきながらベットに寝転ぶ。

「きつそうだな」

「ああ。こんな熱出したのは初めてだ・・・」

因みに龍牙の熱は42度らしい。・・・明らかに普通なら死ぬレベルだろう。

「んで？シグナム俺に何か用か？」

「お前の看病をしると主に言われたのでな・・・まあ・・・願っても無い事だったがな・・・」

「なんか言ったか？」

「い、いや、何も言っていないぞ／＼！！」

「なら別にいいんだが・・・」

「・・・真崎動くな／＼」

「？」

ピッ

シグナムは龍牙の額に、自分の額を当てる。

「・・・ふ、ふむ／＼・・・かなり熱いな。氷を持ってこよう」

「頼むよ」

シグナムは部屋を出た。

「・・・シグナムが看病か・・・少し心配な気が・・・はあ・・・」

そう呟いた龍牙。

シグナムは氷を袋に入れ、持ってきた・・・ところまでは良かったのだが・・・

「・・・なあシグナム」

「なんだ？」

「おかしくないか？」

俺は頭に乗っている氷袋を指差す。その袋の大きさは、軽く人の頭サイズだ。お、重い・・・

「これだけあれば十分だろう？」

「・・・いや、確かに十分だけどさ・・・重いんだが・・・」

「我慢しろ。風邪を治すためだ」

シグナムは正論を言っているつもりで言う。シグナム、正論を言っているつもりなんだろうが・・・絶対違うぞ！！

「（・・・まあ、シグナムなりの配慮なのかな？）」

俺は心の中でそう呟いた。すると

グウッ

俺の腹のなる音がした。

「私が何か作ってこようか？」

「・・・でいいのか？」

ジト目で俺はシグナムを見る。

「バカにするな！この烈火の将シグナムに、出来ないことなどない！！」

シグナムはそういい残し、部屋を出て行った。

「・・・シグナムが料理か・・・かなり心配な気が・・・はあああ・・・」

かなり心配になり、大きなため息を吐く。

シグナムはおかゆを作ってきた。・・・ところまで・・・よかった。
・・・いや、おかゆは意外と普通だった。だが・・・

「だーから！一人で食えるって言うてんだろー！」

「ダメだ！病人は病人らしくしろ！」

「どういう理屈だそれ！」

いざ俺がおかゆを食おうとしたとき、シグナムがスプーンを取り、シグナムの手で食べさせようとしてきた。ようするに・・・「あゝんしろ」と言ってきた。因みに俺はおかゆを食べるときはスプーン派だ。

「ほら、真崎」

「ぐっ・・・」

シグナムは一步も引き下がらない。・・・仕方ないな・・・。

「わかったよ・・・ほれ、さっさと食わせろ」

「あ、ああ／＼／＼、それでは・・・あ、あゝん／＼／」

「あゝんぐ・・・むぐ」

「ど、どうだ？主みたいにうまくはいかないが・・・」

シグナムはもじもじして言う。

「んゝ普通にいけるぞ？」

「そ、そうか・・・よかった・・・」

シグナムはホツとした表情になる。俺はシグナムの手を見た。何箇所か、軽いやけどの痕がある。・・・まあ頑張ったんだな。意外と健気な奴なんだな・・・シグナムって。

そしておかゆを食べ終え、俺は寝ようと考えていた。

「真崎、何かしてほしい事はないか？」

「特にないな・・・というか、してほしい事って・・・他人から聞けば誤解を招くような発言だぞ？」

「なっ！？別に私は変な意味で言ったわけではないぞ！！」

「わかってる、わかってる」

「・・・個人的にはお前からしてほしい事が色々あるのだが・・・」

「は？」

「い、いや！なんでもない！！」

「・・・まあいいや、俺寝るから静かにしててくれよ」

「わかった」

俺は目を閉じて、寝に入った。

「・・・ZZZ」

「寝むったか・・・」

私は静かに寝息を立てる真崎を見ながら呟く。

「（・・・看病と言われて何をすればいいか色々迷ったが・・・まあ何とかあっただろう）」

私は心の中でそう呟く。

「（・・・ふと考えてみれば・・・私がまともに真崎と一緒に居るのは、今が初めてか・・・！？／／そう考えると胸がときどきしてしまふ／／／）」

・・・初めてだろうな。私がこういう感情が芽生えたのは。私は真崎の頬にそっと手を添える。

「・・・真崎、私はお前に助けられた。あの時の恩・・・絶対忘れない」

チュッ

真崎の前髪を優しくかきわけ、真崎の額に口付けをする。

「真崎・・・私は・・・」

言葉を放とうとしたが

バンッ！！

「」「」「何してるの！」「」「」

扉が勢いよく開かれた。そこには、主、高町、テストロッサ姉妹が居た。

「シグナム！今見たよ！龍牙のおでこにキ、キ、キ、キ！！／／／」

「キス？」

「そう！」

「シグナム！主を差し置いて抜け駆けとは・・・シグナムに任せたら安心かな？」と思ったんやけど、ちょっと胸騒ぎがするな？」と思って早く帰ってきたら・・・シグナムに任せたのはどうやら失敗だったようやな？」

あ、主の瞳のハイライトがない！？

「シグナムさーん・・・ちょっと・・・お話しようか？」

た、高町まで！？ま、まずい・・・非常にまずい・・・ど、どうす

れば・・・

「うるせーぞ」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

真崎は何時の間にか起き上がっていた。

「・・・人が静かに寝てんのに・・・騒ぎやがって・・・ちょっとお話すんぞ?」

「「「「「ごめんなさい!?!?!?!」」」」」

真崎のにらみで、主達はしずかになった。

「ったく・・・静かしてろよ・・・」

真崎はそう言い放ち、再びベットに寝転がった。

「「「「「シグナム」」」」」

「（ビクッ!?!?!?!?!）」

主達は小さな声で呼ぶ。

「ちょっと来てもらおうか」

「は、はい・・・」

私は主達に引きづられ・・・お話をされた・・・どんな内容？思い出したくない・・・

それから真崎の容態は一向に良くならず、風邪一週間続いた。一日おきに看病の番を主たちがしていたのは・・・別の話だ。・・・私はそれ以降看病をさせてもらえなかったのも・・・別の話だ。

「まあ、少しの時間だったが・・・と一緒の時間が出来て良かった」

私は真崎の事が好きだ。優しく、強く、とても男らしい真崎を私は好きだ。この気持ちは、私が消え果るまで、なくなることはないだろう。

空白期「レッツ看病!」(後書き)

どうでしたか?・・・こういう感じの難しいですね・・・そして・
・次回からS t sに入ろうと思います!!え?なのは達のはやらないの?いえいえ・・・やりますよ?もちろん・・・ククク・・・
次回オタノシミニ!!

S t r i k e r s スタート第二十七話「空港火災」(前書き)

S t s 編スタート!! 早速空港火災から始めます。

Strikers スタート第二十七話「空港火災」

「ギン姉・・・どこ・・・？」

空港のエントランスホールの中で一人の少女『スバル・ナカジマ』が、姉であろう名前を呼びながら歩く。彼女の周りは火に包まれている。

「ッ！？」

天井が崩れ、瓦礫がスバルの頭上から落ちてくる。スバルは思わず目を瞑り、このままだと下敷きになってしまう。スバルがそう思った瞬間。

バゴオオン！！

轟音とともに、瓦礫が破壊された。

「え・・・？」

スバルは恐る恐る目を開けると、そこには、炎よりも紅く煌めく鎧を身に纏い、その紅とは対照的に、白くたなびく髪をしている一人の男が立っていた。そしてその男は鎧を解き、少女に近づく。

「ケガはないか？」

「は、はい・・・えつと・・・あなたは？」

スバルの問いに、男は答える。

「時空管理局『特務機動隊』隊長。真崎龍牙中将だ」

赤い髪の青年。龍牙は優しい笑顔で

「もう大丈夫だ。君を助けに来た」

龍牙はそうスバルに言う。

「あ、あの・・・ギン姉知りませんか？」

「ギン姉・・・君の姉さんだな、少し待ってくれ・・・まだ救助リストに載っていない・・・」

龍牙の言葉に、スバルは暗い表情になる。すると、一人の人影が現れる。

「リュウ君！」なのは、ちょうどいいところに来た」

白いバリアジャケットを身に纏っている少女、なのはが龍牙に近づく。

「なのは、この子を頼む。俺はこの子の姉を探してくる」

「うん、任せて」

龍牙は歩もうとすると、スバルが龍牙の服の袖を掴む。スバルはとも心配そうな表情をしている。龍牙はスバルの頭を撫で

「大丈夫、君の姉さんは必ず助ける。俺を信じろ」

龍牙は笑顔で言う。スバルは静かに、コクリと頷く。

「リュウ君、気をつけて」

「ああ、なのはもな」

龍牙は紅き鎧を再び身に纏い、その場を離れた。スバルは龍牙が視界から消えるまで、ずっと見ていた。

「リュウ君なら大丈夫だよ、あなたのお姉さんもきっと助かるよ」

なのはは、スバルに優しく言う。

「ギン姉・・・」

非常階段の場所に一人の少女が居た。

「スバルー！どこに居るのー！？」

『ギンガ・ナカジマ』がスバルの名を叫び、歩き続ける。彼女の周りもまた、炎に包まれている。ギンガは、一歩足を動かしたその瞬間

ガラッ！！！！

ギンガの足元が突然崩れる。

「きゃあああ！！！！」

ガシッ！

「・・・え？」

ギンガが落ちる寸でのところで、紅い鎧を身に纏っている龍牙が、ギンガをしっかりとキャッチしていた。

「大丈夫か？」

「は、はい・・・」

龍牙は安全な足場に降り、ギンガを優しく降ろす。

「時空管理局の者だ。ギンガ・ナカジマだな、君を助けに来た。」

「あ、あの！」「スバルは無事だ。今、管理局に保護されている」そうでしたか・・・」

ギンガはホッとした表情を浮かべる。

「龍牙！！」

黒いバリアジャケットに金髪の少女、フェイトが龍牙の側に降りてくる。

「フェイトか、そっちはどうだ？」

「うん、こっちはもう大丈夫。その子は？」

「救助リストに載っていなかった子だ。この子を頼むぞ」

「うん、龍牙はどうするの？」

「俺は、まだ誰が残っていないか探してくる。消化活動は少し待ってくれと本局に伝えてくれ」

「わかった」

龍牙はフェイトにギンガを預け、再び駆けていった。

S t r i k e r s スタート第二十七話「空港火災」(後書き)

如何でしたか？色々疑問に持つところがございますでしょうが、それは後々。次回お楽しみに！！

第二十八話「忙しくなる予感・・・」

（前書き）

ども、白修羅です！今回が時系列的に空白期『お悩み相談！？』から三日後の話です。本格的にはStsには、入りません。次回から、Stsへの布石を行っていきます！

第二十八話「忙しくなる予感・・・」

あのミッドチルダの空港火災の日から少し時を遡ろう。

「・・・ふむ・・・感知システムを追加すれば少しは変わるか・・・
?・・・むう・・・」

龍牙は自室の机の前で、アレースのデータを見て呟く。

ドタドタドタ!!

何やら階段から、複数の人が走ってきている足音が聞こえる。その音は次第に龍牙の部屋に近づき

「」「」「」龍牙（リュウ）君!!」「」「」

「どわぁ!!」

なのは、フェイト、アリシア、はやてが扉を勢いよく扉を開ける。
龍牙は体をビクツ!とし、アレースを手から落とす。

「あ!ちよっ!ま!はっ!」

龍牙は辛うじてアレースをキャッチするが

「うは！ー！」

ドン！

椅子と一緒に、後ろに倒れてしまった。

「つつつつ・・・何だいきなり！！びっくりすんじゃないかー！」

打ち付けた頭を摩りながら、龍牙は言う。

「ご、ごめんなさい、リュウ君・・・ってそれよりもリュウ君！」

なのは達は声を合わせて

「「「管理局に入るって本当なの（なんか）！？」「」「」

そう言った。

「あゝその話か・・・大方リインフォースにでも聞いたんだろ・・・」

龍牙はネックスプリングで起き上がり、椅子を立て、座る。

「ああ、俺は管理局に入る」

椅子の背もたれに寄りかかりながら、龍牙は言う。

「ど、どうして？管理局は龍牙のお父さんを・・・」

フエイトは言葉を詰まらせる。

「・・・俺は確かに管理局を恨んでいた。だがそれは管理局全体じゃなくて、あくまでも個人・・・グレゼンだけだった。実際管理局は、リンディさんやクロノ。そしてエイミイのようない奴等もいる。俺は全部が全部恨んでいるわけじゃないさ。・・・それに、俺が管理局に入る理由は二つある」

「理由？」

「ああ」

龍牙は頷き

「まず一つ、俺は記憶を失ってたとはいえ、他人、そして色んな生物を傷つけた。俺はこれに対して罪滅ぼしをしたい」

「・・・それで？二つ目は？」

「二つ目は・・・もしかしたらこっちが本音かな・・・」

龍牙は少し上を見上げて

「父さんと同じところに立ってみたい」

「「「「「えっ？」「」「」「」

なのは達は首をかしげる。龍牙は言葉を続ける。

「俺にとって父さんは目指すべき目標だった・・・だからその目標である父さんと同じ所を経ては少しは父さんに近づける。そう思ったんだ」

龍牙は曇り無い眼で言う。暫しの沈黙があつたが、その沈黙を破つたのはなのはだった。

「・・・私も・・・私も管理局に入る！」

「ちよっ！？なのは！？」

フェイトがなのはの方を向く。

「・・・いいんじゃないか？・・・俺は理由は聞かない。お前が決めたことに俺は口出しはしない」

「リュウ君・・・」

「だが・・・もう普通の暮らしをするのが難しくなるぞ？それでもいいのか？」

龍牙はそう問うが、なのはは頷き

「大丈夫だよ！私はもう覚悟は決めたから！」

そう力強く言う。するとフェイトとアリシアが

「「私も管理局に入るよ！」」

と声を合わせて言う。

「フェイトちゃん！？アリシアちゃんまで！？」

なのはは驚いた表情をする。

「まあ・・・理由はともあれ、お前等も覚悟あつての発言だろうな」

龍牙は腕を組んで言う。

「あたりまえだよ！」

「覚悟は決めてるもん！！」

フェイトとアリシアがそう言う。

「・・・なんか私だけ置いてけぼりのような・・・」

元から管理局に入ること決めていたはやてが、少しだけ空気になつていた。

「そう言うなよ、はやて」

龍牙は椅子から下り

「はやては兎も角、お前等は士郎さんやプレシアさん達に許可もらわないとダメだぜ？」

「「「わかった！」「」」

元氣よく言うのは達。

「（まさかなのは達が管理局に入るって言い出すとはな・・・まあ・・・俺の方も忙しくなりそうだな・・・）」

龍牙は心の中でそう呟いた。

そして二日後、龍牙は海鳴市の公園のベンチで、ある人物を待っていた。

「すまない、遅くなった」

クロノがベンチに座っている、龍牙に声をかける。どうやら龍牙が待っていたのは、クロノのようだ。

「ようクロノ、遅かったな。なんかあったのか？」

「いや・・・あまりの事で少々・・・いや・・・かなり・・・な」

「？」

龍牙は首を傾げる。

「ともかく、早速だが場所を移そう」

クロノは魔方陣を展開する。因みに、誰も見ていない問題ない。

そして龍牙とクロノは転移した。

龍牙とクロノは、ミッドチルダの時空管理局地上本部へと来た。

「それではついて来てくれ」

「おう」

龍牙はクロノの後を追う。

「母さん連れてきました」

とある部屋に連れて来られた俺。そこにはリンディさんが居た。

「お久しぶり・・・というわけではありませんね」

「フフフ、そうね。とりあえず座ってね」

俺はリンディさんの目の前にある椅子に座る。

「早速ですが、俺の陸士訓練学校の入学手続きはどうになりました？」

俺がそう言つと、リンディさんは言葉を詰まらせる。

「・・・えつと・・・そのね、龍牙君・・・驚かないで聞いてちょうだい・・・」

リンディさんは何時にもなく真面目な表情をした。ま、まさか・・・
「や・・・やっぱり魔力が無いから入学できないってことですか・・・？」

「えつと・・・確かに・・・龍牙君、あなたは陸士訓練学校に入学できません・・・ですが・・・」

リンディさんは一息置き

「上層部があなたを即戦力に欲しいと言っていて・・・」

「・・・つまり？」

「お前は陸士訓練学校うんぬん免除して、直ぐに管理局の局員になれるということだ」

「・・・は!？」

クロノのその言葉を聞き、思わず呆けた声を出してしまった。

「これは異例中の異例よ」

「僕もこれを聞いたときは、耳を疑ったよ・・・」

「だろうな・・・」

俺は遂呆れた風に言う。

「多分、ジュエルシードの破壊、そして闇の書の防衛プログラムの撃破・・・それらを一人でこなしたあなたを、上層部は直ぐにでも欲しいのじゃないね」

「それだけ人手不足・・・ということでしょうね・・・まあ、こちらとしては都合がいいですが」

俺は腕組んで言う。

「・・・後もう一つ、あなたに与えられた階級は『中将』よ」

ガラン！！

俺は思わず椅子に座っているのに、ずっこけた。

「ちょっとまってください！！いきなりその階級ですか！？いくらなんでもそれは・・・」

言葉が続けようと思ったが、リンディさんが何か言いたげなので止めた。

「龍牙君を中將に希望したのは・・・グレアム元提督よ」

「グレアムさんが！？」

リンディさんはコクリと頷く。

「グラム元提督が希願退職をするとき、『自分の枠は真崎龍牙に譲る』と上層部に言ったらいいわ。上層部は『入りたての者に提督の座はあまりにも早すぎる。だが真崎龍牙はある程度の力と実績を残している。せめて中将だ』って言って、グラム元提督はそれで納得したらしいわ」

「ま、まじっすか……」

俺は絶句した。

「けどまあ……ありがたくその階級は受け取っておきますかね」

苦笑しながら言う。

「因みに正式に本局員となるのは来年になります」

「わかりました。それじゃ用件はすんだんで、俺はこれで」

「そう、クロノ龍牙君をおくつて」あ、一人で帰れるんで結構です」
「わかったわ」

俺は部屋の扉まで歩む。

「龍牙」

不意にクロノに呼び止められ、俺は歩みを止める。

「今回の件は本当に異例中の異例だ……だが……お前になら中将を任せてもいいと、僕は思っている」

「・・・偉そうに言うんじゃないよ」

俺はクロノに近づき、笑いながら言う。

「フツ、今は偉そうに言わせて貰うよ、来年からは・・・そうはいかなくなるがな」

「ククク・・・違いねえ・・・じゃあな、クロノ」

「ああ」

パンツ！

俺とクロノはハイタッチをし、俺はそのまま部屋を出た。

これから先・・・色々忙しくなりそうだな・・・

俺はこのとき、そう思った。

第二十八話「忙しくなる予感・・・」
(後書き)

龍牙まさかの中將wちよつと・・・といつかかなり強引でしたが・・・
・次回もお楽しみに!!

第二十九話「怒りの矛先」(前書き)

ども〜白き修羅です。今回の回はなのはがアンノウンに襲われる回です。

第二十九話「怒りの矛先」

闇の書事件から数週間後。なのはは、士郎と桃子の同意を得、フェイトとアリシアはプレシアの同意をなんとか得、武装隊第四陸士訓練校に入学することが出来た。

なのは達が武装隊第四陸士訓練校に入学してから約一年が経ち、一方の龍牙は管理局の正式な局員となった。龍牙は中將として数々の活躍をし、父親の勅と同じ『修羅神』としての二つ名。『紅^{あか}の修羅神』という二つ名で呼ばれるようになった。今や周りから認められる立派な『中將』となった。

そして、なのはが任務で異世界へと赴こうとしていた。

「なのは」

「あれ？リュウ君来てたんだ。どしたの？」

なのはは龍牙にそう問う。

「・・・なのは、何度も忠告してると思うが、・・・あまり無茶は

するな・・・無茶のし過ぎで大怪我しても儘ならんぞ?」

「何言ってるの?リュウ君。半年前からずっと言ってるけど私は大丈夫だよ」

「・・・そうか、ならいいんだ・・・本当に無茶すんなわかったな。いざとなったら暫くは魔法を使わずに、地球に帰って過ごせよ?」

「・・・わかったよ、リュウ君。それじゃ行ってくるね」

なのはは、軽い足取りで任務へと向かった。

「・・・半年前から忠告はしたが・・・本当に大丈夫か・・・心配だ・・・」

そして、龍牙はブツブツ言い、なのはのあとを追った。

なのはは、雪の降る現場を飛びながら、龍牙に言われたことを考えていた。

「(もう・・・リュウ君は心配しすぎだよ・・・私は無茶なんてしてないのに・・・それに・・・私から魔法をとつたら・・・何も残らないよ・・・)」

そしてその時、なのはの前にアンノウンが現れる。そしてなのはは

迎撃しようとする。

「いくよ！レイジングハート！！」

アンノウンはなのはに近づき、その刃を振り下ろそうとしていた。
なのはは避けようとしたが

「！？動け・・・ない！？」

ズバァア！！

なのはの体は、アンノウンの凶刃によって切り裂かれた。

「なのは！！」

ヴィータは、なのはの前に居るアンノウンに向かって、アイゼンを振るうが、アンノウンはそれをかわす。ヴィータは地へと落ちていくのはをすぐさま抱きかかえ、地上に降りた。

「なのは！！おい！！しっかりしろ！！」

そうヴィータが呼びかけると、なのはは

「あはは・・・ちょっと失敗・・・しちゃった・・・」

なのはは、今にも消えそうな声で言う。アンノウン達は、なのは達に近づいてくるが

「おりゃあっ！！！！」

バキーン!!

アンノウンの一体が、突然現れた龍牙の拳によって吹き飛んだ。

「龍牙!!」

「リュウ・・・君・・・」

龍牙はなのはを見る。

「・・・ヴィータ・・・早くそいつと一緒に行け。ここは俺が抑える」

「け、けど「聞こえなかったか・・・?」え?」

龍牙は声を荒げ

「さっさとそいつ連れて行けっつてんだよ!!」

「う、うん・・・龍牙気をつけろよ・・・」

ヴィータはそう言い、なのはを連れて行った。

「間に合わなかった俺が言えた口じゃねえが・・・ちっ!・・・何で無茶しやがったんだよ・・・バカヤロウ・・・」

龍牙は怒っている。それは、自分の忠告を無視し、怪我をしたなのはに対してか・・・それともなのはを傷つけた、アンノウンに対してなのか・・・。そして龍牙は目の前に居るアンノウンに視線を向

ける。

「てめえらは俺の大切な奴を傷つけた・・・」

構えをとり

「ぜってえにてめえらを許さねえ！！おおおおお！！！！！！」

龍牙は吼え、アンノウン達に向かって駆けて行き、アンノウン達を殲滅していった。

なのはは病院に運ばれ、ベッドで休んでいた。そこにはフェイト達が居た。そして・・・シャルから衝撃の報告が告げられる。

「嘘だよね・・・？シャル・・・」

「じ、冗談きついで？シャル・・・。嘘って言ってや・・・」

「・・・嘘じゃないわ・・・、なのはちゃんの身体は、今までの無理な訓練や魔法の使用でボロボロなの・・・。正直、歩けるように

なるかも怪しいわ……。最悪歩けるようになって、魔法は使えないかもしれないの……」

「くそッ！！なんで……なんで！！」

「落ち着け！！ヴィータ！！」

そしてその時、病室に、龍牙が入ってきた。

「リュウ君……」

龍牙は明らかに怒りの剣幕を見せている。

「みんなすまねえ……。なのはに話したいことがある……。席をはずしてくれ……」

「……ああ」

「おい！シグナム！！」

「いいから行くぞ。テストロッサ達もだ」

「う、うん……」

フェイト達は病室を出て行った。

「……」

「……」

病室内に、沈黙が続く。

「・・・なのは・・・何故忠告を無視した・・・俺は何度も忠告したはずだ!!」

「・・・」

龍牙がその声を荒げて言うが、なのはは黙ったままだ。

「・・・怖いんだろう？」

「!？」

なのはは、龍牙のその言葉に反応する。

「お前は怖いんだろう？魔法を使えなくなること、周りの人達が離れていくんじゃないかって・・・、そして自分は独りになるんじゃないかって・・・お前は怖いんだろう？魔法が使えない自分を、みんなが見放すのが」

「やめて!!」

なのはは叫ぶ。すると龍牙は、なのはの頭に手を置く。

「・・・思い込みが激しすぎんぞ？、お前の周りの奴等はその程度か？お前にとって俺達はその程度の奴等だったのか？」

先程とは打って変わり、優しい口調で言う龍牙。

「お前は・・・またみんなと一緒に空を飛びたいんだろう？」

龍牙の言葉に、なのは頷く。

「・・・私は・・・私はまた、みんなと・・・みんなと空を飛びたい!!」

なのはのその言葉を聞き、龍牙は笑顔になり、なのはの頭をワシヤワシヤと撫でる

「リュ、リュウ君!! / / /」

「全く、心配する身にもなれつつの・・・バカ」

「にゃ!! ひ、ひどいの～～!!」

龍牙はなのはの頭から手を離し、扉に向かう。

「・・・俺は信じてる・・・お前ならまた、空を飛べるってな」

「リュウ君・・・」

「リハビリ、頑張れよ」

龍牙は手をひらひらさせながら、病室を出て行った。

「・・・私、頑張る。またみんなと・・・リュウ君とまた空を飛ぶから!!」

なのははそう、力強く呟いた。

第二十九話「怒りの矛先」(後書き)

・ ・ ・ S t s にまだ完全には入りません。色々な布石を立ててから入りたいと思います。次回お楽しみに！！

第三十話 龍「さて・・・あのマッドにでも会いに行くか・・・」「???」そ

どうも更新いたしました。今回のタイトルですが・・・まあ、あれが出ます。

第三十話 龍「さて・・・あのマッドにでも会いに行くか・・・」「????」そち

「・・・ここか」

俺は管理局からお忍びで、とある研究所の入り口付近に居た。

「さて・・・蛇がでるか蛙がでるか」

「マスター違います。蛙ではなく鬼です」

「ハハッ、そうだったか？まあいいや。行くぜ」

「御意」

俺は研究所に入って行つた。

「酷えな・・・こりゃ」

俺は研究所のカプセル内に浸られた実験動物の死骸などを見て、そう呟いた。明らかに幾多の動物を掛け合わせたキメラや、人の死体もある。・・・えげつねえな

「しっかし・・・あいつも随分と悪趣味な場所にいやがんな・・・ん？」

俺は壁の前に立つ。

「風が吹き抜けている・・・アレース、この壁の先に何かあるか？」

「・・・スキャン完了、この壁の向こうは抜け道となっています」

「OK そんじゃあ・・・ぬうん!!」

バコオン!!

俺は壁をぶち破った。すると下に続く階段が現れた。

「少々強引すぎます、マスター」

「そうか？まあ結果オーライだろ？」

俺はそう言いながら、階段を下がっていく。

「広い所に出たな・・・しかも・・・」

俺は前を見る。そこには、六人の女性が居た。そいつらはあのマツドの娘達、ナンバーズだ。右から『ドゥーエ』『トーレ』『クアットロ』『チンク』『セイン』『ディエチ』が俺を視界にとらえている。あ、そっか・・・まだこの時には他のナンバーズ達は生まれていないのか。

「何者だ貴様・・・何故この場所が分かった？」

トーレが俺にそう問うが

「さあ・・・何でだろうな」

「質問を質問で返すな！」

声を荒げて言うトーレ。俺はそれを無視して

「・・・そこを退いてくんねえか？俺はその奥に居る奴に会い行かなきゃなんねえんだな」

「断る・・・！」

ナンバーズ達が一斉に、俺に向かってきた。だが

「やめたまえ！！」

突然の制止の言葉に、ナンバーズ達は止まった。俺は声のした方を見た。そこには、あいつが居た。すると、そいつは笑顔になって、両腕を広げて俺に向かって走って来た。

「久しぶりだねえ！！！！龍牙k「ふんっ！！！！」」

バキィ！！

「がはぁあ！！！」

とりあえず殴っておいた。

「な、殴るなんて、酷いじゃないか・・・龍牙君・・・」

「あからさまに抱きついて来ようとした、お前が悪い。というか、久しぶりだな、ジェイル」

俺は殴った頬を摩っている『ジェイル・スカリッティ』にそう言った。

「ああ、久しぶりだね。ほんと・・・大きくなったよ」

「止める・・・お前は俺の親戚か？」

「近いものじゃないか」

「あ、あの・・・ドクター、お知り合いですか？」

チンクがジェイルにそう尋ねる。

「そうだよ、彼の母親と僕は昔からの親友だったんだ」

つまりそういうことだ。ジェイルは俺の母さんと古くから親友で、俺も昔によく会っていた。母さんとジェイルは結構仲が良かったらしい。・・・母さんも実はマッドだったとか・・・？

「ここで話もなんだ、奥に行って話そうか」

「おつ」

俺とジェイルは奥へと赴いた。その後を、ナンバーズ達がついて来た。

第三十話 龍「さて・・・あのマッドにでも会いに行くか・・・」「???」そ

スカリッティは少々ギャグキャラとして扱います。

因みに・・・ウーノを抜かしたナンバーズも・・・ヒロイン候補で
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1806u/>

魔法少女リリカルなのは～『紅き修羅の力を持つ者』～

2011年10月16日21時58分発行